蒲田・水ヶ元遺跡

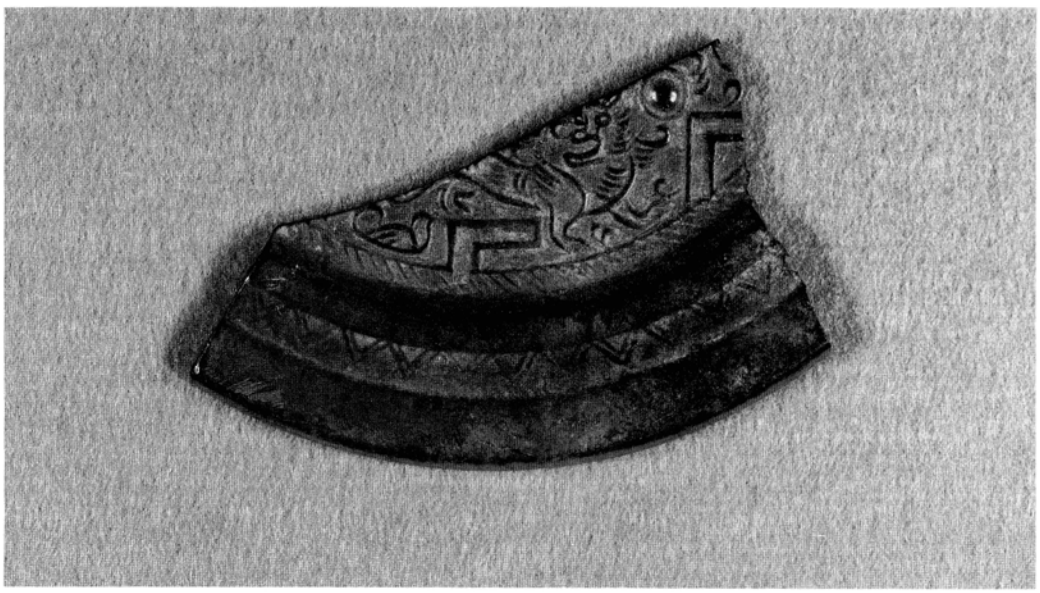
― 九州自動車道福岡インターチェンジ東隣
㈱駒井鉄工所用地の調査 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集

付録　1．香椎Ａ遺跡第１次調査

2．梅ヶ崎遺跡

3．博多遺跡群第23次調査



１９９６

福岡市教育委員会
蒲田・水ヶ元遺跡調査会

蒲田・水ヶ元遺跡
福岡市埋蔵文化財調査報告書第491号

正　誤　表

頁	正	誤
挿図目次	Fig. 21-1 第10・11・14号住居址内出土土器実測図(縮尺1/5)	Fig. 21-1 第14号住居址実測図(縮尺1/100)
〃	Fig. 21-2 第14号住居址実測図(縮尺1/100)	Fig. 21-2 第10・11・14号住居址内出土土器実測図(縮尺1/5)
〃	Fig. 122 第17・20・32号甕棺実測図(縮尺1/12)	Fig. 122 第5・7・8号甕棺実測図(縮尺1/12)
〃	Fig. 124 第5・7・8号甕棺実測図(縮尺1/12)	Fig. 124 第17・20・32号甕棺実測図(縮尺1/12)
35	Fig. 21-1 第10・11・14号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/5) 1～3(J10),4(J11)	Fig. 21-1 第14号住居址実測図(縮尺1/100)
〃	Fig. 21-2 第14号住居址実測図(縮尺1/100)	Fig. 21-2 第10・11・14号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/5) 1～3(J10),4(J11)
50	Tab. 6 説明項目Fig.の覧「21-1」	Tab. 6 説明項目Fig.の覧「21-2」
75	Fig. 122 第17・20・32号甕棺実測図(縮尺1/12)	Fig. 122 第5・7・8号甕棺実測図(縮尺1/12)
〃	Fig. 124 第5・7・8号甕棺実測図(縮尺1/12)	Fig. 124 第17・20・32号甕棺実測図(縮尺1/12)
87	Fig. 139 鉄器・青銅器実測図 (縮尺1/5) 1(J7),2(J10),3(J13),4(J16),5・6(J17),7(J21),8(J25),9(Fn-11西),10(青銅器,J28とJ29の間)	Fig. 139 鉄器・青銅実測図(縮尺1/5)

蒲田・水ヶ元遺跡

－福岡市東区大字蒲田字水ヶ元
㈱駒井鉄工所用地の調査－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集

付録　1．香椎Ａ遺跡第１次調査

2．梅ヶ崎遺跡

3．博多遺跡群第23次調査

1996

福岡市教育委員会
蒲田・水ヶ元遺跡調査会

序　　文

福岡市はアジアに開かれた拠点都市をめざし都市基盤整備を進めております。その認識は大陸との国際交流の証しである志賀島出土の「金印」や鴻臚館跡など、現代に継承される歴史的文化遺産にある事は言うまでもありません。

都市基盤整備の第一歩は大規模交通網の整備としての新幹線「博多」乗り入れ、さらには九州自動車道の「福岡インターチェンジ」の開設にありました。それらの事業と併行して進められていたのが、福岡北九州高速道路の建設でした。

昭和50年、福岡北九州高速道路の用地買収に応じられ移転先を蒲田の地に求められたのが株式会社駒井鉄工所様でありました。蒲田遺跡は福岡市東部にあって重要な遺跡という認識のもとに様々な手立を考え、文化庁、福岡県のご指導、特に福岡県文化課長故藤井功様の心暖まるご指導で調査会の発足を見た訳であります。

遺跡は方格規矩鏡など貴重で意義のある文物を提供してくれました。これも一重に関係各位のみなさま、とくに駒井鉄工所の財部様、故人となられた当時の福岡県文化課長藤井様のご指導、ご協力のおかげと感謝申し上げる次第であります。

遅きに失した感を拭えませんが、調査後20年の歳月を得、ここに報告書の完成を見ました。各方面でご活用頂きますことをお願い申し上げご挨拶といたします。

平成８年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾　花　　剛

例　　言

1．本報告書は、福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第491集である。
2．本報告書は、蒲田水ヶ元遺跡の発掘内容を主体とし、付録として、香椎Ａ遺跡第１次調査、梅ヶ崎遺跡、博多遺跡群第23次調査を収録している。
3．各遺跡の記号は、次のとおり
　蒲田水ヶ元－「ＫＭＴ」、香椎Ａ１次－「ＫＳＡ－１」
　梅ヶ崎－「ＵＧＳ」
　博多23次－「ＨＫＴ－23」
4．各遺跡の調査番号は次のとおり
　蒲田水ヶ元－7514、香椎Ａ１次－8451
　梅ヶ崎－8444
　博多23次－8334
5．福岡市文化財分布地図における各遺跡の登載記号は次のとおり
　蒲田水ヶ元－「002－Ａ－２」、香椎Ａ１次－「017－Ａ－１」
　梅ヶ崎－「029－Ａ－２」
　博多23次－「049－Ａ－１」
6．各遺跡の調査年月日は次のとおり
　蒲田水ヶ元－昭和51年１月６日～昭和51年８月31日
　香椎Ａ１次－昭和59年４月30日～昭和59年５月31日
　梅ヶ崎－昭和59年５月８日～昭和59年６月10日
　博多23次－昭和59年２月１日～昭和59年２月28日
7．各遺跡の調査面積は次のとおり
　蒲田水ヶ元－約9,500㎡、香椎Ａ１次－約600㎡
　梅ヶ崎－約300㎡
　博多23次－約150㎡
8．本報告書の編集は、濱石正子（小沢）と石井美土里（坂田）の助言を得て、折尾學が行なった。
9．報告書の執筆は各地点の住居址と住居址内出土土器の説明を濱石正子と石井美土里、他を折尾が行った。
10．本報告書の図版、表等の作成は、濱石正子、石井美土里、武藤和子（高橋）、池崎温子（市来）、三沢京子（須賀）、Fig.132を二宮忠司が行なった。
11．本報告に関係する資料は、福岡市埋蔵文化財センターにて保管している。

本文目次

1．位置と環境……6
2．調査経過……8
3．遺跡の概要……10
4．第Ⅰ地点の調査……11
① 第Ⅰ地点の概要……13
② 住居址……13
③ その他の遺構……19
5．第Ⅱ地点の調査……20
① 第Ⅱ地点の概要……22
② 住居址……22
③ 環濠……31
6．第Ⅲ地点の調査……59
① 第Ⅲ地点の概要……60
② 方形周溝遺構……60
7．第Ⅳ地点の調査……62
① 第Ⅳ地点の概要……64
② 住居址……65
③ その他の遺構……66
④ 甕棺墓……67
⑤ 甕棺墓群に伴う祭祀遺構……73
⑥ 縄文時代の遺構……73
8．その他の遺物……83
ナイフ形石器と石鏃と縄文式土器……84
石斧……84
石庖丁……84
砥石……84
鉄器と青銅器（金属器）……84
ガラス玉……84
鏡……84

付録 1．香椎Ａ遺跡第１次調査……89
2．梅ヶ崎遺跡……93
3．博多遺跡群第23次調査……97

挿図目次

Fig. 1 若杉山から蒲田水ヶ元遺跡を望む（Ph.1）…… 6
Fig. 2 蒲田・水ヶ元とその周辺（縮尺1/25,000）…… 7
Fig. 3 蒲田水ヶ元遺跡全体図（縮尺1/1,000）…… 9
Fig. 4 第Ⅰ地点遠景（Ph.2）……11
Fig. 5 第Ⅰ地点遺構配置図（縮尺1/400）……12
Fig. 6 第1号住居址実測図（縮尺1/100）……12
Fig. 7 第2号住居址実測図（縮尺1/100）……12
Fig. 8 第3号住居址実測図（縮尺1/100）……12
Fig. 9 第4号住居址実測図（縮尺1/100）……12
Fig. 10 第1号掘立柱遺構実測図（縮尺1/100）……12
Fig. 11 第2号掘立柱遺構実測図（縮尺1/100）……12
Fig. 12 第3号掘立柱遺構実測図（縮尺1/100）……12
Fig. 13 第1号住居址内出土土器実測図（縮尺1/5）……14
Fig. 14 第2号住居址内出土土器実測図（縮尺1/5）……14
Fig. 15 第3号住居址内出土土器実測図（縮尺1/5）……14
Fig. 16 第Ⅱ地点航空写真（西側）（Ph.5）……20
Fig. 17 第Ⅱ地点遺構配置図（縮尺1/400）……21
Fig. 18 第10号住居址実測図（縮尺1/100）……35
Fig. 19 第11号住居址実測図（縮尺1/100）……35
Fig. 20 第12・13号住居址実測図（縮尺1/100）……35
Fig. 21-1 第14号住居址実測図（縮尺1/100）……35
Fig. 21-2 第10・11・14号住居址内出土土器実測図（縮尺1/5）……35
Fig. 22 第15・16・17号住居址実測図（縮尺1/100）……35
Fig. 23 第15号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……37
Fig. 24 第15号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……37
Fig. 25 第15号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……37
Fig. 26 第16号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……37
Fig. 27 第17号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……38
Fig. 28 第17号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……38
Fig. 29 第17号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……38
Fig. 30 第17号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……38
Fig. 31 第18号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……39
Fig. 32 第19号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……39
Fig. 33 第19号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……39
Fig. 34 第20・21号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……39
Fig. 35 第23号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……39
Fig. 36 第33号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……39
Fig. 37 第26号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……40
Fig. 38 第27号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……40
Fig. 39 第31号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……40
Fig. 40 第35号住居址・土壙内出土土器実測図（縮尺1/6）……40
Fig. 41 第28号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……40
Fig. 42 第32号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……40
Fig. 43 第37号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……40
Fig. 44 第30・34・36号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）……41
Fig. 45 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……41
Fig. 46 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……41
Fig. 47 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……41
Fig. 48 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……42
Fig. 49 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……42
Fig. 50 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……42
Fig. 51 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……42
Fig. 52 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……43
Fig. 53 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……43
Fig. 54 環濠内出土土器実測図（縮尺1/6）……43
Fig. 55 環濠土層セクション図（縮尺1/20）……44
Fig. 56 第18号住居址実測図（縮尺1/100）……45
Fig. 57 第19号住居址実測図（縮尺1/100）……46

Fig. 57' 第20号住居址実測図（縮尺1/100）……46
Fig. 58 第21号住居址実測図（縮尺1/100）……46
Fig. 59 第23号住居址実測図（縮尺1/100）……46
Fig. 60 第24・25号住居址実測図（縮尺1/100）……47
Fig. 61 第26・27・33号住居址実測図（縮尺1/100）……47
Fig. 62 第31号住居址実測図（縮尺1/100）……47
Fig. 63 第35号住居址と土壙実測図（縮尺1/100）……47
Fig. 64 第28・29・32・37・38号住居址実測図（縮尺1/100）……48
Fig. 65 第22・30・34・36号住居址実測図（縮尺1/100）……49
Fig. 66 環濠実測図（縮尺1/80）……49
Fig. 67 第III地点遠景（Ph.14）……59
Fig. 68 第III地点遺構配置図（縮尺1/500）……60
Fig. 69 第1号方形周溝実測図（縮尺1/100）……60
Fig. 70 第1号方形周溝内遺物出土状況実測図（縮尺1/20）……60
Fig. 71 第1号方形周溝内遺物出土状況（Ph.15）……60
Fig. 72 第2号方形周溝実測図（縮尺1/100）……61
Fig. 73 第1・2号方形周溝内出土土器実測図（縮尺1/6）……61
Fig. 74 第1号方形周溝内出土石器実測図（縮尺1/4）……61
Fig. 75 第IV地点遠景（東南から）（Ph.16）……62
Fig. 76 第IV地点遺構配置図（縮尺1/500）……63
Fig. 77 第5号住居址実測図（縮尺1/100）……63
Fig. 78 第5号住居址内出土紡錘車実測図（縮尺1/3）……63
Fig. 79 第6号住居址実測図（縮尺1/100）……63
Fig. 80 第7号住居址実測図（縮尺1/100）……64
Fig. 81 第8号住居址実測図（縮尺1/100）……64
Fig. 82 第9号住居址実測図（縮尺1/100）……64
Fig. 83 第4号掘立柱遺構実測図（縮尺1/100）……64
Fig. 83' 第5・8号住居址、第4号掘立柱遺構内出土土器実測図（縮尺1/4）……66-2
Fig. 84 甕棺墓遠景（西から）（Ph.19）……67
Fig. 85 第1号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……68
Fig. 86 第2号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……68
Fig. 87 第3号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……68
Fig. 88 第4号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……68
Fig. 89 第5号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……68
Fig. 90 第6号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……68
Fig. 91 第7号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……68
Fig. 92 第8号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……68
Fig. 93 第9号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……69
Fig. 94 第11号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……69
Fig. 95 第12号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……69
Fig. 96 第14号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……69
Fig. 97 第13号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……70
Fig. 98 第10号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……70
Fig. 99 第15号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……70
Fig.100 第16号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……70
Fig.101 第17号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……71
Fig.102 第18号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……71
Fig.103 第19号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……71
Fig.104 第20号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……71
Fig.105 第21号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……71
Fig.106 第22号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……71
Fig.107 第23号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……71
Fig.108 第24号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……71
Fig.109 第27号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……71
Fig.110 第25号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……72
Fig.111 第26号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……72
Fig.112 第28号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……72
Fig.113 第29号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……72
Fig.114 第31号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……72
Fig.115 第32号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……72
Fig.116 第33号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……72
Fig.117 第34号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……72
Fig.118 甕棺墓群に伴う祭祀遺構実測図（縮尺1/20）……73
Fig.119 縄文式土器出土土壙(K30) 実測図（縮尺1/20）……73

表目次

Fig.120　第１号土壙(P1)実測図（縮尺1/20）……73
Fig.121　第１・２・３・４号甕棺実測図（縮尺1/12）……75
Fig.122　第５・７・８号甕棺実測図（縮尺1/12）……75
Fig.123　第11・18号甕棺実測図（縮尺1/12）……75
Fig.124　第17・20・32号甕棺実測図（縮尺1/12）……75
Fig.125　第33・34号甕棺実測図（縮尺1/12）……75
Fig.126　第９・10・12～15号甕棺実測図（縮尺1/12）……76
Fig.127　第16・21・22・23・25・26・28・29号甕棺実測図（縮尺1/12）……77
Fig.128　祭祀遺構……80
Fig.129　祭祀遺構内出土土器実測図（縮尺1/3）(Ph.22)……80
Fig.130　Ｐ１・K30内出土土器実測図と拓影(縮尺1/3)……81
Fig.130-2　出土した縄文土器（Ph.23）……82
Fig.131　方格規矩鏡片（Ph.24）……83
Fig.132　ナイフ形石器・石鏃実測図（縮尺1/1）……83
Fig.133　石斧実測図（縮尺1/4）……86
Fig.134　石包丁実測図（縮尺1/3）……86
Fig.135　第II地点出土砥石実測図（縮尺1/5）……86
Fig.136　第II地点出土砥石実測図（縮尺1/5）……86
Fig.137　第II地点出土砥石実測図（縮尺1/5）……87
Fig.138　第Ｉ・II地点出土砥石実測図（縮尺1/5）……87
Fig.139　鉄器・青銅器実測図（縮尺1/3）……87
Fig.140　第II地点住居址内出土ガラス玉実測図（縮尺1/1）……87
Tab.　1.　第Ｉ地点．住居址一覧表……16
Tab.　2.　第Ｉ地点．住居址内土土器一覧表……16

Ph.　3　第１号住居址の遺物……14
Ph.　4　第１号住居址……14
Ph.　6　環濠遠景……43
Ph.　7　遺跡遠景……45
Ph.　8　第20号住居址……45
Ph.　9　作業の風景……45
Ph.　10　第31号住居址……46
Ph.　11　第15号住居址……46
Ph.　12　第16、17号住居址……48
Ph.　13　第19号住居址……48
Ph.　17　第IV地点遠景……66
Ph.　18　第４号堀立柱遺構……66-2
Ph.　20　甕棺墓遠景……79
Ph.　21　甕棺墓遠景……79
Ph.　25　作業員のみなさん……88

Tab.　3.　第Ｉ地点．掘立柱遺構計測表……19
Tab.　4.　第II地点．環壕内掘立柱遺構計測表……44
Tab.　5.　第II地点．住居址一覧表……50
Tab.　6.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……50
Tab.　7.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……51
Tab.　8.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……51
Tab.　9.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……52
Tab.　10.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……52
Tab.　11.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……53
Tab.　12.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……53
Tab.　13.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……54
Tab.　14.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……54
Tab.　15.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……55
Tab.　16.　第II地点．住居址内出土土器一覧表……55
Tab.　17.　第II地点．住居址・環壕内出土土器一覧表……56
Tab.　18.　第II地点．環壕内出土土器一覧表……56
Tab.　19.　第II地点．環壕内出土土器一覧表……57
Tab.　20.　第II地点．環壕内出土土器一覧表……57
Tab.　21.　第II地点．環壕内出土土器一覧表……58
Tab.　22.　第II地点．環壕内出土土器一覧表……58
Tab.　23.　第III地点．第１・２号方形周溝内出土土器一覧表……61
Tab.　24.　第IV地点．掘立柱遺構計測表……66-2
Tab.　25.　第IV地点．住居址一覧表……66-3
Tab.　26.　第IV地点．住居址内出土土器一覧表……66-3
Tab.　27.　第IV地点．甕棺墓一覧表……74
Tab.　28.　第IV地点．甕棺観察一覧表……78
Tab.　29.　第IV地点．甕棺観察一覧表……79
Tab.　30.　第IV地点．甕棺観察一覧表……79
Tab.　31.　ガラス玉計測表……87

1．位置と環境

蒲田水ヶ元遺跡は、福岡市の東のはずれに位置している。旧粕屋郡は、近世以降北部の平野部である裏粕屋（現福岡市東区香椎・唐原・和白・粕屋郡古賀町・新宮町）と南部の平野部である表粕屋（現福岡市東区箱崎・多々良・蒲田・粕屋郡粕屋町・久山町・篠栗町・宇美町・志免町・須恵町）に二分されてきた。表粕屋は、多々良川・宇美川・須恵川などによって形成された平野で、月隈丘陵をはさんで福岡平野に隣接し、裏粕屋とは標高２～300メートルの立花山・城ノ腰山・遠見岳などで区分される。蒲田水ヶ元遺跡は、多々良川（久原川・猪野川）がつくった沖積地に向かって東から張り出した低丘陵の先端付近に当たる。

周辺では、九州縦貫自動車道や工場・倉庫の建設にともなって発掘調査が実施され、多くの遺跡の存在が知られるようになった。蒲田部木原遺跡において、これまでに２次の発掘調査が行われている。第１次調査は、九州縦貫自動車道建設にともなうもので、ピット群および台形様石器・ナイフ形石器などの包含層を検出した。第２次調査は、粕屋町の圃場整備によるもので、３世紀後半の竪穴住居跡・５～６世紀の竪穴住居跡、７世紀後半の土坑、11～12世紀の土坑などが調査されている。

蒲田部木原遺跡のすぐ北側の工場建設にともなって、蒲田水ヶ元遺跡を調査した。弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・周溝遺構などが発見された。丘陵の西端には、前方後方墳と円墳からなる部木八幡古墳群があるが、未調査である。

蒲田部木原遺跡の立地する丘陵から小さい谷を隔てた南側の丘陵上には、福岡県指定史跡である平塚古墳が存在する。町営住宅建設中に発見されたもので、弥生時代終末頃の墳丘墓とされる。大型箱式石棺を主体とし、墳裾付近に小型の石棺を配するもので、大型石棺内から管玉17点、棺外から内行花文鏡片が出土した。

表粕屋一体には、平塚古墳と同時期と見られる墳丘墓が点在する。名子道２号墳は、大型箱式石棺の周囲に列石を巡らして墓域を画し、石棺上に偏平な石を積み上げて墳丘をつくる。酒殿遺跡の大型

Fig. 1　若杉山から蒲田水ヶ元遺跡を望む（↓印本遺跡）（Ph. 1）

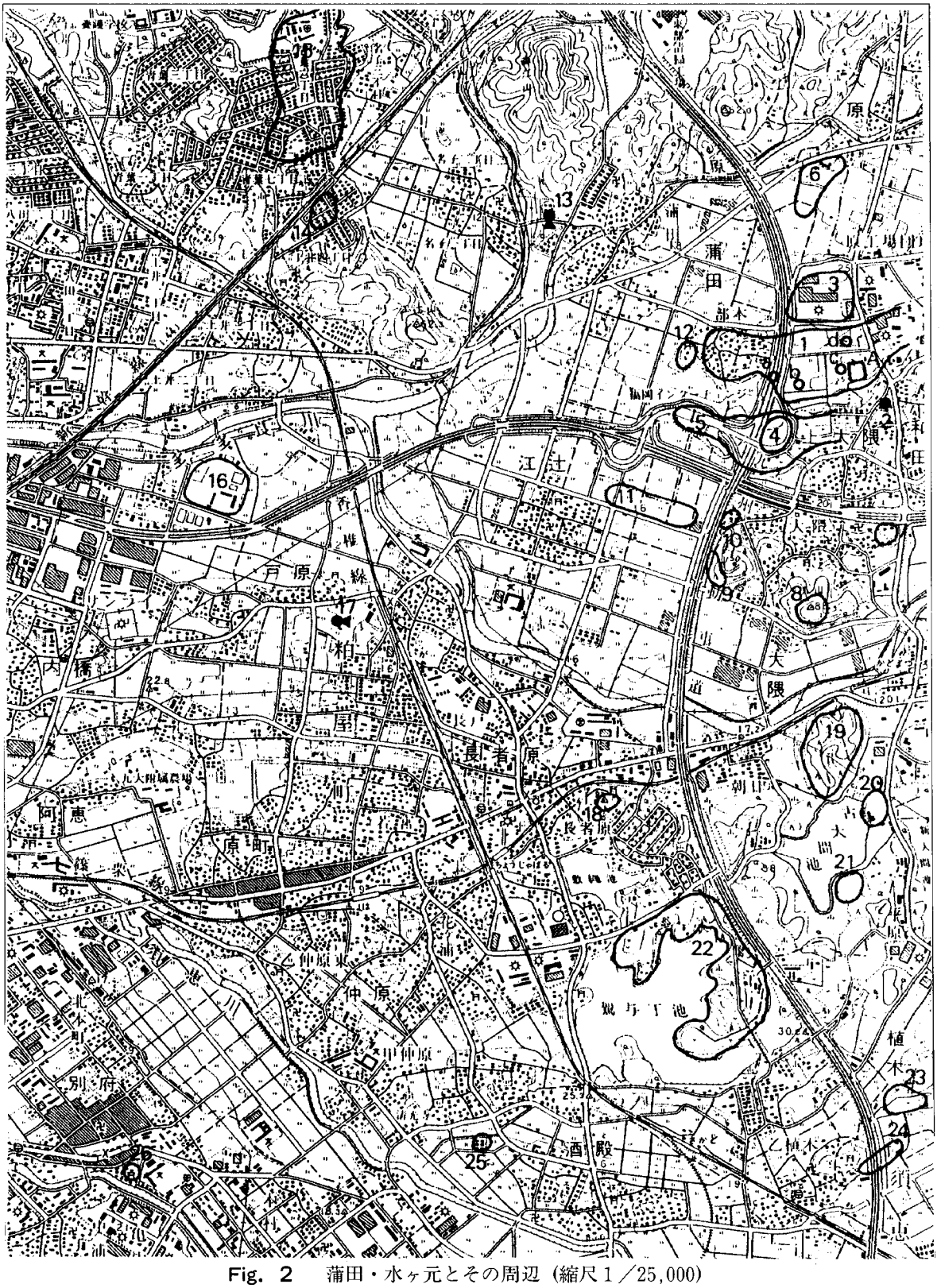


Fig. 2　蒲田・水ヶ元とその周辺（縮尺1／25,000）

1．蒲田部木原遺跡、A-第3次調査 a-第1次調査、b-第2次調査A地区、c-同B地区、d-同C地区
2．上大隈平塚古墳、**3．蒲田水ヶ元遺跡**、4．かけ塚古墳群、5．蒲田遺跡、6．蒲田原遺跡、7．脇田山古墳群、8．丸山城跡、
9．西尾山古墳群、10．辻畑遺跡、11．江辻遺跡、12．部木八幡古墳群、13天神森古墳、14．名子道古墳、15．土井遺跡、16．戸原麦尾遺跡
17．王塚古墳、18．岩崎神社境内甕棺群、19．焼地山古墳群、20．古大間池玉造遺跡、21．古大間遺跡、22．鶴与丁池遺跡、23．牛ヶ隈遺跡
24．乙植木古墳群、25．酒殿遺跡、26．亀山神社古墳

箱式石棺からは、変形夔鳳鏡・管玉が出土している。このほか、亀山神社古墳も大型箱式石棺と、墳裾に小型の箱式石棺を配した墳丘墓である。これらの墳丘墓の被葬者は、小地域を単位とした盟主と考えられている。平塚古墳・名子道古墳とは至近距離にある丘陵上に築かれた天神森古墳は、盤龍鏡・三角縁神獣鏡を副葬した前方後円墳であり、畿内型の古墳を導入した被葬者によって、それまでの分立した状況が統合されたことを示している。

さて、表粕屋には、滑石の玉造遺跡が点々と分布している。古大間玉造遺跡では、滑石を加工した古代の玉造跡が調査された。牛ガ熊遺跡は、６世紀中葉～７世紀初頭にかけての滑石製品生産工人集団による特殊占地の集落であったとされる。

今回報告する蒲田水ヶ元遺跡に関連する周辺の遺跡の状況は、おおむね以上の通りである。このほか、縄文時代晩期の大規模な集落遺跡である江辻遺跡、中世の集落と居館が発見された戸原麦尾遺跡など多数の重要な遺跡が調査されている。

1．粕屋町教育委員会1985『蒲田部木原遺跡』粕屋町文化財調査報告第２集
2．福岡市教育委員会1975『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集
3．須恵町教育委員会1993『牛ガ熊遺跡』須恵町文化財調査報告書第６集
4．下条信行1977「考古学・粕屋平野」『福岡市立歴史資料館研究報告』第１集　福岡市立歴史資料館
5．森貞次郎1961「福岡県粕屋町上大隈平塚古墳」『九州考古学』11・12　九州考古学会
6．福岡市教育委員会1996「蒲田部木原３次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第446集

2．調 査 経 過

昭和50年当初、株式会社駒井鉄工所は福岡北九州高速道路建設にかかる箱崎地区の社有地の用地買収に応諾され、九州自動車道福岡インターチェンジに隣接する蒲田の地に代替地を求められた。当然、当地が埋蔵文化財の包蔵地という事で、発掘調査について福岡市教育委員会との間で協議がもたれ、開発サイドからの強い調査体制整備の要請等があり、福岡市教育委員会内に本遺跡を調査する緊急の措置として「蒲田水ヶ元遺跡調査会」を設置することとした。

昭和51年１月６日より、熊本大学の協力を得て試掘調査を行なった。対象となる面積は約50,000平方メートルである。試掘調査は２ヶ月を要し、２月末日で終了した。試掘の結果、遺構の密度の高い４つの地点を調査地点に選んだ。調査の面積は第Ⅰ地点を約2,000平方メートル、第Ⅱ地点を約3,300平方メートル、第Ⅲ地点を約1,000平方メートル、第Ⅳ地点を約3,200平方メートルとした。

第Ⅰ地点は古墳時代の住居址数軒、第Ⅱ地点は弥生時代後期を主体とする住居址数十軒と掘立柱群のみを取り囲む環濠、第Ⅲ地点は内部構造（主体）不明の弥生時代後期の方形周溝遺構２基、第Ⅳ地点は弥生時代中期と奈良時代の住居址数軒と弥生時代中期の甕棺墓数十基等々の遺構検出を見た。

発掘調査の組織と協力者は以下のとおり。

福岡市教育委員会（昭和51年当時）
教育長　古村 澄一　　社会教育部長　青木　崇　　主幹　志鶴 幸弘　　文化課長　清水 義彦
埋蔵文化財係長　三宅 安吉

蒲田水ヶ元遺跡調査会
会長　清水 義彦　　顧問　藤井 功（現鬼籍）　松浦 宥一郎（現東京国立博物館）
主任　折尾 學（現福岡市埋蔵文化財センター）　　副主任　中野 和夫（現福岡市体育協会）

調査協力
熊 本 大 学　平野 芳英（現島根県文化課古代文化センター）　山本 京子（現オーストラリア在住）
高瀬 哲朗（現佐賀県名護屋城博物館）　渡辺 一雄（現梅光女学院大学）
山崎 龍雄（現福岡市博物館）　田中 壽夫（現福岡市文化財整備課）
池田 道也（現菊水町歴史民俗資料館）　田中 克子（旧姓安部・現福岡市埋蔵文化財課調査員）
嶋田 光一（現飯塚市歴史民俗資料館）
東京教育大学　田平 徳栄（現佐賀県文化財課）
桐朋学園大学　濱石 正子（旧姓小沢・現福岡市埋蔵文化財課調査員）
石井美土里（旧姓坂田）、池崎温子（旧姓市来）、酒井美知子（旧姓松田）
日 本 大 学　福井裕一、三沢京子（旧姓須賀）
武蔵野美術大学　大町 光子（旧姓三島）

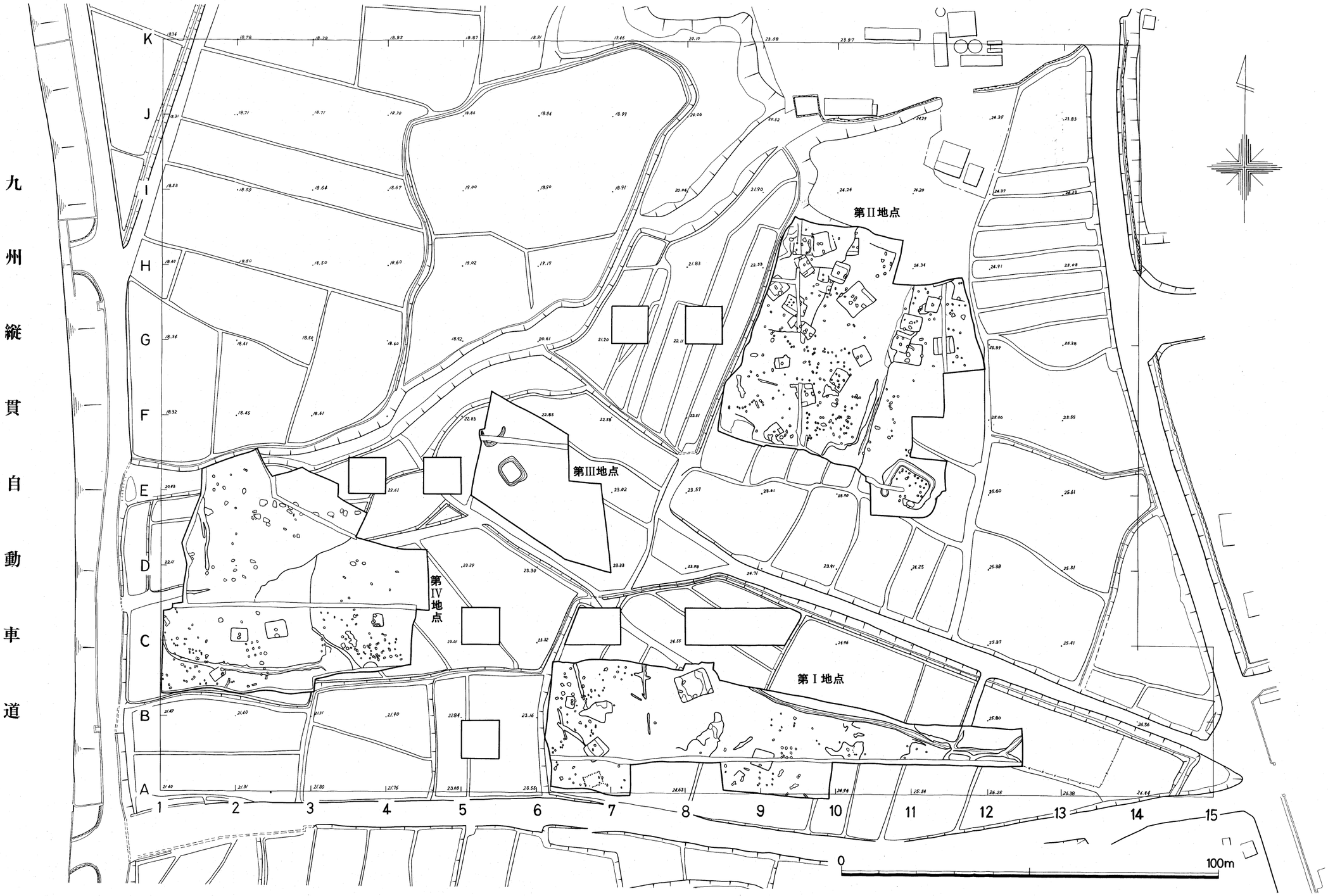


Fig. 3　蒲田水ヶ元遺跡全体図（縮尺１／1000）実大

3．遺跡の概要

第Ⅰ地点は古墳時代の住居址群、第Ⅱ地点は弥生時代後期を中心とした住居址群、それに柱穴群を取り囲む弥生時代後期の環濠、第Ⅲ地点は内部構造（主体）不明の方形周溝遺構、第Ⅳ地点は弥生時代中期から後期の住居址群と弥生時代中期の甕棺墓で形成される共同墓地等それぞれの地点で調査成果を納めている。

第Ⅰ地点　第Ⅰ地点東端より約70メートルの部分に第１号住居址と掘立柱建物第１号と第２号が、東端より約90メートルＣ－８区の部分に第２号住居址、Ｃ－７区に第３号掘立柱建物が、さらに西へ10メートルのＣ－６区の部分に第３号・第４号住居址が見える。方位はそれぞれ個性的で統一的ではない。ベッド状遺構を有つものに第２号と第３号住居址があって２号住居址が東側、第３号住居址が両短辺に設けられている。炉跡については不明な部分が多い。第４号住居址は住居址の堅穴壁周辺と思われる所に柱を配した柱穴列を有つ、いわゆる平地式住居址である。各住居址の時代は伴出土器から考えて第１号住居址が古墳時代前期、第２号住居址が古墳時代中期、第３号住居址が弥生時代後期に比定され、第４号住居址は伴出土器を有しないが時代は奈良時代に下がる可能性がある。

第Ⅱ地点　28軒の住居址と本調査地点南端に掘立柱群を囲む環濠がある。住居址を概観するとベッド状の遺構を有つものと有たないものとがあるが、ベッド状遺構をもつものが多数をしめる。ベッド状遺構の配置は、南北東西、南北東西の短辺の片側、南北東西の短辺の両側に設けられるものとがある。第31号住居址は南北東西にベッド状遺構を配し、南端の中央に土坑を設け、床中央に炉址を設けているが、ベッド状遺構を有つ住居址の生活空間の合理的活用を念頭においた設計がなされている。住居址の年代は２，３の住居址に古墳時代の土器を有つものがあるが後世の流れ込みと考えられ全て弥生時代後期に比定される。

掘立柱穴を取り囲む環濠は本調査地点の南東に位置している。長辺16メートル、短辺12メートルに設計され、溝は幅160センチメートル内外、深さ50センチメートル内外に設計され、本遺構北側に２間×６間の掘立柱建物を配している。本遺構の存在の意味について、貴重な食糧の貯蔵倉庫の保護と、集団の精神的統一または集団の象徴としての宗教的施設を考えたいが、実証する確たる遺物の存在は発見されていない。

第Ⅲ地点　方形周溝遺構、２基の検出を見る。２基とも大幅な削平が見られるが、残る周溝を第２号方形周溝で観察すると、幅60センチメートル内外、深さ20センチメートル内外、長辺5.8メートル、短辺4.8メートルの隅丸方形の形状を有つ。伴出する遺物は半製品の輝縁凝灰岩製の石包丁と弥生時代後期の壺形土器である。本遺構を方形周溝墓と見るなら出土遺物を副葬品と考えたい。第１号に伴う石器は縄文時代の色彩の濃い石器であるが、方形周溝遺構に伴う遺物としては本遺構の比定年代より古式に入る事から今後の検討課題である。

第Ⅳ地点　住居址５軒と掘立柱遺構１軒、甕棺墓32基、さらに甕棺墓域に伴う祭祀遺構、それと縄文時代前期の遺構それぞれ１基が検出されている。住居址は第９号が弥生時代中期の様相を有ち、他は古墳から奈良時代に比定され、甕棺墓と祭祀は弥生時代中期に、縄文時代遺構は縄文時代前期の轟式土器と曽畑式土器を伴出している。

4．第Ⅰ地点の調査

Fig. 4　第 Ⅰ 地 点 遠 景 (Ph. 2)

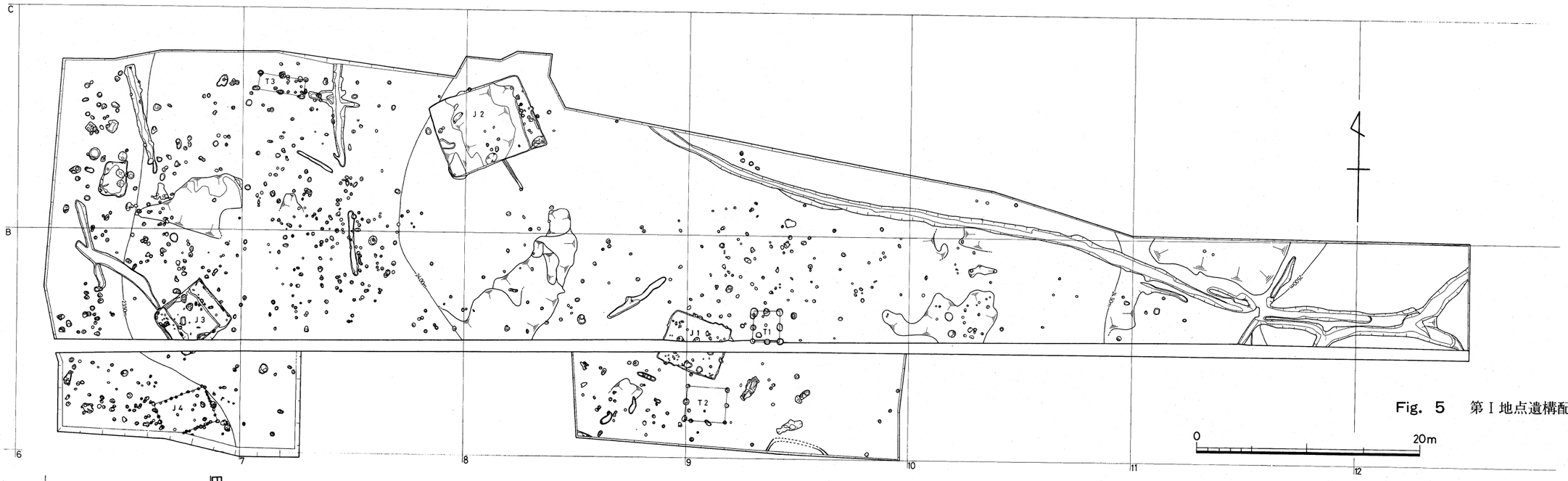


Fig. 5　第Ⅰ地点遺構配置図（縮尺１／400）

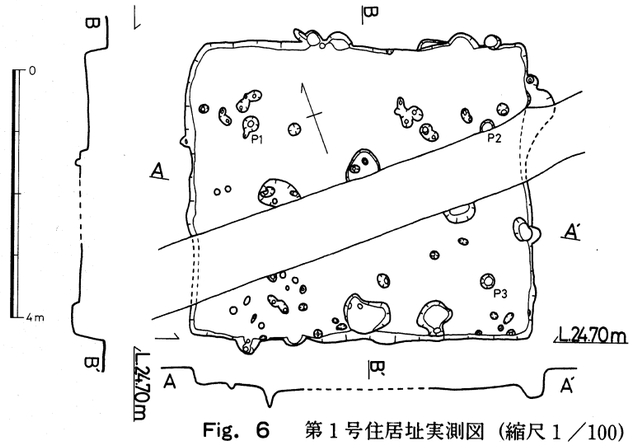


Fig. 6　第１号住居址実測図（縮尺１／100）

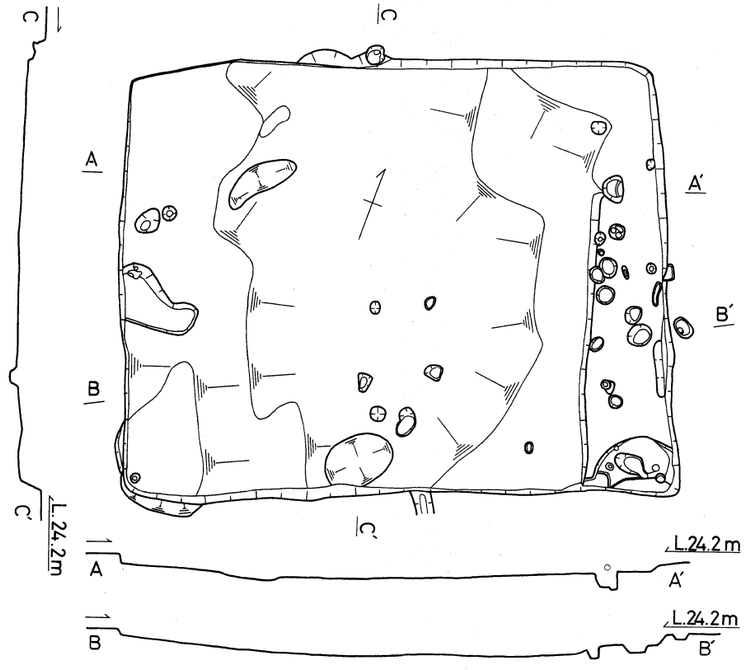


Fig. 7　第２号住居址実測図（縮尺１／100）

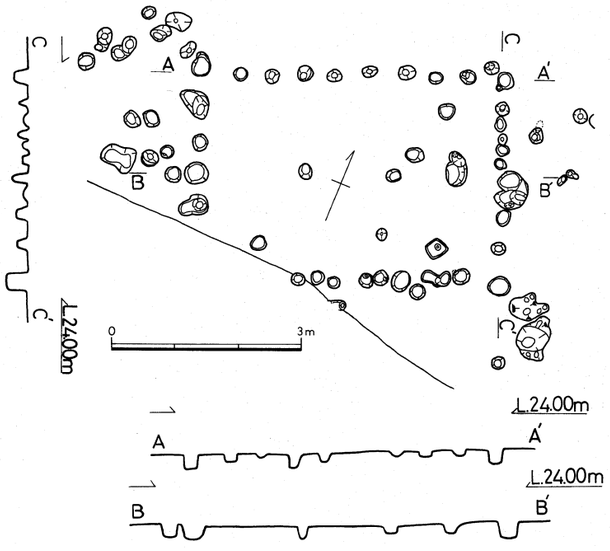


Fig. 9　第４号住居址実測図（縮尺１／100）

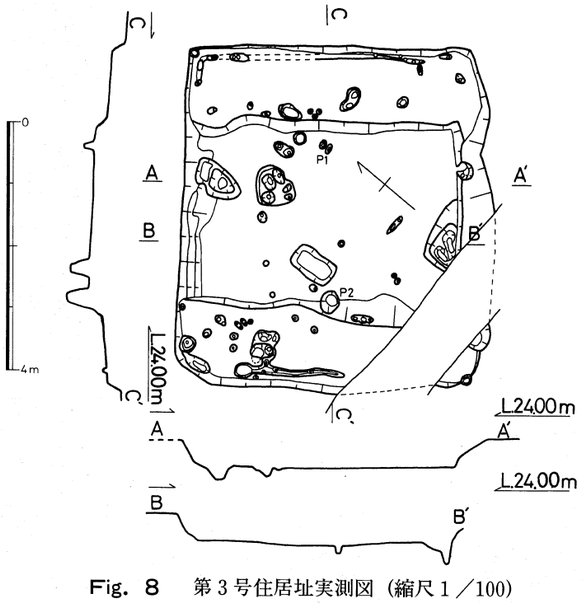


Fig. 8　第３号住居址実測図（縮尺１／100）

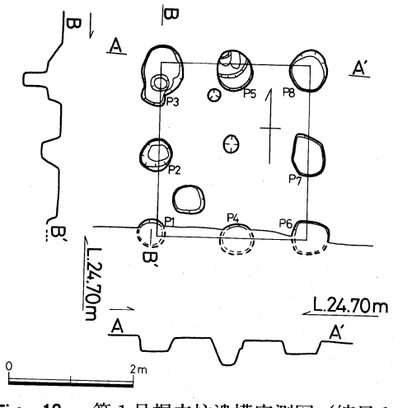


Fig. 10　第１号掘立柱遺構実測図（縮尺１／100）

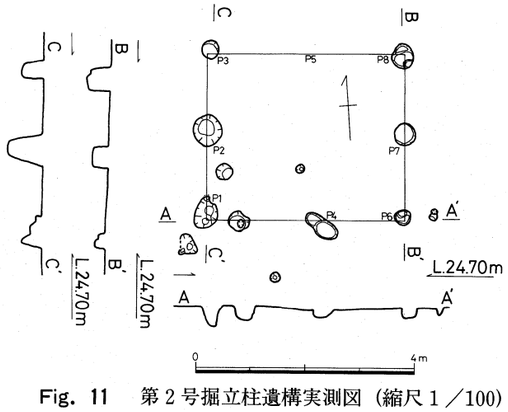


Fig. 11　第２号掘立柱遺構実測図（縮尺１／100）

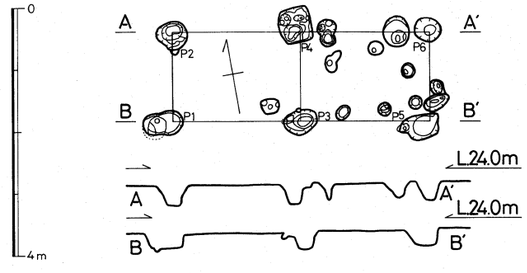


Fig. 12　第３号掘立柱遺構実測図（縮尺１／100）

① 第Ⅰ地点の概要

本調査地点は、本遺跡の南部分にあって東西に長い台地上に位置し、東西130メートル、東辺10メートル、西辺30メートルの調査範囲を有つ。調査地点の南には農道が隣接し発掘区外である。発掘地点の東部分は標高25.8メートル、西部分で標高24.5メートルを測る。西の発掘区外は１メートル以上の段差となって標高23.1メートルを測り、畑作圃場整備による掘削により遺構は削平の憂き目にあっている。発掘区の北側隣接地は、本調査地点と同様の東から西へ流れる台地を形成するが、農道及び入排水用側溝のため遺跡の損壊にあったと思われ遺構の存在は皆無であった。本地点は第Ⅳ地点に流れる台地であるが、本地点との間に遺構の空白が見られる。その空白は圃場整備のためと思われる。いずれにしても本調査地点は東から西へ緩斜しながら流れる台地状に形成された地点である。

本地点では、第３号住居址が弥生時代後期の後半の土器を伴出、第１号住居址が古墳時代前期の様相をもつ土器群、第２号住居址が古墳時代中期の様相を有つ土器群をもっている。第４号住居址はいわゆる平地式住居址と呼ばれるもので奈良時代に比定されるものと思われるが、伴出土器は見当らない。住居址の他、３軒の高床式倉庫と思われる掘立柱建物の跡が見られるが、これら倉庫が各住居址に所有されたか否か、各時代の集団における財産の所有の有り方を考える上で今後の課題となる。

② 住 居 址

第１号住居址（Fig. 6）

第Ⅰ地点発掘区の中央部、やや南寄りに位置する。本住居址は中央を試掘溝によって、斜めに切られているが、長軸5.48m、短軸4.76mの長方形を呈している。長軸方位はN－68°－Wである。主柱穴は西南部の試掘溝の中に１本を想定するとすれば、Ｐ１～３という４本柱が考えられよう。Ｐ１は径約23cm、深さ10cm、Ｐ２は試掘溝にかかり、半分を欠くが径20～25cm程と思われる。Ｐ３は径約22cm、深さ19cmである。ピット間の心心距離はＰ１～Ｐ２が3.84m。Ｐ２～Ｐ３が2.52mである。炉は中央付近を欠く為、不明である。焼土等も検出されていない。小ピットや浅い堀り込みが床面に多くみられ、壁際にもピットがあり、北辺、東辺、南辺は、かなり凹凸がある。床面は壁際付近でやや下がり気味になっている。壁高は25～35cmである。

なお、東南側より壺の口縁等が出土している(Fig.13)。又、砥石(Fig.138の１）も出土している。

第２号住居址（Fig. 7）

第Ⅰ地点発掘区の北側、やや西寄りに位置する。長軸8.76m、短軸７mで規模の大きな長方形を呈している。長軸方位はN－67°－Eである。主柱穴は不明である。炉も検出されていない。南壁際中央には楕円形の浅い掘り込みがみられる。東側短辺沿いにベッド状遺構をもつ。東北隅では段が明確でなくなり、このベッド状遺構が東北隅まで続くものか、途中で切れているものかは不明である。ベッド状遺構の部分にはピットが多く検出されている。東南隅も浅く掘り込まれている。又、西南隅にやや高い部分があり、これはベッド状遺構の名残りとも考えられ、西辺沿い南側のベッド状遺構の可能性を示すが、確かではない。周溝は東壁際の中央南寄りに、わずかに溝が残存するほかはみられない。床面は東側、西側の両辺の壁際から、なだらかに中央に向かって低くなっている。最も低い中央部に小ピットが６個程検出された。壁高は９～27cmである。南壁の中央付近より、南東に延びる25cm程の巾の細い溝を本住居址は切っている。

なお、砥石（Fig.138の２）が出土している。

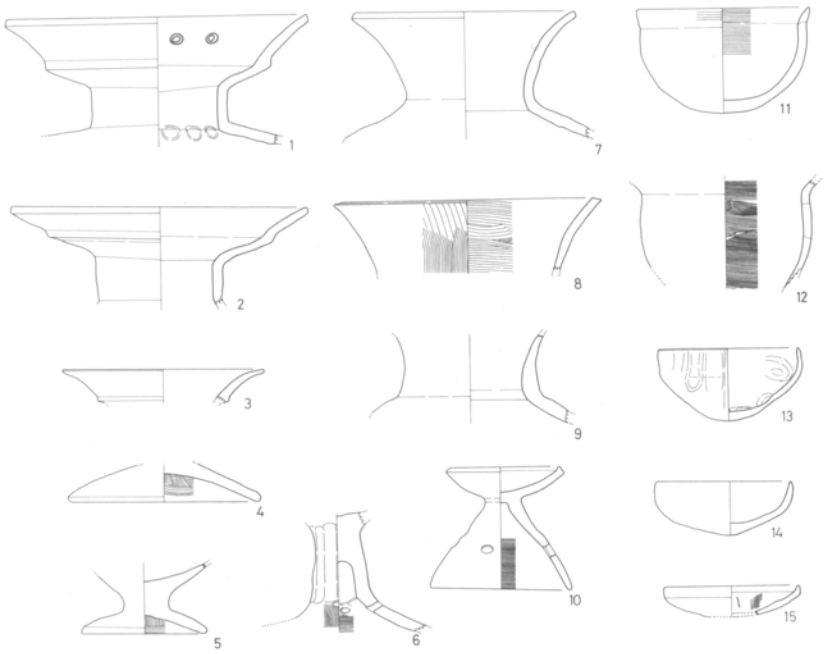
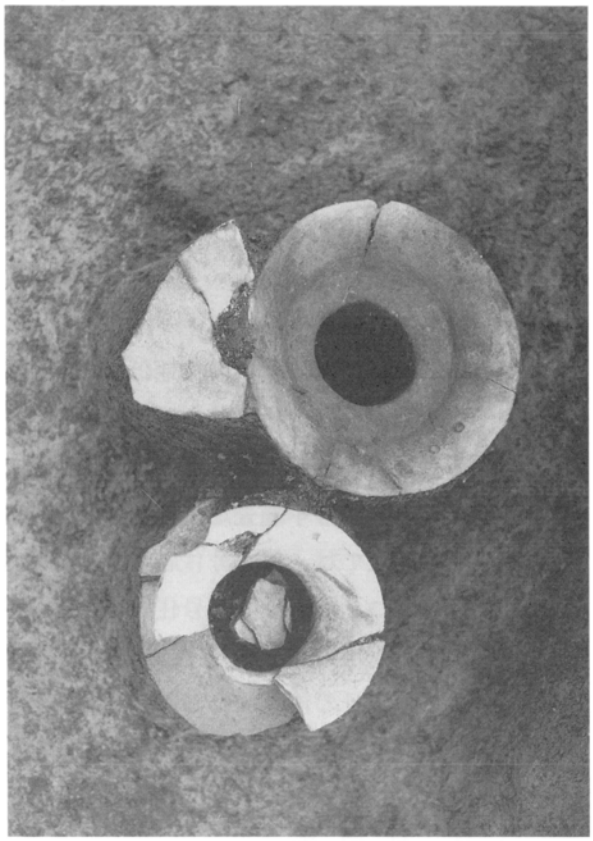


Fig. 13　第１号住居址内出土土器実測図（縮尺１／４）

Fig. 14　第２号住居址内出土土器実測図（縮尺１／５）



第１号住居址の遺物（Ph. 3）

第１号住居址（Ph. 4）

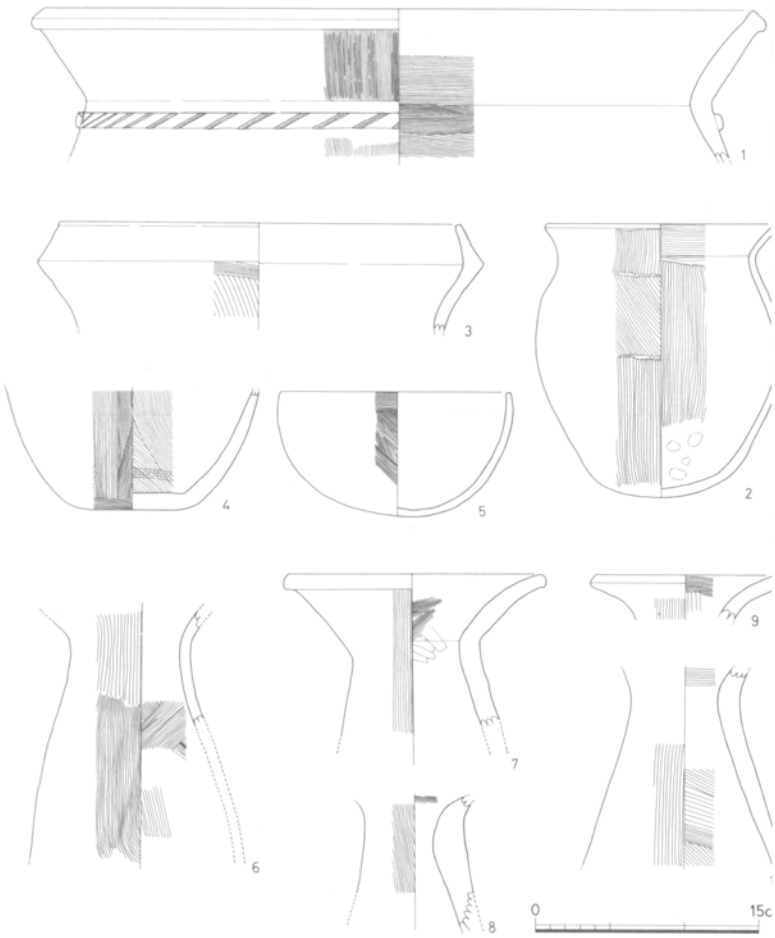


Fig. 15　第３号住居址内出土土器実測図（縮尺１／５）

第１号住居址内出土土器（Fig.13）

出土土器の器種は、壺・小形鉢・高杯・高杯形器台・台付杯・杯・小形土器である。壺は１～３・７～９で、二重口縁のもの（１～３）と、外反し開く口縁のもの（７～９）とがある。１は頸部が直立し、外反して明瞭な稜をもち立ちあがって段をなし、更に外反する二重口縁である。胴部は張りのある球形のものと思われる。外面はヨコナデ。内面は口縁部に竹管状工具による施文が２個みられる。頸部から肩部への移行部に指圧痕がある。２は１と同様の形態であるが、口縁上部が１に比べ、開いている。外面はヨコナデである。３はやや小形のもので、口唇部が薄くなり更に開いている。１・２・３とも胎土、焼成は良である。７は頸部がしまり、口縁部が長く外反し開く。外面はヨコナデである。８は口唇端部が比較的平坦であるが、ナデにより中央がわずかに凹んでいる。外面は縦方向、内面は横方向のハケ目調整がされている。黄褐色を呈し、小石粒を含み焼成は良である。９は外弯気味に直立する頸部で、上方が薄くなる。色調は淡赤褐色。胎土、焼成は良である。１と７は胴部以下を欠損した後、器台に転用した可能性も考えられよう。小形鉢は11・12で、12は口縁部と底部を欠失するが、形態的には類似するものであろう。11は口縁が短く、わずかに外反し、端部は薄く丸味を帯びる。底部は丸底。口縁部外面はヘラ調整で、口縁の接合部分は指ナデがされている。内面も上方は横方向のヘラ調整が行われている。又、底部にはヘラ削りもみられる。12は内面に非常に細かい横方向のハケ目調整がされている。４と６は高杯の脚部である。４は低くわずかに内弯気味に外側に開くもので、脚端部は丸味を帯びる。外面はヨコナデ。内面はハケ目調整である。６は柱状の脚より裾部で外側に大きく開くもので、裾部移行部に２個の円形透孔がある。外面は穿孔より上方でヘラ削りがされ、下方はハケ目調整が行なわれている。高杯形器台は10で、皿状の受け部をもち口唇端部は上方にやや尖る。脚下方はやや内弯気味に開き、中位に円形透孔を４個もつ受け部外面はヨコナデ。脚部内面下方には細かいハケ目が施されている。色調は赤褐色。胎土焼成とも良である。台付杯の５は小形で、脚部は低くわずかに内弯気味に外側に開く。杯部内面はヘラ削り、脚部内面には非常に細かいハケ目調整。外面はヨコナデがされている。15の杯は口縁端が短く直立する。外面はナデ、底部周辺にヘラ圧痕がみられる。内面はヘラ磨き→ハケ目調整→ヨコナデの順に行われている。赤褐色を呈し、胎土、焼成は良。小形土器は13・14ていずれも手捏ね土器である。13は小形の椀形でやや尖り気味の底部に、口縁部上方がやや内弯気味に直立する。外面は縦方向の指ナデ、そして、口縁部は内外面を挟んで横方向にナデられている。内面にも指圧痕が残存している。14は13に比べ、やや浅く、尖り気味の底部をもつ。指による整形痕が明瞭に残っている。13・14とも胎土、焼成はあまり良くない。

第２号住居址内出土土器（Fig.14）

出土土器は少なく、小形の手捏ね土器と高杯である。１は小形の椀形で楕円形気味にややつぶれている。内面に部分的に指圧痕が残っている。色調は淡褐色。細砂粒を含み、焼成は良である。２・３は高杯の脚部で、２は裾端部に行くに従い薄くなる。３は裾部が弯曲し開き、やや薄くなっている。両方とも外面はヘラ削りがされている。

Tab. 1　第Ⅰ地点　住居址一覧表

No.	形　態	規　模(m)	長軸方位	ベ　ッ　ド　状　遺　構	炉
1	長方形	4.76×5.48	N－68°－W	な　し	中央を試掘溝に切られている為、不明。
2	〃	7.0×8.76	N－67°－E	東壁（西壁にもあったと思われる。）	不　明
3	〃	5.6×4.48	N－51°－E	両短辺	〃
4	〃	3.7×4.82	N－69°－E	な　し	な　し

Tab. 2　第Ⅰ地点　住居址内出土土器一覧表

遺特番号	出土地点（住居址）	器種・器部	法　量(単位cm) 口　径	器　高	最大径	形　態　の　特　徴
1	J 1	壺・胴部以下欠	19.9			明瞭な稜をもち、立ちあがり、外反する二重口縁。肩部へと張り出す。
2	〃	〃・　〃	19.5			明瞭な稜をもつ二重口縁。
3	〃	〃・口縁部	13.3			やや小形。外反する口縁（二重口縁のもの）。口唇部分は比較的薄い。
4	〃	高杯・脚部	(脚径) 12.4			低く、わずかに内弯気味に外側に開く。脚端部は丸味を帯びる。
5	〃	台付杯・杯部欠	(脚径) 8.2			小形。脚部は低く、わずかに内弯気味に開く。
6	〃	高杯・脚部				柱状の脚より裾部で外側に大きく開く。裾部移行部に２個の円形透孔。
7	〃	壺・胴部以下欠	14.6			頸部がしまり、口縁部が外反し開く。
8	〃	〃・口縁部	18.0			外反し、開く口縁。口縁端部はナデによる稜線がわずかにみられるが、比較的平坦な面である。
9	〃	〃・頸部				頸部が外弯気味に立ちあがる。肩部へと張り出す。
10	〃	高杯形器台	7.9	8.2	9.5	小形。皿状の受部をもち、口唇端部は上方にやや尖る。円形透孔（径８～９㎜）４個。
11	〃	小形鉢	11.5	6.9	11.5	丸底。口縁部が短く、わずかに外反。
12	〃	〃・口縁端底部欠				胴部より緩やかに口縁が外反。
13	〃	手捏ね土器	9.2	4.8	9.5	小形椀形。やや尖り気味の底部。口縁部上方でやや内弯気味に直立。器厚が一定していない。
14	〃	〃	8.9	3.6	9.1	小形椀形。尖り気味の底部。13に比べ、やや浅い。
15	〃	杯・底部一部欠	9.0	2.0	9.0	口縁端で短く直立する。
1	J 2	手捏ね土器	6.1	4.8	6.1	器形がいびつで、楕円形気味の小形椀形。厚さも面も一定していない。
2	〃	高杯・脚一部				裾端部に行くに従い、薄手になる。
3	〃	〃・　〃				裾部にかけて弯曲し、開く。裾部は薄くなる。
1	J 3	甕・口縁部	49.0			外反する口縁部下に刻み目を有す台状凸帯一条。口縁部にややふくらみあり。大形甕。
2	〃	〃	15.5	18.2	16.5	なだらかなカーブで外反する口縁。口唇端は丸味を帯びる。丸底気味。
3	〃	壺・口縁部	27.0			内傾のやや少ない逆「く」字口縁。口縁部上部は薄くなり、内面の屈曲も緩やか。
4	〃	甕・底部	(底径) 6.8			やや丸味を帯びた平底で楕円形。
5	〃	椀	15.3	8.3	15.6	半球形を呈し、口縁部はやや内弯気味に方ちがある。
6	〃	器台・受け部、裾部欠				くびれ部が上方で、受け部、裾部とも開く。
7	〃	〃・裾部欠	17.4	(推定) 23.0		朝顔状に開く。受け部端の下部はわずかに下に突出気味。
8	〃	〃・受け部、裾部欠				くびれ部付近の器厚が厚い。
9	〃	〃・受け部	12.8			朝顔状に開く受け部。
10	〃	〃・受け部、裾部欠				くびれ部が上方で、受け部、脚部ともに開く。

焼　土	土　坑(貯蔵穴様)	溝	主　柱　穴	備　　考	No.
不　明	不　　明	なし	4	中央に試掘溝	1
な　し	〃	東壁際にわずか残存	不　　明		2
〃	〃	東壁際	2	西南角試掘溝	3
〃	な　　し	なし	――	西南角発掘区域外	4

手　法　の　特　徴	胎　　土	焼成	色　　調	備　　考	Fig	遺物番号
外面：ヨコナデ 内面：口縁部に竹管工具による施文２個。肩部への移行部に指圧痕。	精良	良	外面：黒褐色 内面：明褐色	胴部以下を欠損した後、器台に転用した可能性あり？	13	1
外面：ヨコナデ 口唇部、内外面ともヨコナデ。	〃	〃	赤褐色		〃	2
器面磨滅の為、不明。	〃	〃	明赤褐色		〃	3
外面：ヨコナデ 内面：ハケ目	微量の石粒を若干含む。	〃	赤味を帯びた黄褐色		〃	4
外面：ヨコナデ 内面：杯部はヘラ削り、脚部は非常に細かいハケ目。	微量の長石粒等を若干含み、きめ細かい。	〃	薄茶色		〃	5
外面：穿孔より上部はヘラ削り、下方はハケ目。 内面：穿孔より上部はヘラ整形、下方はハケ目。穿孔の時の粘土のはみ出しあり。	小石粒を少量含む。	〃	外面：淡赤褐色 内面：暗褐色		〃	6
外面：ヨコナデ 内面：磨滅の為、不明。	良	〃	明褐色 （内面に黒褐色部分あり）	胴部以下を欠損した後、器台に転用した可能性あり？	〃	7
外面：口唇部は粗いハケ目の後ヨコナデ。下方は縦方向のハケ目。 内面：ハケ目	長石・石英粒等を含む。	〃	黄褐色		〃	8
器面磨滅の為、不明。	砂粒・微量の長石等を若干含み、きめ細かい。	〃	淡赤褐色		〃	9
外面：受け部はヨコナデ。 内面：脚部上方はナデ。下方は細かいハケ目。	良	〃	赤褐色 （脚部から受部に黒班あり）		〃	10
外面：口縁部ヘラ調整痕。口縁部下指ナデ。底部ヘラ削り。 内面：上方ヘラ調整	少量の砂粒を含み、きめ細かい。	〃	外面：黄褐色 内面：やや黒味を帯びる		〃	11
外面：磨滅の為、不明。 内面：非常に細かいハケ目。	砂粒を多量に含む。	〃	外面：淡褐色 内面：黄赤褐色		〃	12
口縁部は両面を挟んで横方向にナデ。 外面：指ナデ。内面：所々に指圧痕。	細砂粒を含み、きめ、やや粗い。	やや不良	黄色味を帯びた暗褐色		〃	13
内外面ともに指整形。	きめ粗く、やや不良。	〃	小黒班あり。		〃	14
外面：ナデ。底部周辺ヘラ圧痕。 内面：ヘラ磨きの後ハケ目、更にヨコナデ。	精良	良	赤褐色		〃	15
内面：明瞭な指圧痕が部分的に残存。	細砂粒を少量含み、良。	〃	淡褐色		14	1
外面：ヘラ削り 内面：ヘラをあて、回して削り調整。	小石粒を若干含み、きめ細かい。	〃	外面：黄赤褐色 内面：淡褐色及び灰褐色		〃	2
外面：ヘラ削り 内面：ヨコナデ	微量の小石を含み、きめ細かい。	〃	淡褐色		〃	3
口唇部及び内面上方はヨコナデ。 外面：ハケ目。凸帯付近はヨコナデ。刻み目は、細かい線のある斜め帯状のもの。内面：ハケ目	砂粒が多く、小石粒等を含む。	〃	外面：淡褐色 内面：白色を帯びた黄褐色		15	1
外面：ハケ目 内面：口縁部、胴部にハケ目。底部に指圧痕。	長石・石英粒・砂粒を多量に含む。	〃	淡い明褐色		〃	2
外面：屈曲部より下方にハケ目。	小石粒等を含む。	〃	外面：淡黄赤色 内面：淡黄褐色		〃	3
外面：ハケ目。底面にも明瞭なハケ目。 内面：ハケ目	長石粒等を多く含む。	〃	外面：暗黄褐色 内面：白味を帯びた黄褐色		〃	4
外面：ハケ目。部分的にヘラ痕あり。 内面：ヨコナデ。底部に指圧痕。	砂粒を少量含む。	〃	明赤褐色		〃	5
外面：ハケ目 内面：全体になでた後にハケ目	小石粒を多量に含む。	〃	淡褐色		〃	6
外面：ハケ目 内面：くびれ部より上方、ハケ目とヨコナデ。下方にかけてヘラ削り。	石英粒等を含み良。	〃	黄褐色		〃	7
外面：ハケ目 内面：上方に一部分ハケ目。くびれ部付近ヨコナデ。	細石粒を多量に含む？	〃	黄赤色		〃	8
外面：ハケ目。上方は後にヨコナデ。 内面：ハケ目。	砂粒を含む。	〃	淡黄赤色		〃	9
外面：ハケ目。 内面：上方及び下半部にハケ目。	小石粒を多量に含む。	〃	外面：白味を帯びた黄褐色 内面：暗黄褐色		〃	10

第３号住居址（Fig.18）

第Ⅰ地点発掘区の西側南寄り、第４号住居址の北方2.8m（最短距離）に位置する。長軸5.6m短軸4.48mの長方形を呈する。長軸方位はN－51°－Eである。西南角付近を試掘溝によって切られている。主柱穴はＰ１・２の東西方向の２個と思われる。Ｐ１はごく小さいピットが隣り合った状態になっているので、或いは、この２個が同時にあった可能性も考えられるであろうか。やや疑問を残す。Ｐ２は径約30cm、深さ33cmで、ピット間の心心距離は2.5mである。炉は不明で、焼土の検出もされていない。南壁際中央に土坑状のものが検出されている。東辺西辺の両短辺に沿って、ベッド状遺構が設置されている。西辺沿いのベッド状遺構は試掘溝により、南側の一部を欠いている。ベッド状遺構の部分を除いた北壁、南壁もかなり斜めの面をもった壁となっている。周溝は北東角から東壁際に残存している。西壁にも細長い溝状のものがみられるが、周溝の一部かどうかは不明である。床面は平坦で、小ピットをもつ不整形の土坑や長方形の土坑等も検出されている。壁高は約24～40cmである。なお、本住居址の床面より10cm程上層で、礫石が多数出土した。その中には石斧（Fig.133の１・４・５）もみられたが、本住居址に伴うものではないと考える。又、砥石（Fig.138の３）も出土している。

第３号住居址内出土土器（Fig.15）

本住居址の中央付近から器台等が出土している。器種は甕・壺・椀・器台である。甕は１・２・４。１はかなり大形の甕で、外反する口縁部下に刻み目をもつ台状凸帯をめぐらすもの。口縁端がやや膨らみをもっている。内外面ともにハケ目調整がされ、口唇部と内面上方にはヨコナデが行なわれている。凸帯の刻み目は５mm程の巾の斜め帯状で、施文具による細かい横線がみられる。外面は淡褐色を呈し、砂粒等を含み焼成は良。２はなだらかなカーブで外反する口縁と丸底気味の底部をもつ。内外面、ハケ目調整で内面底部付近には指圧痕がみられる。淡い明褐色で、長石、石英、砂粒を多量に含み焼成は良である。４はやや丸味を帯びた平底で底面は楕円形である。内外面全面にハケ目調整がされている。３の壺は逆「く」字口縁で口唇部がわずかに外弯気味で内傾もやや少ない。外面屈曲部の稜は明瞭であるが、内面は緩やかである。外面屈曲部より下方にハケ目調整がみられる。色調は淡黄赤色。小石粒等を含み、焼成は良。椀は５である。半球形で口縁部がやや内弯気味に立ちあがるもので、口唇端は平坦である。外面にはハケ目調整が行なわれ、部分的にヘラ痕がみられる。内面はヨコナデ、底面に指の圧痕が明瞭に残っている。色調は明褐色で砂粒を少量含み、焼成は良である。器台は６～10である。すべて、くびれが上方にあるものである。７と９は朝顔状に開く受け部である。７は口縁端の下部がわずかに下に突出気味で稜をなし、くびれがはっきりしている。外面はハケ目調整。内面はくびれ部より上方ではハケ目調整とヨコナデ、下方にかけてはヘラ削りが行なわれている。口縁端の突出気味の部分はヘラ調整がされている。色調は黄褐色。胎土、焼成は良である。９もハケ目調整がされ、外面上方は後からヨコナデである。６・８・10は受け部と裾部を欠いている。６はくびれ部より緩やかに開き、やや内弯気味に開く裾部へと続いている。外面はハケ目調整。内面はナデの後にハケ目調整が行なわれている。色調は淡褐色で、小石粒を多量に含み、焼成は良。８はくびれ部付近の器厚が厚く、外面はハケ目調整、内面はヨコナデがみられる。10は直線的に開くもので、内外面はハケ目調整。小石粒を多量に含み、焼成は良である。

第４号住居址（Fig.19）

第３号住居址の南方2.8m（最短距離）に位置する。西南角が発掘区域外にかかり、ピット数を欠いている。長辺4.82m、短辺3.7mの長方形を呈する。長軸方位はN－69°－Eである。本住居址は柱穴のみを残すもので、平地式住居であろうと考えられる。短辺が７本柱、長辺が10本柱であろう。東辺と南辺には、位置的に考えられる柱穴の間にピットがかなりみられる。短辺のピット間の心心距離は約44～68cmで、平均が56cmである。長辺のピット間の心心距離は約48～64cmで、平均は55cmとなっている。各辺のピット間の距離は、ほぼ同一になっている。それぞれの角に位置するピット３個の深さは25～32cm程で他のピットに比べ、やや深くなっているようである。又、ピットの大きさは西辺に比べ、東辺のものの方がやや小さいが、径20～30cm前後のものが多い。

なお、遺物の出土はみられないが、奈良・平安時代以降の住居址と考えられる。

③　その他の遺構

第１号掘立柱遺構（Fig.10）

２間×２間で、正方形に近いが、Ｐ１～Ｐ３の方向を桁行とした。桁行方位は南北線上に一致する。桁行間の平均は281.3cm、梁行間は238cmを測る。なお、Ｐ１・４・６は試掘溝にかかり、約½が削られている。

第２号掘立柱遺構（Fig.11）

２間×２間であるが、Ｐ５に当たる柱穴は検出できなかった。桁行方位はN－86°－Wを指す。桁行間の平均は362cm、梁行間は306cmを測る。

第３号掘立柱遺構（Fig.12）

２間×１間の長方形の建物跡である。桁行方位はN－80°－Wを指す。桁行間は412cm、梁行間の平均は143.3cmを測る。

第１号掘立柱遺構と第２号掘立柱遺構は方位もほぼ一致しており一連の建物であった可能性もある。第３号掘立柱遺構は１・２号とはやや離れた位置にあり、規模も異なる。

これらの掘立柱遺構からは、構築時期を示すような遺物の出土はないが、遺構の配置状況からみて、あるいは第１号住居址、第２号住居址と同時に営まれた倉庫の跡であるとも考えられる。

Tab. 3　第Ⅰ地点掘立柱遺構計測表

第１号掘立柱遺構

桁行	Ｐ１～Ｐ２	Ｐ２～Ｐ３	Ｐ４～Ｐ５	Ｐ６～Ｐ７	Ｐ７～Ｐ８	平　均
	136	146		134	146	140.5
	282		282	280		281.3
梁間	Ｐ１～Ｐ４	Ｐ４～Ｐ６	Ｐ２～Ｐ７	Ｐ３～Ｐ５	Ｐ５～Ｐ８	平均
	120	118		122	116	119
	238		238	238		238

	Ｐ1※	Ｐ2	Ｐ3	Ｐ4※	Ｐ5	Ｐ6※	Ｐ7	Ｐ8	平均
径	45	51	67	56	57	58	53	60	55.9
深	15	30.5	61	21	39.5	24	11	18.5	27.6

※印は推定値。平均値は推定値も含む。小数点２位を４捨５入。
方位：南北線上に一致する。

第２号掘立柱遺構

桁行	Ｐ１～Ｐ４	Ｐ４～Ｐ６	Ｐ２～Ｐ７	Ｐ３～Ｐ５	Ｐ５～Ｐ８	平均
	194	168		(190)	(170)	181
	362		362	(360)		362
梁間	Ｐ１～Ｐ２	Ｐ２～Ｐ３				平均
	164	142		164	142	153
	306		(306)	306		306

	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８	平均
径	42	52	32	28	－	32	40	42	38.3
深	37.5	65	39.5	13.5	－	18	31	43.5	35.4

Ｐ５は検出されなかった。Ｐ４の径は北側の最大径。
方位：N－86°－W

第３号掘立柱遺構

桁行	Ｐ１～Ｐ３	Ｐ３～Ｐ５	Ｐ２～Ｐ４	Ｐ４～Ｐ６	平　均
	206	206	194	218	206
	412		412		412
梁間	Ｐ１～Ｐ２	Ｐ３～Ｐ４	Ｐ５～Ｐ６	平均	
	144	144	142	143.3	

方位：N－80°－W

	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	平均
径	66	52	56	54	66	44	56.3
深	21	32	28.5	32	27	30	28.4

5．第II地点の調査

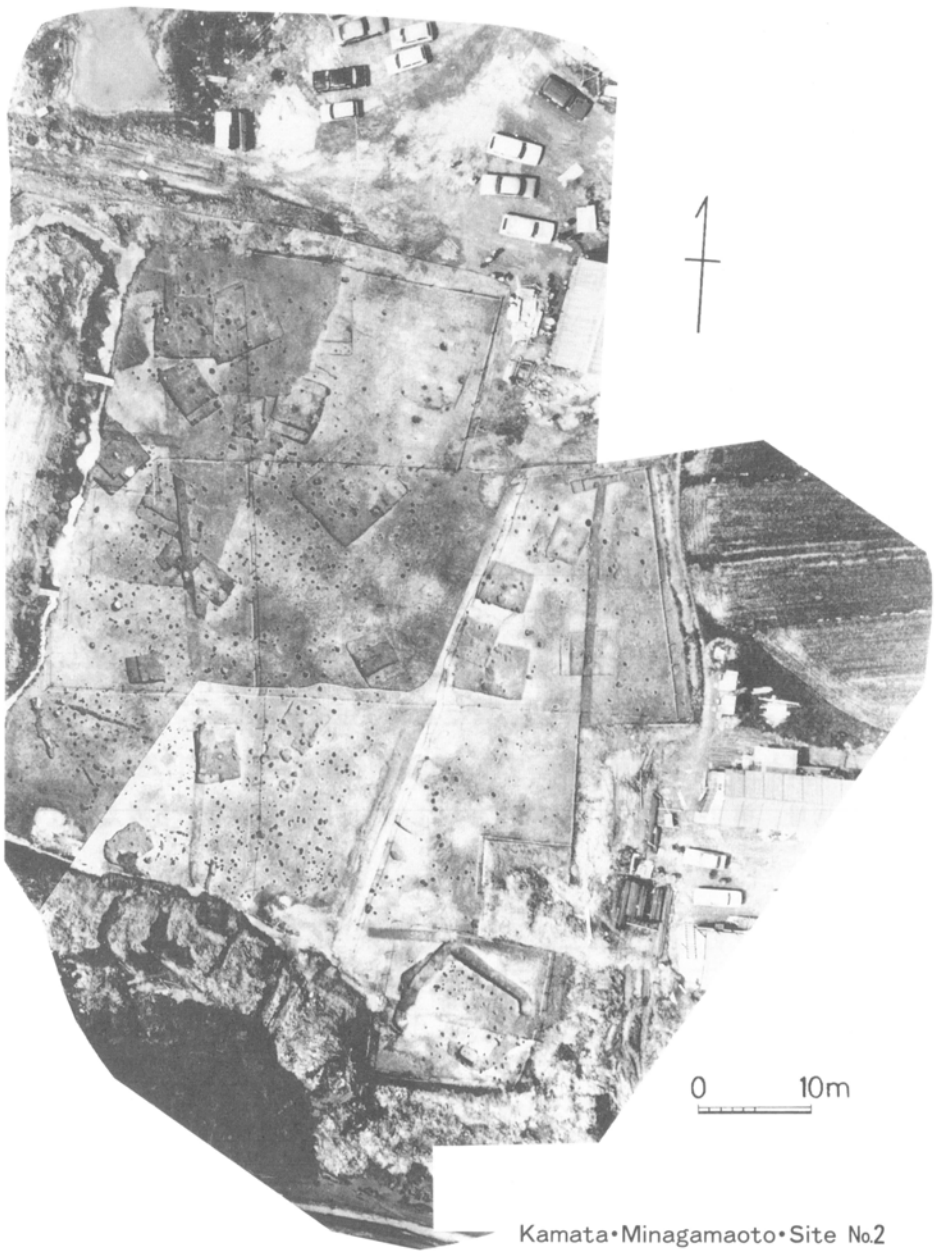


Fig. 16 第 II 地 点 航 空 写 真（西側）（Ph. 5）

Fig. 17　第II地点遺構配置図（縮尺1／400）

① 第II地点の概要

本地点は遺跡の東北部分標高25メートルから23メートルの地点に形成された集落群である。本地点の隣接部分は南側が第Ⅰ地点と本地点の間に形成された谷で本地点集落群の南限を示し、東、北、西側は圃場整備による損壊と思われる試掘結果を得ている。本地点を含む緩斜する台地は西側の標高21メートルから急な段差をもって現在の水田面標高19メートル地点へと落ちる。この水田面の調査も埋蔵文化財保護理念からすれば当然調査対象となるが、調査会にその余力がなかった事を申し添える。

さて、本地点の集落の特徴は、住居群と掘立柱群を取り囲む環濠の存在である。

まず住居址を大別すると４つの形態が概観できる。その１つはベッド状遺構を全くもたないもの、その２は短辺の片側のみにベッド状遺構を配するもの、その３はベッド状遺構を短辺両側に有つもの、その４は住居址長辺、短辺の四辺にベッド状遺構を配置するものである。住居址は複雑な切り合い関係を示しているが、土質が雨に触れると極端に柔かくなり、陽に照らされると反対に堅くなって移植小手を通さない状態で、また地山の文化層の覆土の色別が困難事もあって、切り合いの時代的新旧の判断及び住居址の平面プランの正確さを問う事が難しかった事を申し添える。

環濠について言及する。環濠内には２間（2.67メートル）・６間（7.47メートル）の掘立柱遺構を、環濠は幅1.6メートル内外、深さ0.5メートル内外、長辺16メートル、短辺12メートルを測り、南辺に幅４メートルの出入口部分がある。本遺構が集団管理の倉庫であるのか集団の精神的支柱となる施設であるのか今後の課題となろう。

本地点の出土土器は弥生時代後期に比定されるが、その分析は常松幹雄よりなされている（『伊都国の土器、那国の土器』、「古代探叢III」早稲田大学考古学会滝口宏編所収）ので参照されたい。

② 住　居　址

第10号住居址（Fig.18）

第II地点発掘区の北寄り東側に位置する。長軸4.2m、短軸3.7mの長方形を呈するが、東辺3.7m、南辺3.12mでやや短い、主柱穴はＰ１・２の２個でやや西寄りに位置している。心心距離は3.06mで、Ｐ２はＰ１に比べ径が大きい。炉は床面中央にあり、炉内より焼土も検出された。東壁際中央に不整形の土坑がある。床面は平坦。壁高は12cm。長軸方位はＮ－20°－Ｅである。東北角床面より鉄製の鍬先（Fig.139の2）が出土。砥石も２個（Fig.136の1･2）出土。

第11号住居址（Fig.21-1）

発掘区の北側中央に位置する。西半を削平され欠くが現存部分は5.7mで長方形であろう。主柱穴は不明。炉は中央に位置すると考えられ、炉の東側にも焼土が検出された。東壁際中央に不整形の土坑がある。ベッド状遺構は両短辺沿いに確認され、北側ベッド状遺構の南側にもわずかな段をもつ面がみられる。周溝も全周すると思われる。壁高は非常に浅く削平著しい。

第14号住居址（Fig.32・33）

第10号住居址の南6.8mに位置する。長軸5.5m、短軸4.5mの長方形を呈す。主柱穴はＰ１・２の２個であるが、Ｐ１はやや浅く多少疑問を残す。炉は床面中央であるが、試掘溝により半分を欠く。西側に炭化材と、住居址全体に炭化物、及び焼土が多量に検出される為、火災にあった可能性が強い。両短辺に沿って、貼り付けによるベッド状遺構が設置されている。周溝は部分的に途切れているが、ほぼ全周するとみられる。床面は中央がやや上がっている。

第10号住居址内出土土器（Fig.21-2の１・２・３）

１の壺底部と２の小形高杯の接合部、３の杯が出土。３は小さな丸底から斜上方に大きく開く杯である。口唇部は丸味をもつ。内外面ともにハケ目調整で、底面付近はかなり丁寧に各方向から行なわれている。きめ粗く、焼成良。

第11号住居址内出土土器（Fig.21-2の４）

５の器台が出土している。くびれ部が上方に位置し、受け部、脚部とも開くもので、脚端部がやや内弯気味である。又、受け部端、脚部端が薄手になり丸味をもっている。

第14号住居址内出土土器（Fig.21-2の５・６・７・８・９）

５は外反する口縁で、甕か壺かは不明である。６は壺の口縁、肩部にかけて急に薄手になるもの。８は外側に大きく開く脚部と思われるが、比較的厚手である。９の小形器台は上部を欠失しており、支脚の可能性もあると思われる。外面、ヘラ削りがみられる。

第12号住居址（Fig.20）

第II地点発掘区の北東隅に位置する。発掘区域外にかかり、東側を斜めに欠いている。全体に削平が著しく、北側の壁は確認できなかったが、推定長辺６m、短辺４mの長方形を呈すものと思われる。主柱穴は不明。北側角の３個のピットの帰属も明確ではないが、本住居址のものと考えてよいであろう。炉は床面中央にあり、焼土が炉内と、炉と西壁の間に検出された。又、焼土範囲の付近では炭化物及び炭化物混入土の広がりもみられた。南壁際中央に不整方形の土坑があり、この土坑より砥石（Fig.138の４）が出土している。周溝は南壁際沿いで検出。

第13号住居址（Fig.20）

第12号住居址に隣接し、南側の一部が検出されたのみで、大半は発掘区域外にあたる。長方形を呈すと思われ、現存する長辺は6.12mである。東西の両短辺に沿ってベッド状遺構をもつものであろう。南壁際中央に半円形の浅い土坑がある。周溝は東寄りに一部、残存している。東隅の壁は削平され、遺存しない。なお、鉄器片（Fig.139の３）が出土している。

第15号住居址（Fig.22）

第II地点発掘区の北東寄りに位置する。長軸5.2m、短軸4.32mの長方形を呈し、長軸方位はN－76°－Wである。主柱穴はＰ１・２の２個と考えられる。Ｐ１・Ｐ２とも径48cm程の楕円形気味のもので、中に径18cm程の小ピットがみられる。やや北寄りの東西方向で、心心距離は2.8mである。炉は床面中央部にあり、炉内より焼土も検出された。北辺の東寄り付近には、焼土も多少混入した炭化物が、直径50～60cmの範囲にみられた。炉と南壁の中間に不整形の土坑があり、この土坑より、壺等の土器が多数出土している。床面はほぼ平坦である。西側が削平され、斜面になっている為、西壁部分はわずかに残存するのみであった。東側の壁高は36cm程度である。なお、住居址の全面から多量の土器が出土しているが、特に中央付近に多い。東北の角に器台４個が出土した。又、その他の遺物としては、石庖丁（Fig.134の４・５）が西北寄りの床直上と東側中央付近上層から出土。ガラス玉（Fig.140）が東南付近より４個出土。

第16号住居址（Fig.22）

第15号住居址の南に位置する。長軸5.3m、短軸は西側が斜面になっており、西壁を欠くが、4.3m程と思われる。長方形を呈し、長軸方位はN－19°－Eを示す。主柱穴はＰ１・２の２個で、炉を挟

んで南北方向にある。Ｐ１は径約45cm、深さ15cm。Ｐ２は径約24cm、深さ18cm程である。２個の心心距離は3.04mである。炉は床面中央よりやや南寄りにあり、炉内に焼土も検出された。北側短辺沿いにベッド状遺構が設けられている。この東側には細長い溝状のものが、延長して第15号住居址に続いているが、この溝は新しいものと思われ、本住居址には伴わないものである。周溝が東南角付近に残存している。東側の周溝は東壁際にある小形の土坑と繋がり終わっている。東南角から南側の壁も明確ではない。第17号住居址と切り合っており、新旧関係は本住居址の方が新しいといえるであろう。なお、出土土器は第15号、第17号住居址に比べ、少なかった。又、東壁付近より鉄器（Fig.139の４）を出土している。

第17号住居址（Fig.22）

第15号住居址の南側にあり、第16号住居址によって、全体の1/4近くを切られている。西北部を欠くが、長軸7.24m、短軸5.52mの長方形を呈す。やや大形の住居址である。長軸方位はほぼ東西である。主柱穴は不明である。炉を挟み南北に並ぶピットもみられるが、深さや位置等にやや疑問がある。炉は床面中央。長径1.32m、短径1.08mの楕円形で大きい。炉内より焼土も検出されている。南側長辺の中央、壁より約40cm程離れた所に長方形の土坑をもつ。大きさは152×80cm、深さ約25cmである。床面は西側でやや低くなっている。壁高は10～30cmである。本住居址からは夥しい量の土器片が出土し、特に中央部に重なり集中していた。上層下層の別なく出土している為、廃棄されたものであろう。その他の遺物としては、石庖丁が２個（Fig.134の９・12)、砥石が１個（Fig.138の５)。東側より鉄器２片（Fig.139の５・６)、ガラス玉が東側中央付近に１個と中央付近に２個。やや西寄りで１個の計４個（Fig.140）が出土している。

第15号住居址出土土器（Fig.23～25）

器種は甕・壺・小形鉢・器台・支脚がある。甕は２～14・25・27。いずれも「く」字口縁であるが２～５は口縁部直下に三角凸帯を一条めぐらすもの。２・６・11・13は口縁部がやや肥厚し膨らみをもつものである。９は小形で直立気味の胴部より緩やかに外反する。25は口唇部が薄くなり丸味をもつ。13は張りの少ない胴部より弯曲し口縁をもち、27は胴部から口縁部にかかる部分でやや巾をもち、口縁部が短く外反する形態を呈す。胴部外面はほとんどハケ目調整がみられ、内面もハケ目調整、或いはヘラナデである。壺は１・５～24・26で、１は朝顔状に開き口縁上部内面が斜めの平坦面をなし、段をもつもので口唇端に刻み目が施されている。24は平底。球形胴部に外反する口縁をもつもの。15～22は逆「く」字口縁をもつものである。逆「く」字口縁の中で、口縁上部が内弯気味に内傾する（15・19・20）とやや外弯気味に内傾する（16～18・21・22）がある。又、18は内傾が少なく口唇端が薄くやや外反し、19は屈曲部がかなり丸味をもち、20は屈曲部に３mm程の巾の突出をもち、頸部が短く大きく弯曲するなど、個々に形態の違いをみせている。総体的には口縁上部が、内弯気味に内傾するものの方が古いといえよう。28～31は小形鉢で、30は手捏ねである。32～40は器台。32・34～39はくびれが上方にあり、受け部、脚部とも開くもの。33・40は脚部中間がやや筒状を呈し、受け部が開くものである。外面はハケ目調整がほとんどであるが、37は叩き目が施されている。41は頂部に孔をもつ支脚である。

第16号住居址内出土土器（Fig.26）

甕・壺・鉢・高杯・器台・沓形器台がある。甕は２で、直線的に開く口縁直下に形の整っていない

刻み目のある凸帯をめぐらしている。内外面にハケ目調整。1の壺は口縁上部がやや外弯気味に内傾する逆「く」字口縁で、外面屈曲部がやや突き出ている。4の鉢は大形のものである。7は高杯の脚部で、接合部内面の中央に孔を1個もっている。外面はヘラ削りがされている。器台は5・8～11で、小形で筒形を呈すもの(5)と、くびれ部が上方にあるもの（8・10）とがある。9は緩やかにくびれている。内外面ともにハケ目調整がほとんどであるが、5はヘラ削りがみられる。沓形器台の6は、頂部がやや斜めで孔をもつものである。

第17号住居址内出土土器（Fig.27～30）

器種は甕・壺・長頸壺・鉢・高杯・器台・沓形器台・支脚・小形土器である。1・2・5～14は甕で、「く」字口縁の直下に三角凸帯をもつもの（1・2・5）と、もたないものがある。1は大形の甕である。2はくびれ部やや下方に凸帯がめぐらされている。6は緩やかな「く」字形を呈すもの。口唇端部がヨコナデにより、中央がやや凹んでいるもの（2・5・11・12）もある。内外面にハケ目調整がされているものが多い。壺は朝顔状に開く口縁のもの（3・4・19)、やや丸味をもつ平底に球形胴部がつき、口縁がやや外反する（20)、胴中位よりやや上方が張り出し、緩やかな弯曲を呈し口縁がわずかに外傾する（22)。逆「く」字口縁をもつ（15～17）がある。17は口縁上部が短く内弯気味に内傾するもの。15・16は外弯気味に内傾するものである。18は逆「く」字形に近い二重口縁で、内傾が少なく屈曲部が下方に下がり気味に突き出ている。口縁部外面には7～8本のほぼ、等間隔の凹線文が一周している。屈曲部下、接合部分には指先の圧痕がめぐり頸部はハケ目調整が行なわれている。この土器は、弥生時代後期前半の凹線文の盛行する中国地方系の様相を呈しており、本遺跡においては特異なものである。21の長頸壺は丸底である。23～26・28は鉢である。23は丸底に近い底部で口唇端がわずかに外傾する。24は丸底。25は平底で口唇部は丸味をもつ。26はやや丸味を帯びる平底の深鉢。28は大きく外反する口縁をもつ鉢形であるが、脚部がつく可能性もある。29～33は高杯である。29はやや内弯気味に立ちあがる。杯に明瞭な稜をもち、口縁が大きく外反するもの。30は内外面に明瞭な稜をもち、口縁が外反するもの。器台は35～46で、くびれ部が上方にあり、受け部が朝顔状に開き、受け部端に刻み目をもつもの（35～38）と、刻み目をもたないもの（39～42)。受け部、裾部とも開き中間でやや筒状を呈すもの（43・44）がある。又、脚部も開きが少なく筒状に近いもの（37・38・42）と、「ハ」字形に開く（39・41・45・46）がある。外面はほとんどがハケ目調整であるが、46は叩き目である。沓形器台は48で、外面と頂部に叩き目がされ、頂部中央に孔をもつ。支脚（47）は頂部に孔をもち脚が開く。内面の孔下方にしぼり痕がある。27は鉢形の小形土器で手捏ねである。

第18号住居址（Fig.56）

発掘区の西側南寄りに位置する。長軸3.84m、短軸2.84mの長方形を呈すが、北辺東寄りに突出する部分がある。主柱穴は西寄りのベッド状遺構際の径15cm程のピット以外は、見当たらず不明である。炉は床面中央やや南寄りにあり、炉内より焼土が検出された。又、炉の周囲に直径1m程の範囲で炭化物もみられた。南壁際中央にやや小形の楕円形土坑がある。ベッド状遺構は西側短辺沿いにあり、一方にのみ設置されている。ベッド状遺構の西側中央部から西壁にかけて、面が大部分、斜めになっている。床面は平坦。壁高は西側を除いては35cm程度である。長軸方位はN－81°－Eである。なお、出土土器は本住居址の中央付近の上層に多く、その他に、ガラス玉が1個（Fig.140)、炭化物の層

の直上から出土している。

第18号住居址内出土土器 (Fig.31)

甕・壺・小形壺が出土。2～4は甕で「く」字口縁をもつ。2はかなり口径が広く、胴部も直立気味である。3と4の口縁部はヨコナデ、胴部にハケ目調整がみられる。1の壺は内弯気味に内傾する逆「く」字口縁である。5・6は平底底部。7は小形壺。やや丸底気味で厚く、口縁部は短く直立し更にやや外反して薄くなる。赤褐色を呈し、下半にススの付着がみられる。

第19号住居址 (Fig.57)

発掘区の中央部で、第20号住居址の北東3.8m（最短距離）に位置する。長軸4.66m短軸3.76mの長方形を呈する。長軸方位はN－27°－Wである。主柱穴はP1・P2の2個と考えられる。P1は長径30cm、深さ約14cmで、掘り込みが少なく、やや疑問を残す。P2はベッド状遺構の中間にあり、長径40cm、深さ約19cm程である。南北方向で西側に寄り気味となっている。ピット間の心心距離は3mである。P1の東側並びのピットも関連のあるものかどうかは不明。炉は床面中央よりやや西寄りにある。焼土は炉内から検出されている。西壁際中央には長径90cm、短径62cmの楕円形を呈す土坑がある。ベッド状遺構が南北の両短辺沿いにある。床面は西側が若干低くなり、壁高も南西部ではわずかに残存する程度である。

第19号住居址内出土土器 (Fig.32～33)

多数の土器片が出土している。器種は甕・壺・鉢・器台。1～3・5・6は甕である。1～3は比較的小形のもので、1と2は緩く外反する短い口縁をもち、明瞭な稜がみられない。1は平底で内面底部近くに、わずかにハケ目が残存する。2は外面ハケ目調整。胴部内面に部分的に指圧痕がみられる。3は「く」字口縁にやや短く丸味をもつ胴部がつき平底である。5は逆「く」字形に近い口縁で、内外面ともにハケ目調整。6は底部端がやや丸味を帯びる平底である。7・8は逆「く」字口縁の壺である。7は口縁部上方が外弯気味に内傾し、屈曲部外面が8mm程の巾で突出しており稜が明瞭なもので、頸部直下に小さい三角凸帯一条と胴部の最大径の部分より、やや下方に刻み目をもつ丸味のある台状凸帯一条をめぐらす。内外面ともハケ目調整。口縁部内面と突出部の下面に明瞭な指圧痕が等間隔に並んでいる。8は若干、内弯気味にやや内傾し、屈曲も緩やかなもので、頸部上方の弯曲も7ほど大きくはない。やはり、頸部直下に三角凸帯一条をめぐらし、内外面にハケ目調整がみられる。7は8よりも後出するものであろう。4・9は鉢である。4は平底で口縁部が緩やかに外反するもの。上方に行くに従い器厚が薄くなっている。9は厚手の平底から立ちあがり、口唇端が平坦面をなすものである。10・11は器台。筒状を呈す脚部中位に裾部が開くもの（10）と、上方で緩やかにくびれ、受け部、脚部とも開くもの（11）があり、11は受け部端、脚部端に稜がみられる。内外面ともにハケ目調整が行なわれ、内面は上方、下方で更にナデがされている。

第20号住居址内出土土器 (Fig.34の1・10・11)

1は高杯でほぼ完形である。口縁部との接合部に稜を持ち、外反し開く杯部に柱状部が長く、裾部が緩やかに広がる脚がつくものである。脚部外面の上方はヘラ削り、脚部下方は内外面ともにハケ目調整である。杯部がやや斜めに傾いて接合されている。10は直立する胴部に肥厚して外反する甕の口縁。11は平底の底部で、内外面にハケ目調整がされている。

第21号住居址内出土土器（Fig.34の２～９・12・13）

甕・壺・鉢・器台がある。甕は「く」字口縁で、やや大形のもの（３・４）と、小形のもの（12）があり、内外面ともにハケ目調整である。12の内面底部付近は指によりナデ押さえがみられる。壺は外弯気味に内傾し、屈曲部がやや突き出る逆「く」字口縁のもの（７・８）と、直口壺（９）、頸部に連続する刻み目をもつ台状凸帯をめぐらす大形のもの（２）がある。鉢は13のみで、口縁が短く強く外反し、平底である。器台は中位が筒状を呈す（５）と、「ハ」字形に開く脚（６）がある。

第20号住居址（Fig.57'）

発掘区の中央部のやや南寄りに位置する。長軸5.5m、短軸4.4mの長方形を呈す。主柱穴はＰ１・２の２本柱か、或いは、Ｐ３～６の４本柱が考えられる。Ｐ４とＰ６は形態が似ている。炉は床面中央部で焼土を伴っている。ベッド状遺構は北側短辺沿いと南側短辺沿いの西半に設置されている。南西隅の壁は削平され確認できなかったが、ベッド状遺構設置とみてよいであろう。周溝が北壁際と東壁際に残存している。なお、東側の炉との中間から高杯が出土。

第21号住居址（Fig.58）

5.9×4.66mの長方形を呈す。西側を試掘溝が切り西南角を欠く。主柱穴はＰ１・２の２個。炉は中央部で焼土を伴う。東辺中央に両端に小ピットがつく楕円形の土坑があり、出入口の可能性をもつ。北辺の東半、南辺の西半にベッド状遺構がある。東南部で石庖丁（Fig.134の８）。東壁側で鉄器（Fig.139の７）を出土。

第23号住居址（Fig.59）

Gn－10西側に位置する。7.9m×6.64mの長方形を呈し、長軸方位はN－49°－Eを指す。本住居址は上面をかなり削平されており、壁高は最も残りの良い所で26cmを測るに過ぎない。

主柱穴はＰ１～Ｐ４の４個。柱間の距離はそれぞれ、Ｐ１～Ｐ２間3.84m、Ｐ３～Ｐ４間3.84m、Ｐ１～Ｐ３間2.84m、Ｐ２～Ｐ４間2.64mを測る。中央には不整長方形の炉を持つ。ベッド状遺構は北側短辺の東角にあり、その位置に周溝が残存する。また東側長辺際からは方形の土坑が検出された。

第23号住居址内出土土器（Fig.35）

３は壺で、球形の胴部に強く外反し中央でやや肥厚する口縁を持つ。口縁部はヨコナデ。胴部はハケ目を施す。６・７は鉢であると思われる。６は半球形を呈し、口縁端に僅かな凹みが見られる。外面はヘラ削りとナデ、内面はヘラ削りがされている。７は緩く外反する短かい口縁が、丸味を帯びた胴部につく。底部は丸底であろう。１は高杯。２・４・５も高杯であるが、脚部を残すのみである。１は口縁端と裾部を欠く。杯部は直線的に大きく開く底部から鋭く屈曲、直立し、さらに外に大きく開く。脚部は柱状で、屈曲部から下が欠損している。磨滅により調整痕は不明。４・５もほぼ同様な形態をとると思われる。４の脚部には明瞭なヘラ削りが認められる。５は杯との接合部を削り形を整えた跡が見られ、支脚として使用された可能性がある。２は裾部に段がつき、屈曲部とその上方に45°位置を変え計８個の円形透孔がある。

第24・25号住居址（Fig.60）

第24号住居址を埋め、約１cmの貼床を施し、第25号住居址を構築している。

第25号住居址は長方形を呈すものと思われるが、西壁を削られて不詳。主柱穴はＰ１・２の２個。中央に台形の炉を持つ。東壁際に土坑と周溝が検出され、土坑からは砥石が出土した（Fig.135）。

また鉄器の出土もある（Fig.139）

第24号住居址は残存状態が悪く、形態不明である。

第26・27・33号住居址（Fig.61）

Gn－9西側付近に位置する。第26・27・33号住居址は重複しており、27号住居址の後に26・33号住居址が構築されている。

第26号住居址　5.5m×4.3mの長方形を呈し、長軸方位はN－21°－Eを指す。主柱穴はP1・2の2個。中央南寄りに長方形の炉が検出された。ベッド状遺構は両短辺に位置する。周溝はほぼ全周している。床面には5～7cm程黄褐色粘土の貼床が認められた。なお2個の砥石の出土がある（Fig.136の4・5）。

第27号住居址

26・33号住居址に切られており、規模不詳。東壁際南半分にベッド状遺構がある。柱穴は不明。炉・周溝は検出されなかった。ガラス玉の出土がある（Fig.140）。

第33号住居址

3.96m×2.7mの長方形を呈し、長軸方位はN－11°－Eを指す。主柱穴は不明。中央に方形の炉を持つ。東壁の北半は削平されている。砥石1個が出土した（Fig.135の6）。

第26号住居址内出土土器（Fig.37）

1は壺で、「く」字口縁をなす。両面共ハケ目調整。3・5は支脚である。共に頂部に穿孔があるが、3は面が斜めで、脚は「ハ」字形に開き、裾部でさらに開く。5の頂部は平坦面をなし、上方でややくびれ、裾は内弯気味に大きく開く。

第27号住居址内出土土器（Fig.38）

1・6・9は壺で、1は逆「く」字口縁。口縁端は内外面共に僅かに突出している。7・8は甕で、7は直線的な胴部にハネ上がり気味の強く外反する口縁を持つ。8は張りの少ない胴部より緩やかに外弯する口縁部。共にハケ目調整がなされる。3・4・5は器台の脚部。3は内面端が突出している。4は裾が緩やかなカーブをもって開き、端部に丸味を帯びる。5は直線的に開く。3・4・5共にハケ目調整。2は鉢で尖り気味の丸底を呈し、大きく開く胴部にさらに外反する口縁部がつく。調整は内外面共にハケ目。10は高杯の裾部。緩やかなカーブで大きく開く。内外面共にハケ目調整がなされる。

第33号住居址内出土土器（Fig.36）

3・4は壺で、3は大きく外弯して開く。4は外反する口縁で、丸味を帯びた端部はやや外側に引き出されている。1・2は甕で、1は外弯気味に外反する。2はやや強く外反する口縁。7は鉢で、平底より急に立ち上がりが深い。8・9・10は器台の受部で、直線的に開くもの（8）とややカーブを持って開くもの（9・10）とがある。

第31号住居址（Fig.62）

5.7m×4.9mの長方形を呈し、長軸方位はN－48°－Eを指す。検出住居址中最も残りが良く壁高56cmを測る。主柱穴はP1・2と対応する2個（推定）の計4個が考えられる。中央に楕円形の炉を持つ。ベッド状遺構は南側中央部を除き全周し、周溝も同様である。ベッド状遺構の欠落部分にはベッド面と同レベルに黄色土を貼っており、黄色土下に検出された土坑と合わせて、この位置に出入口の施設のあったことが考えられる。なお、砥石が2個出土した（Fig.135の3・4）。

第31号住居址内出土土器（Fig.39）

1は壺で、丸味のある胴部より立ち上がる二重口縁を持つ。2は鉢で、丸味を帯びた平底と緩やかに外反する口縁部。3・6は小形壺で、球形の胴部とやや外反し、直線的に立ち上がる口縁部を持つ。4も小形壺の底部と思われる。5は台付の壺で、球形の胴部に外反する口縁部がつき、口唇部でさらに短かく立ち上がる。7も台付の壺か、もしくは小形の高杯であろう。8～10は高杯で、8・9は杯の一部。8は屈曲部に明瞭な稜が認められる。9は屈曲部でやや段をなす。10は脚部で、緩やかなカーブを持って開く。下部に3個の円形透孔がある。

第35号住居址と土坑（Fig.63）

En－9西側に位置する。第35号住居址と土坑は重複しており、第35号住居址の後に土坑が掘り込まれている。

第35号住居址

短辺は3.6m、長辺は用途不明の土坑に切られているが、おそらく4m程度と思われる。長軸方位はN－52°－Eを指す。壁高は28cm。

柱穴は不明であるが、D～D′間、北側の2個のピットなどは本住居址に帰属するとみてよいであろう。住居址中央に検出された楕円形の炉は深く掘り込まれており床面から24cmを測る短辺の半分にはベッド状遺構が設置されている。周溝は断片的に認められた。また、長辺のベッド状遺構が位置する側に方形の土坑が検出された。

土　　坑

前述のように用途は不明である。第35号住居址より新しく、同住居址の南側を切っている。不整楕円形を呈し、規模はおよそ3.4×2.5m程度である。

第35号住居址内出土土器（Fig.40の1～7）

1・4は壺の口縁で、1は強く外反し、中央がやや肥厚する。口縁端は外に引き出される。内外面共にヨコナデが施されている。4は弥生後期の逆「く」字口縁。流れ込みである。2・3は甕で、2は外反する短い口縁。3は外反する口縁で、外面の中央付近はやや肥厚する。口縁端は尖り気味である。5は完形の小形高杯。浅くほとんど直線的な受け部に緩やかなカーブをもって開く脚がつく。脚部下方には等間隔に5個の円形透孔がある。6・7も高杯で脚部を残すのみである。カーブを持たずに小さく開き、裾で屈曲して急に開く形式のものと思われる。

土坑内出土土器（Fig.40の8・9）

8・9共に須恵器の蓋で完形品である。8はやや平坦な天井部に僅かに内傾する体部がつくが境は明瞭でない。9は器高が低く扁平で、端部は尖り気味である。いずれもヘラ削りを施す。

第28・29・32・37・38号住居址（Fig.64）

HS－9東側に位置する。5軒が重複、隣接しており、第28号住居址は第29号住居址および第32号住居址の後に構築されている。第38号住居址との関係はつかめていない。また第37号住居址と第38号住居址の新旧関係も確認できなかった。新旧関係をまとめると次のようになる。

J 29 ⟶
J 32 ⟶　J 28（J 38→J 28）

第28号住居址

第29号住居址の東北角と第32号住居址の西北角をそれぞれ切っている。第38号住居址との関係は、同住居址の形態が不明であり確認できなかった。

5.36m×5.36mのほぼ正方形を呈し、長軸方位はN－4°－Eを指す。壁高は20cmを測る。

主柱穴は不明。中央やや西北寄りに円形の炉を持つ。東壁際にベッド状遺構様の一段高くなった部分があり、その中央には不整形の掘り込みが検出された。周溝は断片的に残存する。砥石が1個出土した（Fig.137の2）。

第29号住居址

第28号住居址と東北角部分が重複しており、本住居址は第28号住居址より古い。

5.36m×3.6mの長方形を呈し、長軸方位はN－32°－Wを指す。壁高は34cmを測る。

主柱穴は明確ではないが、P・2の2個の可能性も考えられる。炉は住居址中央に位置し、床面から5cm掘り込まれている。南側短辺と北側短辺の約½にはベッド状遺構が設置されている。また東側長辺際に残り掘り込みが検出された。石庖丁・砥石各1個が出土した（Fig.134・136）。

第32号住居址

西側部分が第28号住居址と重複しており、本住居址は第28号住居址より古い。

5.82m×6.7mの長方形を呈し、長軸方位はN－68°－Wを指す。壁高は16cmを測る。

主柱穴は炉を挟んで対応するP1・2の2個。住居址中央に方形の炉が掘り込まれている。ベッド状遺構は東側短辺に位置する。なお東壁北半は削平されている。周溝は断片的に残る。砥石が1個出土した。詳しくはFig.135の5を参照されたい。

第37号住居址（Fig.17）

方形を呈すと思われるが、約½が発掘区域外に延びており、また第37号住居址との境界付近も明確でないため形態は不明である。住居址の規模は、炉が中央に位置していると想定すれば1辺がおよそ3.7mとなる。方位はN－22°－Wを指す。主柱穴は不明。東南角に一段高い部分がみられるが、これはベッド状遺構であったと考えられる。石庖丁・砥石が各1個出土した（Fig.134の1，Fig.137の3）。

第38号住居址（Fig.17）

形態および規模は不明である。南側の1段高い部分は本住居址に伴ったベッド状遺構かとも考えられる。ベッド状遺構であるとすれば第28号住居址に切られているのであるが、炉の位置からみてそうでない可能性の方が強い。柱穴、周溝などその他詳細は不明。

第28号住居址内出土土器（Fig.41）

1～5は壺である。1・2・3は二重口縁を持つ。いずれも屈曲部からさらに外反して開くが、1・3は屈曲部より外弯気味に開き、2は直線的にやや大きく開く。ハケ目調整が施される。4は小形壺の胴部で、丸味球形を呈す。外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整。5は張りの強い胴部に外反し中位でさらに開く口縁部がつく。ハケ目が施される。6は鉢で、丸底、器高は低く全体に丸味を帯びる。外面上部はハケ目。下部はヘラ削りがなされる。7は支脚、もしくは器台の脚部。作りは粗雑である。8～10は高杯で、8はその杯部、外弯気味に外反し、端部中央はやや凹む。9・10は脚部。低く大きく開き、下部に4個の円形透孔がある。11は土錘で、算盤玉状を呈し、穿孔は片側からなされている。

第32号住居址内出土土器（Fig.42）

1は壺の口縁で、大きく開き、内面に粘土を貼り付け肥厚させており、平坦面をなす。口縁端には粗い刻み目がつけられる。2は「く」字口縁の甕。6は手捏ね土器で、丸く小さい底部。

第37号住居址内出土土器（Fig.43）

1～5は甕の口縁部で、外反する「く」字口縁をなす。調整はいずれもハケ目、あるいはハケ目の後にヨコナデを行なっている。6～13は壺または甕の底部で、明瞭な平底（7・9・10・11）やや丸味を帯びた平底（6・8・13)、丸底に近いもの（12）とがある。14・15は鉢で、14は短く外反する口縁部。15は緩やかに外反し、内面が肥厚し稜をもつ口縁部である。16・17は底部欠損の杯であるが、台付であったと思われる。ともに杯部は半球形を呈す。18～20は高杯の脚部で、18・19は緩やかに開きながら裾部でさらに開く。18には3個の円形透孔がある。20は直線的な脚上部から内弯気味に急に開き、下部には4個の円形透孔がある。21・22・24は器台片。22は台付杯の台部である可能性もある。

第22・30・34・36号住居址（Fig.65）

第22・36号住居址は重複しており、第36号住居址の方が新しい。第30・34号住居址も重複しており、これは第34号住居址が新しい。また第36号住居址の北壁際がベッド状遺構であれば、第30・34号住居址に切られていることになり、そうであるとすると4址の新旧関係は次のようになる。第22号住居址 → 第36号住居址 → 第30号住居址 → 第34号住居址

第22号住居址　長方形で中央に炉を持つ。主柱穴は不明。第36号住居址と重複している位置の南半はベッド状遺構と思われる。

第36号住居址　第30・34号住居址側の1段高くなっている部分は本址のベッド状遺構であった可能性もある。住居址中央に円形の炉が検出された。

第30号住居址　規模は不詳。東壁際に長方形の土坑が検出された。

第34号住居址　長方形で中央に炉を持ち、両短辺にはベッド状遺構がある。主柱穴は不明。

出土遺物（Fig.44）1・3は第34号住居址からの出土。1は二重口縁の壺で、屈曲部からは垂直に立ち上がる。3は「く」字口縁の壺。2は第30号住居址出土の甕の口縁部。4・5・6・7は第36号住居址からの出土。4は屈曲部から僅かに外弯気味に内傾する逆「く」字口縁の壺。6は甕で、「く」字口縁に張りの少ない胴部を持つ。

③　環　　濠（Fig.66）

環濠内掘立柱遺構

E－11杭をほぼ中心に位置する。6間×2間の建物址で、長軸の平均は7.47m、短軸の平均は2.67mを測る。長軸方位はN－57°－Wを指す。各ピット間の距離および各ピットの径・深さは別表（Tab.4）に示した。

P7～P9を結ぶ線より西側は多くのピットが近接して掘り込まれており、建て替えられたことも考えられる。従って環濠内には2軒の建物が構築されていた可能性がある。その場合には東側が2間×3間、西側が2間×3間ということになろう。なお、P11・13・16に当たるピットは検出できなかった。

環　　濠

巾約160cm、平均の深さ約50cmで、断片は逆台形、平面形角丸方形の溝が、上述の建物址の周囲を

廻っている。南側には溝の中断された部分があり、ここに出入口を想定できよう。また出入口と建物址との間は比較的広いスペースが設けられている。

溝内覆土の堆積状況はFig.55に示した。切断の位置はFig.66のＳ・Ｐ。各層の観察は下記のとおりである。

第Ｉ層　部分てきに炭化物を含有した暗褐色粘土層で、堅く粘性が強い。同層中より多量の土器片が出土している。他に10cm程度の角のとれた石も部分的に含む。

第Ｉ'層　第Ｉ層に比べ炭化物の含有量の少ない暗褐色粘土層。同層中からも多量の土器片出土がある。

第II層　暗茶褐色粘土層。堅く、粘性が強い。

第III層　茶褐色粘土層。堅く締まっている。

第IV層　黒褐色の腐植した粘土層。堅く、粘性は少ない。

第Ｖ層　黄褐色粘土層（地山）

上述のとおり本遺構は高床式の建物跡とそれを取り囲む溝からなっている。集落全体を廻る溝は知られているが、このようにひとつの建物のみに溝が廻らされる例は少ない。

周囲に掘り込まれた溝は建築物の重要性を物語る。高床式建物と環濠の必要性から求められる用途は収穫物の貯蔵用倉庫であり、想像を逞しくするならば、環濠は鼠除けの役割りを果たしていたものと考えられる。規模の大きさからは集落内の共同使用であったであろうことが推察できる。

遺物（土器）は溝内全面に渡って大量に出土し、特に第Ｉ・Ｉ´層に多い。出土状況からみてそれらは廃棄されたものと考える。個々の土器については後に述べるが、時期は弥生時代後期中葉～同終末期であり、この時期に渡って廃棄され続けたとは考えにくく、上層より出土した新しい部類のものはその後の流れ込みであろう。依って環濠は後期中葉までには構築されていたことになり、後期中葉に至って溝の使用が打ち切られたものである。環濠内の建物跡もおそらく同様と思われる。

第II地点内に検出された弥生時代の住居址の時期は後期後半に比定され、環濠が使用されなくなった後に住居址が構築されているわけであり、それらの住居址と環濠との関連は一応無いものとみて差し支えない。また出入口も住居址の位置する方向とは逆を向いており、環濠内倉庫を使用していた集落は第II地点発掘区域外に広がっていた可能性もある。

土器以外の出土遺物には石斧（Fig.133の３）と砥石（Fig.137の１）があるが、石斧は流れ込みと考えてよいであろう。

環濠内出土土器（Fig.45～54）

環濠内より出土した土器の器種には壺・甕・鉢・杯・高杯・器台・支脚があり、その他小形手捏ね土器がある。

甕（土器ナンバー１～18、20～33、35、53、62、84）（Fig.45～48・52）

口縁部のあるものは全て「く」字口縁を呈す。１・５・８はくびれ部直下に１条の三角凸帯を有す。１・８は口縁部が緩やかに外反しやや厚手で、端部にはヨコナデによる凹みがみられる。５は１・８に比べ器壁は薄く口縁部は外弯気味である。８にはハケ目が施される。他は器面磨滅のため不明。２・９・10・18・22・23・53は外反する口縁が直線的に開き、口縁部外面の中位が肥厚気味のものである。２・９・22・53は端部が僅かに引き出されている。調整は概ねハケ目であるが、22にはヘラ磨き

がなされる。9はほぼ完形で、稜の明瞭でない平底を持ち、底部には不定方向のハケ目がみられる。7・11もやはり外反する口縁が直線的に開くのであるが、端部にかけて僅かに外弯する。11はハケ目調整がなされ、底部の稜は明瞭でない。4・29は強く外反する口縁で、直線的に開く。胴部の張りは少ない。ハケ目調整がなされる。3は強く外反し口縁部にかけて外弯する。13・14・28は比較的張りの少ない胴部に緩やかに外反する口縁部がつく。くびれ部内面には明瞭な稜が認められる。ハケ目調整がなされる。13の下半はヘラ削りがなされ、底部はやや丸味を持った平底を呈す。12は短く外反する口縁が緩やかなカーブをもつ胴部に続く。底部は僅かに直立する部分をもつ。器壁は全体に厚手である。ハケ目調整がなされ、下部はヘラナデが行なわれる。15は明瞭な平底からくびれをあまりもたない比較的器高の低い胴部が続き、短く外反する口縁部がつく。端部は薄く尖り気味。ハケ目調整がなされる。6・24・25・26・30ははね上がり口縁を持ち、やや外弯気味に外反する。ハケ目調整がなされるが、26の口縁部外面には叩き目様の痕跡が残る。蒲田・水ヶ元周辺遺跡からははね上がり口縁の出土が多く、当遺跡においても多量の出土が予想されたが、その数は少ない。

壺（土器ナンバー19，34，36～58，60，61，63）（Fig.47，48，40～50）

36～40，42～45は逆「く」字形を呈する口縁部である。37は屈曲部からの立ち上がりが内弯気味で、反転の角度は比較的緩やかである。外面はハケ目調整がなされ、頸部内面はヘラ削りがなされる。38は屈曲部からの立ち上がりが直線的で、内面の稜は明瞭である。36・39・42・43は屈曲部からの立ち上がりが外弯し、屈折の角度はやや鋭い。36・42・43はその端部が外に引き出され、43に特に著しい。いずれも器面は磨滅しており調整痕は明らかでないが、部分的にハケ目の痕跡がみられる。40・44・45は屈曲部からの立ち上がりが直線的で、40はほとんど直立に近い。44・45は頸部へ続く部分のカーブが大きい。ハケ目調整がなされる。

41・46は頸部と胴部との接合部で、41は1条の、46は2条の三角凸帯を有す。47・60は張りのある大きな胴部に外反する口縁部がつく。47の口縁部外面は直線的であるが、内面は中位でやや肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面はハケ目およびヨコナデがなされる。48は丸味のある平底を呈し、球形の胴部をもつ。最大径を測る位置に断面「コ」字形の凸帯がつけられ、楕円形の刻み目が施される。外面はハケ目、内面はヘラナデがなされる。

19,34,49～52,54～58,63は球形の胴部に外反する口縁部がつく。34、57は口縁部が直線的に外反し、内面はやや肥厚する。57の端部は外に引き出されている。ハケ目調整がなされる。49・52は平底に球形胴部がつき、外反する口縁部へと続く。49の口縁端は平坦面をなし、52は尖り気味である。調整はハケ目。50は丸底に球形胴部がつき、やや強く外反する口縁をもつ。口縁部外面は中位で僅かに肥厚する。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部にはハケ目が施される。51は丸底に近い底部で、球形の胴部がつく。口縁部は短かく僅かに外弯気味に立ち上がる。口縁部外面はヨコナデ、他はハケ目調整がなされる。54・56は胴部中位で大きく張り出す。54は外弯気味の口縁部がつき、端部は尖り気味である。ナデによる調整がなされる。56は平底を呈し、口縁部は54と同様であると思われる。

61は外反する口縁下に断面三角形の凸帯を1条有す。凸帯には刻み目がつけられる。口縁部はヨコナデ、内面下方はヘラ削りがなされる。

器　台（土器ナンバー64～83）（Fig.51・52）

72はくびれ部分が明瞭でなく、受け部と裾部の径はほぼ等しい。内面中位に稜をもつ。内外面ともにハケ目調整がなされ、口縁端はヨコナデである。70は全体に細く、受け部の開きは少ない。くびれの位置は低く、下から約⅔にある。受け部、脚部ともに直線的に開き、外面受け部はヨコナデ、脚部はハケ目、内面受け部はハケ目、ナデ、脚部はヘラ削りがそれぞれなされる。69・75は受け部および脚部が直線的に開き、くびれの位置は上方にある。やや小形。いずれもハケ目調整である。67は器高に比して径が大きい。受け部、脚部ともに直線的に開く。ハケ目とヨコナデによる調整がなされる。64・68・73は直線的に開く脚部に、外弯気味で端部が内側上方に突出する受け部がつく。64の受け部端には刻み目が施される。また脚部内面は内側に引き出されている。外面は叩きの後ハケ目調整がなされ、脚下部には叩き目痕が残存する。65・77・82は内弯気味の脚部をもつ。65には直線的に開く受け部がつく。脚部下方は叩き、上方はハケ目調整。77・82はいずれもハケ目調整がなされる。

器台の形態の変化は、時期差とともに上にのせる器種の違いも考慮に入れなければならないと思われる。

鉢（土器ナンバー85～90・99）（Fig.53）

85・86は尖り気味の丸底に大きく開く脚部がつき、さらに大きく外反する口縁部がつく。内面反転部分の稜は明瞭で、86は内面に粘土を貼り付け肥厚させる。ハケ目調整がなされ、86はその上からヘラナデが行なわれている。88は半球形を呈し、端部は丸くおさめる。外面はハケ目調整がなされる。89は平底を呈し、器高は深く、端部は内弯気味に直立する。ハケ目調整がなされる。

高　杯（土器ナンバー103～110）（Fig.54）

103は丸味を帯びた杯下部より反転して大きく開く口縁部がつく。口縁は僅かに外弯気味。脚は直線的にのび、裾は大きく開く。杯部内面はヘラ磨き、外面はヘラナデがそれぞれ行なわれている。104・105は杯部中位に稜をもち、外弯しながら外反する口縁部がつく。器面磨滅のため調整痕は不明である。

支　脚（土器ナンバー111～114）（Fig.54）

112は沓形器台で、項部に穿孔がなされる。穿孔は外面から行なわれる。脚部は「ハ」字形に直線的に開き、ナデによる調整がなされる。111～113・114は内弯気味に開く脚部である。111の項部には穿孔がなされる。内外面ともにハケ目調整。115は中位やや上方にくびれを持ち、上下に開く。器面の凹凸が激しく器高は一定しない。

小形土器（土器ナンバー91～98，100～102）（Fig.53）

91は小形壺で、やや丸味をもった平底に中位の張り出した胴部をもつ。口縁部は欠損するが外反気味の直立に近い口縁部と思われる。調整は外面胴部がヘラ磨き、内面上半はナデ、下半にはハケ目がそれぞれなされる。92・94・97・98・100・101は手捏ね土器。92は平底で、器厚が厚い。他は丸底かそれに近い底部をもつ。概ね指頭によるナデ、押さえがなされ、作りは雑である。102もやはり手捏ねの土器で、小さな平底に細く深い胴部がつき、口縁部は内弯するタコ壺様の器形を呈している。器面磨滅のため調整痕は明瞭でなく、部分的にヨコナデ痕の残存がみられる。

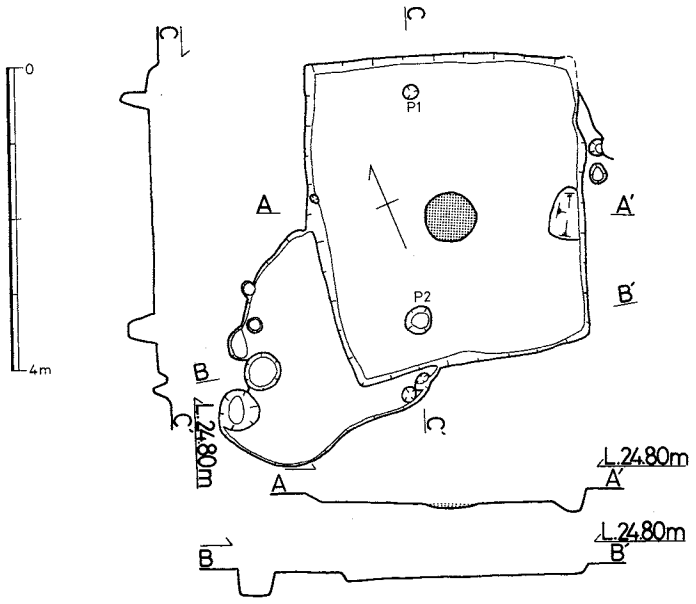


Fig. 18　第10号住居址実測図（縮尺１／100）

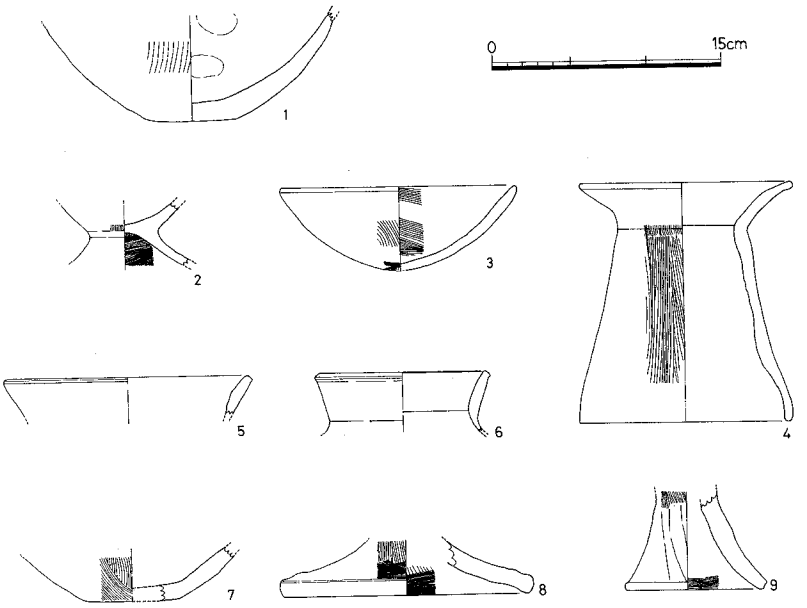


Fig. 21-1　第14号住居址実測図（縮尺１／100）

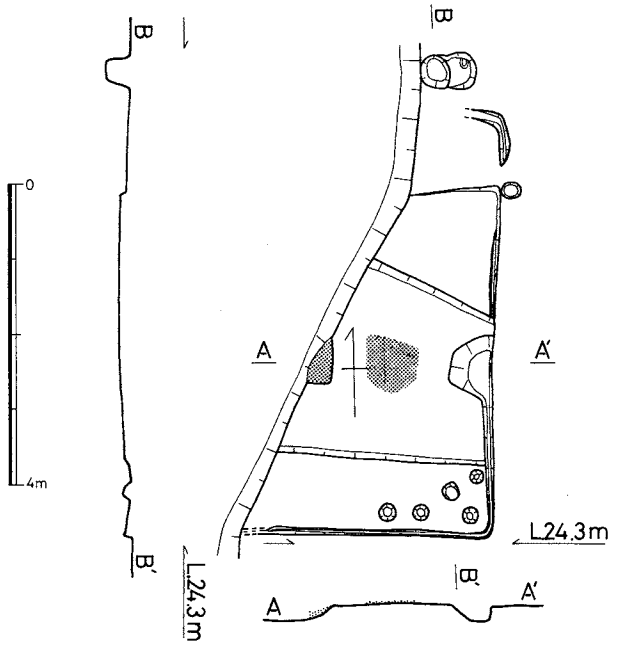


Fig. 19　第11号住居址実測図（縮尺１／100）

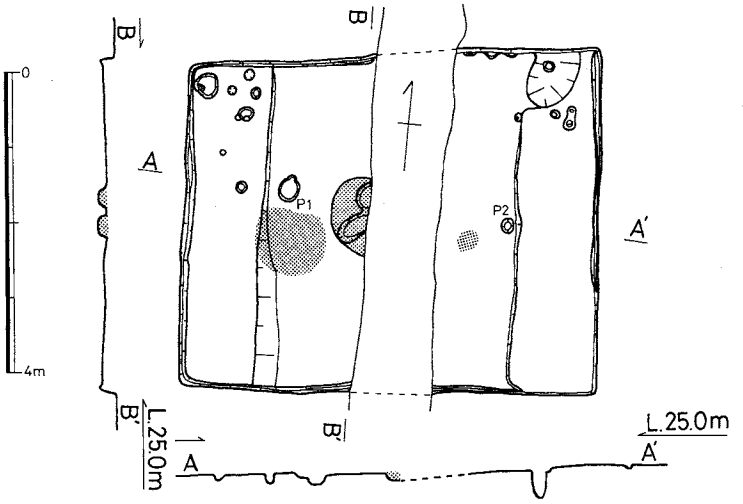


Fig. 21-2　第10・11・14号住居址内出土土器実測図（縮尺１／５）
１～３（J10）　４（J11）

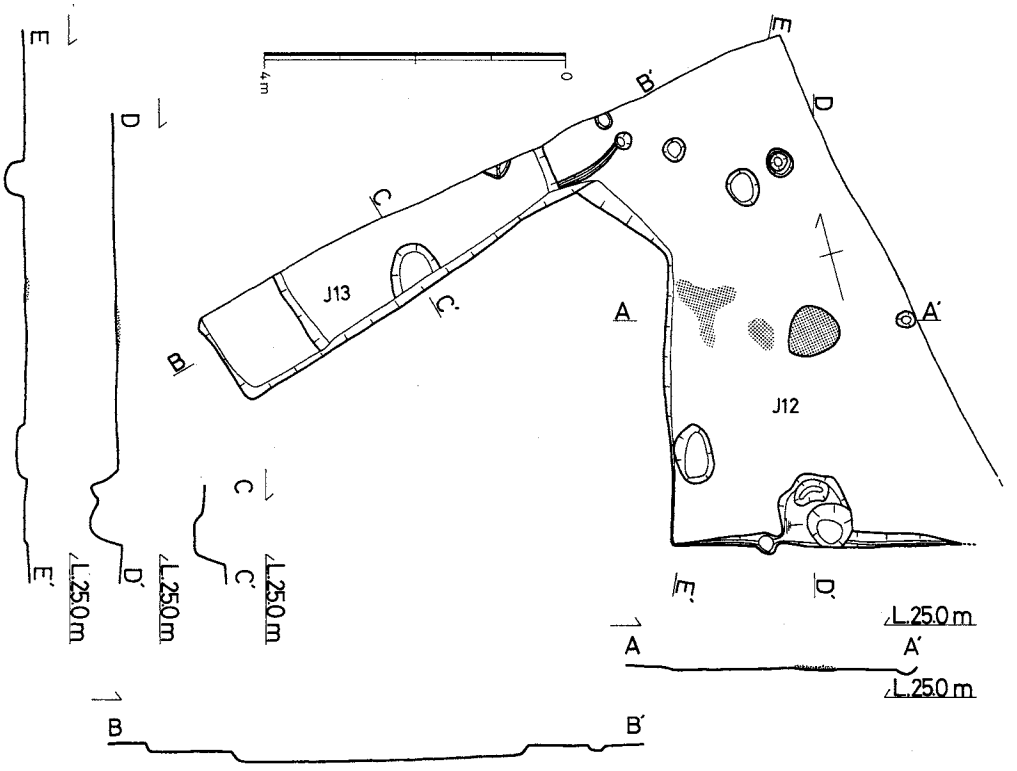


Fig. 20　第12・13号住居址実測図（縮尺１／100）

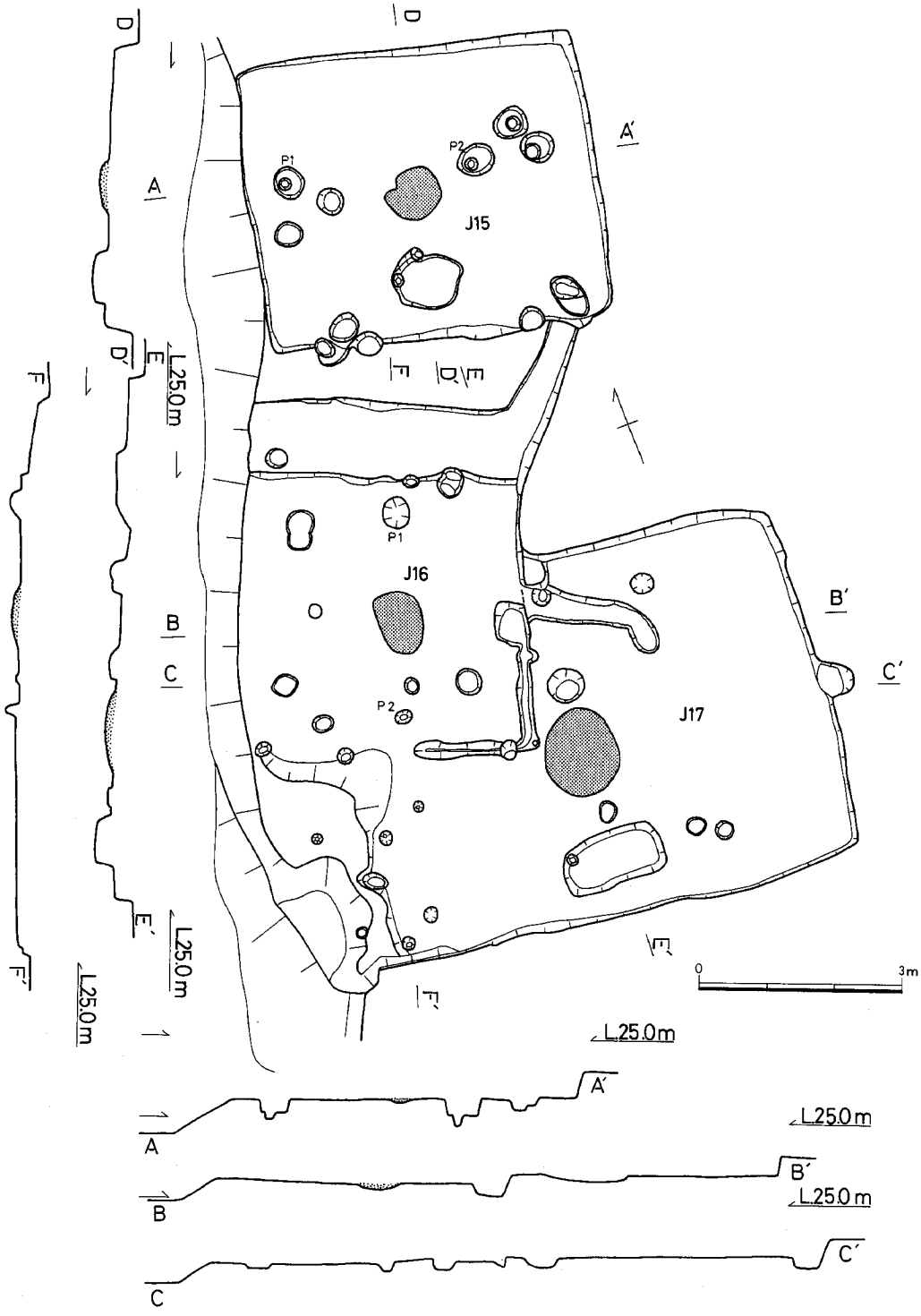


Fig. 22　第15・16・17号住居址実測図（縮尺1／100）

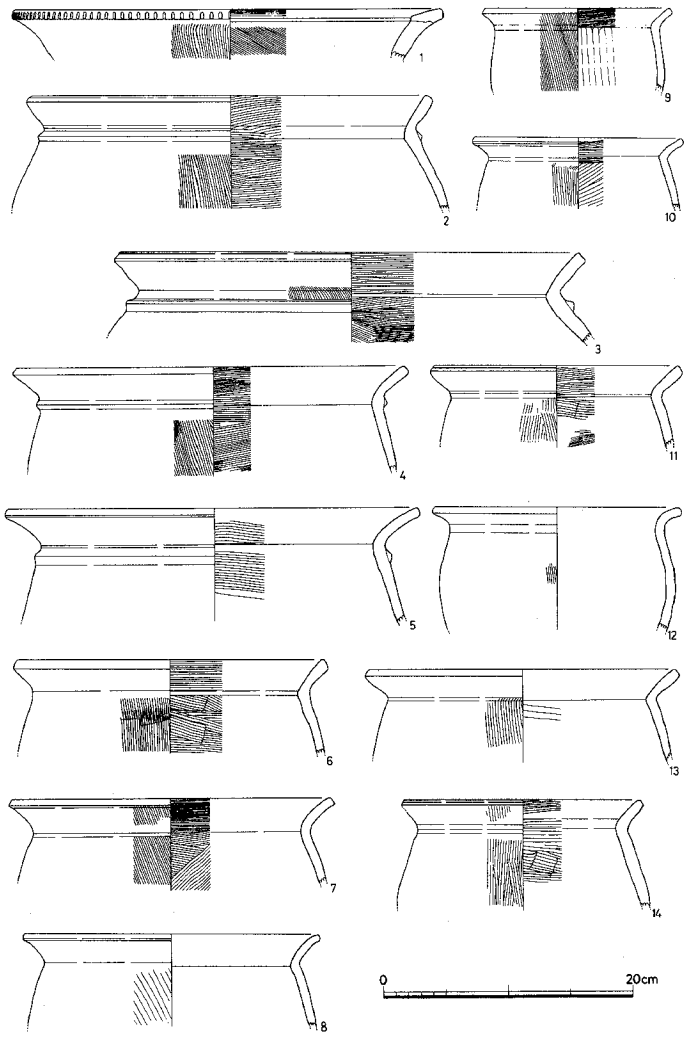


Fig. 23　第15号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

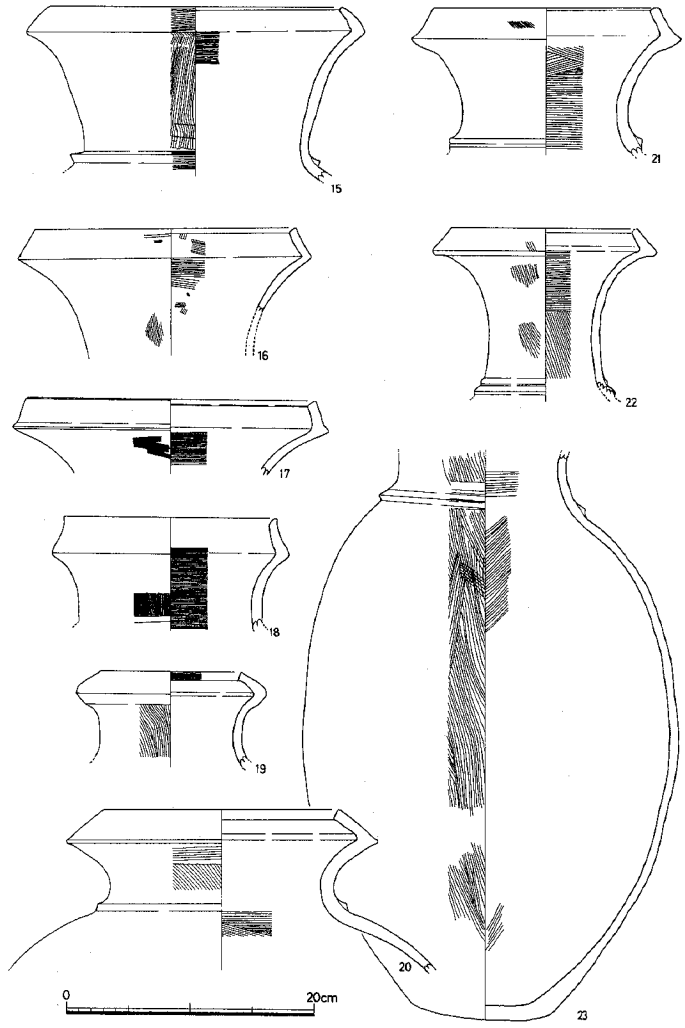


Fig. 24　第15号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

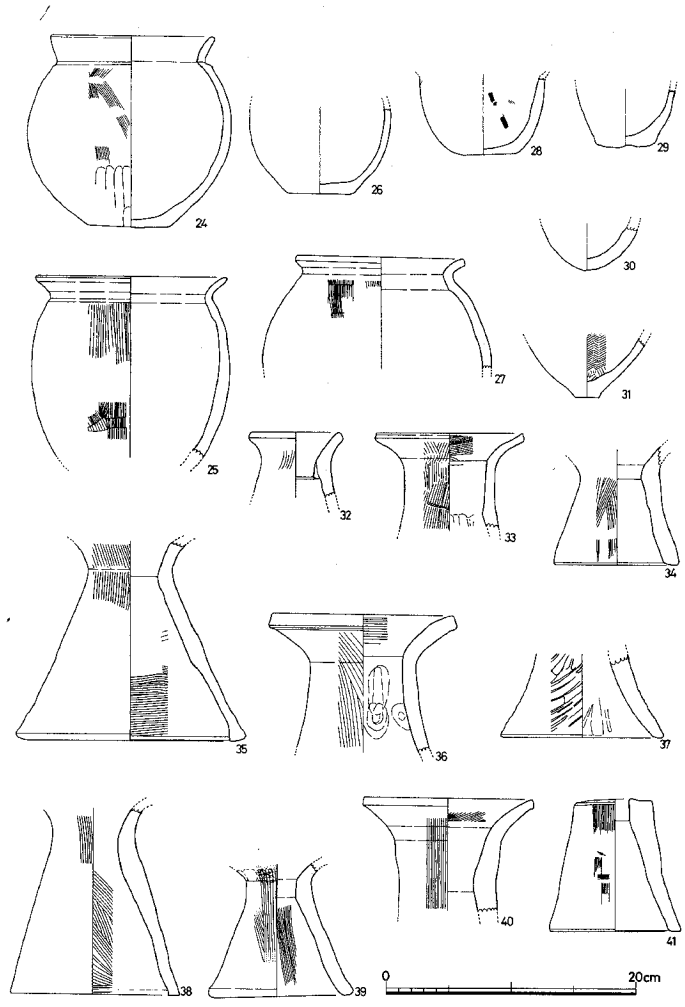


Fig. 25　第15号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

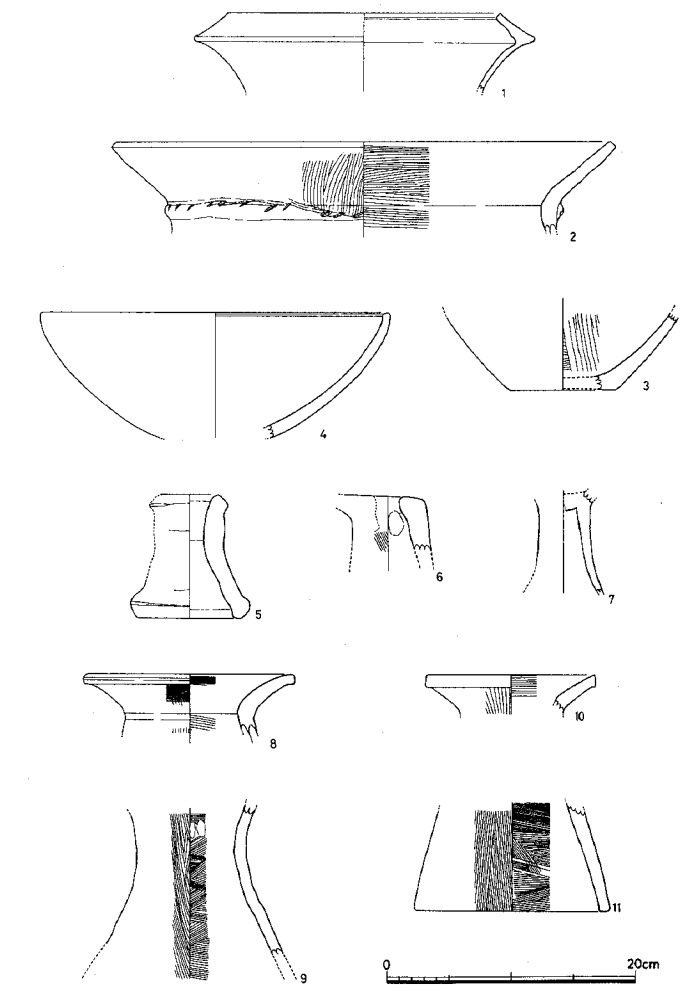


Fig. 26　第16号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

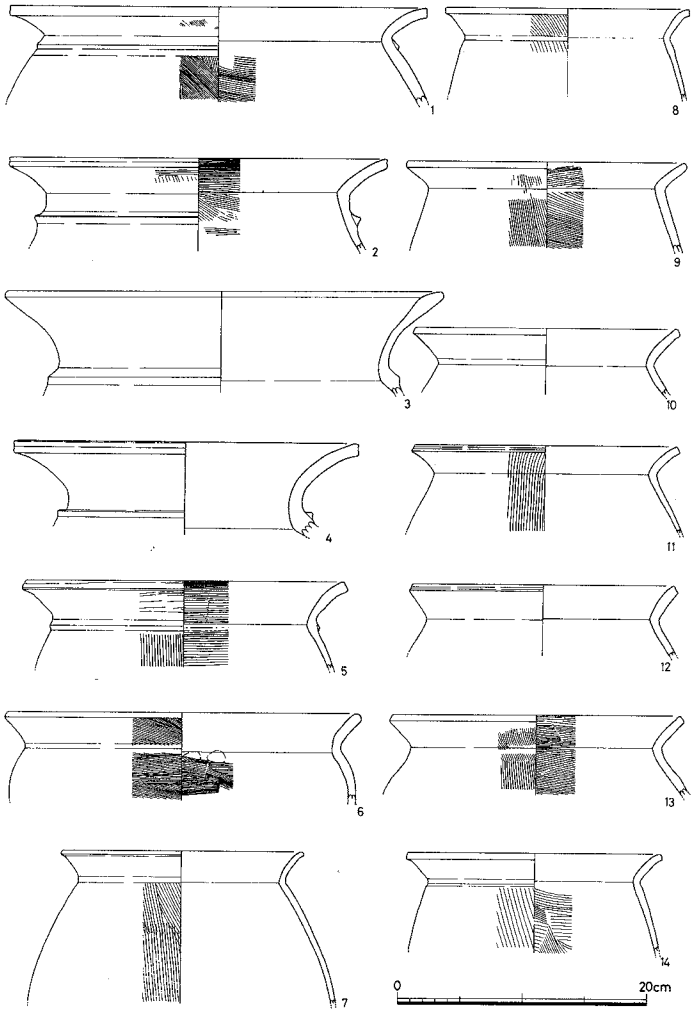


Fig. 27　第17号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

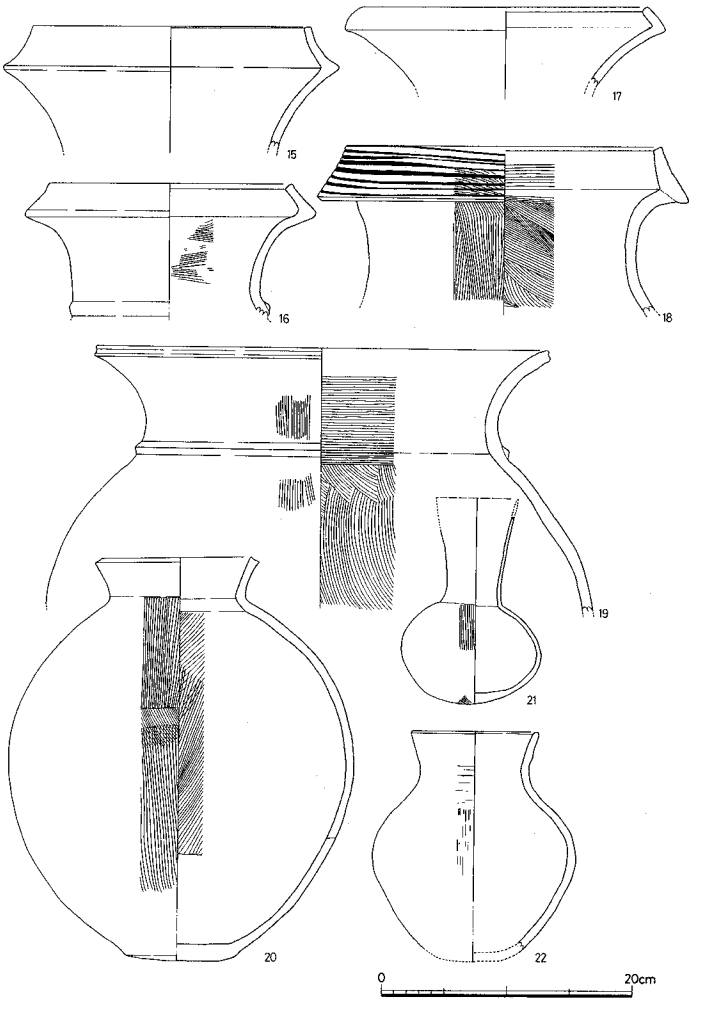


Fig. 28　第17号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

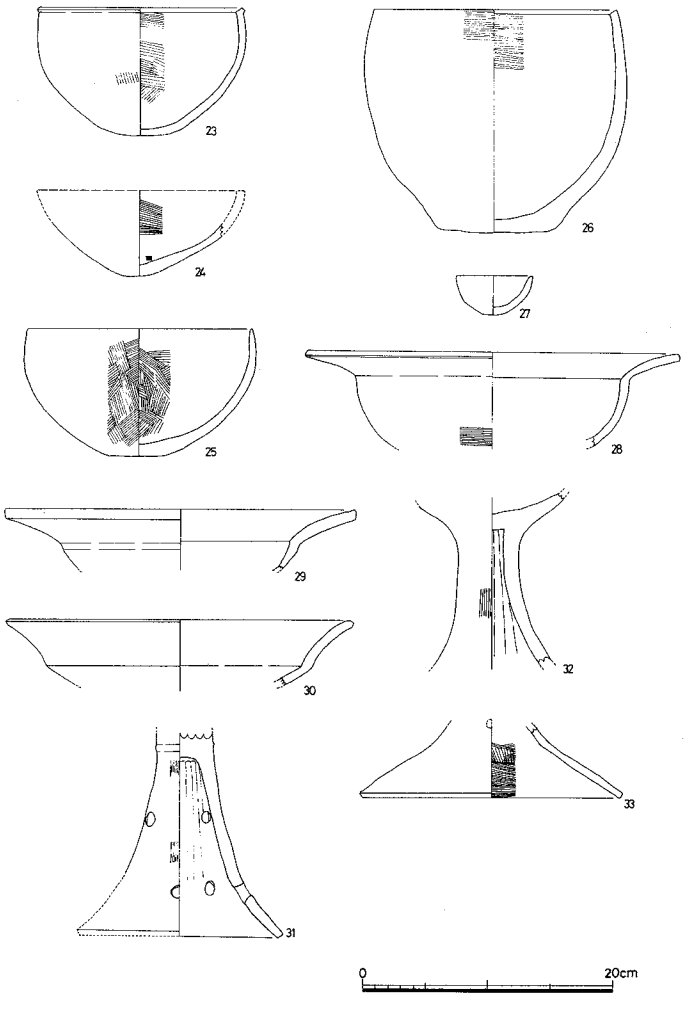


Fig. 29　第17号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

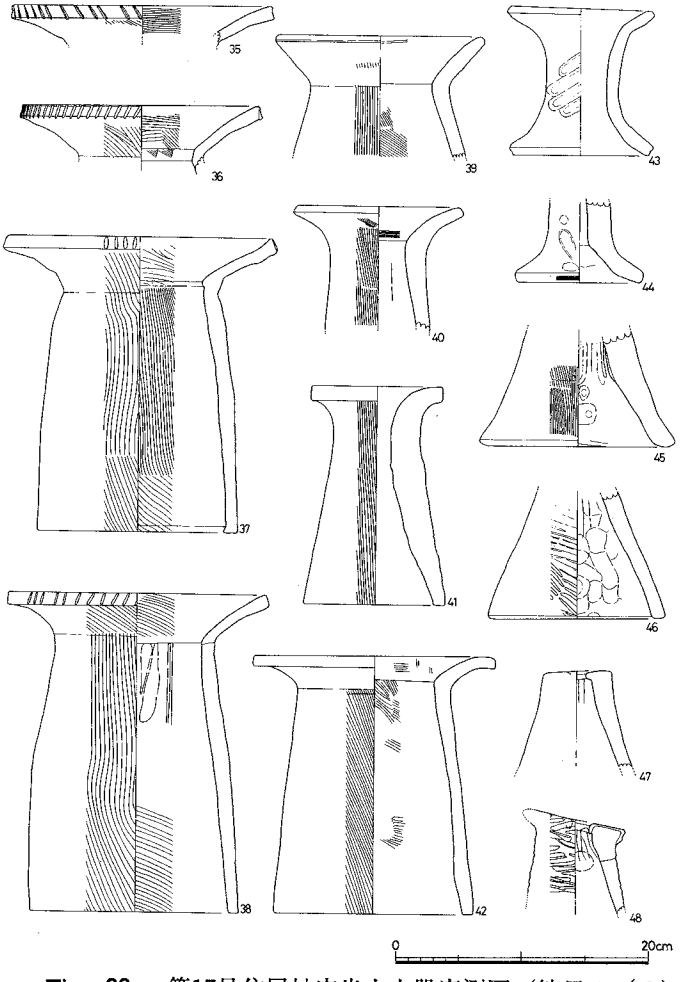


Fig. 30　第17号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

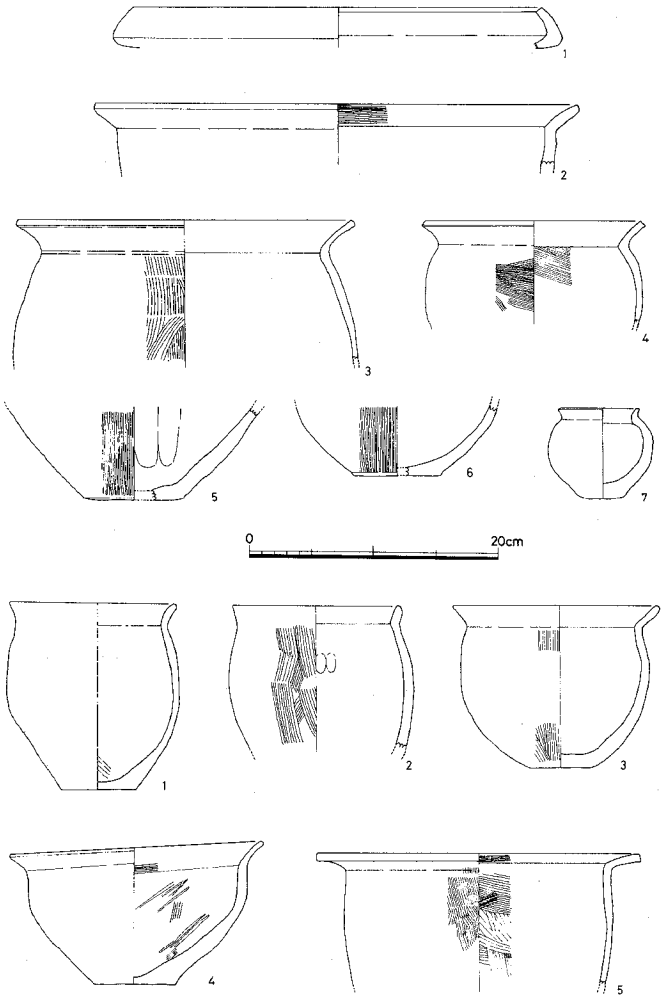


Fig. 31　第18号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）（上）
Fig. 32　第19号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）（下）

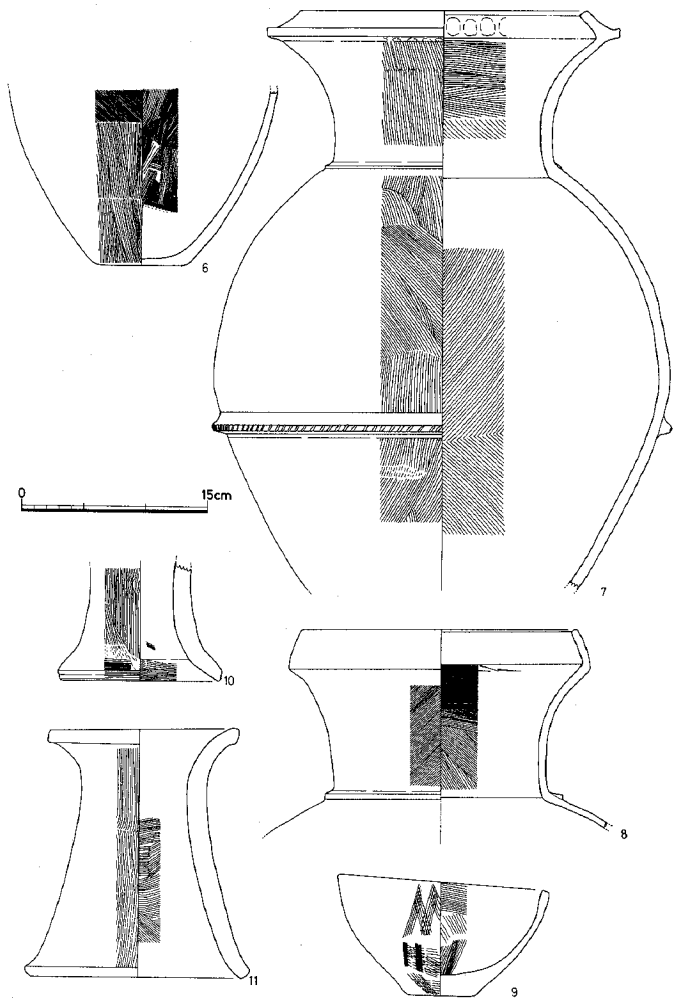


Fig. 33　第19号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

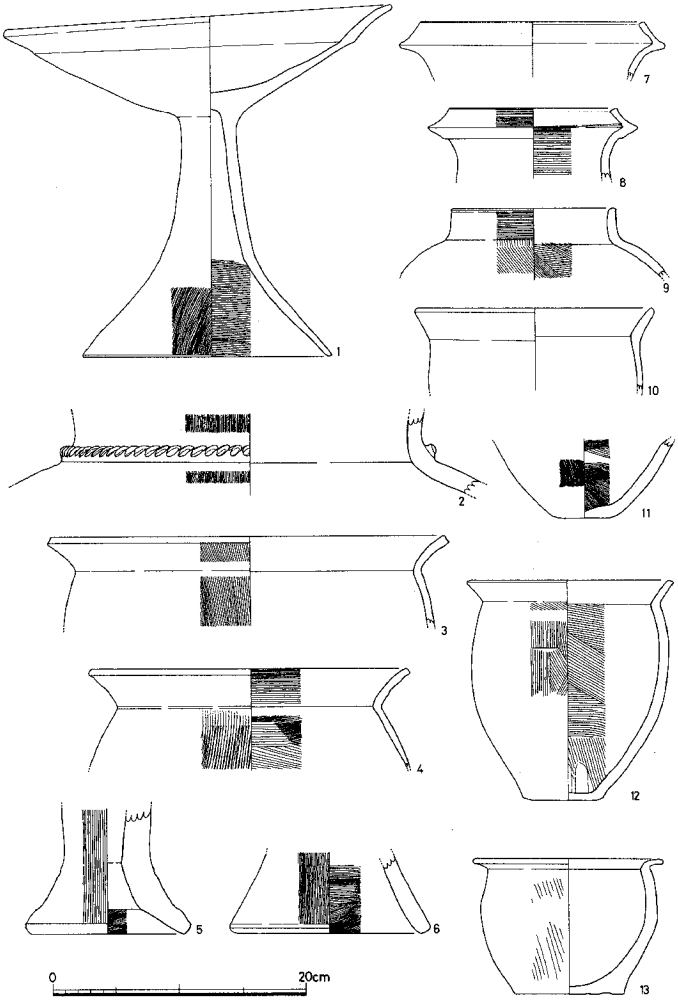


Fig. 34　第20・21号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）
１・10・11(J20)，２～９・12・13(J21)

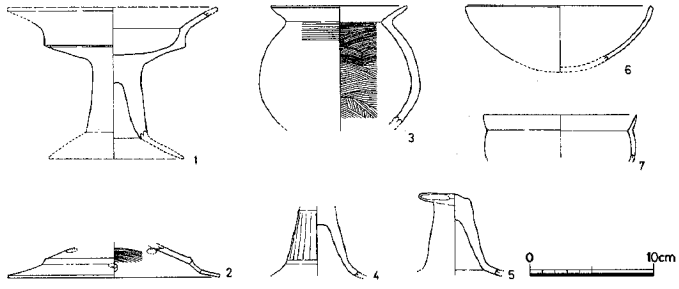


Fig. 35　第23号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

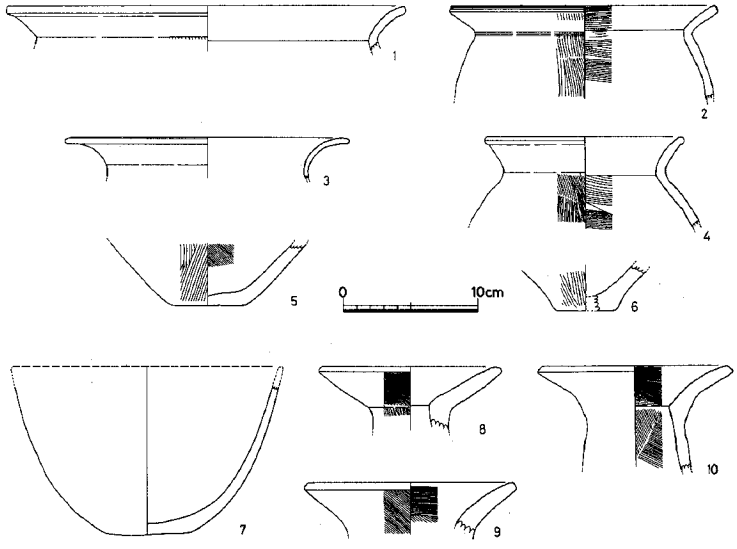


Fig. 36　第33号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

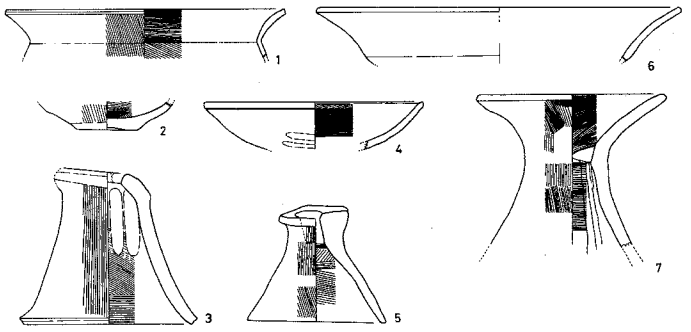


Fig. 37　第26号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

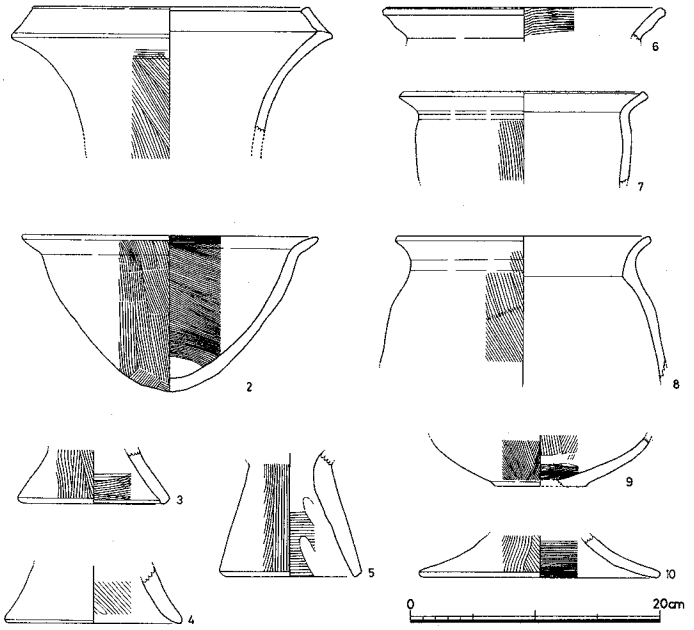


Fig. 38　第27号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

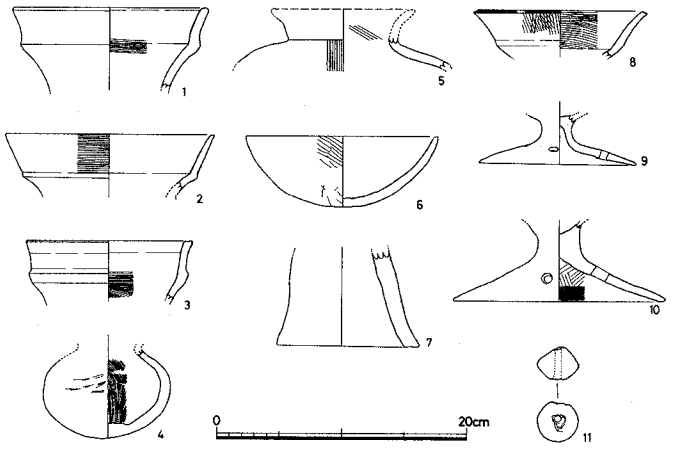


Fig. 41　第28号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

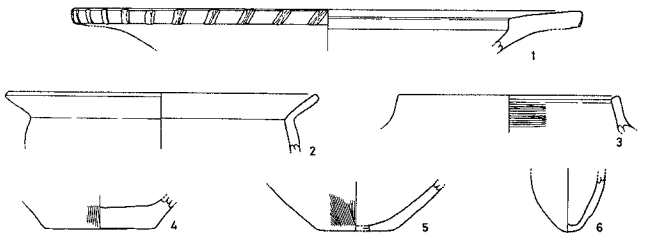


Fig. 42　第32号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

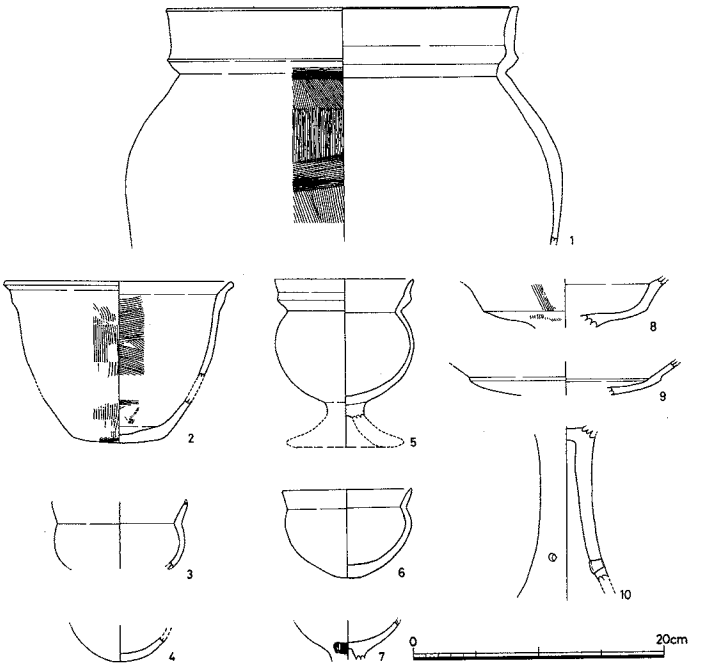


Fig. 39　第31号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

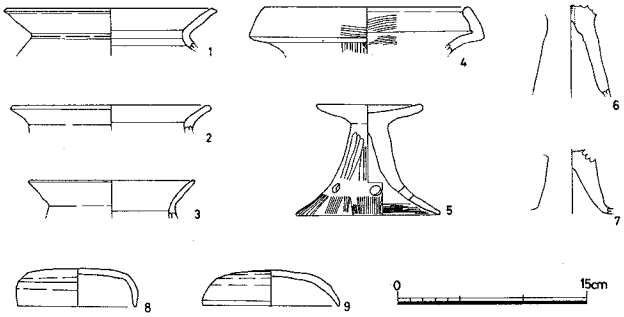


Fig. 40　第35号住居址とそれを切る土坑内出土土器実測図（縮尺１／６）

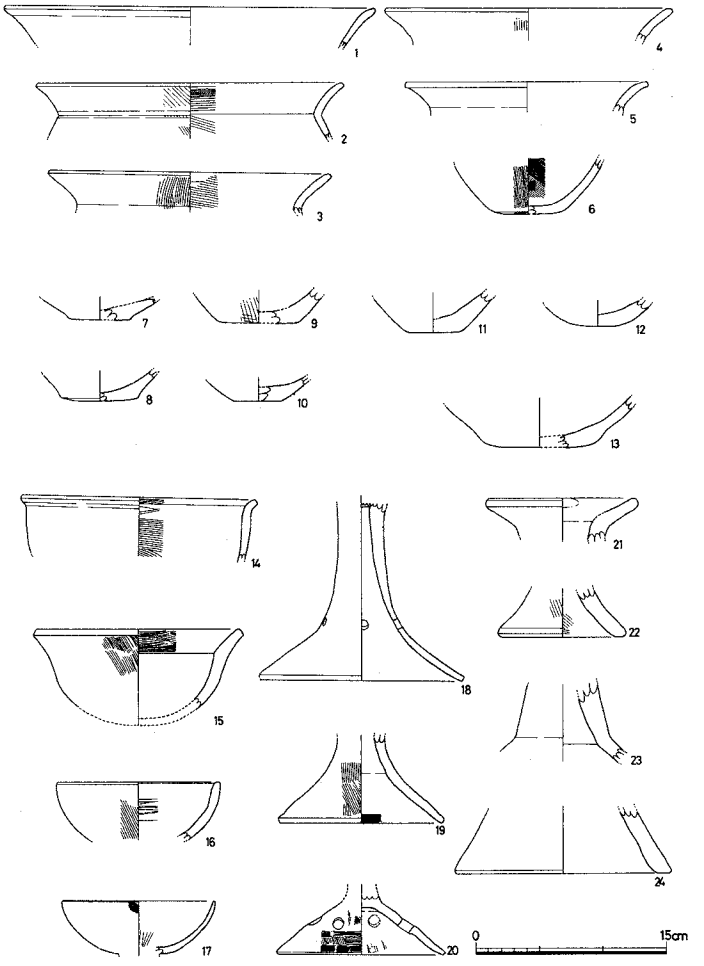


Fig. 43　第37号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）

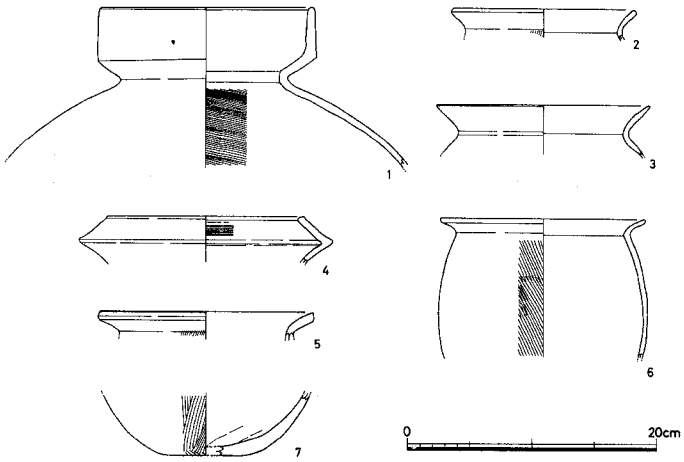


Fig. 44　第30・34・36号住居址内出土土器実測図（縮尺１／６）
2（J30），1・3（J34），4～7（J36）

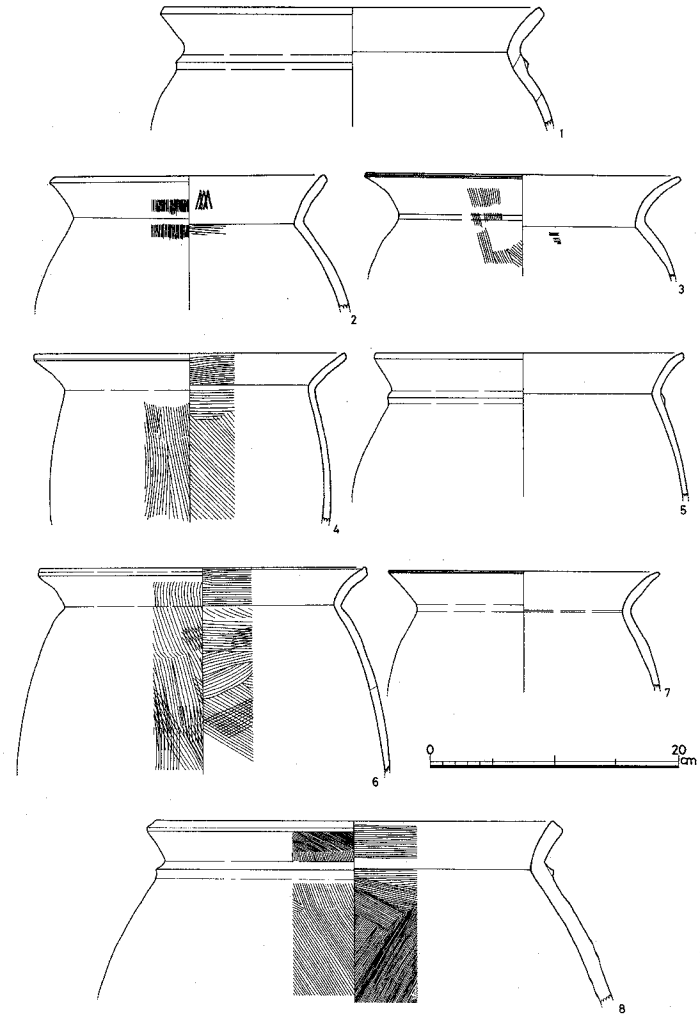


Fig. 45　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）

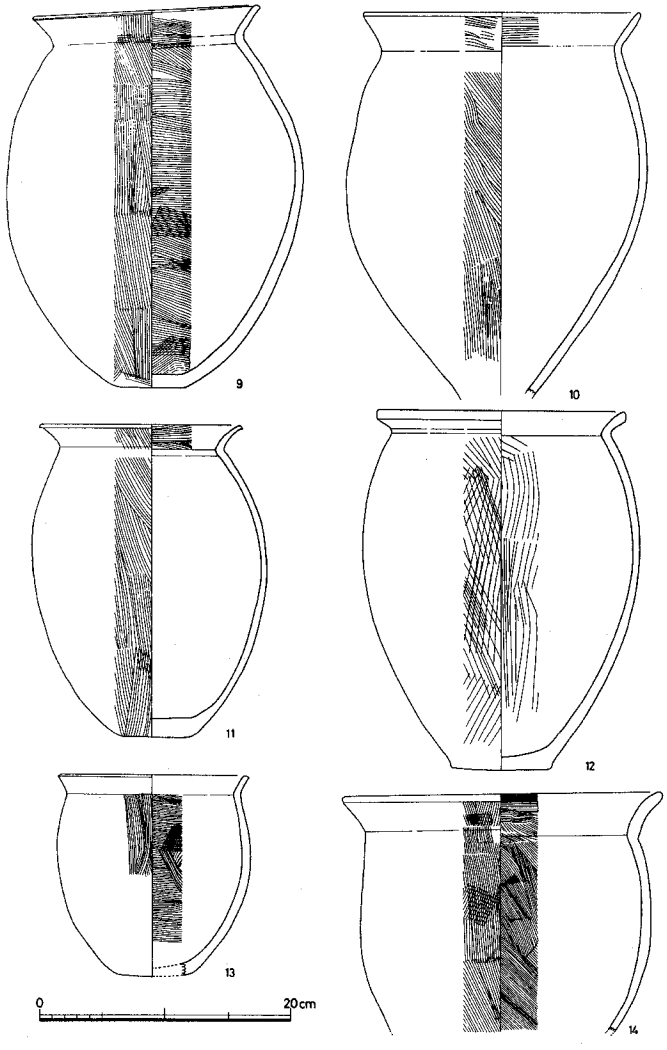


Fig. 46　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）

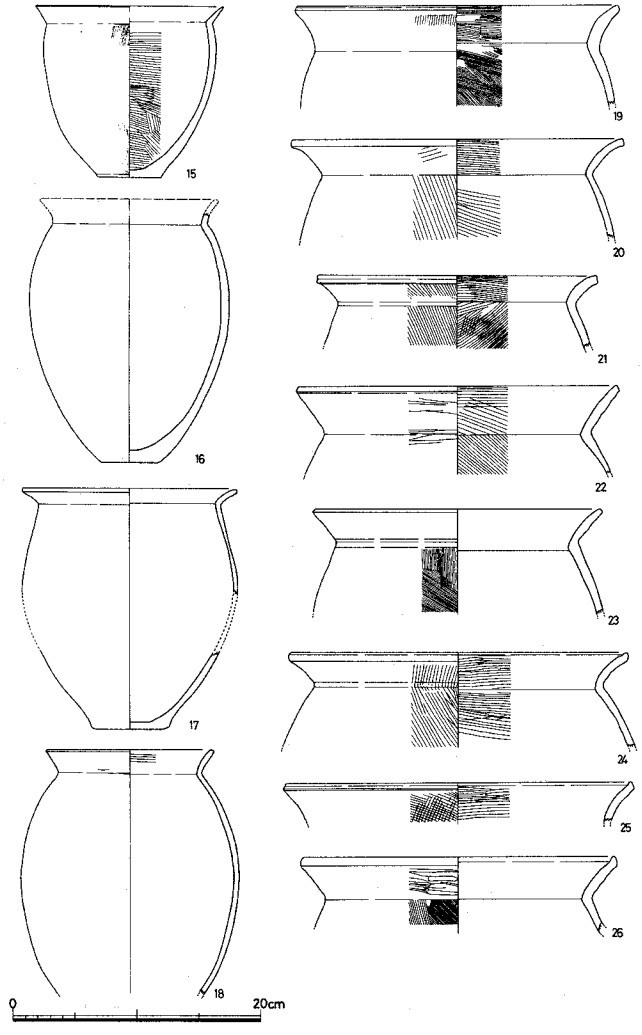


Fig. 47　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）

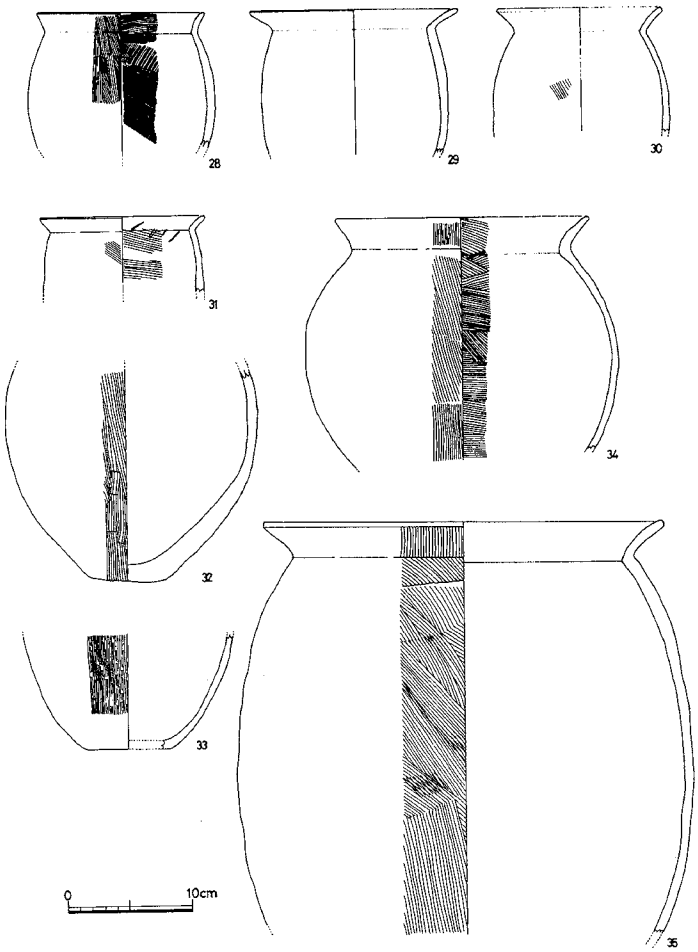


Fig. 48　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）

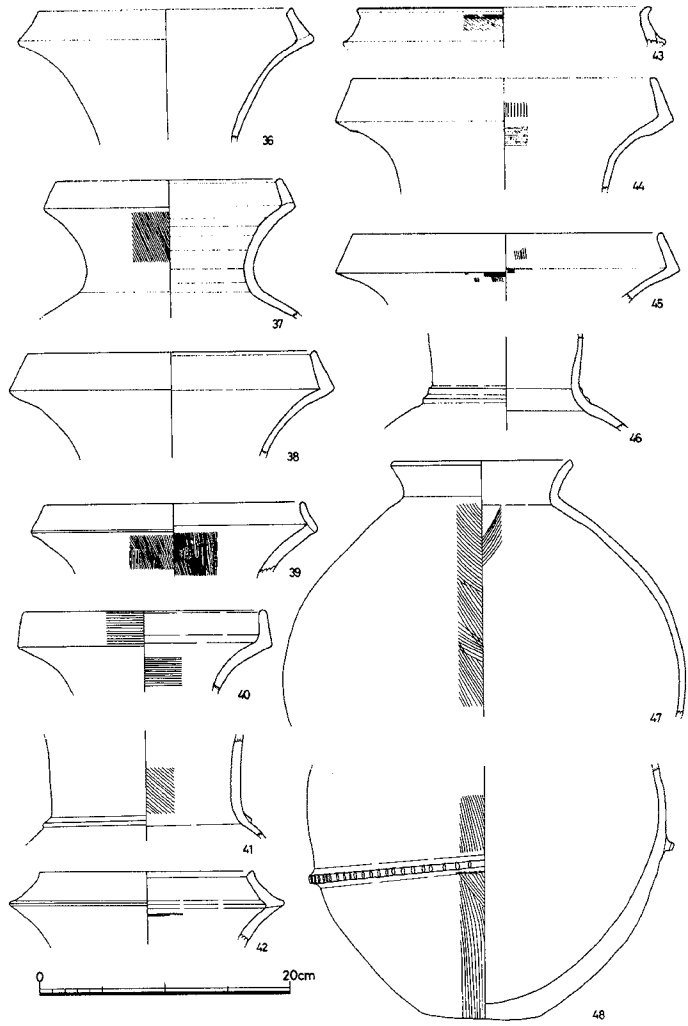


Fig. 49　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）

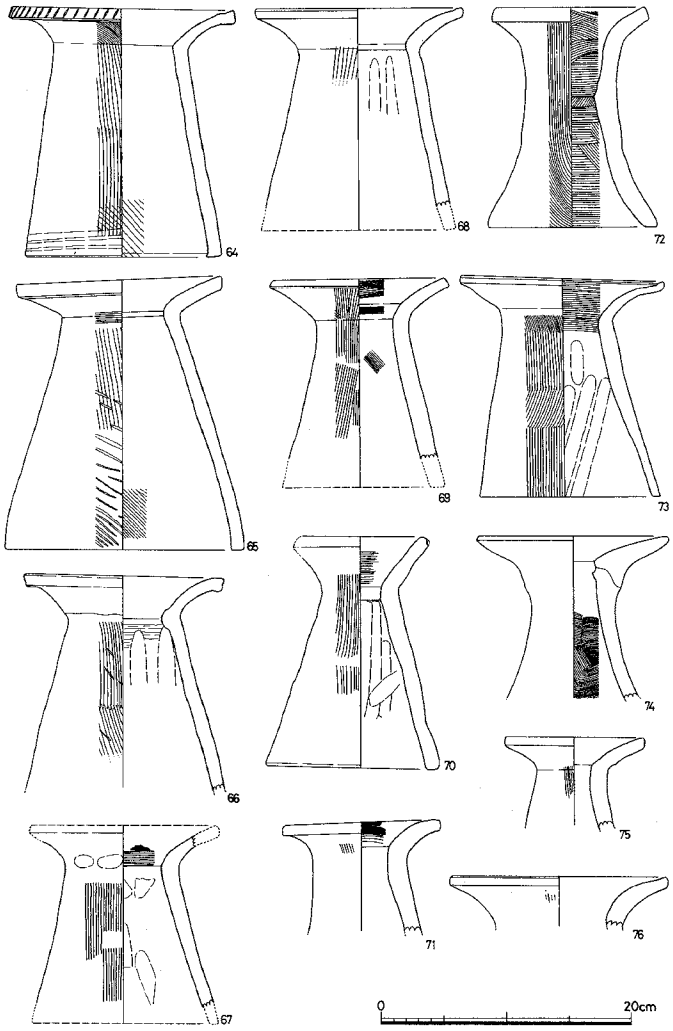


Fig. 51　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）

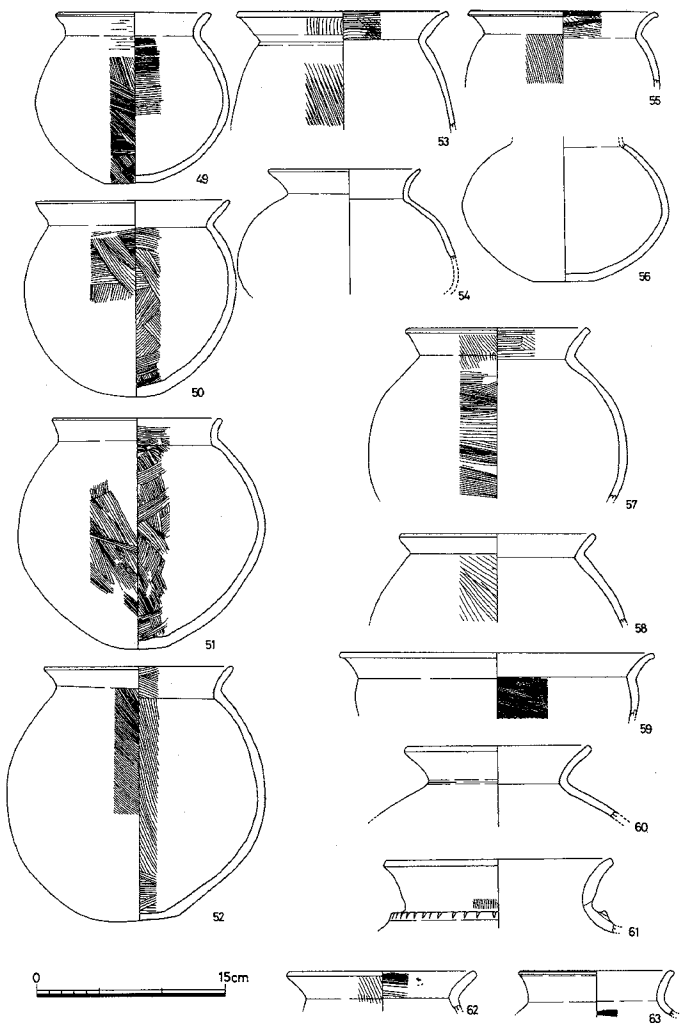


Fig. 50　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）

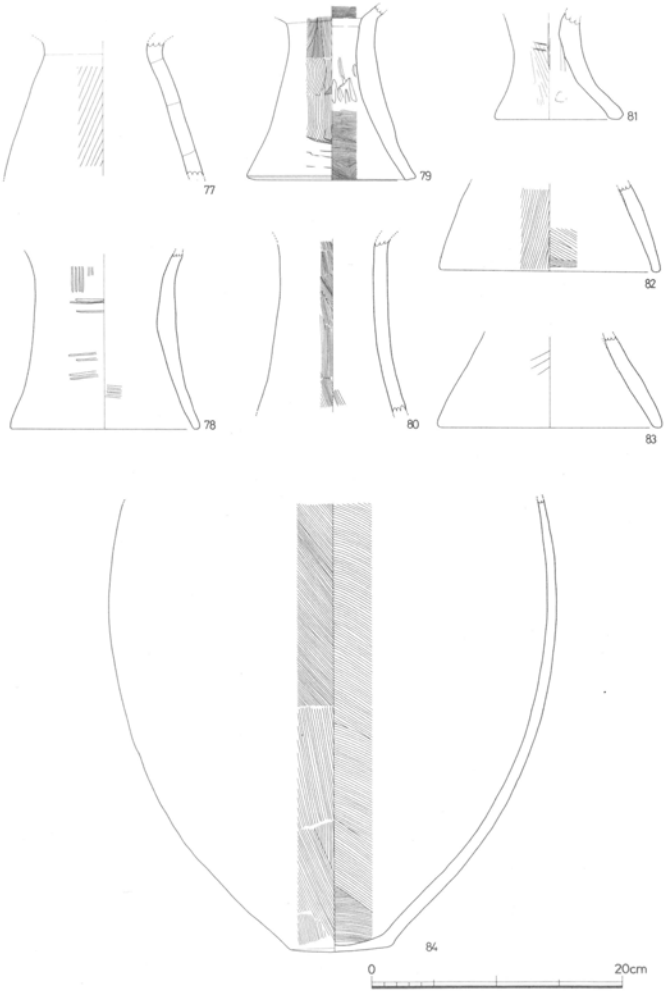
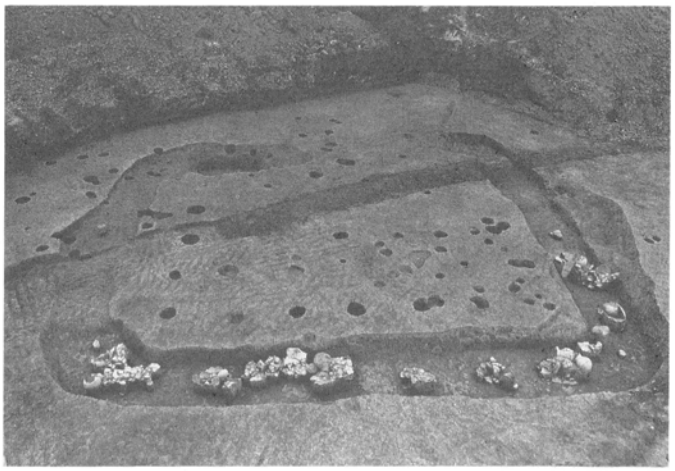


Fig. 52　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）



環濠遠景（Ph. 6）

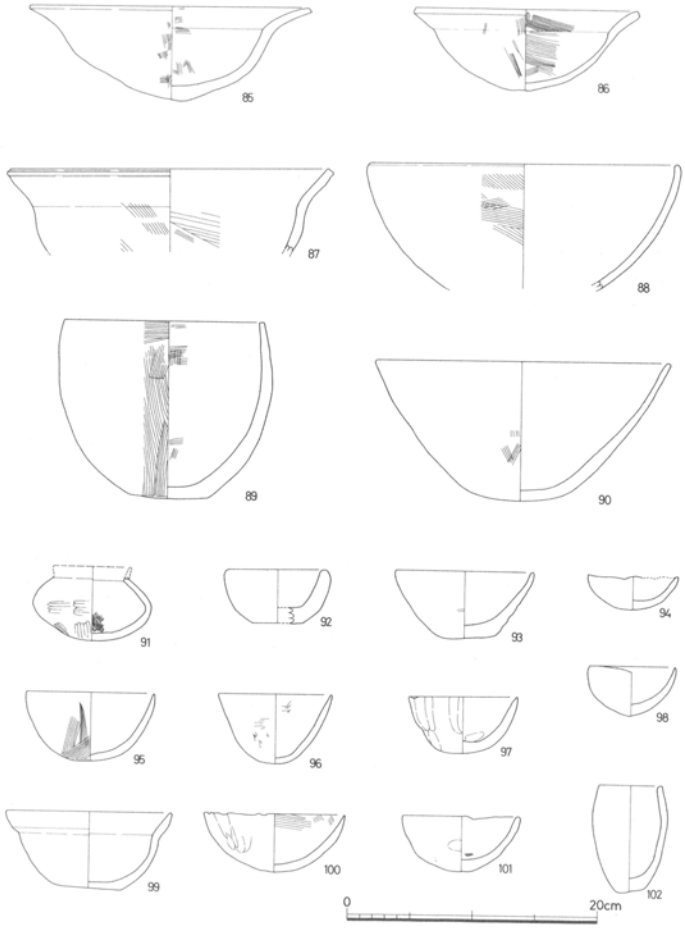


Fig. 53　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）

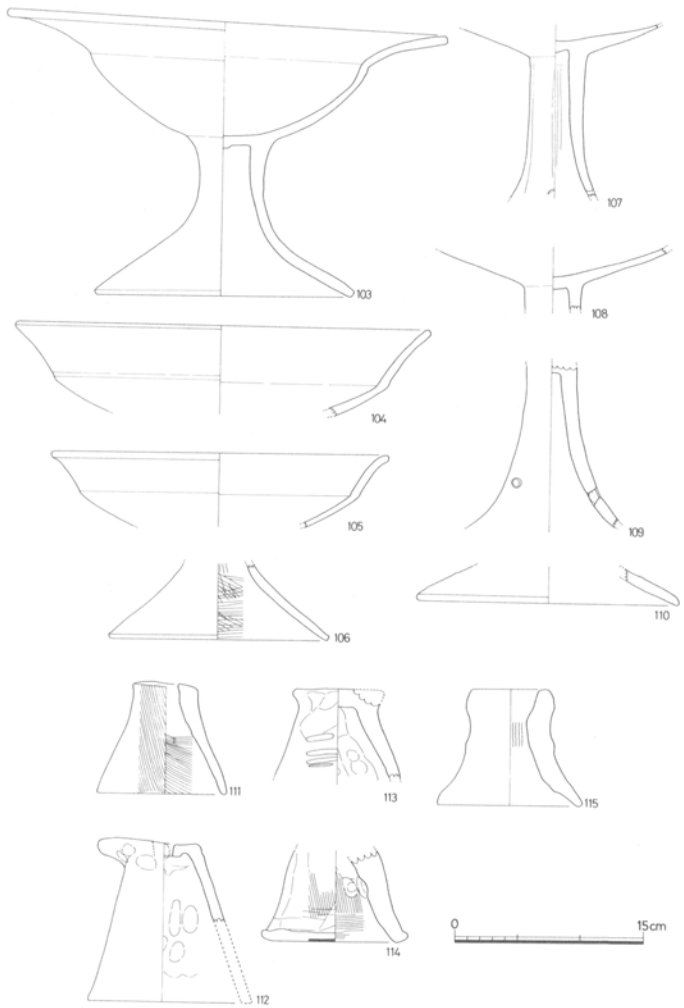


Fig. 54　環濠内出土土器実測図（縮尺１／６）

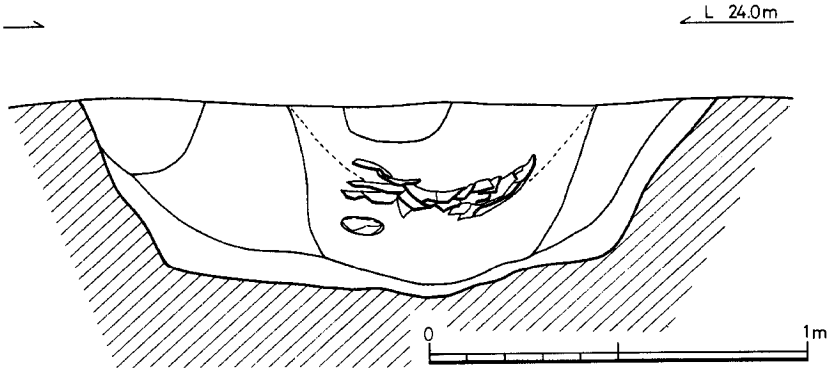


Fig. 55 環濠土層セクション図（縮尺1/20）

Tab. 4 環濠内掘立柱遺構表

P 1 ～ P 4	138	P 1 ～ P19	P 3 ～ P 6	112	P 3 ～ P21	P 1 ～ P 2	150	P 1 ～ P 3	P19～ P20	138	P19～ P21
P 4 ～ P 7	110		P 6 ～ P 9	116		P 2 ～ P 3	130	280	P20～ P21	128	266
P 7 ～ P10	140	742	P 9 ～ P12	136	738	P 4 ～ P 5	116	P 4 ～ P 6	平均	135.8	267
※ P10～ P13	－		P12～ P15	118		P 5 ～ P 6	142	258			
※ P13～ ※ P16	－		P15～ P18	118		P 7 ～ P 8	142	P 7 ～ P 9			
※ P16～ P19	－		P18～ P21	140		P 8 ～ P 9	122	264			
P 2 ～ P 5	126	P 2 ～ P20	平 均	126.3	747.3	※ P10～ P11	－	－			
P 5 ～ P 8	128		(単位cm)			※ P11～ P12	－				
※ P 8 ～ P11	－	762				※ P13～ P14	－	－			
※ P11～ P14	－					P14～ P15	138				
P14～ P17	138					※ P16～ P17	－	－			
P17～ P20	122					P17～ P18	152				

(単位cm)

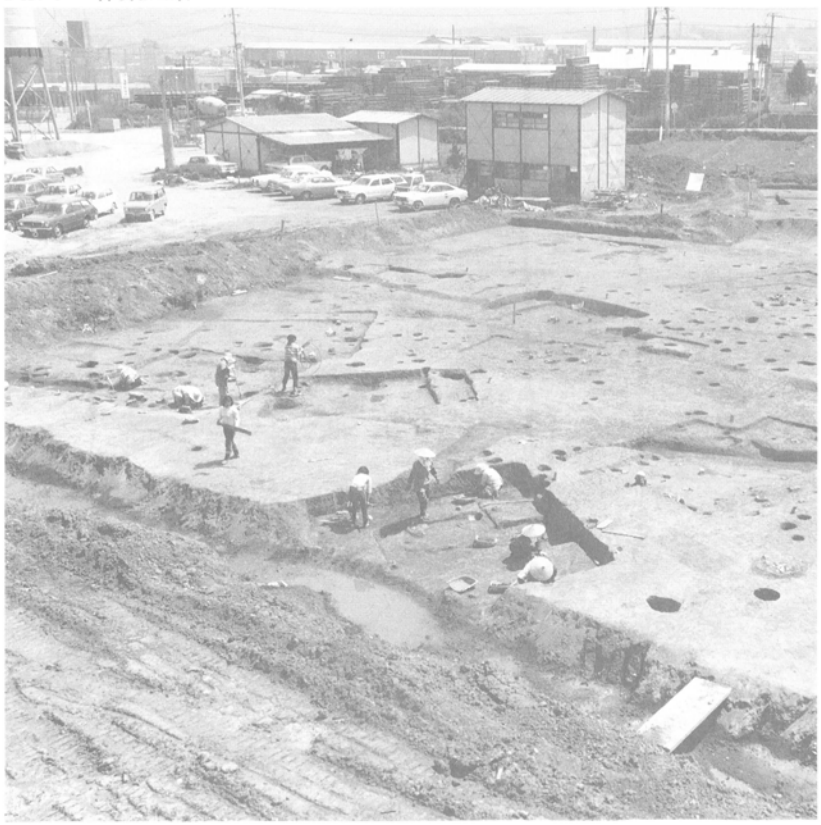
	径	深 さ		径	深 さ		径	深 さ		径	深 さ
1	42	58	6	37	24.5	11	－	－	16	－	－
2	38	29	7	27	9.5	12	39	40	17	47	12
3	24	26	8	31	5.5	13	－	－	18	34	10
4	37	24.5	9	47	35	14	40	9.5	19	45	26
5	22	18	10	39	35	15	37	46.5	20	26	16
									21	33	23.5

(単位cm)

Ph. 7　遺跡遠景

Ph. 8　第20号住居址

Ph. 9　作業風景



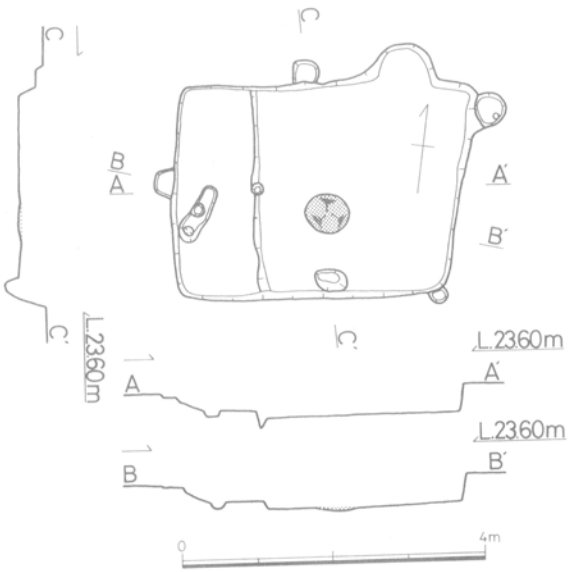


Fig. 56　第18号住居址実測図（縮尺１／100）

Ph.10　第31号住居址

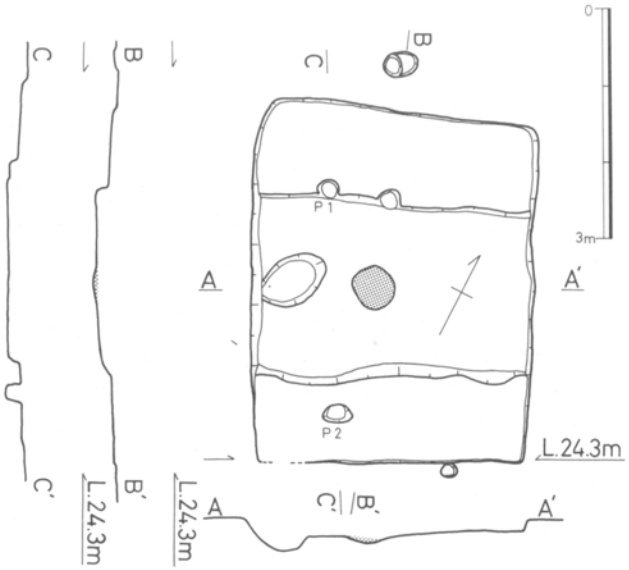
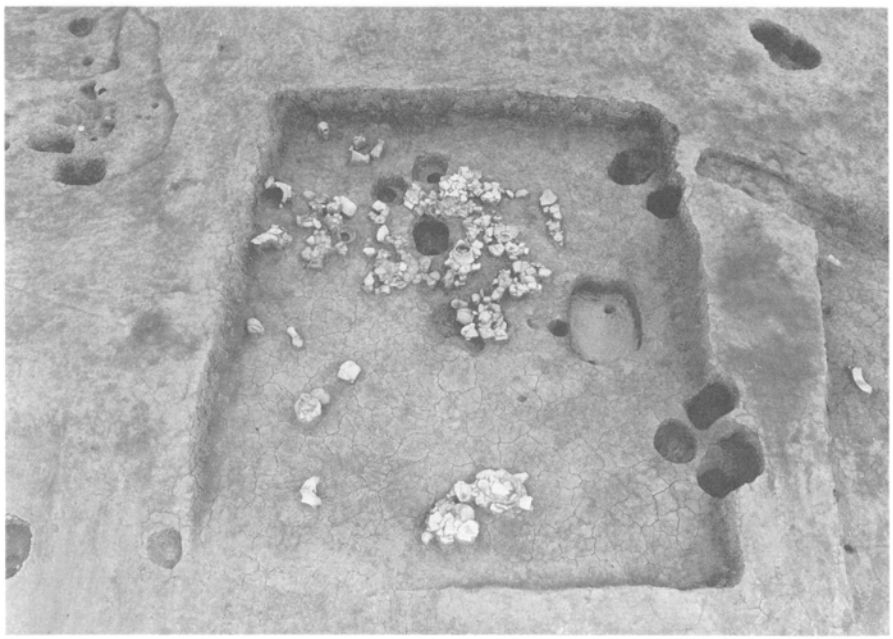


Fig. 57　第19号住居址実測図（縮尺１／100）



Ph.11　第15号住居址

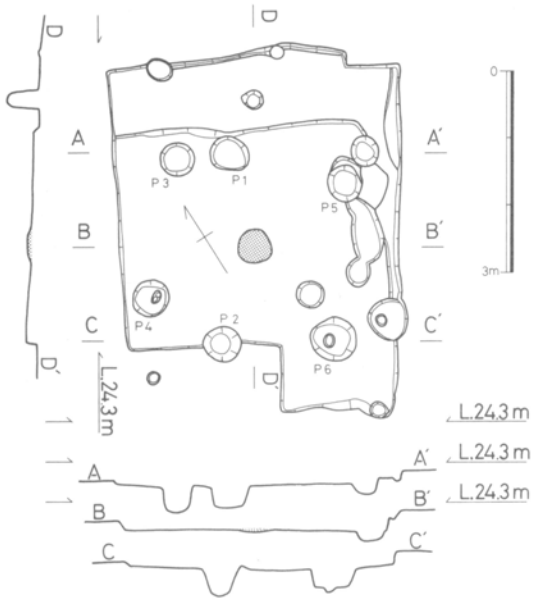


Fig. 57′　第20号住居址実測図（縮尺１／100）

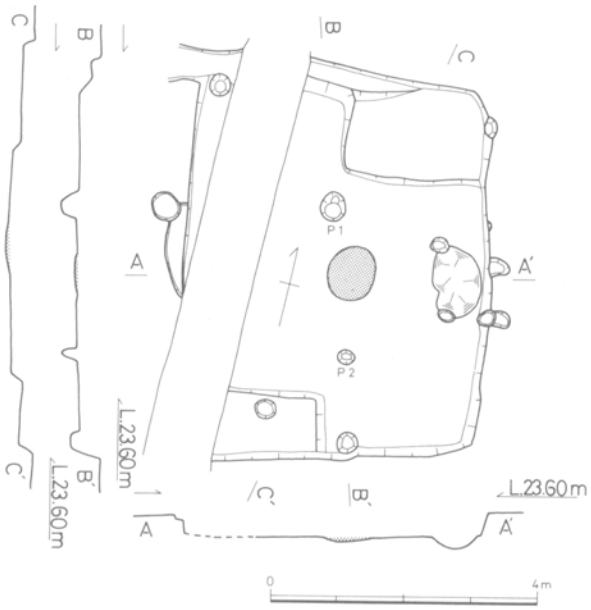


Fig. 58　第21号住居址実測図（縮尺１／100）

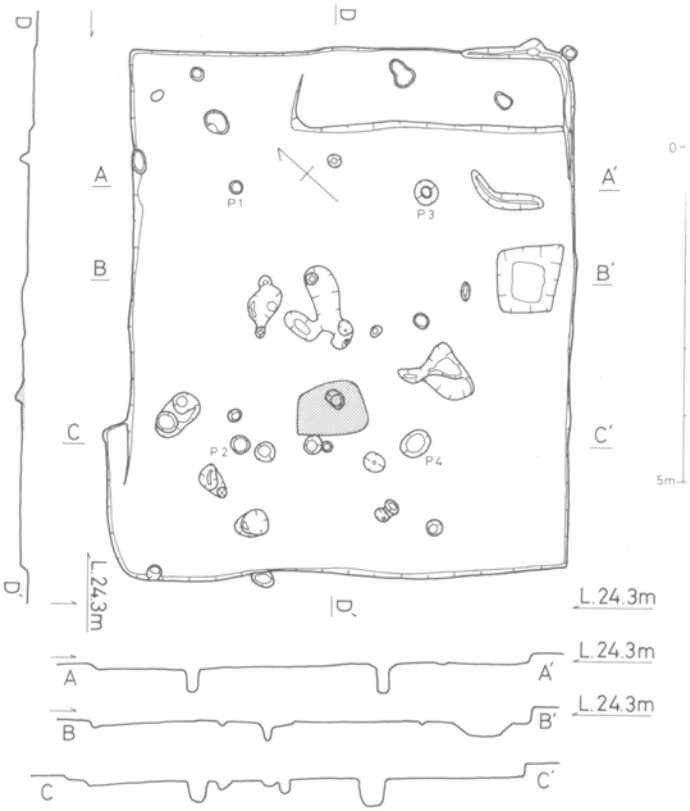


Fig. 59　第23号住居址実測図（縮尺１／100）

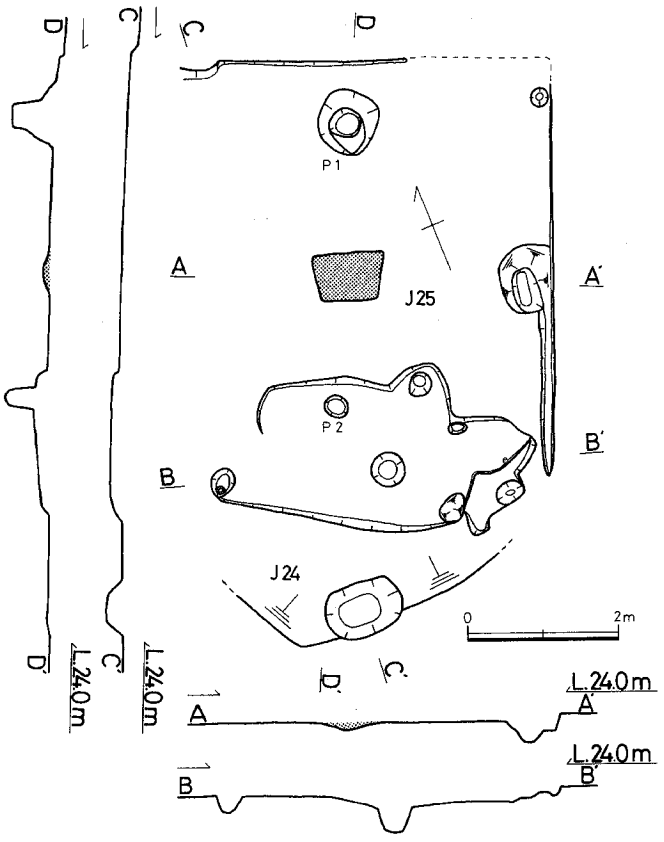


Fig. 60　第24・25号住居址実測図（縮尺１／100）

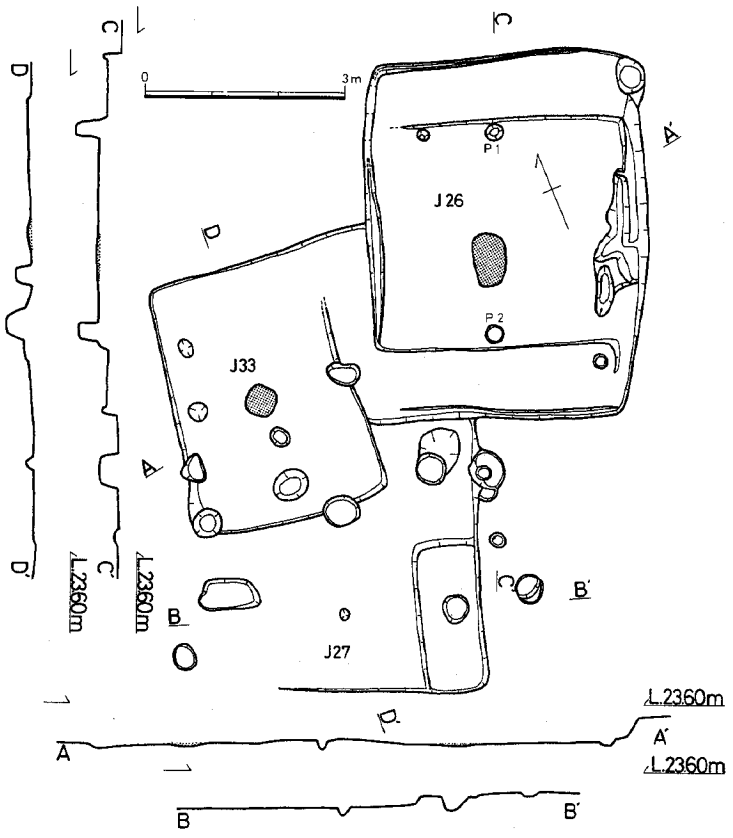


Fig. 61　第26・27・33号住居址実測図（縮尺１／100）

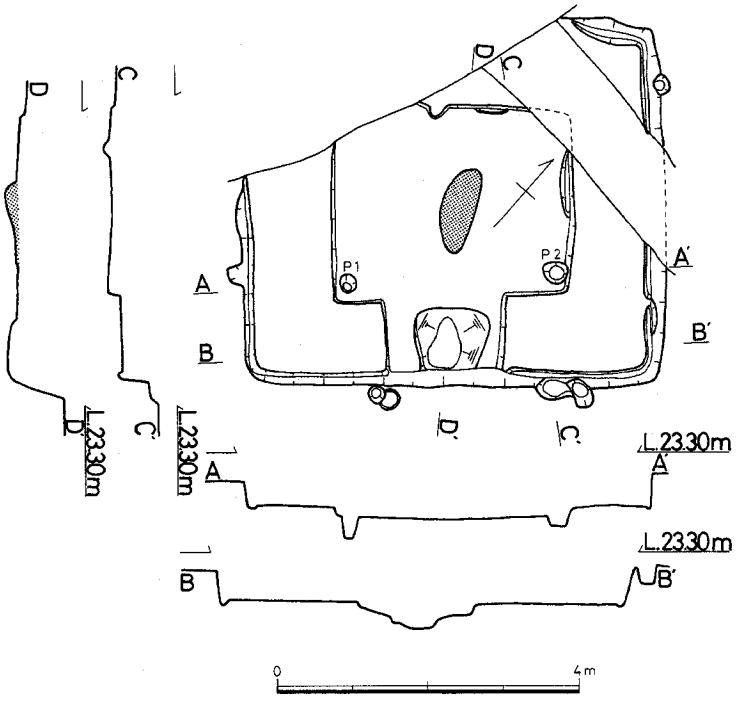


Fig. 62　第31号住居址実測図（縮尺１／100）

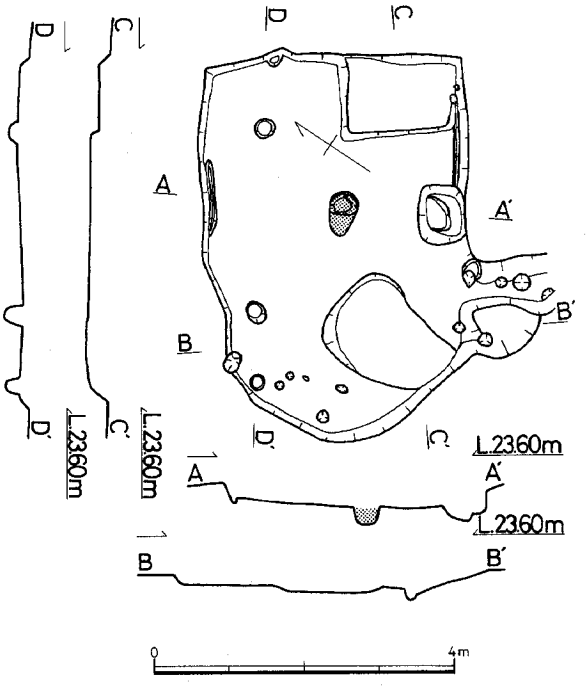
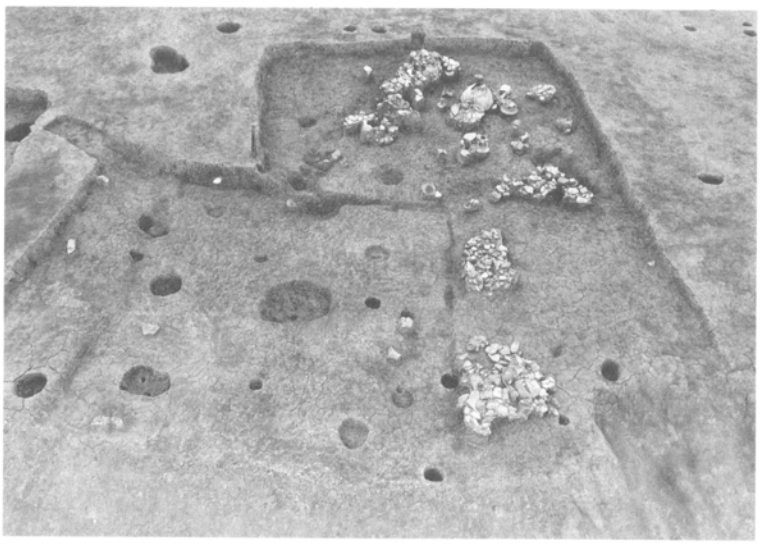
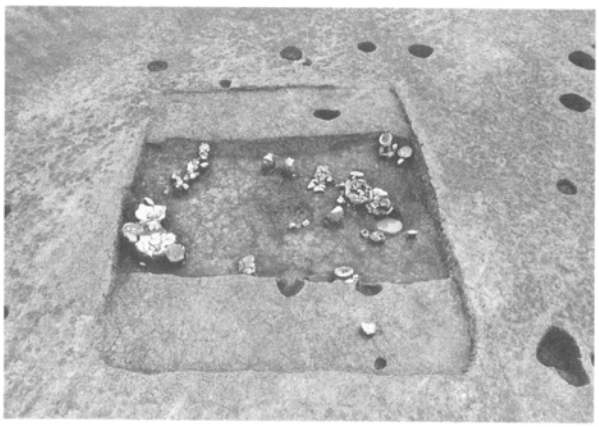


Fig. 63　第35号住居址と土坑実測図（縮尺１／100）

Fig. 64 第28・29・32・37・38号
住居址実測図（縮尺 1／100）



第16・17号住居址（Ph.12）



第19号住居址（Ph.13）

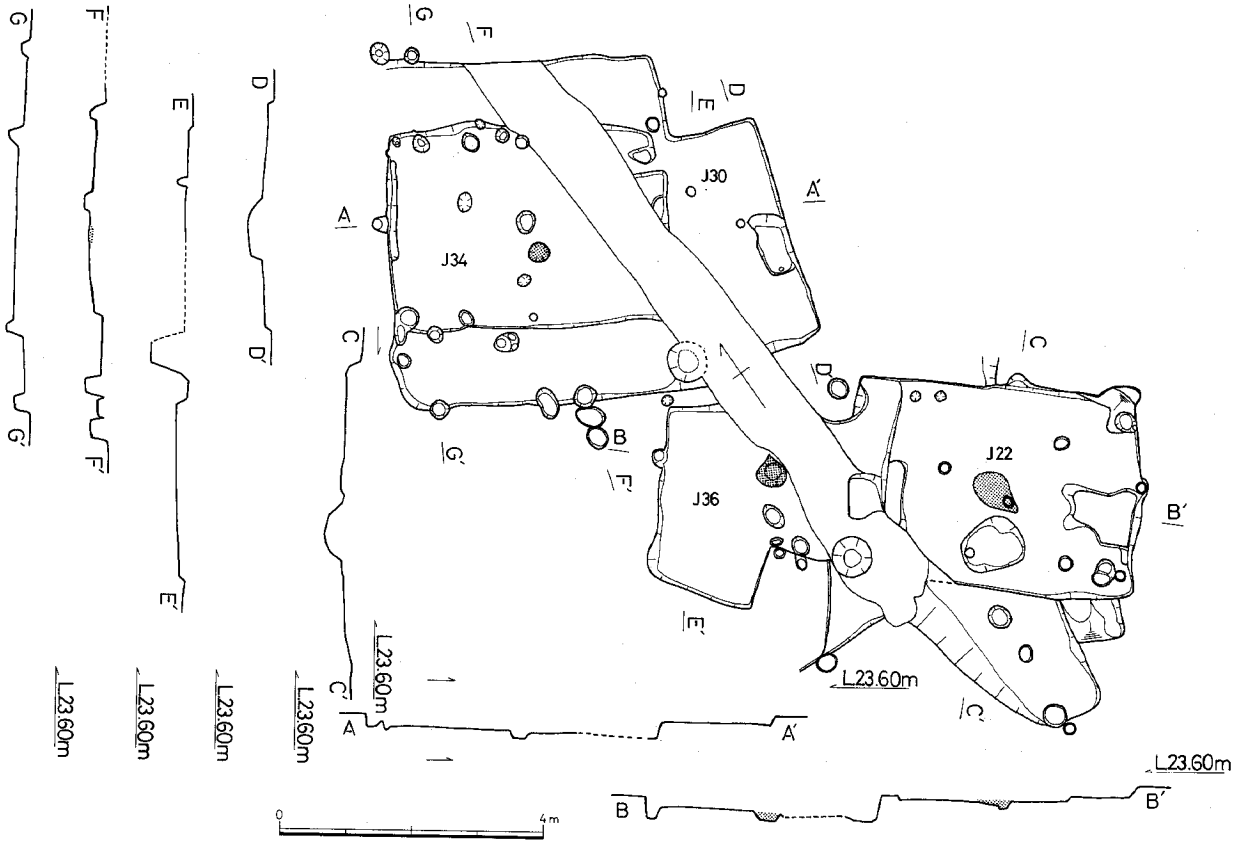


Fig. 65　第22・30・34・36号住居址実測図（縮尺１／100）

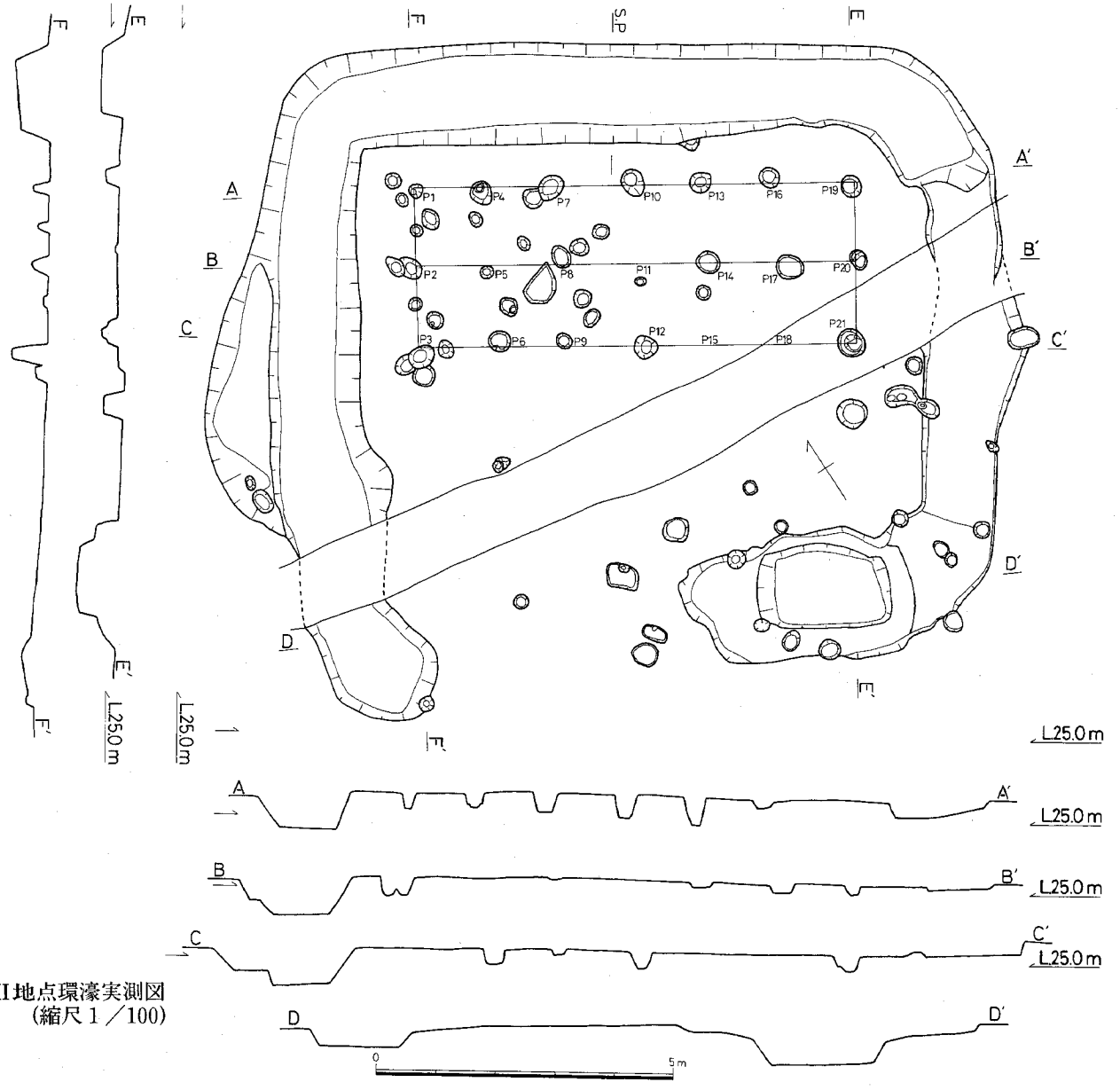


Fig. 66　第Ⅱ地点環濠実測図
（縮尺１／100）

Tab. 5　第Ⅱ地点　住居址一覧表

No.	形態	規模(m)	長軸方位	ベッド状遺構	炉	焼土	土坑(貯蔵穴様)	溝	主柱穴	備考	No.
10	長方形	4.16×3.68	N－20°－E	なし	中央	炉内	〔東壁際中央〕	なし	2	西南角、土坑を切る。	10
11	〃	5.68×?	ほぼ南北方向 (N－2°－E)	両短辺（南・北）	有（中央か？）	〃 炉と土坑の中間	東壁際	全周	不明	西半を削平されている。	11
12	〃	(炉を中央とすれば) 〔6×4〕	N－15°－E	なし	中央？	炉内 炉と西壁の間に2ヶ所	南壁際	南壁際	〃	一部発掘区域外。焼土の範囲と重複して(焼土のまわり)炭化物検出。	12
13	〔　〃　〕	長辺6．12 短辺不明	N－73°－E	両短辺（東・西）	不明	――	〔南壁際中央〕	南壁東よりに一部残存	〃	発掘区域外にのびている為、一部を検出したのみ。	13
14	〃	4.48×5.48	N－84°－E 東西方向に近い	〃　（　〃　）	中央	炉内。炉と炉内。 炉と西ベッドの間 炉と東ベッドの中間	不明	ほぼ全周（削平されて残存していない部分もある。）	2	中央に試掘溝。全体に炭化物、炭化材、焼土を多量に検出。ベッド貼り付け。	14
15	〃	4.32×5.2	N－76°－W	なし	〃	炉内	〃	なし	〃	西壁北半削平。	15
16	〃	5.3×4.3	N－19°－E	北側短辺	中央やや南寄り	〃	〃	東南角に残存	〃	西壁削平。J17を切っている。	16
17	〃	5.52×7.24	N－85°－W ほぼ東西	なし	中央	〃	南側長辺中央	なし	不明	J17→J16	17
18	〃	2.84×3.84	N－81°－E	西側短辺	中央やや南寄り	〃	〔南壁際中央やや小形〕	〃	〃		18
19	〃	4.66×3.76	N－27°－W	両短辺（南・北）	中央やや西寄り	〃	西壁際中央	〃	2		19
20	〃	5.5×4.2	N－32°－E	北側短辺と南側短辺西半	中央	〃	不明	東壁北弱と北壁に残存	2か4	南側短辺の西の（ベッド状遺構の場所）角が削平されている。	20
21	〃	4.66×5.9	N－13°－W	北側短辺の東半 南側短辺の西半	〃	〃	〔東側長辺中央〕	なし	2	西側に南北に試掘溝が入っている為、西南角は切られている。	21
22	〃	〔4.5〕×3.1	N－50°－W	西側短辺の南半にあった可能性あり	〃	〃	なし	〃	不明	J36に切られている。	22
23	〃	7.9×6.64	N－49°－E	北側短辺の東3/5	長軸線上、南寄り	〃	東側長辺中央	東北角に残存	4		23
24	不明	――	――	――	――	――	――	――	―	J25に切られている。一部が残るのみで詳細不明。	24
25	長方形	6.28×4.44	N－21°－E	なし	中央	炉内	東壁際中央	東壁際南半	2	J24→J25 東北角、西壁を削平されている。貼床。	25
26	〃	5.5×4.3	N－21°－E	両短辺（南・北）	中央やや西南寄り	〃	不明	両短辺と西側長辺沿い	〃	J27を切る。J27→J26 →J33	26
27	〔　〃　〕	4.08×? (以上)	N－67°－W (ベッドのある部分が短辺とすると)	東側壁沿いの南半	――	――	〃	――	不明	J26とJ33に切られる。西側約半分を削平されている。	27
28	正方形	5.44×5.36	N－4°－E	――	中央やや西北寄り	炉内	東辺中央	東壁・南壁の一部	〃	J29、J32を切っている。J29→ J32→J28	28
29	長方形	5.36×3.6	N－32°－W	南側短辺と北側短辺の東半	中央	〃	東壁際中央	なし	2	北コーナーJ28に切られる。 J29→J28	29
30	〃	3.52×? (短辺と思われる)	N－72°－W	残存部にはなし	――	――	〃	残存部分にはなし	不明	J34に切られる。試掘溝が通る。J36を切っている。 J22→J36→J30→J34。J34に切られている為、詳細不明。	30
31	〃	5.7×〔4.9〕	N－48°－E	東側短辺の中央部を除き全周	中央	炉内	〔南東壁際中央に浅い凹み〕	東壁中央部を除く壁沿いとベッドの下端に沿って若干残存。	4 (2個欠)	西角発掘区域外。北角付近東西に試掘溝。	31
32	〃	5.82×6.7	N－68°－W	東側短辺	〃	〃	南側長辺中央	J28に切られている所を除き、断片的に全周。	2	西北角J28に切られる。 J32→J28	32
33	〃	3.96×2.7	N－11°－E	なし	〃	〃	不明	なし	不明	J27を切っている。	33
34	〃	5.28×4.3	N－34°－E	両短辺（南・北）	〃	〃	――	西側長辺に一部残存	〃	J30を切る。J30→J34 東北コーナー付近試掘溝。	34
35	〃	〔4〕×3.6	N－52°－E	北側短辺の東半	〃	〃	東壁際中央	両長辺沿いに一部残存	〃	南側を土坑に切られる。	35
36	ほぼ正方形	3.44×3.76	N－47°－W	東壁の東半はベッドと思われる北壁の西側4/5も可能性あり	〃	〃	――	――	〃	J22を切る。J30・J34に切られていることも考えられる。 上面を削平されている。	36
37	方形(不明)	(炉が中央とすれば) 〔3.7×3.7〕	N－22°－W	東南角、一段高くなっている。ベッドか？	有	〃	――	――	〃	J38との切り合い不明。約½(推定)発掘区域外。	37
38	不明	――	――	南側ベッドか？	〃	〃	――	――	〃	J28に切られているとも考えられる。J37との切り合い不明。 発掘区域外にかかっている為、詳細不明。	38

＊〔　〕は推定及び不確定なもの。

Tab. 6　第Ⅱ地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
1	J10	壺・底部	(底径) 6.0			厚手の平底底部より、外上方に立ちあがる。	外面：ハケ目 内面：指で整形した後、ナデ。	砂粒や小石粒を多量に含む。良	良	外面：淡赤褐色 一部黒褐色。 内面：淡黄赤色		21-2	1
2	〃	小形高杯・接合部				杯部は、外上方に伸び、脚は開く。	外面：接合部のくびれ部分に細いハケ目。縦方向のヘラ削り 内面：脚部ハケ目。	長石粒・砂粒を多く含み、きめ粗い。	やや不良	淡い黄赤色		〃	2
3	〃	鉢	15.5	5.5	15.5	小さな丸底から上方に大きく開く。口唇部は丸味をもつ。	外面：ハケ目 内面：ハケ目 底面付近では、様々な方向からハケ目が施されている。	大粒の長石粒・細石粒・砂粒を含む。きめ粗い。	良	外面：やや赤味がかった淡黄褐色 内面：白味を帯びた黄褐色		〃	3
4	J11	器台	14.0	15.8	14.0	朝顔状に開く受け口をもち、くびれ部が上方にある。受け部端、裾端部は薄手になり、丸味をもつ。	外面：ハケ目。両端は不明瞭。 内面：指で押圧調整の為、凹凸している。	小石粒を多量に含む。	やや不良	灰褐色		〃	4
5	J14	壺？・口縁部	16.4			外反する口縁。外面は直線的、内面はややふくら味をもつ。	器面磨滅の為、不明。	石英粒等を多量に含む。	良	黄褐色		〃	5
6	〃	〃・〃	11.5			わずかに外反し、立ちあがる口縁。肩部にかけて急に器厚が薄くなる。	〃	長石粒・雲母等を多量に含む。	〃	淡黄褐色		〃	6
7	〃	〃・底部	(底径) 6.3			平底。	外面：ハケ目 内面：磨滅の為、不明。	小石粒をやや多く含む。	〃	外面：褐色 内面：淡褐色		〃	7
8	〃	高杯・脚部	(脚径) 16.6			裾端部に稜をもち、外側に大きく開く。	外面：ハケ目 内面：ハケ目	〃	〃	外面：やや赤味を帯びた茶褐色 内面：暗褐色		〃	8
9	〃	器台・受け部欠	(脚径) 9.3			「ハ」字形に開く脚。	外面：上方にハケ目（ヘラ削りの後のもの）。脚部ヘラ削り。 内面：しぼり痕があり、下方はナデ。裾下方ハケ目。	〃	〃	外面：明黄褐色 内面：淡黄褐色		〃	9
1	J15	壺・口縁部	34.4			朝顔状に開き、刻み目を有す口縁。口縁上部内面が斜めの平坦面をなし、段をもつ。	外面：ハケ目、口唇端と上方は、後にヨコナデ。口唇端の刻み目は楕円形。 内面：ハケ目。平坦部分にもハケ目。段の部分はヨコナデ。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	黄赤褐色		23	1
2	〃	甕・〃	32.0			口縁部直下に三角凸帯一条をもつ「く」字口縁。口縁部はやや肥厚する。	外面：口唇端部から凸帯下1cm程度までヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：ハケ目	小石粒・砂粒を多量に含む。きめ、やや粗い。	〃	明赤褐色 部分的に黒褐色		〃	2
3	〃	〃・〃	37.5			口縁部直下に三角凸帯一条。最もくびれた部分は凸帯の上方、1cm程の所にある。	外面：ハケ目が多少残存。口唇端部はヨコナデ。 内面：ハケ目	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	外面：淡黄赤色 内面：黄褐色		〃	3
4	〃	〃・〃	31.4			「く」字口縁。口縁部直下に三角凸帯一条。	外面：口唇部から凸帯下方までナデ。胴部ハケ目。 内面：ハケ目。	砂粒を少量含みごく少量の長石粒も含む。	〃	赤褐色		〃	4
5	〃	〃・〃	33.0			「く」字口縁。口縁部直下に三角凸帯一条。(凸帯は磨滅により、かなり丸味を帯びている。)	外面：磨滅の為、不明。凸帯付近ヨコナデ。 内面：ハケ目	砂粒・長石粒等を多く含む。石英粒も混入。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	5
6	〃	〃・〃	24.8			「く」字口縁。口縁端外面がやや厚みを増す。	外面：くびれ部分はヨコナデ。以下胴部ハケ目。 内面：ハケ目	砂粒・小石粒・雲母等を多量に含む。	〃	黄赤色 外面一部黒褐色		〃	6
7	〃	〃・〃	25.8			なだらかな「く」字口縁。	外面：ハケ目。口縁部、くびれ部分はハケ目の上をナデ。 内面：ハケ目。口縁部では上にナデ。	細砂粒等を含む	〃	淡朱色		〃	7
8	〃	〃・〃	23.3			「く」字口縁。口唇部がやや外弯気味。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部、巾の広いハケ目。 内面：磨滅の為、不明。	砂粒・長石粒等を多量に含み、きめ、やや粗い。	〃	外面：淡黄褐色 内面：淡黄赤色		〃	8
9	〃	〃・口縁部 胴上部	15.1			直立気味の胴部より緩やかなカーブで外反する口縁。小形。	外面：ハケ目 内面：口縁部は横方向ハケ目。胴部は縦方向のヘラによるナデ。	細砂粒を含む。	〃	灰色		〃	9
10	〃	〃・口縁部	16.8			「く」字口縁。比較的小形。	外面：口縁部ヨコナデ。くびれ部以下はハケ目。 内面：ハケ目。くびれ部付近でナデ。	長石粒・石英粒・砂粒を含む。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	10
11	〃	〃・〃	20.0			「く」字口縁。口唇部外面が、比較的丸味を帯びている。	外面：ハケ目。口縁部はハケ目の上にヨコナデ。 内面：ハケ目、下方では、ヘラ先で整形したようなナデ痕あり。	砂粒をやや多く含む。	〃	外面：淡黄赤色 内面：淡赤褐色		〃	11
12	〃	〃・底部欠	19.2			張りの少ない胴部より弯曲し、開く口縁。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部にハケ目あり。 内面：縦、或いは横方向のヘラナデ。	小石粒を多量に含み、きめ粗い。	〃	明褐色 内面はやや赤味を帯びる。		〃	12

Tab. 7　第II地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
13	J 15	甕・口縁部	25.0			「く」字口縁。口縁部はやや肥厚する。	外面：胴部ハケ目 内面：くびれ部下にハケかヘラによる調整痕。	やや大粒の石英粒少量と細砂粒小石粒を含む。	良	淡黄赤色		23	13
14	〃	〃・〃	19.2			「く」字口縁。口縁端部の中央がわずかに凹んでいる。	外面：ハケ目。口唇端及び口縁部はハケ目の上からヨコナデ。 内面：ハケ目	細かい長石粒・砂粒等を含む。	〃	〃		〃	14
15	〃	壺・胴部以下欠	23.4			逆「く」字口縁。短く内弯気味に内傾し、端部はやや薄い。屈曲部の稜は内外面ともに明瞭。頸部直下に三角凸帯一条。	外面：ハケ目。凸帯にも横方向のハケ目あり。 内面：口縁上部に指圧痕。下方にハケ目。頸部にかかりヘラ調整。	小石粒を多く含む。	〃	黄褐色		24	15
16	〃	〃・〃	20.9			逆「く」字口縁。屈曲部の稜が内外面ともに明瞭。口唇部から頸部までの器厚がほぼ同じ。	内外面ともにハケ目と思われるが不明瞭。 横方向のヘラ圧痕。	小石粒を含み、きめ粗い。	〃	灰黄色		〃	16
17	〃	〃・口縁部	23.0			逆「く」字口縁。やや内弯気味に内傾。屈曲部はやや突き出て、稜が明瞭。	内外面とも屈曲部より上方はヨコナデ。下方はハケ目。	小石粒・砂粒等を多く含み、きめ、やや粗い。	〃	外面：暗黄褐色 内面：白味を帯びた黄褐色		〃	17
18	〃	〃・〃	17.0			逆「く」字口縁。やや内傾する程度で傾きが少ない。口唇端部若干外反している。	外面：口縁部ヨコナデ、頸部下方にハケ目残存。頸部端に巾5㎜程の沈線。 内面：屈曲部付近から頸部にハケ目。口縁部ヨコナデ。	非常に細かい砂粒等を含む。	〃	赤褐色		〃	18
19	〃	〃・〃	11.2			やや筒状を呈す頸部に逆「く」字口縁。屈曲部は丸味をもち、稜はやや不明瞭。口唇部はやや内弯気味。	外面：口縁部ヨコナデ。頸部ハケ目。口唇端はハケ目状のものでヨコナデ。 内面：ヨコナデ	砂粒及び長石粒・石英粒等を多量に含む。	〃	黄赤褐色		〃	19
20	〃	〃・肩部以下欠	19.0			肩部は張り、短い頸部直下に三角凸帯を有す。逆「く」字口縁。屈曲部に3㎜程の巾をもち、稜の明瞭な突出がある。	外面：屈曲部下方から頸部ハケ目。屈曲部の突出部分と凸帯部付近はヨコナデ。 内面：口縁部上方ヨコナデ。肩部への移行部にハケ目残存。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	黄褐色		〃	20
21	〃	〃・〃	18.2			逆「く」字口縁。頸部下「M」字形の凸をめぐらすと思われるが磨滅が著しい。屈曲部がやや突き出し、稜も明瞭。	外面：磨滅の為、不明。わずかに口縁部にハケ目。 内面：屈曲部から下方ハケ目。	〃	〃	〃		〃	21
22	〃	〃・〃	15.0			逆「く」字口縁。比較的頸部が長い。頸部下に二条のやや丸味をもつ三角凸帯。	外面：磨滅の為、不明。多少、ハケ目残存。 内面：口唇部を除きハケ目。	小石粒を含む。	やや不良	淡黄褐色		〃	22
23	〃	〃・口縁部欠	(底径)11.2		30.3	やや丸味をもつ平底より緩やかに弯曲する長胴形の壺。頸部下に三角凸帯一条。	外面：ハケ目。凸帯上方にヘラ（9㎜巾）でヨコナデ。凸帯にも多少ヘラの痕跡あり。 内面：ハケ目	小石粒を多量に含む。	良	黄褐色	外面胴部下部にスス付着	〃	23
24	〃	〃	12.8	15.3	15.9	平底、球形の胴部で、頸部でわずかな段をなし、凹み、口縁部は外反し、やや短い。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。胴下半部はヘラ磨き。 内面：口縁部ヨコナデ。	砂粒・小石粒を含み、密。	〃	赤褐色	スス付着	25	24
25	〃	甕・底部欠	15.0		15.4	緩やかな「く」字口縁。口唇端部は薄くなり。丸味を帯びる。	外面：口縁部ナデ及びヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：口縁部ナデ、胴部一部にハケ目状の痕跡あり。	大粒の石英粒・砂粒等を多く含み、きめ、やや粗い。	やや不良	外面：赤褐色 内面：暗赤褐色		〃	25
26	〃	小形壺・口縁部欠	(底径)5.0			平底。	外面の所々にハケ目状の細かい擦痕あり。 内外面とも研磨に近い状態に調整されている。	小石粒・砂粒等を多量に含む。やや密。	良	淡赤褐色		〃	26
27	〃	甕・底部欠	13.5			胴部から口縁にかかる部分で、やや巾をもち、口縁部は短く外反する。	外面：胴部にハケ目。口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部に横方向のハケ状の擦痕。胴部にかかる部分はナデ。	細かい砂粒等を多く含む	〃	赤褐色		〃	27
28	〃	小型鉢・口縁部欠	(底径)5.0			平底より、やや丸味をもち、上方に立ちあがる。口縁部は短く外反すると思われる。	外面：磨滅の為、不明。 内面：ヘラ調整、細かいハケ目。	精良	やや不良	〃		〃	28
29	〃	〃・〃	(底径)4.8			多面が多少凹凸していて、底部中央に凹みもある。立ちあがりの開きが少ない。	内面：ハケ目様のものが若干みられるが不明瞭。	小石粒を多量に含む。。	良	淡黄色		〃	29
30	〃	手捏ね土器・口縁部欠	(推定)8.4	(推定)6.0		小形の鉢形。尖り気味の底部。	内外面ともに指頭で調整。	〃	〃	灰赤褐色		〃	30
31	〃	小形鉢・口縁部欠	(底径)1.8			小さい平底から斜めに直行する。口縁部は、やや内弯気味になると思われる。	内面に細かい直線文の組み合わせ、底部付近では線が少し太い。	小石粒を含む。	〃	灰褐色		〃	31
32	〃	器台・脚部欠	7.5	(推定)11.2		緩やかなくびれ部が上方にある。	外面：擦痕あり。 内面：くびれ部はよく調整されておらず、粘土の余りがみられる。	精良	〃	茶褐色		〃	32
33	〃	〃・裾部欠	11.8			比較的薄手で、受け部が朝顔状に開く。両面上方のくびれ部分の稜線が明瞭。	外面：ハケ目。受け部はハケ目の上をヨコナデ。 内面：受け部はハケ目。脚部ヘラ削り。	長石・石英の細粒がやや多く、砂粒も含む。きめ、やや粗い。	〃	赤茶褐色		〃	33

Tab. 8　第II地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
34	J 15	器台・受け部欠	(脚径)9.9			小形。くびれ部は中位よりやや上方にある。	外面：ハケ目 内面：くびれ部上方にナデ痕。	砂粒・小石粒等を多量に含む。	良	赤褐色		25	34
35	〃	〃・〃	(脚径)18.0			くびれ部が上方にあり、脚部は大きく「ハ」字形に開く。脚端部は厚味をもつ。	外面：くびれ部付近でハケ目。下方脚部は指によるナデ。部分的に指で押さえた痕あり。 内面：脚上部、ヘラ状のものでなでた後、縦方向に指のナデ。脚下部ハケ目。	長石・石英粒をやや多く含み、きめ粗い。	〃	外面：淡黄赤色 内面：淡赤褐色		〃	35
36	〃	〃・裾部欠	14.9			受け部は朝顔状に開き、くびれ部が上方にある。受け部端の稜は明瞭。	外面：ハケ目。口唇部ヨコナデ。受け部内面はハケ状のものによるナデ及びヨコナデ。 内面：くびれ部以下は縦方向の指圧痕。	長石・石英粒・砂粒等を多く含む。	〃	灰黄褐色		〃	36
37	〃	〃・裾部	(脚径)12.9			裾部がやや開く。端部はやや薄くなる。	外面：叩き目 内面：下方にヘラ削り。	〃	〃	やや赤味がかった淡黄褐色		〃	37
38	〃	〃・受け部欠	(脚径)13.3			くびれ部が上方にある。脚端は平坦。	外面：くびれ部分にハケ目。以下は不明瞭。 内面：くびれ部より下方にハケ目。	小石粒を多く含む。	〃	赤褐色		〃	38
39	〃	〃・〃	(脚径)11.5	(推定)11.9		小形で、くびれ部が上方にある。	外面：ハケ目。くびれ部上方に指圧痕及びナデ。 内面：上方ナデ。くびれ部より下方はハケ目。	砂粒・小石粒等を多く含み、きめ粗い。	〃	〃	内外面にスス状のもの付着	〃	39
40	〃	〃・裾部欠	13.5			脚部中間がしまり、やや円筒状を呈す。受け部は緩やかに開く。	外面：受け部上方はナデ。脚部はハケ目。 内面：受け部上方ナデ。一部分にハケ目残存。	砂粒を含み、小石粒・雲母等もごく少量含む。	〃	淡黄赤色	スス付着	〃	40
41	〃	支脚	11.2	10.6	10.4	「ハ」字形に開き、頂部に孔をもつ。上部の器厚が厚く、下方に行くに従い薄くなる。	外面：ハケ目。上坦面はナデ。 内面：上部でヨコナデ、下方ハケ目。	砂粒・小石粒等を多量に含み、きめ、やや粗い。	〃	赤褐色		〃	41
1	J 16	壺・口縁部	21.9			逆「く」字口縁。やや外弯気味に内傾する。屈曲部は丸味を帯びて稜をなし、やや突き出し気味。	器面磨滅の為、不明。 内面口唇部ヨコナデ。	砂粒・小石粒（特に長石）を多量に含む。	〃	赤味を帯びた黄褐色		26	1
2	〃	甕・〃	40.6			やや直線的に開いた口縁で、口縁下に不整形な凸帯をめぐらす。凸帯に刻み目。	外面：口唇部ヨコナデ。凸帯から上方はハケ目。凸帯部はヨコナデの後に不規則な刻み目を施している。刻み目内にもハケ状の線がある。 内面：ハケ目	細石粒・砂粒を少量含み、きめやや粗い。	〃	外面：暗黄褐色 内面：白味を帯びた黄褐色		〃	2
3	〃	壺？・底部	(底径)8.4			底部中央が、やや凹むものかと思われる。	外面：磨滅の為、不明。 内面：ハケ目	破粒・石英粒を多く含む。	〃	暗赤黄色		〃	3
4	〃	鉢・底部欠	28.3			内弯気味に大きく開き、口唇部で直に立ちあがる。	外面：指で押して整形した後にヘラ磨き。口唇端ヨコナデ。 内面：磨滅の為、不明瞭であるが、ナデと思われる。	砂粒・長石粒等を含む。	〃	外面：赤褐色 黒褐色部分あり 内面：明赤褐色		〃	4
5	〃	器台	6.2	9.9	9.6	器厚が厚く、脚部下方でやや開く。筒形で小形。	外面：上端と下端でナデ。部分的にヘラ削り。 内面：ヘラ削り。	非常に細かい砂粒を少量含む。きめ細かい。	〃	明赤黄色		〃	5
6	〃	省台・脚下部 器台　欠				項部は、やや斜めに傾き、孔がある。	外面：一部分にハケ目。 内面：穿孔部分の下に指の押圧痕がある。	細かい砂粒を若干含む。	非常に良好	暗赤黄色		〃	6
7	〃	高杯・脚上部				接合部内面の中央に孔1個をもつ。緩やかに広がる脚。	外面：ヘラ削り 内面：ヘラ削り、或いはヘラナデ。	砂粒・小石粒をやや多く含む。	良	外面：黄赤色 内面：灰色		〃	7
8	〃	器台・脚部欠	17.2			朝顔状に開き、口唇部が若干外側に広がり、稜が明瞭。	外面：ハケ目。くびれ部ヨコナデ。口唇部ヨコナデ。 内面：口縁部はハケ目の上をナデ。下方はハケ目。	細かい砂粒をやや多く含む。	〃	外面：淡黄赤色 内面：白味を帯びた黄褐色		〃	8
9	〃	〃・受け部 裾部欠				中間近くでややすぼまり、上方・下方が開く。	外面：ハケ目 内面：上方に指の押圧痕。他はハケ目。	小石粒を多く含む。	〃	灰色がかった赤褐色		〃	9
10	〃	〃・受け部	13.7			口唇端部に平坦面をつくり、稜も明瞭。口唇端部のヨコナデにより、はみ出た粘土が若干の段をなす。	外面：ハケ目。口唇端部はヨコナデ。 内面：ハケ目。（縁に対して平行になるように少しずつ方向を変えながら一周している。）	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	外面：赤みを帯びた黄褐色 内面：薄茶色		〃	10
11	〃	〃・裾部	(脚径)15.8			やや内弯気味に開く。	外面：ハケ目 内面：ハケ目。裾部端はヨコナデ。	〃	〃	外面：黄赤色 内面：黄褐色		〃	11
1	J 17	甕・口縁部	33.3			やや外弯し開く口縁。口唇端部の稜が明瞭。口縁部下に三角凸帯一条。胴部にかけては、やや張り出し気味。	外面：口縁部は、ハケ目の後ヨコナデ。凸帯部ヨコナデ。凸帯部下方はハケ目。 内面：口縁付近ヨコナデ。下方はハケ目。	砂粒・小石粒を含む。	〃	淡黄赤色		27	1
2	〃	〃・〃	30.3			やや内弯気味に開く口縁。くびれ部のやや下方に三角凸帯一条。	外面：ヨコナデ。口縁部はハケ目がナデにより消えている。 内面：ハケ目	細かい石粒を多量に含み、砂粒も混入。	〃	白味を帯びた赤黄色		〃	2

Tab. 9　第II地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
3	J17	壺・口縁部	35.0			外弯して開く口縁。口唇部にやや厚味をもつ。口縁部下に三角凸帯一条。	器面磨滅の為、不明。	小石粒・砂粒を含む。	良	淡黄赤色		27	3
4	〃	〃・〃	27.5			大きく外弯し、開く口縁。口唇端部の稜が明瞭。口縁部下に三角凸帯一条。	外面：縦方向にヘラによるナデ整形。凸帯部ヨコナデ、口唇端部はヨコナデ。 内面：ハケ状のものによるヨコナデ。	小石粒を多く含み、砂粒も含む。きめ、やや粗い。	やや不良	外面：淡茶黄色 内面：白味を帯びた黄褐色		〃	4
5	〃	甕・〃	26.0			やや外弯する口縁部下に三角凸帯一条。口唇端部にわずかな凹みがみられる。	外面：ハケ目、口縁部は太いハケ状のもので、上からヨコナデ、口唇部、凸帯部ヨコナデ。 内面：ハケ目。くびれ部にヨコナデ。	細かい砂粒・小石粒等を多く含む。	良	灰茶褐色		〃	5
6	〃	〃・〃	28.5			緩やかな「く」字口縁。口唇部は丸味をもつ。胴部にかけてやや張り出し気味。	外面：ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ。くびれ部は指で押さえ、その上ヨコナデ。下方はハケ目。	砂粒、細かな石粒・雲母等を多量に含む。	〃	外面：黄褐色 内面：赤味を帯びた黄褐色		〃	6
7	〃	〃・胴部以下欠	19.3			「く」字口縁。口唇部は丸味をもち、わずかに外傾する。胴部中央がやや張る。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：剝離の為、不明。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	暗褐色		〃	7
8	〃	〃	19.5			「く」字口縁。口唇部が外傾する。	外面：ハケ目の後ヨコナデ。くびれ部4㎜程の巾でヨコナデ。口唇端部はヨコナデ。 内面：わずかにハケ目が残存。	〃	〃	外面：薄茶色 内面：黄褐色		〃	8
9	〃	〃・口縁部	22.3			「く」字口縁。	外面：ハケ目。上方では、ハケ目の上にヨコナデ。 内面：ハケ目。(くびれ部を境にして)	小石粒・砂粒を含み、きめ細かい。	〃	外面：淡黄褐色 内面：灰黄褐色		〃	9
10	〃	〃・〃	21.4			「く」字口縁。	外面：ヨコナデ。くびれ部に4㎜程の巾の板状のものでヨコナデ。 内面：ヨコナデ	微粒の石粒を若干含む。	〃	外面：淡褐色 内面：薄茶色		〃	10
11	〃	〃・〃	21.4			「く」字口縁。くびれ部の稜が明瞭。	外面：ハケ目。口唇端部ヨコナデ。 内面：磨滅の為、不明。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	茶褐色		〃	11
12	〃	〃・〃	21.4			「く」字口縁。口唇端部中央がやや凹んでいる。	口縁部内外面ともヨコナデ。	〃	〃	外面：淡赤褐色 内面：黒褐色		〃	12
13	〃	〃・〃	23.5			「く」字口縁。	外面：口縁部ヨコナデ。下方はハケ目。 内面：ハケ目	細石粒を含み、ごく少量砂粒も含む。きめ、やや粗い。	〃	淡赤黄色		〃	13
14	〃	〃・〃	20.2			「く」字口縁。口唇部分がやや外傾する。くびれ部にヨコナデによるわずかな凹みがある。	内外面ともに口縁部ヨコナデ、胴部ハケ目。	細かい砂粒、小石粒・黒雲母等を含む。	〃	〃		〃	14
15	〃	壺・頸部以下欠	22.2			逆「く」字口縁。やや外弯気味に内傾し、口唇端部が直立気味で平坦面をなす。	外面：屈曲部より上方にハケ目。下方は磨滅により不明瞭。 内面：磨滅の為、不明。	小石粒を多量に含む。	〃	赤褐色	スス付着	28	15
16	〃	〃・胴部以下欠	19.2			逆「く」字口縁。屈曲部が丸味を帯び、巾のある稜がみられる。頸部下に三角凸帯一条。	外面：屈曲部下方はヘラ削りかとも思われるが不明瞭。 内面：口縁部ヨコナデ。口縁下部から頸部にかけてハケ目。屈曲部はナデによる凹み。	〃	〃	白味を帯びた黄褐色	内面スス付着	〃	16
17	〃	〃・〃	22.5			逆「く」字口縁。頸部はしまり、口唇部は短く、内弯気味に内傾する。	器面磨滅の為、不明。	〃	〃	赤褐色		〃	17
18	〃	〃・〃	25.0			大きく外弯する頸部に、わずかに内傾する口縁をもつ逆「く」字形に近い二重口縁。屈曲部がやや下方に尖り気味に突き出ている。	外面：口縁部は7～8本のほぼ等間隔の凹線文が一周する部分的にハケ目状のもの残存。屈曲部下方はヨコナデ、指圧痕も一周。頸部は指でなでた後にハケ目。 内面：口縁上方はハケ目の後ヨコナデ、頸部ハケ目。	長石粒等を多量に含む。	〃	赤味を帯びた黄褐色		〃	18
19	〃	〃・〃	36.3			大きく外弯する口縁。頸部に三角凸帯一条。口唇端部の中央が凹む。	外面：ハケ目が部分的に残存。 内面：ハケ目	細石粒を多量に含む。(石英粒がやや多い。)	やや不良	黄褐色		〃	19
20	〃	〃	13.0	32.2	27.6	丸味をもつ平底に球形の胴部がつき、口縁部はやや外反する。	外面：口縁部からくびれた部は指でヨコナデ、胴部ハケ目。胴部下方にヘラ痕、くびれ部下はヨコナデ。胴部底部にも不明瞭なハケ目。 内面：口縁部ヘラ痕、くびれ部下はヨコナデ。胴部ハケ目。	やや大粒の砂粒等を含む。	良	〃		〃	20
21	〃	長頸壺・口縁部欠	(推定)6.6	(推定)16.5	11.1	頸部下方が、やや緩やかに外弯し、球形の胴部と接合する。器厚は薄手だが、丸底底部はやや厚い。	外面：胴部上方にハケ目。底部にもわずかにハケ目が残存。	〃 きめ粗い。	〃	赤味を帯びた黄褐色	胴部にスス付着	〃	21
22	〃	壺・底部欠	10.0	(推定)18.5	16.1	胴中位よりやや上方が張り出し、緩やかに弯曲しながら、わずかに外傾する口縁へ続く。	外面：横方向或いは縦方向の細かい擦痕が残存。ヘラ調整。 内面：磨滅の為、不明。	非常に細かい砂粒等を含み、良。	〃	外面：暗赤褐色 内面：淡褐色	スス付着	〃	22
23	〃	鉢	16.3	10.2	16.4	丸底に近い底部に球形の胴部。口唇端がわずかに外傾し、稜をもつ。	外面：磨滅の為、不明。(わずかなハケ目が残存) 内面：ハケ目	細石粒を多く含む。	〃	明褐色		29	23

Tab. 10　第II地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
24	J17	鉢・口縁部欠				丸底より外上方に開き、立ちあがる。	外面：磨滅の為、不明。 内面：ハケ目	良	良	外面：黄褐色 内面：明黄褐色		29	24
25	〃	〃	17.8	10.1	18.5	平底より外上方に開き、口縁部はわずかに内弯気味に直立する。口唇部は丸味をもつ。	内外面ともにハケ目。	砂粒・小石粒を多量に含み、きめ粗い。	〃	暗黄褐色		〃	25
26	〃	〃	19.1	17.7	20.5	やや丸味をもつ、いびつな平底。外上方に立ちあがり、口縁部で多少内傾する深鉢。口唇端部は斜めの平坦面をなす。	外面：ハケ目。(胴部のハケ目は縦方向であるが、不瞭) 内面：上方はハケ目。	小石粒を多量に含む。	〃	黄褐色		〃	26
27	〃	手捏ね土器	6.1			小形の鉢形。丸味のある平底。	外面：ハケ目様のものが、かすかに残存。	大粒の石英粒等を含む。	〃	白味を帯びた黄褐色	スス付着	〃	27
28	〃	鉢？・底部欠	29.6			丸く立ちあがる杯に大きく外反する口縁。口縁部との間に明瞭な稜をもつ。	外面：ヘラ磨き。口縁上部は上からヨコナデ。下方でハケ目。 内面：口縁部ヘラ磨き。下方はナデ。	砂粒・細かい長石・石英粒等を含む。	〃	外面：赤褐色 内面：淡黄赤色 内外面とも暗い部分あり。		〃	28
29	〃	高杯・杯部	28.0			杯部は、やや内弯気味に立ちあがり、口縁部は外反し大きく開く。稜は明瞭。口唇端はやや平坦。	外面：磨滅の為、不明。 内面：上方ヨコナデ。屈曲部下1㎝程、ヘラ削りの可能性あり。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	外面：淡灰褐色 内面：茶褐色		〃	29
30	〃	〃・〃	27.7			杯部に内外面ともに明瞭な稜をもち、口縁部は外反し開く。口唇端部が丸味をもつ。	内外面ともにナデ。	〃	〃	外面：赤味を帯びた黄褐色 内面：淡黄赤色		〃	30
31	〃	〃・脚部	(脚径)16.3			緩やかに開く脚。円形透孔が脚上方に2個、下方に現存3個であるが、4個であったと思われる。杯部との接合部分に、わずかな凸帯が一条。	外面：磨滅の為、不明。(ハケ目がわずかに残存) 内面：〃 (ヘラによる削り痕残存)	〃 大粒のもの混入。	〃	淡赤褐色		〃	31
32	〃	〃・〃				杯との接合部よりなだらかに弯曲し、裾部へと広がる。	外面：部分的にハケ目。 内面：しぼり痕。	細かい石粒を多量に含み、きめ粗い。	やや不良	外面：黄褐色 内面：赤褐色		〃	32
33	〃	〃・裾部	(脚径)20.9			「ハ」字形に開く。孔の下端がわずかに残存。	外面：ヘラ磨き。 内面：ハケ目。上方はナデ。裾端部ヨコナデ。	砂粒・石英粒を若干含み、きめ細かい。	良	黄赤色		〃	33
35	〃	器台・脚部欠	18.2			朝顔状に開く。受け部端に刻み目。	口唇端部はヨコナデの後刻み目 (形や間隔が不規則)。 外面：口縁上方ヨコナデ、上方ハケ目。	細かい砂粒・小石粒等を含む。きめ、やや粗い。	良	やや赤味を帯びた暗黄褐色		30	35
36	〃	〃・〃	19.2			朝顔状に開き、内面、くびれ部にやや段をなす。受け部端に刻み目。	外面：ハケ目。上方ではヘラによるナデ。口唇端部は、刻み目の後ヨコナデ。 内面：ハケ目。くびれ部はヨコナデの後ハケ目。	砂粒・小石粒等を多量に含む。	〃	外面：黒褐色 内面：薄茶色と灰褐色		〃	36
37	〃	〃	21.6	23.5	21.6	朝顔状に開く受け部。外面に凹凸がみられる。くびれ部が上方にあり、脚部は筒状に近く、開きが少なく、わずかに内弯気味。	口唇端部に刻み目。 内外面ともにハケ目。	細かい石粒等を含む。	やや不良	褐色及び灰褐色		〃	37
38	〃	〃	20.8	25.5	20.8	朝顔状に開く受け部。くびれ部が上方にあり、脚部は筒状に近く、開きが少ない。	外面：ハケ目。口唇端部に刻み目。 内面：ハケ目。くびれ部下6㎝程に指で縦方向のなでつけ。	良	良	暗褐色		〃	38
39	〃	〃・脚部欠	16.6			朝顔状に開く受け部。受け部端が丸味をもつ。	外面：口縁部はハケ目の後ヨコナデ、下方はハケ目。 内面：口縁部とくびれ部ヨコナデ、下方はハケ目。	砂粒を含み、長石粒等も少量含む。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	39
40	〃	〃・裾部欠	13.5			朝顔状に開く受け部、くびれ部が上方でなだらかなカーブを呈す。	外面：ハケ目。口唇端部ヨコナデ。 内面：口縁部に部分的にハケ目残存。下方は縦方向になでつけ。	細かい石粒・砂粒等を含み、きめ細かい。	〃	外面：明茶褐色 内面：淡茶褐色		〃	40
41	〃	〃	10.4	17.4	11.3	上方にあるくびれ部に外弯する受け部が続き、かるい平坦面をなす。器厚が厚い。	外面：ハケ目 内面：凹凸して、あまり調整されていない。	小石粒を多量に含む。	やや不良	褐色		〃	41
42	〃	〃	19.1	20.7	19.1	受け部は外弯し、口唇部がやや外傾。くびれ部は上方で、脚部は筒状に近く、開きが少ない。	外面：口縁部ヨコナデ。脚部ハケ目。 内面：口縁部ハケ目の後ヨコナデ。以下脚部はハケ目。	砂粒を含む。	良	暗褐色 (部分的に黒褐色)		〃	42
43	〃	〃	11.5	11.8	11.5	受け部と裾部が開き、中間がすはまり、やや筒状を呈す。	外面：中間くびれ部分に斜方向の指圧痕。 内外面とも磨滅の為、不明。	良	〃	黄褐色		〃	43
44	〃	〃・受け部欠	(脚径)10.2			小形。裾部が急に外側に開く。	外面：指で押さえた後、ナデ。 内面：裾部ヨコナデ。裾端部はハケ状のものでヨコナデ。	細かい砂粒を少量含み、きめ細かい。	〃	明赤褐色		〃	44
45	〃	器台・裾部	(脚径)15.4			「ハ」字形に開く脚、裾部端部は丸味を帯びる。器厚が厚い。	外面：ハケ目。上方ではハケ目の上をヘラ削り。 内面：上方にしぼり痕。下方で所々に指圧痕及び縦方向のナデ。	長石・石英粒を多量に含み、砂粒・雲母も混入。	良	外面：淡い赤味のかかった黄褐色 内面：淡赤褐色		〃	45

Tab. 11　第Ⅱ地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
46	J 17	〃・脚部	(脚径) 13.8			「ハ」字形に開く脚。裾端は、やや内弯気味。	外面：叩き目。(部分的に削られた痕も残る) 内面：上方はヘラ整形。裾部は指で押さえながらナデ整形。	細かい砂粒。ごく少量の細石粒も含む。	良	明赤黄色		30	46
47	〃	支脚・裾部欠	5.3			脚部が開き、頂部中央に孔をもち、穿孔の際に余った粘土が孔付	器面磨滅の為、不明。 内面の孔下方にしぼり痕。	砂粒・小石粒・金雲母等を含む。	やや不良	黄褐色		〃	47
48	〃	沓形器台・裾部欠	(推定) 8.2			近にみられる。 突出部を欠くが、沓形を呈するもので、頂部中央に孔あり。	外面：叩き目。頂部も叩き目が施されている。頂部は粘土をのせたもので、穿孔部分はなでつけ。 内面：しぼり痕、及び押圧痕。下方はヨコナデ。	砂粒・微粒の石粒を多量に含む。良	良	外面：黄褐色 内面：薄茶色		〃	48
1	J 18	壺・口縁部	32.3			内弯気味の逆「く」字口縁。	器面磨滅の為、不明。 屈曲部下にハケ目が若干残存。	砂粒を含み、きめ、やや粗い。	やや不良	淡黄褐色		31	1
2	〃	甕？・口縁部	38.4			直に近い立ちあがりの胴部に外反す口縁。内外面ともに稜線が明	外面：口縁部ナデ痕がかすかに残存。 内面：口縁部ハケ目。	砂粒。小石粒も若干含む。	〃	外面：暗茶褐色 内面：黄茶褐色		〃	2
3	〃	甕・胴下半部以下欠	26.7			瞭。 くびれ部がややなだらかな「く」字口縁。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部はハケ目。 内面：口縁部ヨコナデ。くびれ部下は、ヘラ状のものによるナデ。	長石・石英粒・砂粒を少量含む	〃	外面：淡黄褐色 内面：白黄色		〃	3
4	〃	〃・　〃	17.8			丸味をもつ胴部。外反する口縁。	外面：胴部ハケ目。口唇端部ヨコナデ。 内面：ハケ目	微粒の石粒を少量含む。きめ細かい。	〃	赤味を帯びた黄褐色		〃	4
5	〃	壺？・底部	(底径) 7.8			やや丸味をもつ平底。	外面：ハケ目 内面：指先で下から上に向かってなでつけ。	小石粒等を多量に含む。	〃	淡い茶灰色		〃	5
6	〃	〃・〃	(底径) 6.8			底部の立ちあがり部分に、若干の段がみられる平底から緩やかに	外面：ハケ目	〃	〃	淡黄褐色		〃	6
7	〃	小形壺	6.5	7.3	8.3	外上方にのびる。 底部が厚く、やや丸底気味。口縁部は直に立ちあがり、内面に稜	口縁部内外面ともヨコナデ。 擦痕が多少あるが、調整は不明。	砂粒等を含み、きめ、やや粗い。	〃	赤褐色 外面下半部は黄褐色	スス付着	〃	7
1	J 19	甕	13.1	15.0	13.6	をもち、更にやや外反する。 緩く外反する短い口縁。胴部との間に明瞭な稜をもたない平底。	器面磨滅の為、不明。 内面底部近くにわずかにハケ目残存。	小石粒等を多量に含み、きめ粗い。	不良	赤褐色 (底部付近は黄褐色)		32	1
2	〃	〃・底部欠	13.2			緩く外反する短い口縁。口縁端はやや尖り気味。全体の器形に、	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：口縁部にハケ状の擦痕。胴部は部分的に指圧痕あり。	細かい砂粒等を多量に含む。良。	良	赤茶褐色	スス状のものの付着	〃	2
3	〃	〃	16.4	13.0	16.4	ひずみがみられる。 平底。胴部はやや短く、緩やかな「く」字口縁。口唇端は丸味を	外面：ハケ目 口縁部ヨコナデ。	細かい長石粒を多量に含み、きめ細かい。	〃	外面：明褐色 内面：黒褐色		〃	3
4	〃	鉢	19.9	11.6	19.9	もつ。 平底。胴部上方で直に立ちあがり。口縁は、緩やかに外反する。	外面：ナデ。口縁部はヨコナデ。 内面：ヘラ調整。ハケ目、指頭調整。口縁下部には横方向のハケ目。	小石粒を含む。良	〃	黄褐色 (胴下半一部は黒褐色)		〃	4
5	〃	甕・底部欠	26.0			口唇部は丸味をもつ。 逆「L」字形に近い口縁。直立気味の胴部。	外面：ハケ目。口縁部はハケ目の上をヨコナデ。 内面：ハケ目 口唇端部はヨコナデ。	小石粒、雲母を少量含む。	〃	外面：灰褐色 内面：黄褐色 (胴部黒褐色)		〃	5
6	〃	〃・胴下半部以下欠	(底径) 7.6			底部端がやや丸味を帯びる平底。	外面：ハケ目 内面：ハケ目。底部付近はハケ目の後ナデ。	細かい石粒を多量に含む。	〃	やや白味を帯びた黄褐色		33	6
7	〃	壺・底部欠	23.0		37.5	逆「く」字口縁。外面屈曲部に巾8㎜程の突出があり、稜が明瞭。	外面：ハケ目。凸帯部分。口縁、突出部はヨコナデ。屈曲部下に指圧痕。胴部の凸帯は楕円形の刻み目。 内面：口縁部に等間隔の指圧痕。後にナデ。頸部以下ハケ目。	細かい砂粒を多量に含む。	〃	〃		〃	7
8	〃	〃・胴部以下欠	22.1			頸部直下に小さい三角凸帯一条。胴部最大径の部分よりやや下方に刻み目をもつ丸味のある台状凸帯一条。 逆「く」字口縁。頸部中位より外弯し、緩やかな角度で屈曲。口	外面：口唇部ヨコナデ。頸部はハケ目。胴部はハケ目の後ナデ。凸帯付近はヨコナデ。凸帯下はヘラ調整。 内面：屈曲部分に明瞭なヘラ痕。屈曲部以下ハケ目。	多量の石英粒を含み、きめ細かい。	〃	黄褐色		〃	8
9	〃	鉢	17.0	9.7	17.0	唇部はやや内弯気味。頸部直下に三角凸帯一条。 厚手の平底より外上方に立ちあがり、口唇端は平坦面をなす。	外面：上方のハケ目は山形状に施されている。下方はハケ目の後ヘラ削り。 内面：ハケ目。	やや大粒の砂粒を含み、きめ細かい。	〃	赤褐色 (部分的に灰褐色、黄灰褐色)	底部にスス付着	〃	9
10	〃	器台・脚下部	(脚径) 13.2			脚上半は筒状を呈し、裾部で急に開く。	外面：ハケ目。裾端部はヨコナデだが、一部分ハケ目状のものあり。 内面：裾部下方ではハケ目。脚部中間は指頭調整。	微粒の石粒をやや多く含む。	〃	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色		〃	10
11	〃	器台	15.3	20.0	(脚径) 18.0	受け部も裾部も開き、上方に緩やかなくびれをもつ。	外面：ハケ目 内面：ハケ目。受け部、脚部下方はナデ。	細かい砂粒を多く含む。	〃	外面：赤味を帯びた黄褐色 内面：灰赤褐色		〃	11

Tab. 12　第Ⅱ地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
1	J 20	高杯	30.8	26 ↓ 27.9	30.8	杯部は大きく開き、口縁との接合部に内外面ともに稜があり、口縁部が外反する。脚は柱状部が長く、緩やかに裾部で広がる。	杯部器面磨滅の為、不明。 外面：脚部上方ヘラ削り、裾部ハケ目。 内面：脚部下方ハケ目。	微粒の石粒を若干含む。良	良	赤褐色		34	1
2	J 21	壺・頸部				頸部直下に楕円形の刻み目をもつ台状凸帯一条。	外面：頸部と肩部に非常に細かいハケ目。凸帯付近はヨコナデ。刻み目は連続的に深くつけられたもの。 内面：磨滅の為、不明。(一部に細かいハケ目残存)	石英粒等を多量に含む。	〃	茶灰色 (内面一部暗灰色)		〃	2
3	〃	甕・口縁部	31.8			なだらかな「く」字口縁。	外面：口縁部はハケ目。くびれ部ヨコナデ。胴部ハケ目、口唇端はヨコナデ。 内面：磨滅の為、不明。	小石粒を多量に含み、きめ細かい。	〃	黄褐色		〃	3
4	〃	〃・　〃	25.5			「く」字口縁。口唇端部は若干の丸味をもつ。	外面：口縁部ハケ目の上からヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：ハケ目。くびれ部分ヨコナデ。	微粒の石粒を含み、きめ細かい。	〃	外面：淡褐色 内面：灰褐色 胴部は黒褐色		〃	4
5	〃	器台・受け部欠	(脚径) 13.0			脚上部は筒状を呈し、裾で大きく開く。厚手。	外面：ハケ目 内面：上方はヘラによる整形の後、ナデの部分とヘラ削り、上方はハケ目。	小石粒を多量に含む。	〃	赤味を帯びた明褐色		〃	5
6	〃	〃・裾部	(脚径) 16.0			「ハ」字形に開く脚。	内外面ともハケ目。裾端部はヨコナデ。	〃	〃	淡褐色		〃	6
7	〃	壺・口縁部	17.6			外弯気味に内傾する逆「く」字口縁。屈曲部が突き出てやや丸味を帯びるが、内外面ともに稜は明瞭。	器面磨滅の為、不明。	〃	〃	黄褐色		〃	7
8	〃	〃・　〃	13.3			外弯気味に内傾する逆「く」字口縁。屈曲部がやや突き出て、内外面の稜も明瞭。屈曲部下の頸部に移行する部分に段をなす。	外面：屈曲部より上方、ハケ目。 内面：屈曲部以下はハケ目。上方でヨコナデ。	〃	〃	外面：黄褐色 内面：暗黄褐色		〃	8
9	〃	〃・胴部以下欠	13.1			直口壺。端部はやや丸味をもち、ヨコナデによる段もみられる。	外面：ハケ目 内面：上方ヨコナデ。胴部ハケ目。	微粒の石粒を若干含む。	〃	外面：灰褐色 内面：明褐色		〃	9
10	J 20	甕・口縁部	19.2			直立する胴部に肥厚して外反する口縁。	器面磨滅の為、不明。	砂粒・小石粒を多量に含む。きめ細かい。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	10
11	〃	？・底部	(底径) 4.4			平底。	内外面ともハケ目。	小石粒を多量に含む。	〃	赤味を帯びた黄褐色		〃	11
12	J 21	甕	16.4	17.6	16.4	やや丸味をもつ平底に「く」字口縁。端部は平坦。	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケ目。底部にも明瞭なハケ目。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。底面近くに指によるナデ押さえ。	微粒の石粒を少量含む。良	〃	赤褐色		〃	12
13	〃	鉢	15.2	10.9	15.2	平底。口縁は短く強く外反する。	外面：全体に擦痕が残る。	小石粒を多量に含む。	やや不良	外面：黄褐色 内面：灰褐色	丹塗りの可能性あり	〃	13
1	J 23	高杯・口縁欠・裾部	(推定) 16.7	(推定) 12.0		屈曲して、直立する杯底部に外反する口縁がつく。外面屈曲部の稜が明瞭。内面、口縁部との接合部の稜が明瞭。脚部は柱状で、裾部への移行部分で薄くなる。	器面磨滅の為、不明。	〃 きめ細かい。	良	赤褐色		35	1
2	〃	〃・脚部	(脚径) 16.9			裾部は低く、外側に大きく開く。明瞭な段をなし、広がるもの。 屈曲部下に4個、その上方に位置を変え4個、計8個の円形透孔あり。	内面の一部にハケ目が残存。脚端部はヨコナデ。穿孔は外側から内側に向けて行なわれたもの。	微粒の石粒を若干含む。良	〃	赤味を帯びた黄褐色		〃	2
3	〃	壺・底部欠	10.9		13.0	球形の胴部に強く外反する口縁。口唇端はわずかに上方に立ちあがる。くびれ部分の稜が明瞭。	外面：口縁部はヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：胴部ハケ目。	砂粒を若干含むきめ細かい。	〃	淡褐色		〃	3
4	〃	高杯・脚部				裾部で屈曲し、外側に開く。	外面：ヘラ削り、屈曲部3㎜程はヨコナデ。下方はヨコナデ。 内面：ヘラを回転させ削った後、ナデ。	微粒の石粒を若干含む。きめ細かい。	〃	外面：赤味を帯びた黄褐色 内面：淡黄赤色		〃	4
5	〃	〃・〃				裾部で屈曲し、内面稜をなし大きく開く。杯部を欠いた後、支脚として使用した可能性が強い。	器面磨滅の為、不明。 外面：ヘラ磨き。内面ナデかと思われる。	小石粒を少量含む。きめ細かい。	〃	外面：淡赤褐色 内面：若干赤味を帯びた黄褐色		〃	5
6	〃	鉢・底部欠	15.0	(推定) 5.3	15.0	半球形を呈す。	外面：ヘラ削り及びナデ。 内面：ヘラ削り	細かい砂粒を含む。きめ細かい。	〃	淡茶褐色		〃	6
7	〃	〃・〃	12.3			わずかに内弯しながら外反する短い口縁。口唇部は薄くなる。	器面磨滅の為、不明。	砂粒・小石粒を多量に含む。きめ細かい。	〃	淡い黄赤褐色		〃	7

Tab. 13　第Ⅱ地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
1	J 26	甕・口縁部	22.3			「く」字口縁。	口唇端部はヨコナデ。内外面ともハケ目。	微粒の石粒を若干含む。	良	黄褐色		37	1
2	〃	?・底部	(底径) 5.0			底部中央が凹み、台様になっている。	内外面ともハケ目。	砂粒・細かい石粒を多量に含む。	〃	淡黄赤色		〃	2
3	〃	支脚	5.2	12.5	(脚径) 14.2	端部が内傾する部分をもつ。「ハ」字形に開き、裾端部で更に開く。脚部端部の中央がやや凹む。	外面：上部内傾部はヨコナデ。脚部ハケ目。 内面：脚上部はハケ目の上を指でなでつけ。脚下部はハケ目。 口縁端は調整されていない。	小石粒を多量に含む。	〃	赤味を帯びた明褐色		〃	3
4	〃	杯・底部欠	17.4			尖り気味の口唇部下にわずかな段をなす。浅く広く開く。	外面：指先で斜方向にナデ。口唇端部はヨコナデ。 内面：ハケ目。	砂粒・雲母・小石粒を若干含む。きめ、やや粗い。	〃	外面：茶赤褐色 内面：明赤褐色		〃	4
5	〃	支脚				上方で若干のくびれをみせ、脚部が開く。頂部に斜めの孔あり。	外面：ハケ目。(上方は、縦方向のハケ目以外の整形あり) 内面：穿孔部は、指により整形。下方はハケ目。	細かい長石粒・砂粒等を含む。	〃	淡黄赤色		〃	5
6	〃	高杯・口縁部	29.2			外弯気味に大きく開く口縁。	器面磨滅の為、不明。	砂粒・微粒の石粒をやや多く含む。きめ細かい。	〃	赤黄色	赤色の化粧土か？	〃	6
7	〃	器台・裾部欠	15.1			朝顔状に大きく開き、くびれ部がながらかで、裾へと続き、開く。	外面：ヘラ状のもので削った後にハケ目。 内面：ヘラ削りの後ハケ目。	砂粒を多量に含み、大粒の小石粒も混入。	〃	赤褐色		〃	7
1	J 27	壺・胴部以下欠	22.0			逆「く」字口縁。わずかに外弯気味に内傾する。屈曲部の稜は明瞭。	外面：口縁、屈曲部付近はヨコナデ。下方はハケ目。 内面：屈曲部より上方ヨコナデ。	細かい石英粒等を含み、良。	〃	黄褐色		38	1
2	〃	鉢	23.6	12.4	23.6	底部が尖り気味で、胴部は大きく開き、口縁部は外反し開く。口唇部は丸味をもつ。	外面：ハケ目。口縁端部ヨコナデ。 内面：ハケ目	砂粒・小石粒を含む。	〃	外面：やや赤味を帯びた暗黄色 内面：暗赤黄色		〃	2
3	〃	器台・裾部	(脚径) 12.2			「ハ」字形に開く脚。内面端上方に凹みがある。	外面：ハケ目 内面：下方にハケ目。脚端部はヨコナデ。	小石粒をやや多く含む。	〃	外面：薄茶色 内面：暗黄褐色		〃	3
4	〃	〃・〃	(脚径) 14.0			「ハ」字形に開く脚。脚端部は丸い。	外面：剝離の為、不明。 内面：ハケ目	砂粒・小石粒を多量に含む。きめ細かい。	〃	外面：黄褐色 内面：暗黄褐色		〃	4
5	〃	〃・脚部	(脚径) 11.3			「ハ」字形に開く脚。	外面：ハケ目 内面：下方ハケ目、及び指先による斜下方へのなでつけ。	〃	〃	外面：淡黄赤色 内面：暗褐色	受け部を打ち欠き支脚として使用した可能性あり。	〃	5
6	〃	壺・口縁部	22.6			外反する口縁。ヨコナデによる凹凸がみられる。	外面：ヨコナデ 内面：ハケ目	〃	〃	外面：薄茶色 内面：黄褐色		〃	6
7	〃	甕・底部欠	20.0			まっすぐ上に伸びる胴部に外反する口縁をもつ。 口縁端の稜が明瞭。口縁端内側わずかにはね上がり気味。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部は斜め方向のナデ痕あり。	砂粒を多く含みごく少量、長石粒等も含む。	〃	外面：黄赤褐色 内面：白味を帯びた黄褐色		〃	7
8	〃	〃・〃	20.4			胴部より緩やかに外弯する口縁をもつ。内面の稜は明瞭。	外面：ハケ目。口縁部では、ハケ目の上にヨコナデ。 内面：磨滅の為、不明。	小石粒を多く含む。きめ粗い。	〃	外面：黒褐色 内面：灰白色。口縁部は赤褐色		〃	8
9	〃	壺・底部	(底径) 7.2			平底より緩やかな段をなし立ちあがり、大きく開く。	外面：底部の立ちあがり部分ヨコナデ。他はハケ目。底面にもハケ目。 内面：ハケ目。中間に指先でハケ目の上をなでている部分あり。	砂粒・細かい石粒をやや多く含む。	〃	外面：薄茶色。一部黒褐色。 内面：灰茶色		〃	9
10	〃	高杯・裾部	(脚径) 16.1			外側に大きく開く脚。	外面：内面よりもやや粗いハケ目。 内面：ハケ目	〃	〃	外面：淡黄赤色 内面：黄赤色		〃	10
1	J 33	甕・口縁部	29.5			外反する口縁。	外面：ヨコナデ。 くびれ部分にハケ目。	砂粒・長石粒等を多く含む。きめ、やや粗い。	〃	白味を帯びた黄褐色		36	1
2	〃	〃・〃	19.7			やや強く外反する「く」字口縁。	外面：口唇端はら口縁部は、ハケ目の後ヨコナデ。ハケ目。口唇端部にヘラ先等のナデによってできた凹みがある。 内面：ハケ目	砂粒を少量含む。	〃	外面：暗黄茶色 内面：淡黄赤色		〃	2
3	〃	壺・〃	21.0			薄手の外弯して開く口縁。	器面磨滅の為、不明。	砂粒を多量に含む。	やや不良	白味を帯びた黄赤褐色		〃	3
4	〃	〃・〃	14.6			外反する口縁。口唇部は丸味を帯びる。	外面：口縁部はハケ目の後ヨコナデ。口唇部ヨコナデ。胴部はハケ目。 内面：ハケ目	砂粒を少量含む。	良	白味を帯びた黄褐色		〃	4

Tab. 14　第Ⅱ地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
5	J 33	?・底部	(底径) 5.6			平底。	外面：ハケ目 内面：上方にハケ目。	砂粒等を少量含む。	良	外面：暗黄褐色 内面：暗黄灰色		36	5
6	〃	?・〃	(底径) 4.4			小さい平底。	外面：ハケ目 内面：ヘラによるナデ。	長石粒・砂粒等を含む。	〃	外面：淡赤褐色 内面：黄色味を帯びた淡褐色		〃	6
7	〃	鉢・口縁部欠	(推定) 20.0	(推定) 12.3	(底径) 6.5	やや丸味を帯びた平底。	器面磨滅の為、不明。	小石粒を多量に含む。	〃	外面：黄褐色 内面：黄褐色		〃	7
8	〃	器台・脚部欠	13.5			やや直線的に開く受け部。	外面：ハケ目	長石・石英粒・砂粒をやや多く含む。	〃	外面：淡赤黄色 内面：黄白色		〃	8
9	〃	〃・〃	15.7			朝顔状に開く。	内外面ともハケ目。	砂粒を多量に含む。	〃	淡赤黄色		〃	9
10	〃	〃・脚下部欠	14.4			受け部が朝顔状に開く。くびれ部は上方にあると思われる。内面くびれ部の稜が明瞭。	内面：ハケ目 外面は磨滅の為、調整不明であるが、ハケ目が施されていたものと思われる。	〃	〃	外面：白味を帯びた黄褐色 内面：淡黄赤色		〃	10
1	J 31	甕・胴下半部以下欠	27.9			短く内弯気味に外反し、やや突き出た屈曲部から直上にのびる口縁をもつ。口唇端はやや平坦。丸味を帯びた胴部。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部はハケ目。 内面：口縁部、及び胴上部でヨコナデ。胴部は不明瞭だがヘラ削り。	長石・石英粒等を多量に含む。	〃	外面：淡赤褐色(一部暗褐色) 内面：明褐色		39	1
2	〃	鉢・胴部一部欠	18.2	(推定) 12.9	18.2	丸味をもった平底。緩やかに外反する口縁。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。(外面に比べ細かい)	石英・長石粒・砂粒等を多く含み、きめ粗い。	〃	外面：黄褐色 内面：明黄褐色		〃	2
3	〃	小形壺・底部欠	10.8			やや斜め外方に直線的に立ちあがる口縁。内面くびれ部の稜が明瞭。	外面：磨滅の為、不明。 内面：口縁部ヨコナデ。下方はナデ。	石英粒・砂粒を含む。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	3
4	〃	?・底部				丸底。	器面磨滅の為、不明。	石英粒・砂粒を少量含み、ややきめが粗い。	やや不良	黄茶褐色(外面に黒褐色部分あり)		〃	4
5	〃	台付壺・脚部欠	11.0	(推定) 13.4		球形胴部。外反し直上に短く立ちあがり、口唇部は短く更にやや外反気味に立ちあがる。	〃	石英粒・砂粒等を含み、しまりなし。	良	黄褐色		〃	5
6	〃	小形壺	10.2	7.0	10.2	やや平らな小さい底部。胴部は上方で張る。やや外反し、直線的に立ちあがる口縁をもつ。	口縁部内外面ともナデ。 器面の剝離が激しく不明。	砂粒・小石粒等を多量に含む。	やや不良	黄褐色(下部は黒褐色)		〃	6
7	〃	小形高杯・杯部、底部				杯部は、丸く立ちあがるものと思われる。	外面：非常に細かいハケ目。くびれ部下方にヨコナデ。 内面：ナデ	きめ細かく、良。	良	外面：明赤褐色 内面：黄赤褐色	スス付着	〃	7
8	〃	高杯・杯部、底部				杯部底部より屈曲して、やや外反し内面に稜をもち、口縁部が更に外反する。	外面：ハケ目。屈曲部7㎜程は、後にヨコナデ。 内面：ヨコナデ。	砂粒を少量含み、きめ細かい。良	〃	外面：やや白味を帯びた黄赤色 内面：淡黄赤色		〃	8
9	〃	〃・〃				外面の口縁との接合部分に稜が明瞭で、やや段をなす。	外面：段をなす部分でヨコナデ。 内面：ナデ	〃	〃	外面：黄赤色 内面：明赤褐色		〃	9
10	〃	〃・脚部				脚部下方に円形透孔3個。緩やかに開く。	外面：ヘラ削り 内面：ヘラによる削り、或いはナデ調整。 穿孔は、外側から内へ。はみ出し粘土はきれいに処理されている。	〃 きめ、やや粗い。	〃	黄茶褐色		〃	10
1	J 35	壺・口縁部	16.9			強く外反する口縁。口唇端はやや突き出て、稜が明瞭。	内外面ともヨコナデ。	非常に細かい砂粒を含む。	〃	白味を帯びた黄褐色		40	1
2	〃	甕・〃	16.0			外反する口縁。	器面磨滅の為、不明。	細かい長石・石英粒・砂粒を多量に含む。	〃	赤褐色		〃	2
3	〃	〃・〃	13.2			外反する口縁。	〃	細かい砂粒を多量に含む。	やや不良	外面：黄赤褐色 内面：暗褐色		〃	3
4	〃	壺・〃	16.3			逆「く」字口縁。やや内弯気味に内傾する。	外面：ハケ目 内面：屈曲部分にヘラ先のなでつけ痕の凹みが一周。	小石粒(特にやや大粒の石英粒)砂粒を含む。	良	赤黄褐色		〃	4
5	〃	高杯形器台	8.3	9.0	(脚径) 11.3	受け部が浅く、脚部がなだらかに開く。脚部下方に等間隔で円形透孔5個。脚部の器厚は下方で薄くなる。	外面：脚上部ヘラ削り。穿孔より下方裾部は内外面ともハケ目。 内面：しぼり痕とヨコナデ。受け部内面にハケ目痕あり。	非常に細かい砂粒を含み、密。	〃	黄褐色		〃	5

Tab. 15　第II地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
6	J 35	高杯・脚上部				接合部の中央に小さい穿孔2個と凹み1個がある。	外面：ヨコナデ 内面：ヘラによるナデ。しぼり痕あり。	きめ細かく、良。	良	白味を帯びた黄赤色		40	6
7	〃	〃・〃				裾部で屈曲し、更に開く。	外面：杯との接合部分、ヘラ先によるヨコナデ。裾部との曲部にもヨコナデ。ヘラ削り。 内面：しぼり痕	石英粒・砂粒をごく少量含む。良	〃	暗赤褐色		〃	7
8	(J 35を切る)土坑	壺	9.4	3.0	9.7	やや平坦な天井部に、わずかに内傾する体部がつく。須恵器。	外面：へら削りの後ヨコナデ。底部ヘラ切り。 内面：ヨコナデ	非常に多く砂粒(長石粒混)を含み、密。	〃	灰色		〃	8
9	〃	〃	10.7	2.8	11.0	器高が低く扁平で、端部は尖り気味である。須恵器。	外面：ヘラ削りの後にヨコナデ。下方及び底部は、螺旋状を呈すヘラ切り。その後ヨコナデ。 内面：口唇部からヨコナデ。	長石粒を含む。密	〃	外面：黒味がかった灰色 内面：赤紫がかった灰色		〃	9
1	J 28	壺・口縁部	15.6			屈曲部よりやや外弯気味にのびる二重口縁。	器面磨滅の為、不明。 内面にハケ目が残存。	砂粒・小石粒・雲母等を多量に含む。きめ細かい。	〃	黄赤色		41	1
2	〃	〃・〃	16.5			屈曲部でやや段をなし外反する二重口縁。	外面：屈曲部より上方に細かいハケ目。	細かい小石粒を含む。	〃	灰褐色		〃	2
3	〃	〃・〃	13.3			屈曲部でやや厚みをもち、段をなし、わずかに口縁が外反する二重口縁。	口縁部上方は磨滅の為、不明。 屈曲部下方は、内外面ともにハケ目。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	黄赤色		〃	3
4	〃	小形壺・口縁部欠				丸底球形の胴部をもつ。	外面：ヘラ磨き。(擦痕あり) 内面：ハケ目	精良	〃	赤褐色	スス状のもの付着	〃	4
5	〃	壺・頸部				口縁部は外反し、中位で更に開く。胴部は急に張り出す。形がややいびつ。	外面：肩部にハケ目。 内面：口縁から頸部にかけて、ハケ目及びヨコナデ。肩部は指圧痕。	小石粒を含む。	〃	外面：灰褐色 内面：黒灰色		〃	5
6	〃	鉢	15.2	5.7	15.2	半球形を呈す。	外面：上部にハケ目。下部にヘラの擦痕が多少残る。	〃	やや不良	外面上部は褐色を呈すが全体に黒っぽい。	下部にスス付着。	〃	6
7	〃	支脚？	(脚径)11.3			裾部がやや開く。粗雑な感あり。	内外面ともかすかにハケ目が残存。 内面：指による調整。	やや大粒の石粒を含む。	良	赤褐色	内面スス付着。	〃	7
8	〃	高杯・杯部	13.8			大きく開く口縁。口唇端部はナデによるものか、中央がやや凹んでいる。	外面：ハケ目の上からヨコナデ。口唇端部ヨコナデ。 内面：ハケ目。	砂粒・微粒の小石粒を多量に含み、きめ細かい。	〃	外面：黄赤色及び黒褐色 内面：暗灰褐色		〃	8
9	〃	〃・杯部欠	(脚径)12.5			杯部との接合部から外弯して大きく広がり、裾端部は、やや内弯気味になる。円形透孔(径約9㎜) 4個。	外面：脚上部ナデ。下方はヨコナデ。(ハケ目の上にナデか) 内面：下方ヨコナデ。(ハケ目の上にナデか) 穿孔の方向は、外から内へ。	石英粒を少量含む。良	〃	明赤褐色		〃	9
10	〃	〃・〃	(脚径)17.0			大きく外側に開き、脚部も低い。円形透孔(径約9㎜) 4個。	外面：かすかなハケ目が残存。 内面：ハケ目。(上方は太いハケ目。下方は細かい。)	細かい小石粒を含む。	〃	黄褐色		〃	10
11	〃	土錘	(直径)3.3	(厚さ)2.6	(孔径)0.5	両端と中央の部分を若干欠く。算盤玉状のもの。	穿孔は、片方からされている。	長石・石英等の微粒を少量含む。	〃	赤褐色		〃	11
1	J 32	壺・口縁部	40.7			大きく外側に開き、上址面がやや平坦。内側に厚みをもち、明瞭な段がみられる。口唇端に刻み目。	外面：斜め方形の刻み目。 内面：段のつく部分、ヨコナデ。	長石・石英・砂粒等を多量に含む。	〃	明赤褐色		42	1
2	〃	甕・〃	24.9			「く」字口縁。	外面：口唇部とくびれ部付近でヨコナデ。 内面：口縁部もヨコナデ。	長石・砂粒等を含み、きめ、やや粗い。	〃	淡黄褐色		〃	2
3	〃	壺・〃	17.6			逆「く」字口縁と思われ、やや外弯気味に内傾。	外面：ヨコナデ。口唇端部ヨコナデ。 内面：横方向のハケ目。	砂粒を少量含む	〃	外面：黄褐色 内面：淡黄褐色		〃	3
4	〃	?・底部	(底径)8.8			平底。	外面：ハケ目 内面：底部中央付近に帯状にハケ目。	小石粒・砂粒を含む。	〃	淡赤褐色		〃	4
5	〃	?・〃	(底径)6.0			平底。	外面：ハケ目 内面：部分的に擦痕あり。	砂粒を含み、きめ、やや粗い。	〃	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色		〃	5
6	〃	手捏ね土器・口縁部欠				丸い小さい底部の小形の椀形。	外面：ヘラ先でひっかいた様な痕が所々にある。	小石粒を含む。	〃	外面：黒褐色及び明褐色 内面：褐色		〃	6

Tab. 16　第II地点　住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
1	J 37	甕・口縁部	29.6			外反する口縁。口唇部で内側にやや厚みを増す。	器面磨滅の為、不明。	非常に細かい長石粒・石英粒を多量に含む。	良	外面：白味を帯びた黄褐色 内面：明茶褐色		43	1
2	〃	〃・〃	24.7			「く」字口縁。	外面：ハケ目。くびれ部にヨコナデ。 内面：ハケ目	非常に細かい砂粒を多量に含む。	〃	外面：暗茶褐色 内面：明茶褐色		〃	2
3	〃	〃・〃	22.6			外反する口縁。	口唇端部とくびれ部にヨコナデ。 内外面ともハケ目。	砂粒をやや多く含む。	〃	茶褐色		〃	3
4	〃	〃・〃	23.0			外反する口縁。	外面：ハケ目の後、ヨコナデ。口唇部ヨコナデ。	砂粒を少量含む。	〃	淡黄赤色		〃	4
5	〃	〃・〃	19.3			外反する口縁。	口唇端部から外面はヨコナデ。	細かい砂粒・小石粒を多量に含む。	やや不良	外面：淡茶褐色 内面：やや赤味を帯びた黄褐色		〃	5
6	〃	〃・底部	(底径)5.3			やや丸味を帯びた平底。	外面：ハケ目。底部ハケ目。 内面：底面を除き、ハケ目。	微量の砂粒を含む。	良	外面：暗茶灰色 内面：暗灰色		〃	6
7	〃	?・〃	(底径)4.7			底部の立ちあがりの部分はやや丸味があり、稜をなす平底。	器面磨滅の為、不明。	細かい小石粒・砂粒等を少量含む。	〃	外面：淡黒色 内面：赤黄褐色		〃	7
8	〃	〃・〃	(底径)6.2			やや丸味を帯びた平底。	〃	小石粒をかなり多く含む。	〃	外面：赤黄褐色 内面：暗黄褐色		〃	8
9	〃	〃・〃	(底径)6.3			平底で比較的厚手。	外面：ハケ目 内面：ナデ	非常に細かい砂粒と小石粒も含む。きめ、やや粗い。	〃	黄茶褐色		〃	9
10	〃	〃・〃	(底径)3.7			平底。	内外面ともにナデ。	非常に細かい砂粒を少量含む。	〃	外面：黄褐色 内面：やや暗い黄褐色		〃	10
11	〃	〃・〃	(底径)4.0			平底。	器面磨滅の為、不明。	長石粒がやや多く砂粒も含む。きめ細かい。	やや不良	外面：黄褐色 内面：赤黄褐色		〃	11
12	〃	〃・〃	(底径)3.0			丸底に近い。	内外面ともにナデ。	細かい砂粒・長石粒等を含む。	良	やや赤味を帯びた黄褐色		〃	12
13	〃	壺・〃	(底径)8.8			底部がやや肥厚し、丸味を帯びる。明確な稜みられず。	器面磨滅の為、不明。	小石粒を多く含み、砂粒も含む。きめ、やや粗い。	〃	外面：明赤黄色 内面：暗黄褐色		〃	13
14	〃	鉢・底部欠	18.8			直に近い立ちあがりの胴部に外反する短い口縁。	外面：口唇部ヨコナデ。 内面：ハケ目	長石・石英粒・砂粒を多量に含む。きめ粗い。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	14
15	〃	〃・〃	16.6	(推定)7.8	16.6	胴部より、緩やかにやや外側に開き気味の口縁。内面口縁部と胴部の間に明瞭な稜をもつ。	外面：上方にハケ目。 内面：口縁部はハケ目。	砂粒・小石粒等を多量に含む。密	〃	赤褐色		〃	15
16	〃	杯・〃	13.0			半球形を呈す。	外面：ハケ目。口縁部付近はヨコナデによりハケ目が消えている。 内面：粗い雑なハケ目。	長石・石英粒を少量・砂粒をやや多く含む。	〃	白味を帯びた黄赤色		〃	16
17	〃	台付杯・台部欠	12.3			半球形を呈す。	外面：ヘラ削り、遺物或いは磨きか。部分的にハケ目残存。 内面：中心に向かってヘラ削り。所々にハケ状の擦痕。	非常に細かい砂粒を含む。良	〃	淡黄赤色		〃	17
18	〃	高杯・脚部	(脚径)16.3			脚部中位よりやや下方に円形透孔3個。穿孔部分付近より開く角度が大きくなる。	外面：不明瞭であるが、裾部ハケ目。上方はヘラ磨き。 内面：穿孔より上方は、板状のものでなでつけ。	長石粒等を多量に含む。	〃	黄白色(一部で赤味を帯びる)		〃	18
19		〃・〃	(脚径)13.1			裾部で大きく開く。	外面：ハケ目。上部では、ハケ目の後ヘラ削り。 内面：ナデ。裾部下端には一周する細かいハケ目。	砂粒を微量含み、きめ細かい。	〃	赤黄褐色		〃	19
20		〃・〃	(脚径)13.4			わずかに内弯気味に大きく開く脚。径1.2cm程の円形透孔4個。	外面：透孔より下方はハケ目。 内面：縦方向の擦痕あり。 穿孔は、外側から内へ。	石英粒を少量含み、良。	〃	外面：淡赤褐色 内面：赤褐色		〃	20
21		器台・受け部	12.0			朝顔状に開く。	外面：凹凸がみられ、指圧痕かと思われるものあり。 内面：上部は指によるナデ痕。	長石粒・細かい砂粒を含む。	〃	淡赤褐色		〃	21

Tab. 17　第Ⅱ地点　住居址・環濠内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
22	J 37	器台・裾部	(脚径) 10.0			「ハ」字形に開く脚。小形。	内外面ともハケ目。裾端部はナデ。	微粒の砂粒をごく少量含む。	良	黄赤褐色		43	22
23	〃	高杯・脚部				裾部で更に開く。	外面：磨滅の為、不明。 内面：脚上部、ヘラナデ。	細かい砂粒を多量に含み、小石粒等も含む。きめ、やや粗い。	〃	外面：暗黄赤色 内面：淡黄赤色		〃	23
24	〃	器台・裾部	(脚径) 17.1			「ハ」字形に開く脚。	内面：指頭調整。	細かい長石・石英粒が多く、砂粒も含む。きめ粗い。	〃	外面：赤黄褐色 内面：暗黄褐色		〃	24
1	J 34	壺・胴部以下欠	17.0			口縁は、わずかに内弯気味に外反し、屈曲して直上に伸びる二重口縁。口唇端は丸く、胴部も張りがある。	内外面とも口縁部から頸部にかけてヨコナデ。 内面肩部はハケ目。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	外面：赤味を帯びた茶褐色 内面：口縁部茶褐色、胴部黒褐色。		44	1
2	J 30	甕・口縁部	14.8			外反する口縁。	外面くびれ部付近はナデ痕とハケ目。	砂粒を少量含む。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	2
3	J 34	壺・　〃	17.1			「く」字口縁。	器面磨滅の為、不明。	微粒の石英粒を多量に含み、きめ細かい。	〃	黒灰色		〃	3
4	J 36	〃・　〃	15.4			逆「く」字口縁。わずかに外弯気味に内傾する。 屈曲部の稜は明瞭で、内面では凹みがある。	内面：ハケ目状のものでヨコナデ。屈曲部はヘラ先で一周、ヨコナデ。 口唇部はヨコナデ。	砂粒を多量に含み、長石粒も少量含む。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	4
5	〃	甕・　〃	17.0			外反する口縁。	口唇端部はヨコナデによってやや凹みあり。くびれ部にハケ目。	小石粒を多く含む。	〃	〃		〃	5
6	〃	〃・底部欠	16.3		16.6	「く」字口縁に張りの少ない胴部。	外面：口縁くびれ部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：磨滅の為、不明。	細かい石粒・砂粒を多量に含む。	やや不良	暗黄褐色		〃	6
7	〃	?・底部	(底径) 6.0			やや丸味をもった平底。	外面：ハケ目。底部にもあり。 内面：指で底面から上に向かってなでつけ痕。	微粒の砂粒を少量含む。	良	淡黄赤色 (外面部分的に黒褐色)		〃	7
1	環濠	甕・胴部以下欠	30.7			緩やかな「く」字口縁。口縁部下に三角凸帯一条。	器面磨滅の為、不明。 わずかにくびれ部と凸帯にヨコナデ痕が残る。	石英粒・砂粒等を含む。	〃	暗赤褐色		45	1
2	〃	〃・　〃	22.3			「く」字口縁。胴部にかけてやや張り出し気味。	外面：ハケ目。口縁部はハケ目の後ヨコナデ。 内面：所々にハケ目が残存。	大粒の砂粒等を含み、密。	〃	暗黄褐色		〃	2
3	〃	〃・　〃	25.3			外弯する口縁。胴部にかけてやや張り出し気味。	内外面とも、ハケ目の後ヨコナデ。	小石粒等を含む良	〃	黄褐色		〃	3
4	〃	〃・胴下半部以下欠	25.2			「く」字口縁。胴部の張りが少ない。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：ハケ目	非常に細かい砂粒等を含み、金雲母も少量。きめ、やや粗い。	〃	灰黄褐色		〃	4
5	〃	〃・　〃	24.8			外反する口縁。口縁直下に三角凸帯一条。(磨滅が激しい)。	器面磨滅の為、不明。	細かい石英粒を含む。良	〃	赤褐色		〃	5
6	〃	〃・　〃	26.4			「く」字口縁。口唇端上方がわずかにはね上がる。	外面：ハケ目。口唇端部は、ややつまむ感じでヨコナデ。 内面：ハケ目。下方では、その上をヨコナデ。くびれ部ヨコナデ。	砂粒・小石粒等を含む。	〃	暗茶褐色		〃	6
7	〃	〃・　〃	21.6			「く」字口縁。口唇部が薄くなり、端部は丸い。	外面：口縁部からくびれ部ヨコナデ。 他は不明。	〃	〃	淡褐色		〃	7
8	〃	〃・　〃	33.2			やや外反する短い口縁直下に三角凸帯一条。大形でやや厚手。	外面：ハケ目。凸帯部ヨコナデ。口唇端部ヨコナデ。 内面：ハケ目	砂粒・小石粒等を多量に含む。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	8
9	〃	〃	17.9	30.5	23.4	「く」字口縁。平底よりやや丸味をもって立ちあがり、最大径を胴部中位にもつ。	外面：口縁部はハケ目の後ヨコナデ。胴部以下ハケ目。底部は不定方向のハケ目が全面にある。 内面：ハケ目	小石粒を多量に含む。	〃	外面：暗茶褐色 内面：白味を帯びた黄褐色		46	9
10	〃	〃・底部欠	22.2		24.0	「く」字口縁。胴部中位より底部に向かい直線的にすぼまる。口唇端は丸味を帯びる。	外面：口縁部からくびれ部は、ハケ目の後ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：口縁部ハケ目。	砂粒をやや多く含む。	〃	外面：黄茶褐色 内面：白味を帯びた黄褐色		〃	10
11	〃	〃	16.0	25.0	18.5	「く」字口縁。口唇部はやや薄くなり、外弯気味で、稜が明瞭。やや丸味をもって立ちあがる厚手の平底。緩やかなカーブの胴部。	外面：ハケ目。くびれ部ヨコナデ。口唇端部ヨコナデ。 内面：口縁部ハケ目。	砂粒・長石粒・黒雲母等を多量に含む。	〃	外面：淡赤褐色 (黒色部分あり) 内面：黒褐色 (所々、淡赤褐色)		〃	11

Tab. 18　第Ⅱ地点　環濠内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
12	環濠	甕	19.8	28.8	22.1	短く外反する「く」字口縁。わずかに直立する部分をもつ平底に緩やかな胴部。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部粗いハケ目。下方ではハケ目の後ヘラ調整。底部屈曲部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部は粗いハケ目。くびれ部にヨコナデ。	砂粒を多量に含む(細かい石英粒少量)	良	外面：赤茶褐色 内面：明赤褐色		46	12
13	〃	〃・底部欠	15.0	16.1	15.1	やや外反する口縁が緩やかに胴部へ続く。底部はやや丸味をもつ平底であったと思われる。	外面：口縁部はヨコナデ。胴上部ハケ目。胴下部ヘラ削り。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。	小石粒を多量に含む。	〃	黄褐色		〃	13
14	〃	〃・〃	25.8		25.8	外反する口縁に、張りの少ない胴部がつく。	外面：ハケ目。くびれ部ヨコナデ。口唇端部がヨコナデ。 内面：ハケ目	微粒の石粒を多量に含む。	〃	外面：赤味を帯びた黄褐色 内面：黄赤褐色		〃	14
15	〃	〃	15.0	13.7	15.0	短く外反する「く」字口縁。平底で、底部の立ちあがり部分がわずかに直立気味。	外面：細かいハケ目。(磨滅部分あり)。底部の立ちあがり部分に指圧痕。 内面：ハケ目。(底部まで螺旋状に施す。)	細かい石粒を多量に含む。	〃	灰黄褐色	スス付着	47	15
16	〃	〃・口唇部欠	(推定) 14.5	(推定) 21.0	16.0	「く」字口縁。最大径は胴部、やや上方にある。平底。	外面：ナデ 器面磨滅の為、不明。	〃	〃	黄褐色 (底部付近では黒褐色)		〃	16
17	〃	〃・胴部一部欠	17.2	(推定) 19.3	17.3	「く」字口縁。平底で、立ちあがり部分がやや丸味を帯びる。	器面磨滅の為、不明。	小石粒を多量に含み、きめ粗い。	〃	淡褐色		〃	17
18	〃	〃・底部欠	13.4		17.5	「く」字口縁。胴部中位に最大径をもつ。	器面磨滅の為、不明。 外面はハケ目と思われる。	微粒の石粒を多量に含む。	〃	外面：黒褐色 (一部、淡褐色) 内面：淡褐色		〃	18
19	〃	壺・口縁部	26.1			やや緩やかなカーブで外反し、内面、くびれ部から口縁部中央付近でやや厚みをもつ。	口唇端部はヨコナデ。内外面ともハケ目の後ヘラ磨き。	微粒の石粒を多量に含む。	〃	明黄赤色		〃	19
20	〃	甕・　〃	26.8			「く」字口縁。口唇部が外弯し、開く。	外面：ハケ目。くびれ部はヨコナデ。 内面：ハケ目	砂粒を含み、少量の小石粒も含む。	〃	黄茶褐色		〃	20
21	〃	〃・　〃	22.5			「く」字口縁。口唇部が外弯する。口唇端部は、ヨコナデにより中央が浅く凹む。	外面：ハケ目。くびれ部は上にヨコナデ。口唇端部ヨコナデ。 内面：ハケ目。くびれ部やや下方はヨコナデ。	細かい石粒を多量、微粒の砂粒も含む。	〃	赤味を帯びた黄褐色		〃	21
22	〃	〃・　〃	26.0			「く」字口縁。口唇端部は斜めの平坦面をなす。	外面：口縁部はヘラを使い押しナデ。胴部ヘラ磨き。 内面：ハケ目	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	外面：暗灰褐色 内面：黄褐色		〃	22
23	〃	〃・　〃	23.2			「く」字口縁。口唇端部は丸味を帯びる。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：ハケ目の上をナデ、或いはナデつけ。	砂粒・小石粒等を多量に含む。	〃	淡い赤味を帯びた黄褐色		〃	23
24	〃	〃・　〃	27.2			強く外反する「く」字口縁で、口唇部上方がはね上がり気味で、内面にヨコナデによる浅い凹みがみられる。	外面：口縁部ハケ目の後ヨコナデ。口唇部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：ハケ目	細かい砂粒を含み、少量の小石粒も含む。	〃	外面：灰黄褐色 内面：白味を帯びた赤黄色		〃	24
25	〃	〃・　〃	28.2			外反する口縁の口唇部上方がはね上がり気味で、内面の稜が明瞭。先端は丸味を帯びる。	口唇部上方をつまむようにしてヨコナデ。 内外面ともハケ目。	細かい砂粒を少量含む。	〃	外面：灰黄褐色 内面：赤味を帯びた淡黄褐色		〃	25
26	〃	〃・　〃	25.5			「く」字口縁。口唇部上方がわずかにはね上がり気味で、先端は丸味を帯びる。	外面：口縁部に巾の広い叩き目状の不規則な痕跡あり。下方はハケ目。 内面：磨滅の為、不明。	小石粒を多量に含む。(大粒の石英粒混)	やや不良	灰黄色 (外面はやや暗い)		〃	26
27		〃・　〃	21									〃	27
28	〃	〃・底部欠	13.5		15.0	短く、緩やかに外反する「く」字口縁。	口唇端部ヨコナデ。 内外面ともハケ目。	小石粒を少量含む。	良	淡黄褐色		48	28
29	〃	〃・〃	16.6			張りの少ない胴から強く外反する「く」字口縁。口唇端は丸味をもつ。	器面磨滅の為、不明。	小石粒を多量に含む。	〃	やや赤味を帯びた黄褐色		〃	29
30	〃	〃・胴下半部以下欠	13.2			「く」字口縁。口唇端の稜は明瞭。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部は磨滅しているが、一部にハケ目残存。 内面：磨滅の為、不明。	細かい石粒を含み、きめ粗い。	〃	外面：明黄褐色 内面：灰褐色 (口縁部黒褐色)		〃	30
31	〃	〃・〃	13.2			短く、外反する「く」字口縁。胴部は直立に近い。	外面：胴部ハケ目。 内面：ハケ目。くびれ部はヘラによるナデ、或いは押さえ。	砂粒を含む。	〃	淡い黄茶褐色		〃	31
32	〃	壺・口縁部欠	(底径) 6.0			やや丸味を帯びる平底。	外面：ハケ目。底部にもハケ目。	小石粒を多量に含む。	〃	淡黄褐色	スス付着	〃	32

Tab. 19　第II地点　環濠内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
33	環濠	甕・底部	(底径) 6.8			平底。	外面：ハケ目 内面：ナデか。	細かい石英・長石粒・砂粒を多量に含む。やときめ細い。	良	白味を帯びた黄褐色。		48	33
34	〃	壺・底部欠	20.2			張りのある胴部から外反する口縁。	外面：ハケ目。くびれ部ヨコナデ。口唇部ヨコナデ。 内面：ハケ目	細かい砂粒を含み、きめ細かい。	〃	暗黄褐色	スス付着	〃	34
35	〃	甕・　〃	31.8			くびれ部の稜が明瞭な「く」字口縁。張りの少ない胴部。	外面：ハケ目。くびれ部分は横方向にヘラ先でなでつけ。 内面：磨滅の為、不明。わずかにハケ目残存。	小石粒を多量に含む。	〃	淡褐色		〃	35
36	〃	壺・胴部以下欠	20.1			逆「く」字口縁。口唇端が上方にやや尖り気味。	器面磨滅の為、不明。 内面にハケ目の痕跡がわずかに残存。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	黄褐色		49	36
37	〃	〃・　〃	18.0			大きく外弯する頸部に、わずかに内弯気味に内傾する逆「く」字口縁。	外面：ハケ目が残存。 内面：頸部にヘラ削り。	〃	〃	淡黄褐色		〃	37
38	〃	〃・口縁部	22.8			外弯気味に開き、直線的に内傾する逆「く」字口縁。屈曲部の稜は、内外面ともに明瞭。	器面磨滅の為、不明。	〃	〃	淡赤褐色		〃	38
39	〃	〃・　〃	20.8			逆「く」字口縁。若干短く、外弯気味に内傾し、器厚はやや薄い。	屈曲部より上方は、内外面ともヨコナデ。 屈曲部より下方は内外面ともハケ目。	〃	〃	外面：淡褐色 内面：やや赤味を帯びた淡褐色		〃	39
40	〃	〃・　〃	19.0			直立に近い立ちあがりを呈す、逆「く」字口縁。口唇端部は丸味をもつ。	外面：屈曲部より上方ハケ目。屈曲部下にヨコナデ。 内面：下方にハケ目。	〃	〃	黄褐色		〃	40
41	〃	〃・頸部				直立する頸部下に三角凸帯一条。	外面：凸帯張りつけ部をヘラ先で一周ナデ。 内面：ハケ目	細かい砂粒を含み、密。	〃	赤褐色 （外面は黄褐色部分もあり）		〃	41
42	〃	〃・口縁部	16.9			逆「く」字口縁。外弯気味に内傾する。屈曲部はやや外側に突き出て、内外面とも丸味をもつ。	口唇端部と屈曲部内面はヨコナデ。 器面磨滅の為、不明。	細かい砂粒を多量に含み、長石粒等も少量含む。	〃	外面：灰黄褐色 内面：淡黄灰色		〃	42
43	〃	〃・　〃	23.3			逆「く」字口縁。外弯気味に内傾し、口唇端は外反し、外側に開き、丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ。外面にハケ目が残存する部分あり。	細かな砂粒を含む。	〃	やや赤味を帯びた白黄色		〃	43
44	〃	〃・　〃	24.0			直線的に内傾する逆「く」字口縁。外面屈曲部の下方は、ややふくらみをもつ。屈曲部の稜は明瞭。	外面：磨滅の為、不明。 内面：口縁上方はヨコナデ。屈曲部上方はハケ目。屈曲部下方は、ハケ目とヨコナデ。	砂粒を含み、密。	〃	黄褐色		〃	44
45	〃	〃・　〃	24.4			直線的に内傾する逆「く」字口縁。屈曲部の稜は明瞭。	内外面ともにハケ目の上にヨコナデ。	細かい石粒を含む。	〃	明褐色		〃	45
46	〃	〃・頸部				直立する頸部下に連続する二条の三角凸帯。	器面磨滅の為、不明。 凸帯部はヨコナデ。	砂粒を多量に含み、長石粒も少量含む。	〃	赤味を帯びた白黄色		〃	46
47	〃	〃・胴下半部以下欠	14.4		32.0	外反する口縁。やや直線的な肩部から胴部が張る。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部にハケ目。 内面：口縁部ヨコナデ。所々にハケ目、指圧痕等がみられるが、ナデがされている。	小石粒を多量に含む。	〃	淡黄褐色		〃	47
48	〃	〃・胴下半部	(底径) 8.7			丸味のある平底。球形の胴部に楕円形の刻み目をもつ「コ」字形凸帯をもつ。	外面：ハケ目。凸帯部付近はヨコナデ。凸帯下部分的に指の押痕。 凸帯の刻み目は、ヘラ状のもので押しつけたもの。	〃 大粒のものも混入。	〃	〃		〃	48
49	〃	〃	12.3	13.7	15.3	丸味を帯びた平底。球形の胴部。口縁はやや上方に立ちあがり短く外反する。	外面：口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部・底部はハケ目。 内面：口縁部はヨコナデ。胴上部ハケ目。	砂粒・小石粒を多量に含む。密	〃	赤褐色	スス付着	50	49
50	〃	〃	15.3	15.7	16.6	丸底。球形の胴部。口縁は外反し、上方がわずかに内弯気味。	内外面とも口縁部はヨコナデ。胴部はハケ目。	〃	〃	外面：黄褐色 内面：暗黄褐色		〃	50
51	〃	〃	13.5	18.4	19.5	丸底に近い底部。球形の胴部。口縁は短く外反気味に立ちあがる。口唇端は丸味を帯びる。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：ハケ目	〃	〃	黄褐色		〃	51
52	〃	〃	15.0	20.4	20.5	丸底に近い底部。球形の胴部。口縁はやや短く外反する。	外面：胴部ハケ目 内面：ハケ目	〃	〃	〃		〃	52
53	〃	甕・胴下半部以下欠	16.7			「く」字口縁。口唇部が開き、端部下がやや突き出て稜が明瞭。くびれ部分はナデの為、少し凹んでいる。	外面：口縁部ハケ目。胴部ハケ目。くびれ部はヨコナデ。口唇端はヨコナデ。 内面：口縁部ハケ目。胴部ナデ。	〃	〃	淡褐色		〃	53

Tab. 20　第II地点　環濠内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
54	環濠	壺・底部欠	12.0		17.4	張りをもつ胴部に外弯気味の口縁。口唇部はやや薄い。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。 内面：頸部と胴部の接合部に粘土をかぶせた痕が3cm巾にわたりみられる。	細かい石英粒・雲母等を含む。密	良	外面：上方は赤褐色。下方は茶褐色。 内面：黒褐色。一部赤褐色。		50	54
55	〃	〃・胴部以下欠	15.1			外弯する口縁。口唇端は、わずかに下がり稜をなす。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：口縁部ハケ目。胴部ナデ。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	外面：若干赤味を帯びた淡褐色 内面：若干赤味を帯びた黄褐色		〃	55
56	〃	〃・口縁部欠	(底径) 4.8		16.2	平底。胴部中位で大きく張り出す。	器面磨滅の為、不明。	細かい砂粒・石英粒を多量に含む。	〃	外面：明赤褐色 内面：灰白色		〃	56
57	〃	〃・底部欠	14.6		20.5	強く外反し、やや短い口縁。胴部は球形。	外面：ハケ目。口唇端部ヨコナデ。 内面：口縁部ハケ目。胴部ナデ。	砂粒を少量含む。	〃	外面：黄色味を帯びた淡褐色 内面：黒灰色		〃	57
58	〃	〃・胴下半部以下欠	15.5			「く」字口縁。口縁部は短く、口唇端は丸味をもつ。	外面：くびれ部分はヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：磨滅の為、不明。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	黄褐色		〃	58
59	〃	鉢・口縁部	30.0		30.0	外反する口縁の口唇部がやや外弯気味で、稜をなす。	口唇部：口縁部の内外面はヨコナデ。 内面胴部はハケ目。	〃	〃	淡褐色		〃	59
60	〃	壺・　〃	14.8			強く外反する口縁。張り出す胴部。口唇端は丸味をもつ。	外面：くびれ部ヨコナデ。不明瞭であるが、ヘラ調整。 内面：肩部にハケ目残存。	細かな砂粒・小石粒を多量に含む。きめ細かい。	〃	灰黄褐色 （赤味を帯びた部分もあり）		〃	60
61	〃	〃・　〃	18.2			外弯する口縁下に刻み目を施す三角凸帯一条。	外面：口縁部ヨコナデ。くびれ部はハケ目の上からヨコナデ。凸帯は刻み目の後ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。下方はヘラ削り。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	外面：淡黄赤色 内面：黄赤色 上部は灰褐色		〃	61
62	〃	甕・　〃	15.0			外反する口縁。	内外面ともハケ目。	細かい小石粒・砂粒を少量含む。	〃	淡赤黄色		〃	62
63	〃	壺・　〃	12.2			やや外反する口縁。口唇端は丸味をもつ。	外面：磨滅の為、不明。 内面：ヨコナデ。頸部ハケ目。	〃	〃	灰黒色		〃	63
64	〃	器台	17.9	19.9	17.9	受け部は朝顔状に開き、上方にあるくびれ部の稜は内外面ともに明瞭。受け部端は刻み目があり、やや上方にあがり気味で、稜も明瞭。	外面：口縁部ハケ目。口唇部付近はヨコナデ。刻み目はヘラによるもの。脚部ハケ目。裾部下方に叩き目が残存。 内面：口縁部ヨコナデ。脚部は指によるナデ。裾部ハケ目。	砂粒・小石粒を含む。	〃	薄茶色		51	64
65	〃	〃	16.3	21.8	18.8	受け部は朝顔状に開き、くびれ部が上方にある。裾部がやや内弯気味に開く。	外面：脚中位よりやや上方より裾部まで叩き目。 くびれ部より脚中位までハケ目。 内面：ハケ目が所々に残存。	〃 きめ粗い。	〃	黄褐色		〃	65
66	〃	〃・裾部欠	15.8			受け部は朝顔状に開き、口唇部が外弯して開き、平らな面をなす。くびれが上方で、くびれ部の内面に突出がある。	外面：受け部ヨコナデ。脚部ハケ目。 内面：受け部ヨコナデ。くびれ部下はナデ。その後、脚部に縦方向の指によるナデ。	やや大粒の砂粒を多量に含む。	〃	赤褐色		〃	66
67	〃	〃・受け部端 脚部端欠	(推定) 15.0	(推定) 15.8	15.0	受け部は朝顔状に開き、くびれ部が上方にある。脚部は直線的に開く。	外面：くびれ部は指で押きえ、その上をヨコナデ。脚部ハケ目。 内面：脚部上半はハケ目。くびれ部下方にしぼり痕と指の押圧痕。脚部指によるナデ痕。脚部全面に細かいハケ目。	小石粒を多量に含む。	〃	外面：明褐色 内面：赤褐色		〃	67
68	〃	〃・裾部欠	16.7	(推定) 17.6	16.7	受け部は朝顔状に開き、くびれ部が上方にある。脚部は直線的に開く。	外面：受け部は細かいハケ目の後ヨコナデ。脚部ハケ目。 内面：受け部ヨコナデ。脚部は縦方向の指によるナデ調整。	良	〃	やや赤味を帯びた褐色		〃	68
69	〃	〃・〃	14.4	(推定) 16.5	14.4	受け部は朝顔状に開き、くびれ部が上方にある。脚部は直線的に開く。	外面：ハケ目 内面：受け部上方、ハケ目。以下は指頭調整。細かいハケ目が部分的に施される。	小石粒を多量に含む。	〃	暗褐色		〃	69
70	〃	〃	10.8	18.5	(脚径) 13.7	受け部はやや直線的に外方に開き、くびれ部が上方にある。端部がやや丸味をもっている。	外面：受け部ヨコナデ。くびれ部より下方、脚部ハケ目。 内面：受け部、くびれ部までハケ目。上方ではナデ。くびれ部分はヨコナデ（ヘラによるものか？）。脚部はヘラ削り。	砂粒・小石粒を多量に含み、きめ粗い。	〃	黄褐色		〃	70
71	〃	〃・脚下部欠	12.5			受け部が外弯して開き、稜が明瞭。	外面：ハケ目の上からナデ。口唇端部はヨコナデ。 内面：口縁部ハケ目。	小石粒等を含む良	〃	〃		〃	71
72	〃	〃	12.4	17.6	(脚径) 13.4	受け部は朝顔状に開き、脚部中位までやや筒状を呈し、裾部が開く。内面中位の突き出る部分に稜あり。	口唇端部ヨコナデ。 内外面ともハケ目。	砂粒・小石粒を含み、密。	〃	外面：黄褐色 内面：灰褐色		〃	72
73	〃	〃	16.2	17.7		受け部は外弯して開き、端部がわずかに立ちあがる。くびれ部は上方にある。	外面：くびれ部より下方ハケ目。口唇端部ヨコナデ。 内面：口縁部からくびれ部までハケ目。下方は指によるナデ。	小石粒を多量に含む。	〃	黄褐色 （口縁部内面は赤褐色）		〃	73
74	〃	〃・裾部欠	15.3			受け部と脚部の接合部分が分厚く、受け部は大きく外方に開き、先端に行くに従い薄くなる。くびれ部のカーブが多少いびつだがしまっている。	外面：磨滅の為、不明。 内面：受け部との接合の際に粘土を張りつけた部分あり。屈曲部下ヨコナデ。脚部ハケ目。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	外面：赤味を帯びた黄褐色 内面：淡茶褐色		〃	74

Tab. 20　第II地点　環濠内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
75	環濠	器台・脚下半部欠	11.1			朝顔状に開く受け部。	外面：くびれ部分に指の押痕。脚部ハケ目。 内面：指頭調整。	小石粒を多く含む。	良	暗赤褐色		51	75
76	〃	〃・受け部	17.4			朝顔状に開く受け部。	器面磨滅の為、不明。外面のごく一部にハケ目残存。	微量の砂粒をごく少量含む。きめ細かい。	〃	淡赤黄色		〃	76
77	〃	〃・受け部、裾部欠				くびれ部より「ハ」字形に開く。	外面：ハケ目 内面：部分的に指頭調整の痕。	ごく少量の小石粒を含む。きめ、やや粗い。	〃	褐色（やや赤味を帯びた部分あり）		52	77
78	〃	〃・受け部欠	(脚径) 15.0			明瞭な、くびれのない、やや筒状に近いもの。器厚も中位で厚くなっている。	外面：ヘラ磨きが部分的に残る。 内面：ハケ目がわずかに残存。	石英粒等を含む良	〃	外面：黄褐色と明褐色 内面：黒褐色		〃	78
79	〃	〃・〃	(脚径) 13.4			裾部に向かって緩やかに開く。裾端部は平坦面。	外面：ハケ目 内面：受け部と脚下半部はハケ目。くびれ部付近はナデ。下方は、しぼりの後ヘラ整形。	砂粒・小石粒等を多量に含む。	〃	外面：灰褐色 内面：淡褐色		〃	79
80	〃	〃・受け部、裾部欠				くびれ部が上方で、裾部の開きが少なく円筒状に近く、下方でやや開く。	外面：ヘラ削りの後、ハケ目。 内面：指による押痕やハケ目が多少みられる。	小石粒を多量に含む。	〃	灰赤褐色		〃	80
81	〃	〃・受け部欠	(脚径) 10.2			脚部が開くが、形がややいびつである。小形のもの。	外面：縦方向のヘラ削り。部分的にヘラ痕が明瞭。 内面：しぼり痕（一部に指圧痕）。下方はヨコナデ。裾端部は、指で押さえ、ナデ。	小石粒・砂粒を少量含む。きめ細かい。	〃	淡茶褐色		〃	81
82	〃	〃・裾部	(脚径) 17.4			やや内弯気味に「ハ」字形に開く。	内外面ともハケ目。	細かい砂粒・小石粒を多量に含む。きめ粗い。	〃	淡赤黄色		〃	82
83	〃	〃・〃	(脚径) 17.7			「ハ」字形に開く脚。	器面磨滅の為、不明。	細かい砂粒・小石粒を含む。(大粒のものも混)	〃	明赤黄色		〃	83
84	〃	甕・口縁部欠	(底径) 8.1			不安定なやや丸味を帯びた平底。長胴形の胴部。	内外面ともハケ目。	細かい石英粒・長石粒を多く含む。	〃	外面：灰黄褐色 内面：灰褐色		〃	84
85	〃	鉢	22.6	7.4	22.6	やや尖り気味の底部。大きく外反する口縁部をもつ。内面の稜は明瞭。	外面：ハケ目 内面：口縁部ハケ目。胴上部ヨコナデ。胴下部ハケ目。	小石粒を多量に含む。	〃	淡黄褐色	スス付着	53	85
86	〃	〃	18.0	6.4	18.0	ややいびつな丸底。外反する口縁。口縁部はやや厚く、屈曲部に稜あり。	外面：ハケ目の上をヘラ調整。口縁部は、ハケ目の後ヨコナデ。 内面：ハケ目	〃	〃	灰褐色		〃	86
87	〃	〃	26.1			丸味のある胴部に緩やかに外反する口縁。口縁上方は、わずかに内弯気味。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目の後、ナデ。 内面：胴部はハケ目かヘラナデによる痕か不明。	細かい砂粒を含む。きめ細かい。	〃	淡黄赤色		〃	87
88	〃	〃・底部欠	24.8			半球形に近く、口唇部はやや内傾気味で、端部は丸味をもつ。	外面：ハケ目の上からヘラ削りとナデ。口縁部ヨコナデ。 内面：ヘラナデ。	砂粒・細かい石英・長石粒を多量に含む。きめやや粗い。	〃	外面：淡赤黄色 内面：白味を帯びた黄褐色		〃	88
89	〃	〃	16.0	14.1	17.0	底面、楕円形の平底より立ちあがり、胴部のやや上方で、内傾気味に直立する深鉢。	外面：ハケ目。底部にも所々にハケ目。 内面：部分的にハケ目あり。	小石粒を多量に含む。	〃	灰赤褐色		〃	89
90	〃	〃	23.4	11.0	23.4	丸底に近い底部。	外面：4本程度の単位のハケ目が、不規則にわずかにみられる。 器面磨滅の為、不明。	大粒の石粒や砂粒を多量に含み、きめ粗い。	〃	黄褐色（外面の方が赤味が強い）		〃	90
91	〃	小形壺・口縁部欠	(推定) 6.2	(推定) 5.9	9.4	小形で、胴部中位が張り出し、短い。やや直立気味の口縁をもつ。底部はやや丸味をもつ。口縁部と胴部のくびれの稜が内外面とも明瞭。	外面：胴部ヘラ磨き。 内面：上方はナデ。下方はハケ目。	小石粒・砂粒を多量に含み、密。	〃	赤味を帯びた黄褐色		〃	91
92	〃	手捏ね土器	8.0	4.3	8.4	小形の鉢形。平底で厚手。	比較的厚さは一定していて、面もきれいに整形されている。	細かい砂粒を含む。密	〃	暗褐色		〃	92
93	〃	小形鉢	10.9	5.3	10.9	丸味をもつ平底。	外面：ヘラ削りの後、ヨコナデ。 内面：ヨコナデ	細かい石英粒等を含む。良	〃	外面：赤褐色 内面：灰褐色		〃	93
94	〃	手捏ね土器	7.2	2.7	7.2	小形の浅い楕形。口縁が凸凹している。	内面：底部にハケ目らしきものあり。 器面磨滅が著しい。	小石粒を多く含み、きめ粗い。	〃	黄褐色		〃	94
95	〃	小形鉢	10.2	5.5	10.2	丸底に近い平底。内弯気味に立ちあがる。	外面：ハケ目。口縁部付近はヨコナデ。 内面：ヨコナデ。底部の指の押痕。	細かい砂粒を含む。密	〃	〃		〃	95

Tab. 22　第II地点　環濠内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm) 口径	器高	最大径	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig	遺物番号
96	環濠	小形鉢	9.0	5.5	9.0	丸底。口縁端は薄くなる。	内外面ともに擦痕が多少みられる。	砂粒・小石粒等を多量に含む。	やや不良	外面：黄褐色 内面：赤味を帯びた黄褐色		53	96
97	〃	手捏ね土器	8.6	4.5	8.6	丸底に近い底部で、口唇部が薄くなる。小形の鉢形	外面：指で押さえた痕あり。 内面：上方ハケ目。下方に指圧痕あり。	細かい砂粒を含み、密。	良	黄褐色		〃	97
98	〃	〃	6.8	3.9	6.8	小形の鉢形。底部やや尖り気味。	内外面ともヨコナデ。	大粒の砂粒等を少量含み、密。	〃	黄灰褐色		〃	98
99	〃	小形鉢	13.2	6.3	13.2	平底で、口縁部がやや丸味をもって外反する。口唇部が薄くなる。	外面：口縁部ヨコナデ。他はナデ。 内面：屈曲部ヨコナデ。他はナデ。	細かい石粒を含む。	〃	黄褐色（外面、赤褐色部分、内面は黒色部分あり）		〃	99
100	〃	手捏ね土器	11.1	4.6	11.1	小形の椀形。丸底。（口唇端がギザギザしている為、まだ上に続くものがあった可能性もある。）	外面：縦方向にナデ。下半部では部分的にヘラ痕。 内面：口縁部ハケ目。	大粒の石英粒を含み、密。	〃	外面：赤黄褐色 内面：灰褐色	スス状のもの付着	〃	100
101	〃	〃	9.3	4.4	9.3	小形の椀形。丸底に近い底部から立ちあがり、口唇端は丸い。	外面：上方は指の押圧痕及びヨコナデ。下方は縦方向のナデ。 内面：ヨコナデ。羽根状の圧痕がある。	細かい砂粒を含む。	〃	黄褐色 外面底部は黒褐色		〃	101
102	〃	〃	5.0	8.6	6.0	口径が小さく、深い鉢形。(タコ壺形)	器面磨滅の為、不明。 部分的にヨコナデ痕が残存。	細かい石粒を含む。良	〃	明褐色		〃	102
103	〃	高杯	35.3	22.5	35.3	杯部は内弯して開き、段をもち、外方に大きく開く口縁がつく。柱上部が短く、裾部で大きく開く脚部	外面：杯部ナデ。口縁部はヨコナデ。 内面：杯部ヘラ磨き。	砂粒を多量に含み、きめ粗い。	〃	黄褐色（杯部外面は一部赤褐色）		54	103
104	〃	〃・杯部	33.0			柱部中位に稜をもち、外反する口縁をもつ。	器面磨滅の為、不明。	細かい砂粒を多量に含み、長石粒等も少量含む。	〃	淡赤黄色		〃	104
105	〃	〃・〃	27.2			口縁との接合部内外面に稜あり。口唇部は外弯し、端部は丸味を帯びる。	〃	多量の長石粒等を含む。	〃	赤味を帯びた茶褐色		〃	105
106	〃	〃・裾部	(脚径) 17.6			外側に大きく開く脚。	外面：ヘラ磨き（ハケ目の後のヘラ磨きである。） 内面：ヘラ削り。裾端部ヨコナデ。	砂粒・小石粒・雲母等を多量に含む。	〃	灰褐色		〃	106
107	〃	〃・口縁、裾部欠				杯部は、外方に広く開き、脚部は柱状を呈し長い。下半部を欠く円形透孔1個。	脚部外面、ヘラ磨き。 脚部内面、板状のもので縦方向に調整。	〃	〃	杯部、赤褐色 脚外面：淡黄褐色 脚内面：黒味を帯びる。		〃	107
108	〃	〃・口縁、脚部欠				外方に広く開く。脚上部は筒状をなす。	外面：ナデ。接合部はヘラ先で押しつけ。 脚内面はヘラで一周、削り整形。	〃	〃	暗黄赤色（杯部内面黒味を帯びた部分あり）		〃	108
109	〃	〃・脚部				脚部がなだらかに広がり、円形透孔が3個。	外面：磨滅の為、不明。 内面：縦方向のヘラ整形の後、横方向に回し、削られている。 穿孔は、内面より外側に向かって、孔の周りは整えられている。	細かい石粒を多量に含み、砂粒等も含む。きめ、やや粗い。	〃	明黄赤色		〃	109
110	〃	〃・裾部	(脚径) 20.8			低く、外側に大きく開く裾部。	器面磨滅の為、不明。	砂粒を多量に含み、ごく少量長石粒等も含む。きめ、やや粗い。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	110
111	〃	支脚	5.2			頂部に孔をもち、「ハ」字形に開く。	外面：ハケ目 内面：上部は3段階のヨコナデ。下半部はハケ目。	砂粒を少量含み、きめ細かい。	〃	黄褐色		〃	111
112	〃	沓形器台・	8.0	12.9	(推定、脚) 13.6	頂部に孔があり、脚部は、「ハ」字形に開く。	外面：上方に指の押圧痕。 内面：上方にしぼり痕。全体に指の押圧痕と指のナデ調整。 穿孔は棒状のものを使用し、後を指で押さえている。突出部のつなぎ目が明瞭である。	砂粒・大粒の石英粒・長石粒等を多量に含む。	〃	外面：白味を帯びた黄褐色（一部赤褐色） 内面：赤褐色		〃	112
113	〃	支脚・裾部欠	7.2			頂部は平坦。ややくびれをもって下方に開く。	頂部は磨滅の為、不明瞭だが、叩きと思われる。 外面：くびれ部は、ヘラで押さえ削る。下方は叩き目。 内面：二段階のしぼり痕あり。下方では指によるなでつけもあり。	細かい小石粒・砂粒等を多量に含む。黒雲母も混入。	〃	白味を帯びた黄褐色		〃	113
114	〃	〃	(脚径) 11.7			脚は「ハ」字形に開く。脚端部に削りによって生じた段を有す。上方は、やや内傾気味で肥厚する。	外面：ヘラ削りの後、ハケ目。 内面：ハケ目。指の押圧痕も多少ある。裾端部に若干のハケ目。	細かい砂粒・小石粒（大粒のものも混）。きめ粗い。	〃	外面：やや赤味を帯びた黄褐色 内面：暗灰色		〃	114
115	〃	〃	9.1	9.2	11.5	手捏ね。やや弯曲し、「ハ」字形に開く脚。脚端部で器厚が薄くなるが、一定しない。	器面の凹凸が激しく、内面はしぼり痕が残る。	大粒の石英粒等を含み、密。	〃	赤褐色		〃	115

6．第Ⅲ地点の調査

Fig. 67 第 Ⅲ 地 点 遠 景 (Ph.14)

① 第Ⅲ地点の概要

本地点は本遺跡のほぼ中央に位置する。本地点の周辺部は圃場整備のため削平を受け、また本地点も大幅な削平を受ける。遺存する遺構は方形周溝遺構２基のみである。第１号は輝緑凝灰岩の未製品石包丁６個と弥生時代後期壺形土器を出土している。この遺構を墓址とするか否かの結論は周辺の調査知見を待ちたい。

② 方形周溝遺構

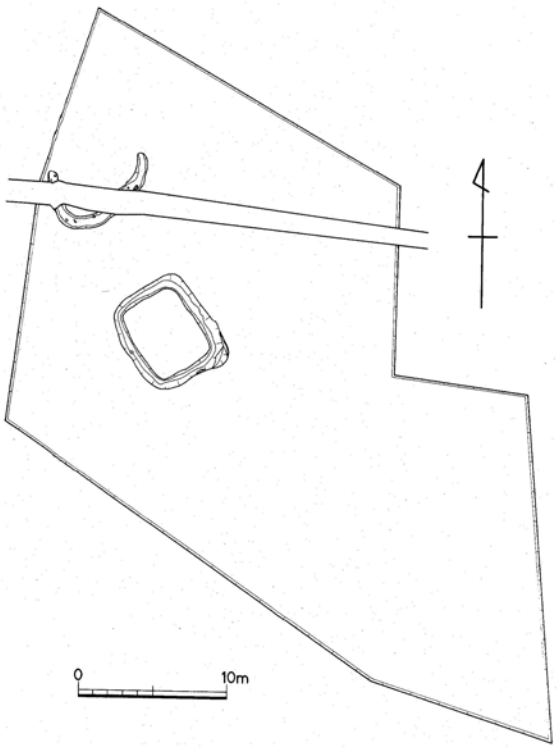


Fig. 68 第Ⅲ地点遺構配置図（縮尺１／500）

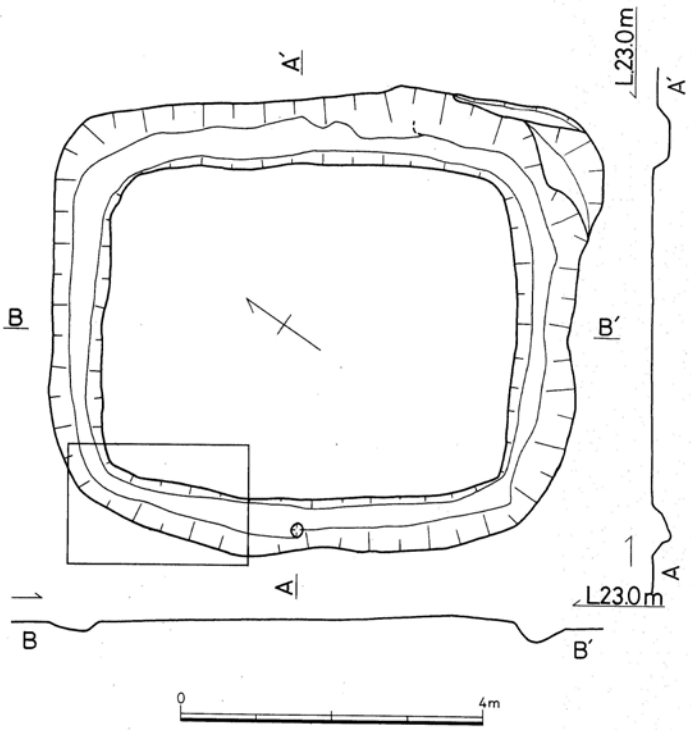


Fig. 69 第１号方形周溝実測図（縮尺１／80）

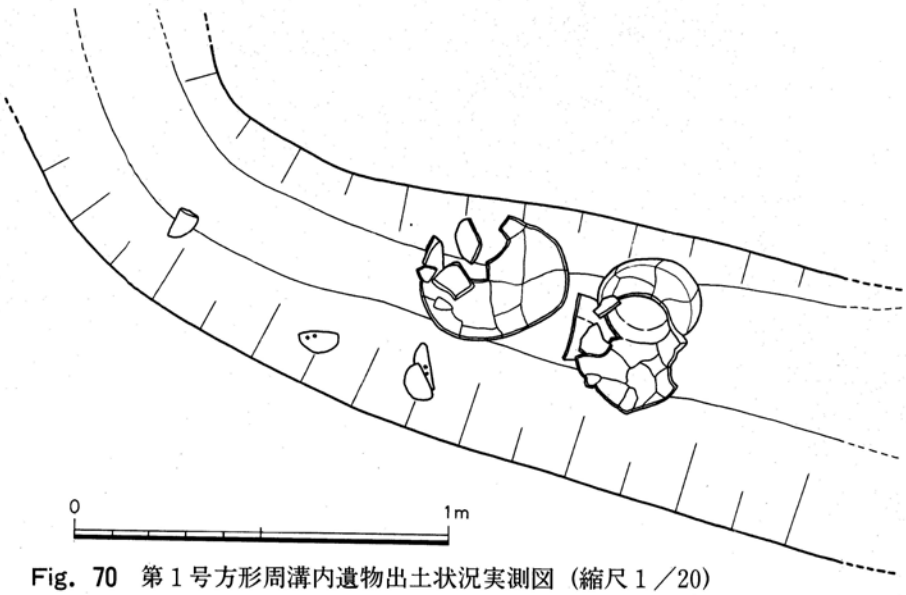


Fig. 70 第１号方形周溝内遺物出土状況実測図（縮尺１／20）

Fig. 71 第１号方形周溝遺構内出土土器 (Ph.15)

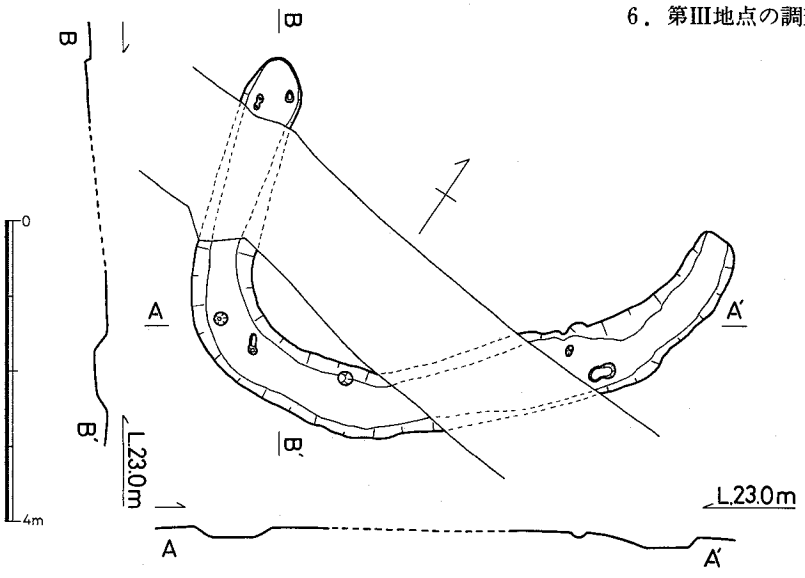


Fig. 72　第２号方形周溝実測図（縮尺１／100）

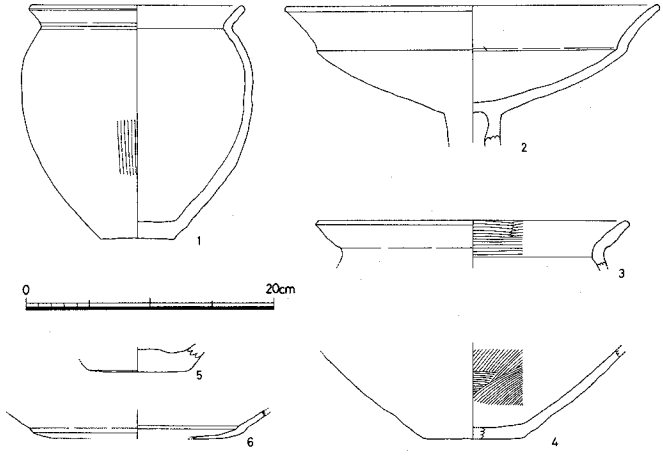


Fig. 73　第１・２号方形周溝内出土土器実測図（縮尺１／６）
１～４（第１号方形周溝）　５・６（第２号方形周溝）

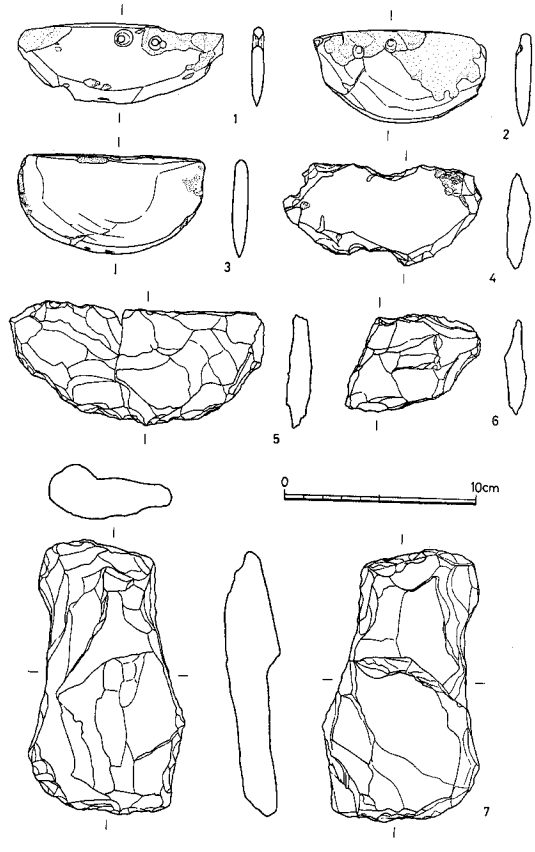


Fig. 74　第１号方形周溝出土石器実測図（縮尺１／４）

Tab. 23　第Ⅲ地点　第１・２号方形周溝内出土土器一覧表

遺物番号	出土遺構	器種・器部	法量（単位cm）		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig
1	第１号方形周溝	甕	口径	17.2	わずかに中央が凹む平底で、胴部上方に最大径をもつ。「く」字口縁。底部は厚手。	口縁部内外面ともヨコナデ。 外面：胴部ヘラ磨き。 内面：ヘラによる削り、或いはナデ。くびれ部下方２cm程に指で押さえ、なでた痕あり。	細かい長石粒・石英粒・砂粒を含み、きめ、やや粗い。	良	淡赤黄色		73
			器高	18.7							
			最大径	18.5							
2	〃	高杯 脚部欠	口径	30.3	口縁との接合部にやや段をなし、稜が内外面ともに明瞭である。 口縁部は外弯気味で口縁端は、若干丸味をもつ。	器面磨滅の為、不明。	多量の細かい長石粒と砂粒その他の小石粒を含む。きめ細かい。	〃	淡褐色 外面一部は黒褐色		〃
			器高								
			最大径								
3	〃	甕 口縁部	口径	25.3	外反する口縁。	外面：口縁部上方とくびれ付近に１cm程の指先によるヨコナデがあり、更に口縁部全面にヨコナデ。 内面：ハケ目	小石粒を多量に含む。	〃	外面：若干の赤味を帯びた淡褐色 内面：淡褐色		〃
			器高								
			最大径								
4	〃	壺 底部	底径	8.0	平底。	外面：磨滅の為、不明。 内面：ハケ目。底面付近はナデ。	砂粒・小石粒を多量に含む。	〃	外面：やや暗い褐色 内面：明褐色		〃
			器高								
			最大径								
5	第２号方形周溝	? 底部	底径	8.1	若干の丸味をもつ厚手の平底。	底部外側に部分的に単位1.3cmの細かいハケ目あり。	〃	〃	淡黄褐色		〃
			器高								
			最大径								
6	〃	高杯 口縁・脚部欠	口径		杯底部が浅く、やや平らな面をなす。接合部に段があり、稜が明瞭。	器面磨滅の為、不明。	〃 きめ細かい。	〃	淡赤褐色		〃
			器高								
			最大径								

7．第IV地点の調査

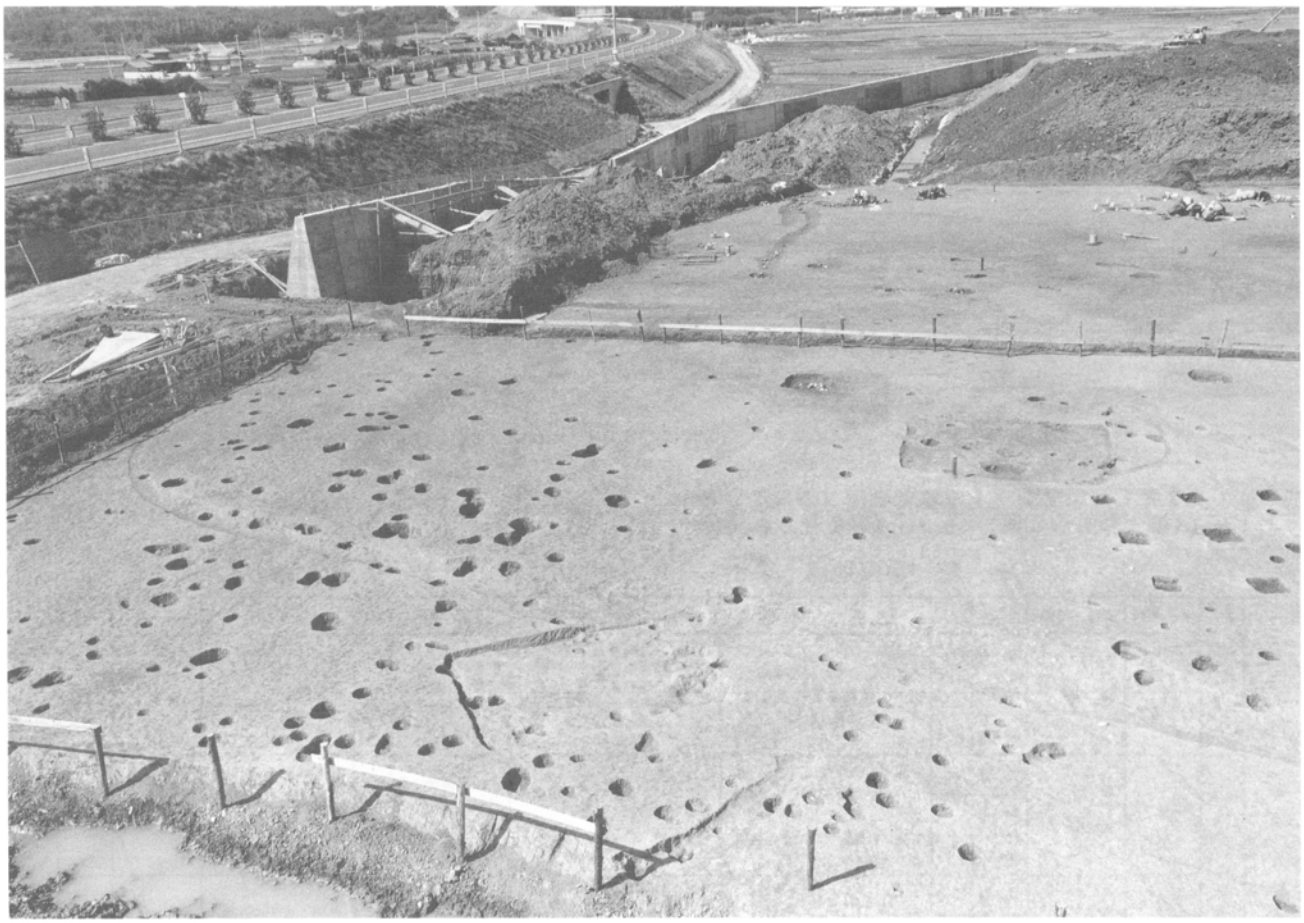


Fig. 75 第 IV 地 点 遠 景（東南から）（Ph.16）

Fig. 76　第IV地点遺構配置図（1／500）

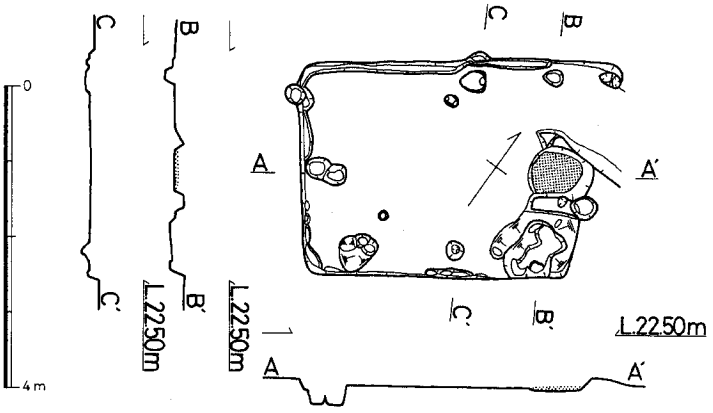


Fig. 77　第5号住居址実測図（縮尺1／100）

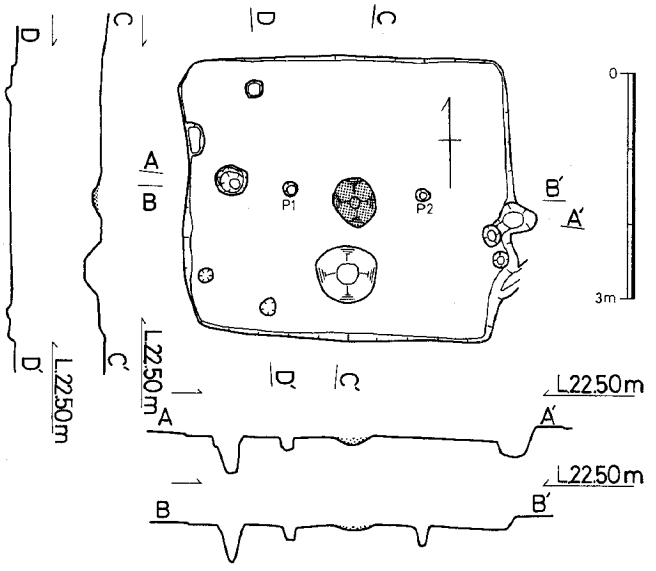
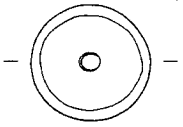


Fig. 79　第6号住居址実測図（縮尺1／100）



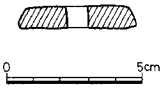


Fig. 78　第5号住居址内出土
紡錘車（縮尺1／3）

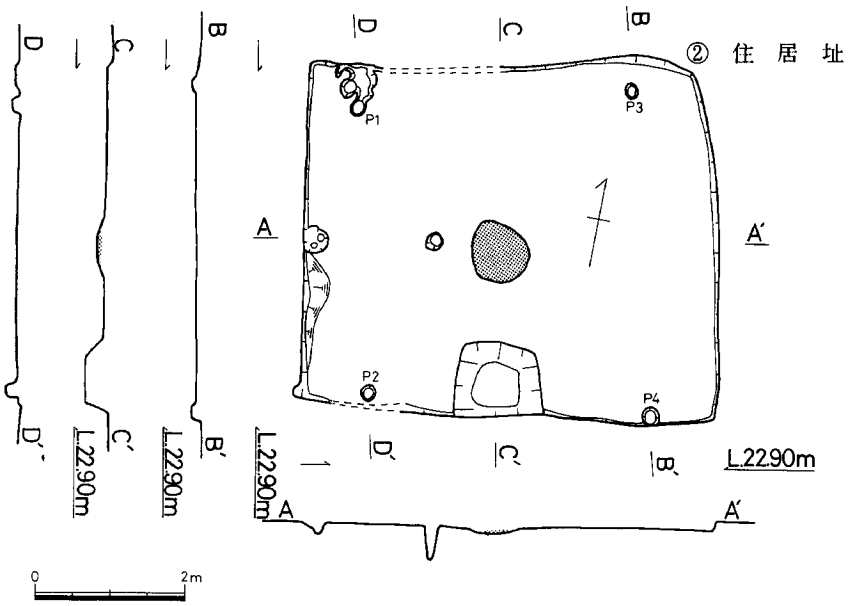


Fig. 80　第７号住居址実測図（縮尺１／100）

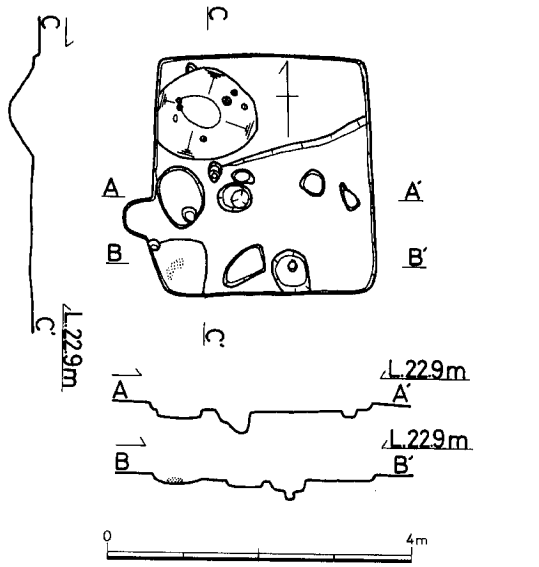


Fig. 81　第８号住居址実測図（縮尺１／100）

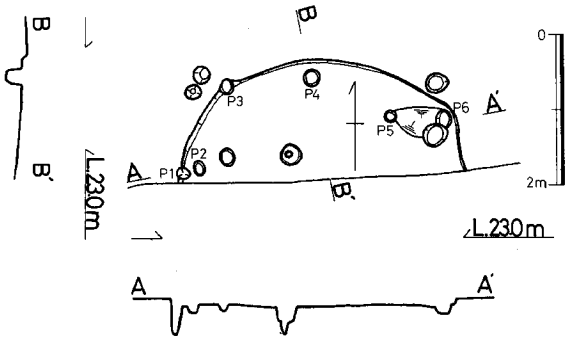


Fig. 82　第９号住居址実測図（縮尺１／100）

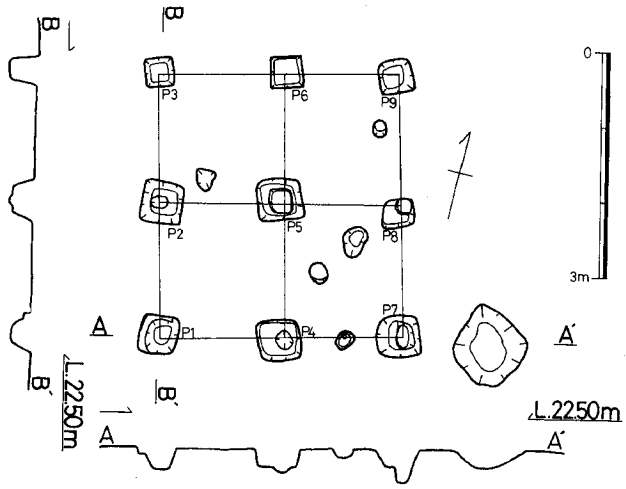


Fig. 83　第４号掘立柱実測図（縮尺１／100）

①　第Ⅳ地点の概要

遺跡の西部に位置し標高23メートルから22メートルの高さに立地しているのが本地点である。北端は急に落ち込み現在の水田面へと続き、南は標高21メートルと本地点より低く後世の削平は受けていないものの遺構は見えない。東側は圃場整備の削平を受けているようである。西側は九州の流通を支える九州縦貫自動車道が南北へと走る。

本地点の南半に住居址10軒と１軒の方形の柱穴をもつ掘立柱遺構が検出されている。第９号住居址は形状からみて弥生時代中期に築造されたものと思われるが、第５号から第８号住居址と第４号掘立柱遺構は、古墳時代終末期から奈良時代の所産と思われる。

住居址を概観すると９号住居址は円形の平面プランに柱穴を配している。５号住居址から８号住居址まで平面プランは方形の形状を示している。炉址は中央部に遺存するもの（第６号と第７号）と竈の痕跡をもつもの（第５号と第８号）がある。柱穴から柱の配置を類推するに第７号が４本の柱と思われる以外定形的な姿は見られない。恐らく２本柱が主流かと思われる。

方形の柱穴を有つ掘立柱遺構は見た目に堅牢な建造物を支えた柱の想影をとどめている。

本地点の北半には弥生時代中期に営なまれた甕棺墓主体の共同墓地が検出されている。

②住居址

第５号住居址（Fig.77）

第IV地点発掘区の西寄り南側に位置する。本遺跡で、カマドを有する唯一の住居址である。長軸3.88m、短軸2.88mの長方形を呈するが、北辺が4.16mとやや長い。主柱穴は不明である。カマドは東辺中央部にあり、裾部に相当する盛り上がりも残存している。カマド内部からは焼土も検出されている。カマドに接して東南隅に不整形の土坑がある。周溝は東壁側を除き、ほぼ一周していたと思われるが、深さも６㎝、或いはそれ以下と浅く、南側では部分的に途切れている。床面は平坦。壁高は10～14cm程で、上面がかなり削平されている。長軸方位はN－54°－Eである。本住居址の東北角が、東西に延びている溝状遺構を切っていることから、溝状遺構よりも新しいといえる。なお、石製の紡錘車（Fig.78）が１個出土している。径44㎜、厚さ8.5㎜、孔径７㎜である。断面が台形を呈すもので、面も平滑である。

第５号住居址内出土土器（Fig.83'の１・２・５）

出土土器は少なく、いずれも小片である。甕・椀・高杯があり、１は大きく、なだらかに外反する甕の口縁と思われる。外面下方に巾の広いハケ目状のものが施されており、その上方はヨコナデである。２と５は須恵器である。２の椀の底面端は、ヘラにより一周削り整えられている。３は高杯と思われる。脚部を欠いているが、杯部は椀形を呈すものである。

第６号住居址（Fig.79）

第IV地点発掘区の西寄りで、第５号住居址の北東6.8m、第７号住居址の西５mに位置する。長軸4.4m、短軸3.78mの長方形を呈す。住居址の東方に、東辺南側の壁際より北東方向に延びる細い溝と細長い土坑が続いているが、弥生時代中期頃の遺構と思われ、この遺構よりも本住居址の方が新しいといえるであろう。主柱穴はＰ１・Ｐ２の２個で、炉を挟んで東西方向にある。径が約20cm、深さ16～25cm程で、この２個のピット間の心心距離は1.76m。炉からの距離もほぼ、等しくなっている。Ｐ１と西辺の中間に径40cm程のピットがあり、この延長線上、東壁にやや突き出て径48cm程のピットがみられる柱穴に関係するものかは不明である。炉は床面中央にあり、やや楕円形を呈し、炉内より焼土も検出された。炉と南辺の中間には径78cm、深さ21cmの不整円形の掘り込みがある。床面は平坦。壁高は非常に浅く、削平が著しいが、東壁では20cm弱程ある。長軸方位は、ほぼ東西方向である。なお、出土土器はいずれも小片で、復元しえなかった。

第７号住居址（Fig.80）

第６号住居址の東方５mに位置する。長軸5.5m、短軸4.6mの長方形を呈す。主柱穴はＰ１～４の４個で、各々径20cm程で深さはＰ３が最も浅く約５㎝、Ｐ２が約14cmである。南側の２個は壁際にあり、北側の２個は北壁より26～42cm程離れた所に位置している。心心距離はＰ１～Ｐ２，Ｐ２～Ｐ４が3.8m。Ｐ１～Ｐ３が3.68m、Ｐ３～Ｐ４が4.3mである。炉は床面中央にあり、焼土を伴う。南壁際、中央部に120×96cmの方形の土坑がある。床面は平坦。壁高は６～12cm。

発掘区の東寄りに位置する。長軸3.2m、短軸2.92mでほぼ正方形を呈す。長軸方位は南北方向である。主柱穴は不明。炭化物含土が西南隅にあり、焼土もここより少量、検出されたのみである。西側の北寄りに長径1.28mのすり鉢状を呈する土坑がある。又、北側の床面は一段高くなっている。壁付近の床面はしっかりしていたが、中心に向かって、やや軟らかな状態であった。壁面は約８㎝であ

る。なお、すり鉢状の土坑内より鉄器片（Fig.139の１）が出土している。

第８号住居址内出土土器（Fig.83'の４・７・８）４と７は高杯の脚部。７は小形高杯で、稜をなし裾部が開くもので柱状部外面はヘラ削りが明瞭である。８は須恵器で、甕の口縁かと思われる。

第９号住居址（Fig.82）

発掘区の東寄り南端、第８号住居址の南9.6mに位置する。発掘区域外にかかり、全体の½強を欠いている。円形で推定径は約3.8mである。主柱穴は不明であるが、考えられるものは、30～40cmと比較的深い西側壁際のＰ１、Ｐ３とＰ４、東側のＰ５の４個か、或いは、やや浅いが、大きさと壁より10cm前後、離れた位置等から考えられるＰ２・Ｐ４・Ｐ６の３個のピットであろう。

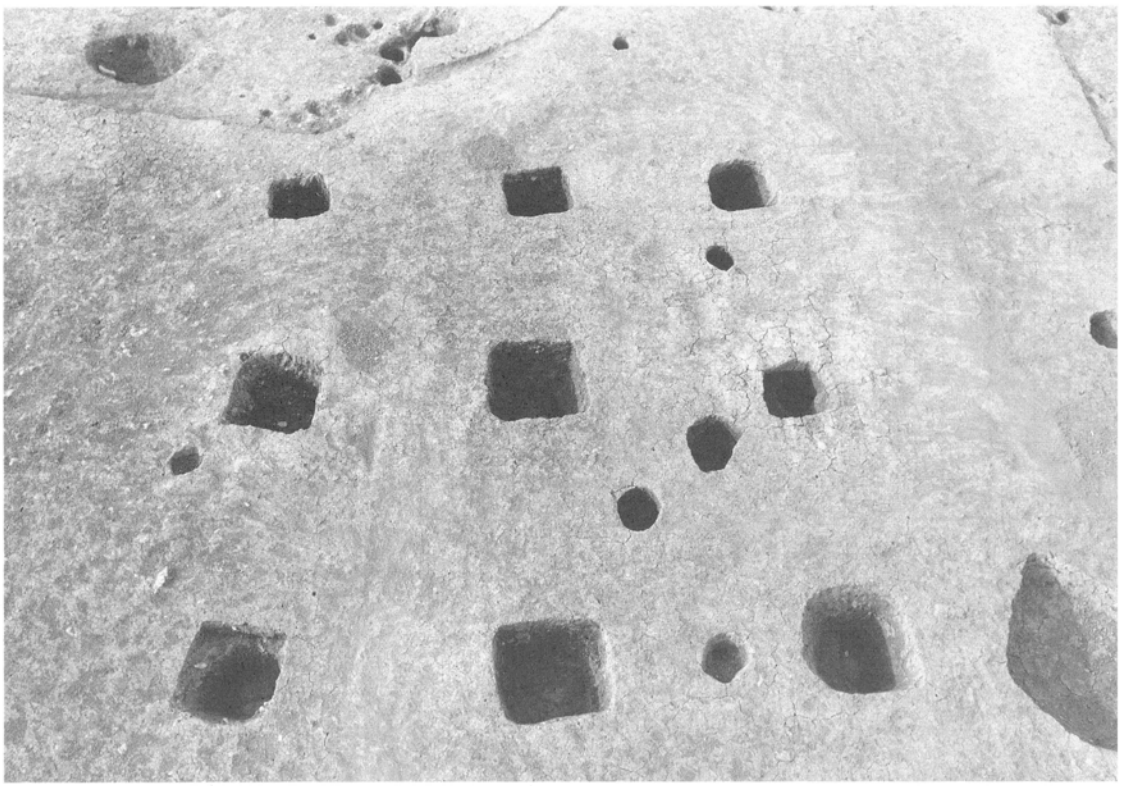
炉はこの範囲内では検出されなかった。床面は赤黄褐色土で粘土質の土も混入しており、かなり柔らかい。壁際で緩やかに上がり、全体では東側に行くに従い、やや下がり気味である。壁高は10cm弱で、上面を削平されている。出土遺物は土器片10数片と少なく、土師器や須恵器の杯片等が含まれており、流れ込みが多いと思われる。いずれも小片で、復元しえなかった。

③ その他の遺構

第４号掘立柱遺構（Fig.83）

第６号住居址の南35cm（最短距離）、第７号住居址の西方2.4m（最短距離）に位置する。残りのよいもので、正方形プランを呈し、２間×２間の規模をもつ。桁行が350cm・梁行320cmである。桁行方向はN－15°－W。柱間の寸法もほぼ一定しているが、表（Tab.30）を参照されたい。柱穴のプランは正方形。

第Ⅳ地点遠景（Ph.17）



第 4 号 堀 立 柱 遺 構 (Ph.18)

Tab. 24 第4号掘立柱遺構計測表

第IV地点　第4号

(単位cm)

	P1～P2	P2～P3	P4～P5	P5～P6	P7～P8	P8～P9	平 均
桁行	180	170	178	172	176	174	175
	350		350		350		350
	P1～P4	P4～P7	P2～P5	P5～P8	P3～P6	P6～P9	平 均
梁間	164	156	166	154	166	154	160
	320		320		320		320

(単位cm)

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	平均
径	49	55	38	57	59	43	57	43	44	49.3
深	29.5	32	35.4	32	43	33.5	43	37.5	44	36.7

横（北に向かって）小数点2位4捨5入
方位N－15°－W（14.5°）

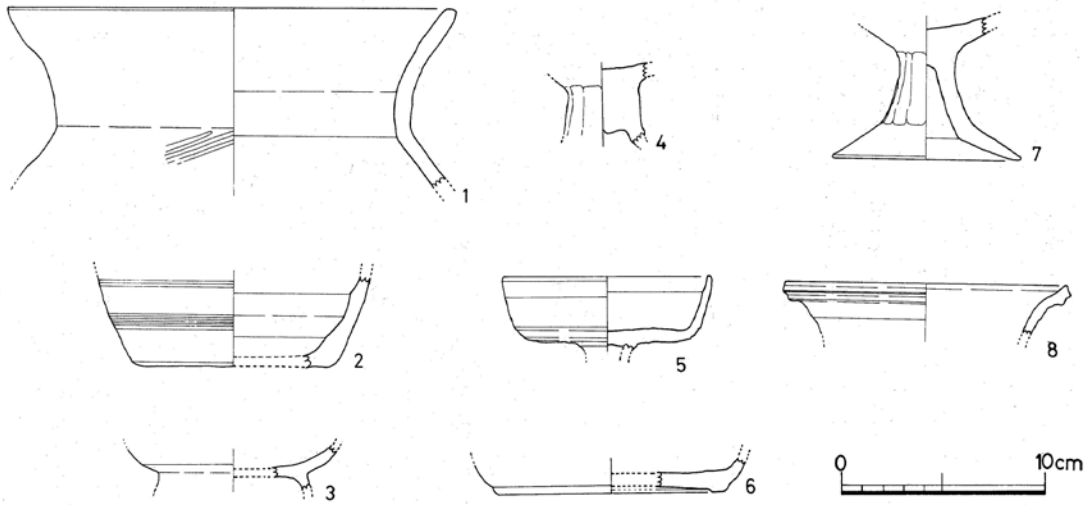


Fig. 83 第5・8号住居址、第4号掘立柱遺構内出土土器実測図（縮尺1／4）
1・2・5（J 5）、4・7・8（J 8）、3・6（第4号掘立柱遺構）

Tab.25 第IV地点 住居址一覧表

〔 〕は推定

No.	形態	規模(m)	長軸方位	ベッド状遺構	炉及びカマド	焼土	土坑(貯蔵穴様)	溝	主柱穴	備考
5	長方形	2.88×3.88	N−54°−E	なし	カマド 東短辺中央	カマド内	カマドの南側に貯蔵穴様のものあり。	東壁際を除き、ほぼ全周	不明	東北角、溝を切っている。
6	〃	3.78×4.4	ほぼ東西方向 N−89°−W	〃	炉中央	炉内	なし	なし	〔2〕	
7	〃	4.64×5.52	N−80°−E	〃	〃	〃	南壁際中央	〃	4	
8	ほぼ正方形	3.2 ×2.92	南北方向	〃	不明	西南角に焼土を伴う土坑あり	不明	〃	不明	
9	円形	(推定径)約3.8	——	〃	〃	なし	——	——	——	½強が発掘区域外

Tab.26 第IV地点 住居址・掘立柱遺構内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm)		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig
1	J 5	甕 口縁部	口径 器高 最大径	21.6	なだらかに外反する口縁。	外面：口縁部下方、くびれ部にヨコナデ。胴部への移行部に太いハケ目状のもの。 内面：磨滅の為、不明。	砂粒を含み、長石粒等も多少含む。	良	外面：黒ずんだ赤黄褐色 内面：白味を帯びた黄褐色		83'
2	〃	椀 口縁・底部一部欠	底径 器高 最大径	9.0	須恵器 直線的に立ちあがる。	外面：横方向に4～7本程度の線が帯状にある。	微粒の砂粒を含み、精良。	〃	暗灰色		〃
3	第4号掘立柱遺構	台付杯 口縁・台部端欠	口径 器高 最大径		高台付き	外面：ヨコナデ 高台の付け根の部分、ヘラ削りの後、なでた可能性あり。	微粒の石粒を若干含み、良。	〃	外面：明褐色 内面：黒褐色		〃
4	J 8	高杯 杯と脚の接合部	口径 器高 最大径		接合部の厚味がある。	外面：ヘラ削り 内面：ヘラにより削り整形	長石粒等を若干含む。	〃	淡赤褐色		〃
5	J 5	高杯 脚部欠	口径 器高 最大径	10.0	須恵器 小形で、杯底部より弯曲し、立ちあがる。口唇部は薄くなる。	口唇部ヨコナデ	微量の砂粒を含む。精良。	〃	茶色味がかった淡灰色		〃
6	第4号掘立柱遺構	台付杯 底部	底径 器高 最大径	10.9	台部はかなり丸味を帯びている。	ヨコナデ及びナデ。	砂粒を少量含みきめ細かい。	〃	外面：白味がかった赤黄色 内面：淡赤黄色		〃
7	J 8	高杯 杯部欠	脚径 器高 最大径	9.2	小形。裾部にかかる部分で屈曲し、稜をなして更に開く。裾端部が薄くなる。	外面：杯部との接合部より脚部にかけてヘラ削り。裾端部はヨコナデ。 内面：脚部はヘラを回転させ削る。	微粒の小石粒をやや多く含む。きめ細かい。	〃	淡黄褐色		〃
8	〃	甕 口縁部	口径 器高 最大径	14.0	須恵器 外反する口縁。口唇部が外面に突き出て段をなす。	ヨコナデ	精良	〃	若干、緑色がかった灰白色		〃

④ 甕 棺 墓

第IV地点北半に弥生時代中期の甕棺墓群即ち共同墓地があり、その西側に流れる自然流路の溝北端に、共同墓地を祭る祭祀遺構が見える。

甕棺墓に与えられた整理番号は34号までであるが、この内甕棺片をもつ墓坑が4基（K 6、24、27、31）縄文時代前期の土器溜り遺構（K30）が含まれており、甕棺と認定された基数は29基である。

甕棺墓に遺存する人骨は皆無である。甕棺のみの形状から可視的に把えて成人、小児の分類を図れば、成人用14基、小児用15基で、甕棺片をもつ墓坑をその破片の形態から小児と考えれば小児用が19基となる。小児の死亡率の高さは他の遺跡の資料と比較して平均値を保つものである。

成人、小児用の甕棺墓には合わせ口式のものと単式のものがあって、成人用は合わせ口式7基、単式7基、小児用は合わせ口式5基、単式10基である。

成人用の合わせ口式の組み合せを見ると鉢と甕のものが4基、甕と甕が2基、不明形態と甕が1基である。小児用の合わせ口の組み合せは鉢と甕が2基、甕と甕が2基、壺と甕が1基である。

祭祀遺構を見ると、浅く窪められた土坑に壺形土器や高杯形土器が見られるが、土器が精製された繊細な胎土であるが故に覆土に侵蝕され復元不能な面が多々あったが、蓋付高杯形土器をどうにか図化している。

本甕棺墓の時代は弥生時代中期に比定されるが、小規模な共同墓地である。小規模な共同墓地の有り方が、弥生時代農耕社会にどう位置付けられるのか今後の課題となる。

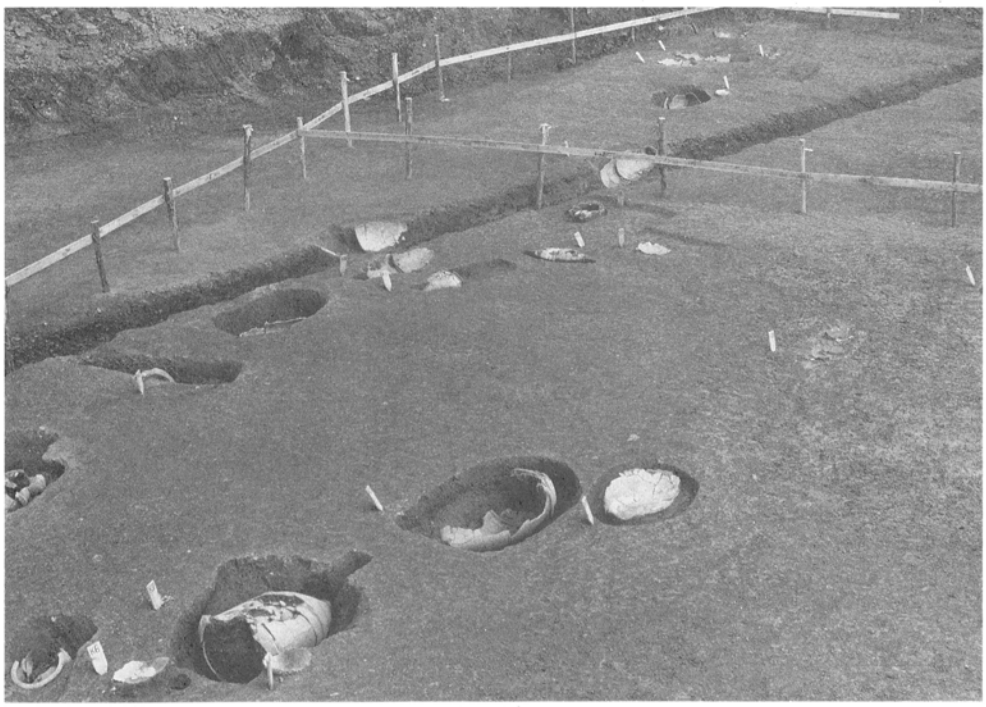


Fig. 84 甕 棺 墓 遠 景（西から）（Ph.19）

④ 甕 棺 墓

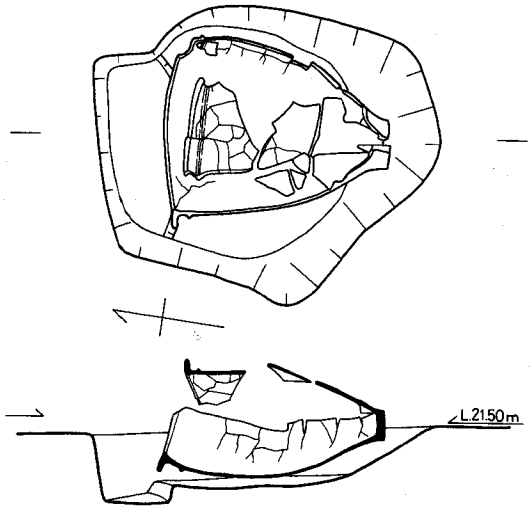


Fig. 85 第1号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

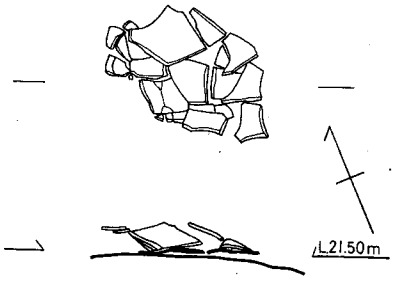


Fig. 86 第2号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

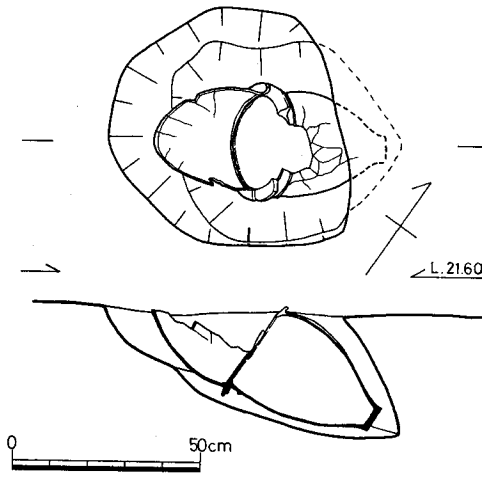


Fig. 87 第3号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

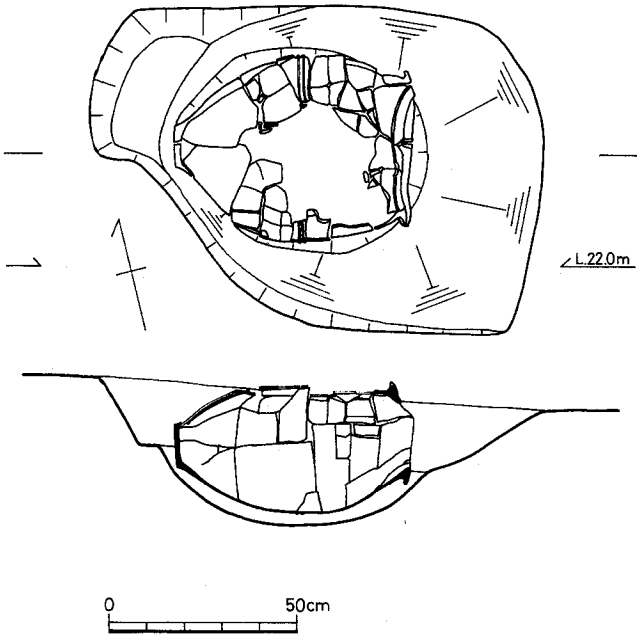


Fig. 88 第4号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

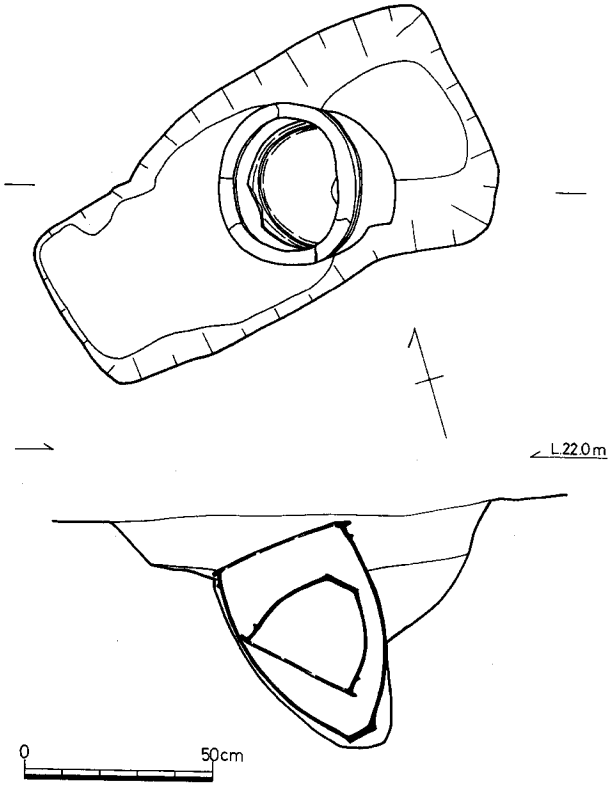


Fig. 89 第5号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

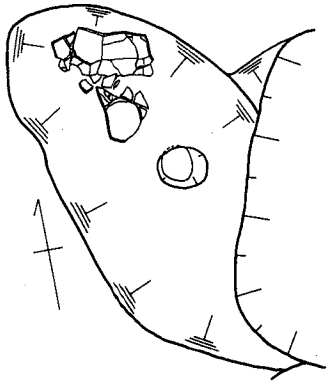


Fig. 90 第6号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

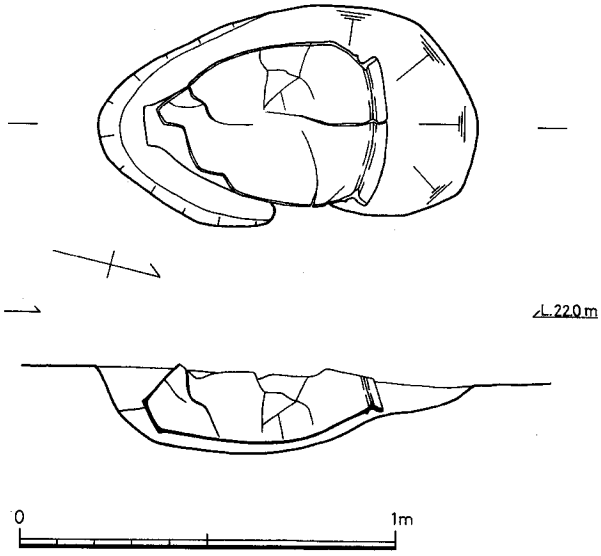


Fig. 91 第7号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

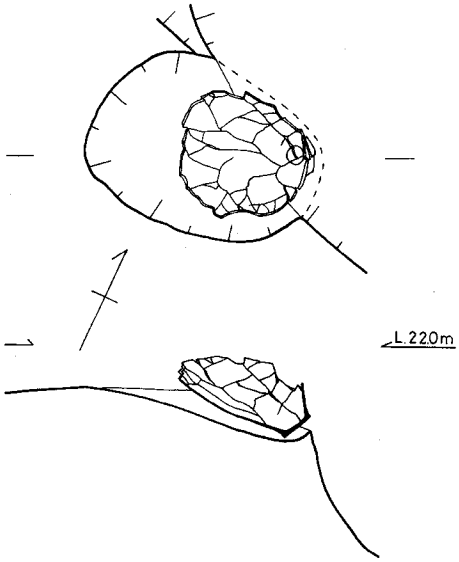


Fig. 92 第8号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

Fig. 93　第９号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

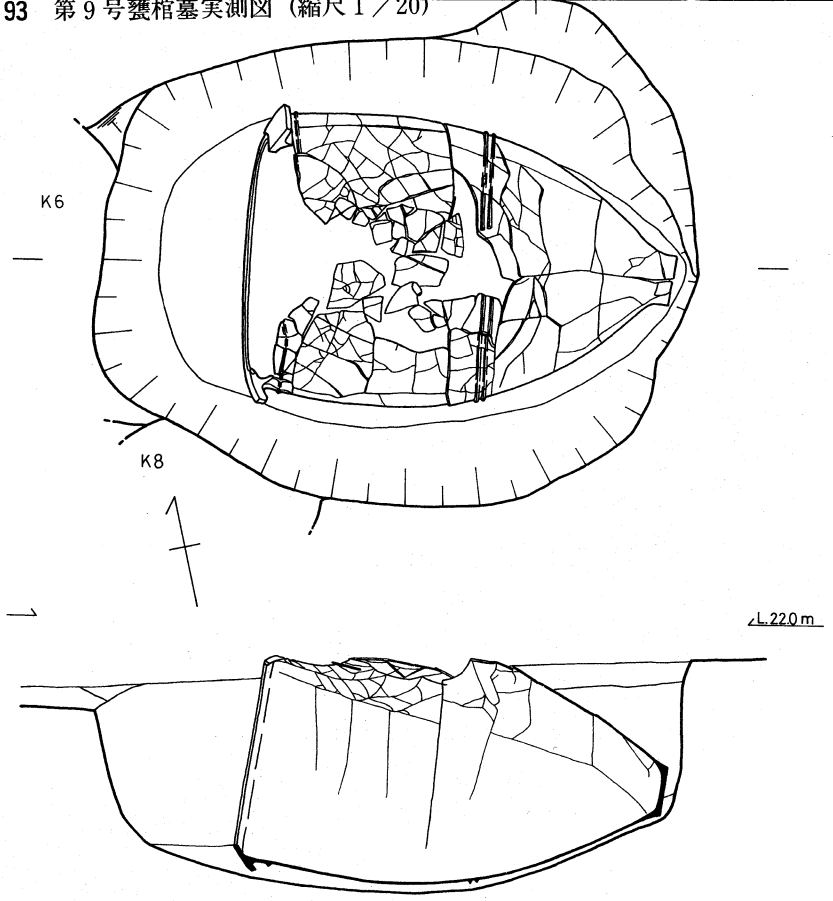
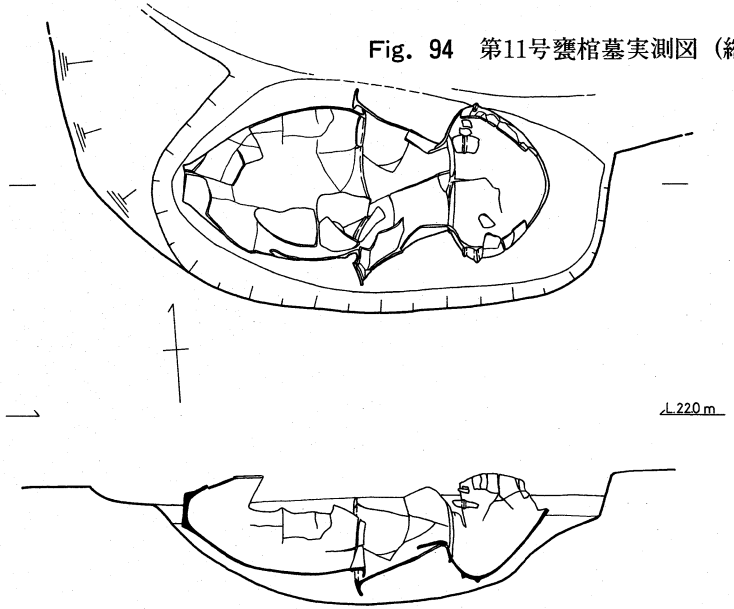


Fig. 94　第11号甕棺墓実測図（縮尺１／20）



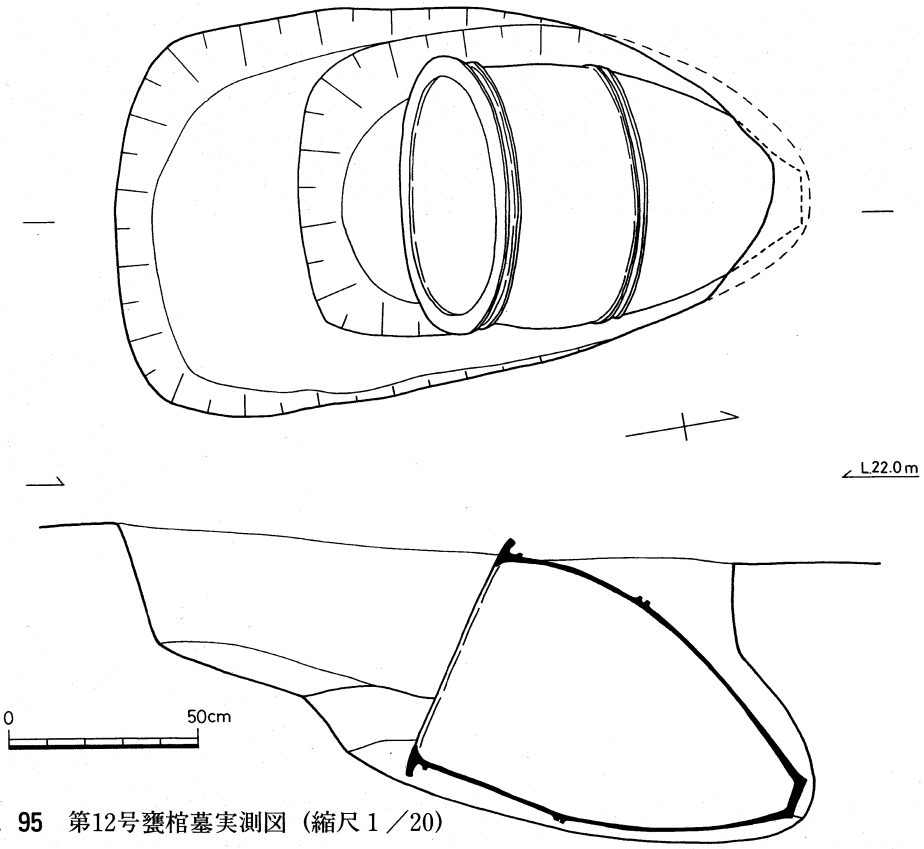


Fig. 95　第12号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

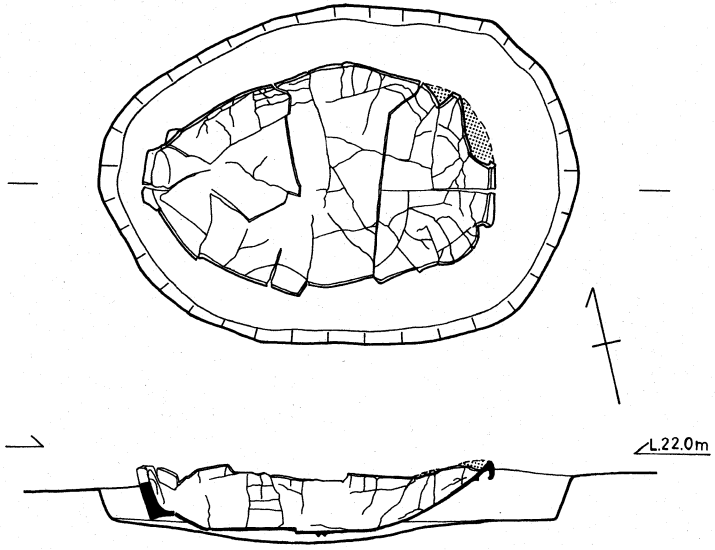


Fig. 96　第14号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

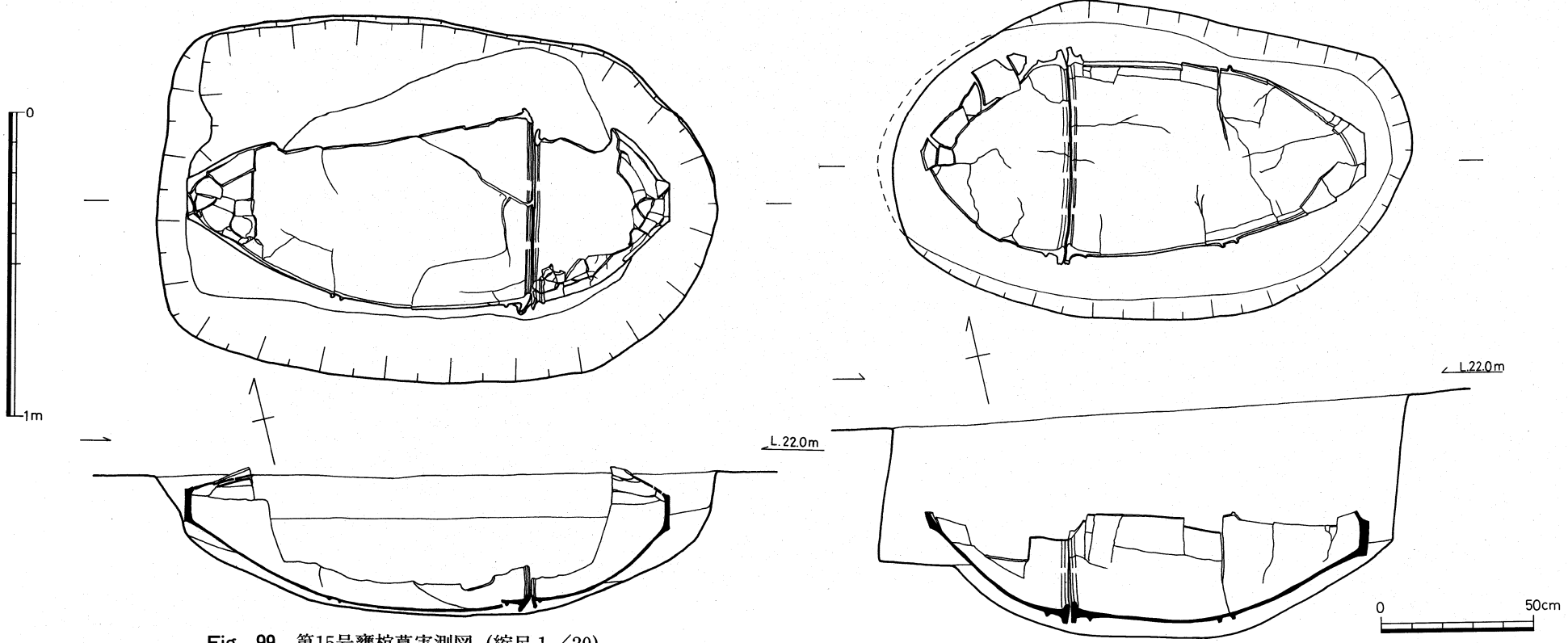


Fig. 99　第15号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

Fig. 97　第13号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

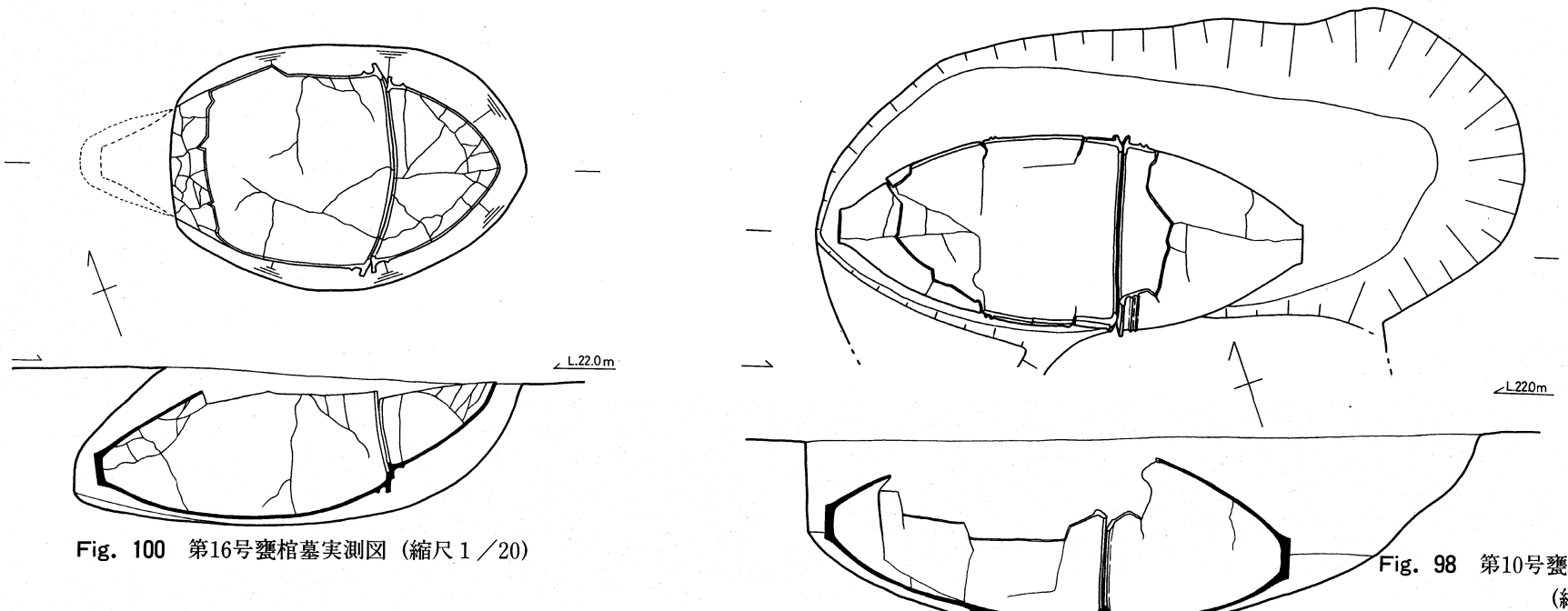


Fig. 100　第16号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

Fig. 98　第10号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

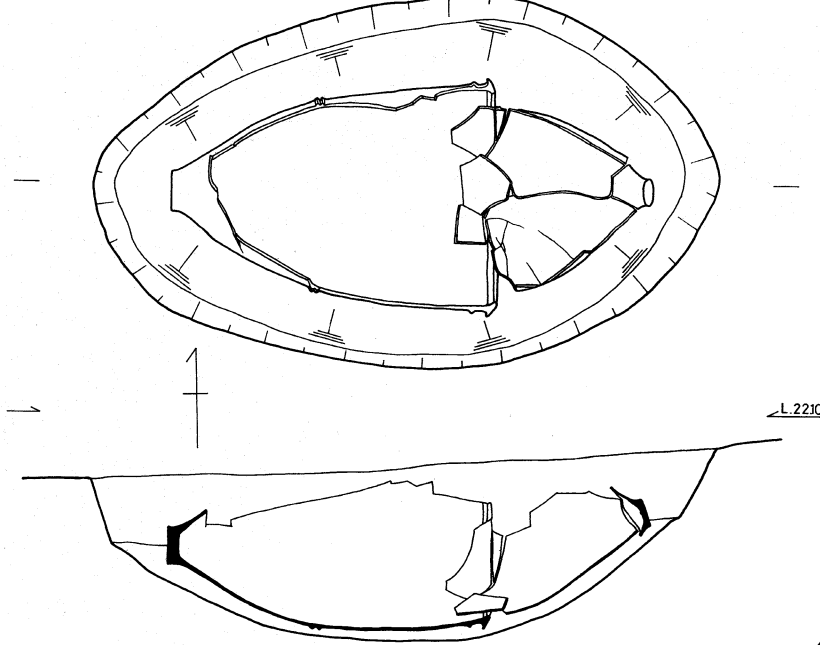


Fig. 107　第23号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

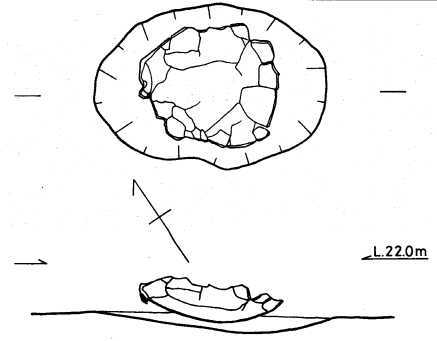


Fig. 103　第19号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

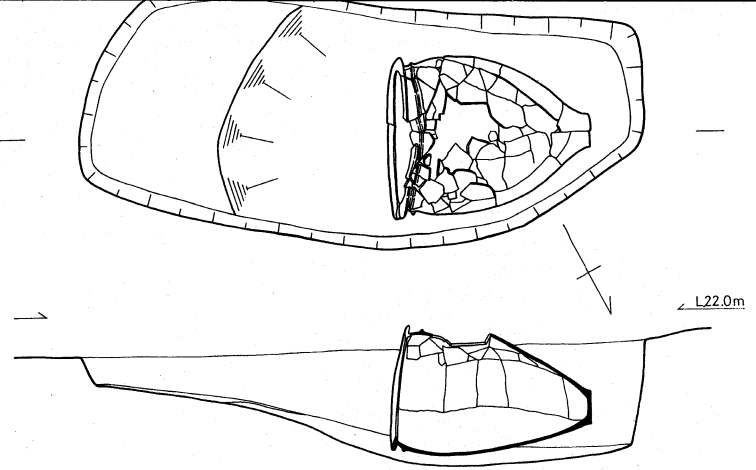


Fig. 101　第17号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

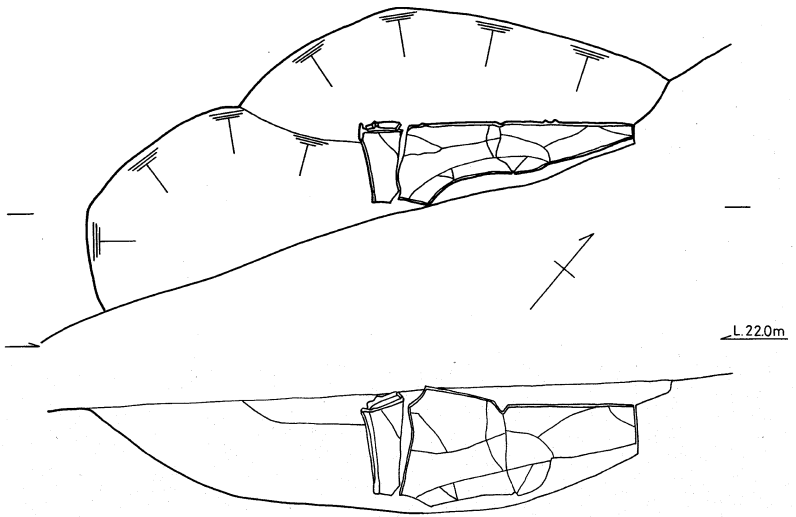


Fig. 105　第21号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

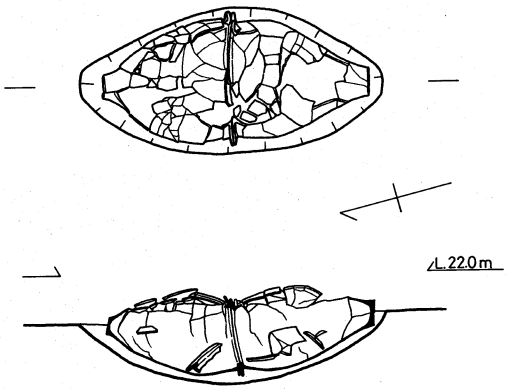


Fig. 102　第18号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

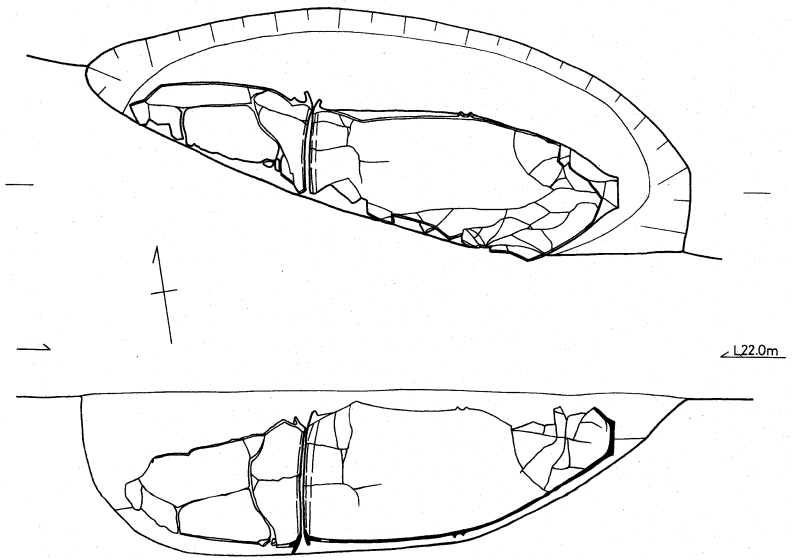


Fig. 106　第22号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

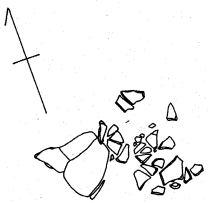


Fig. 109　第27号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

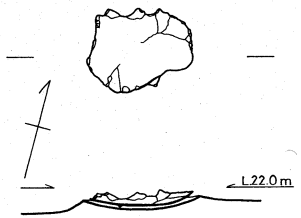


Fig. 108　第24号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

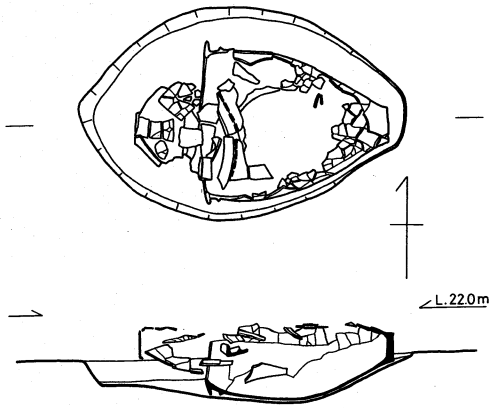


Fig. 104　第20号甕棺墓実測図（縮尺１／20）

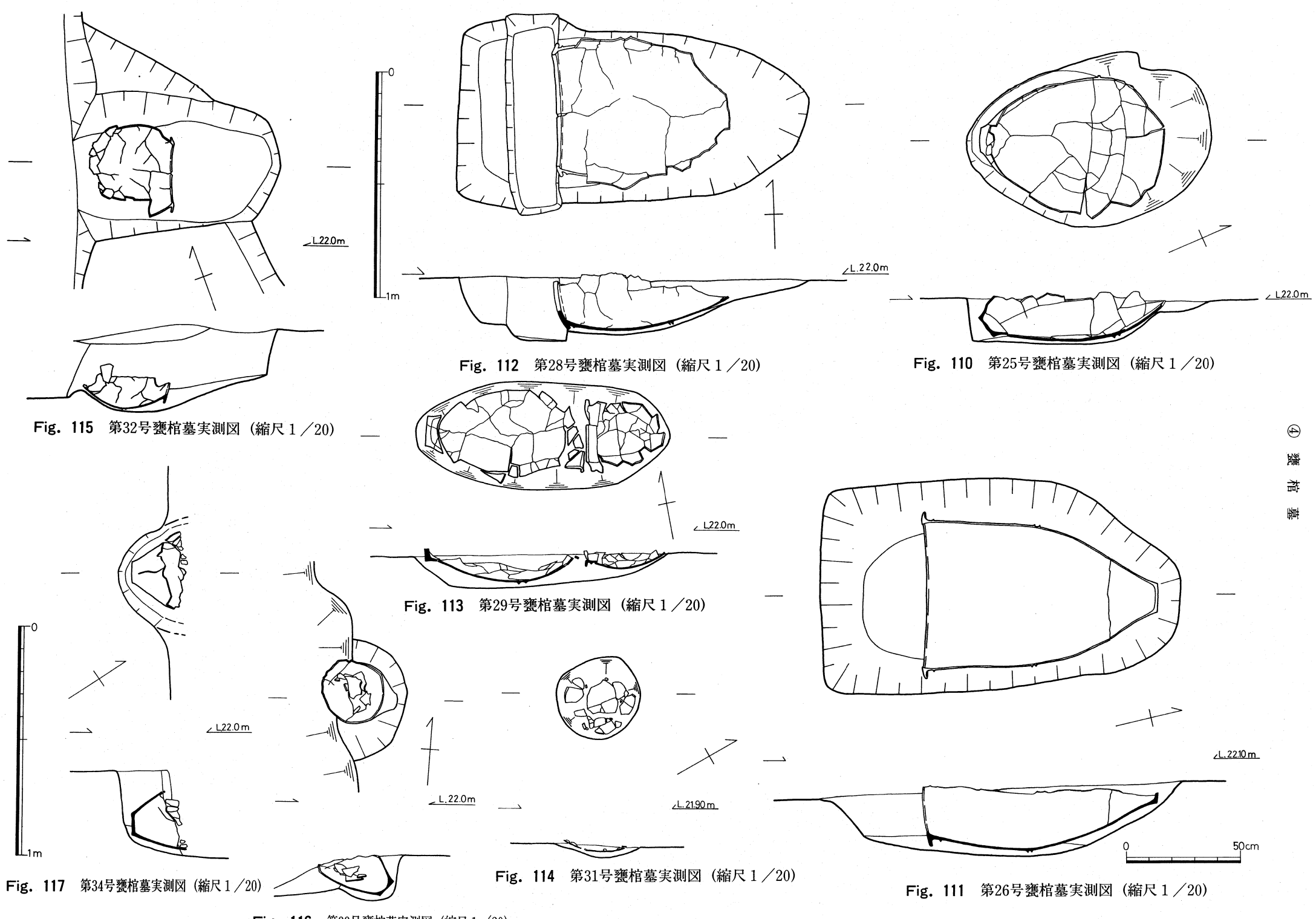


Fig. 115 第32号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

Fig. 112 第28号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

Fig. 110 第25号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

Fig. 113 第29号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

Fig. 117 第34号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

Fig. 114 第31号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

Fig. 111 第26号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

Fig. 116 第33号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

⑤ 甕棺墓群に伴う祭祠遺構

「④甕棺墓」（67頁）参照。

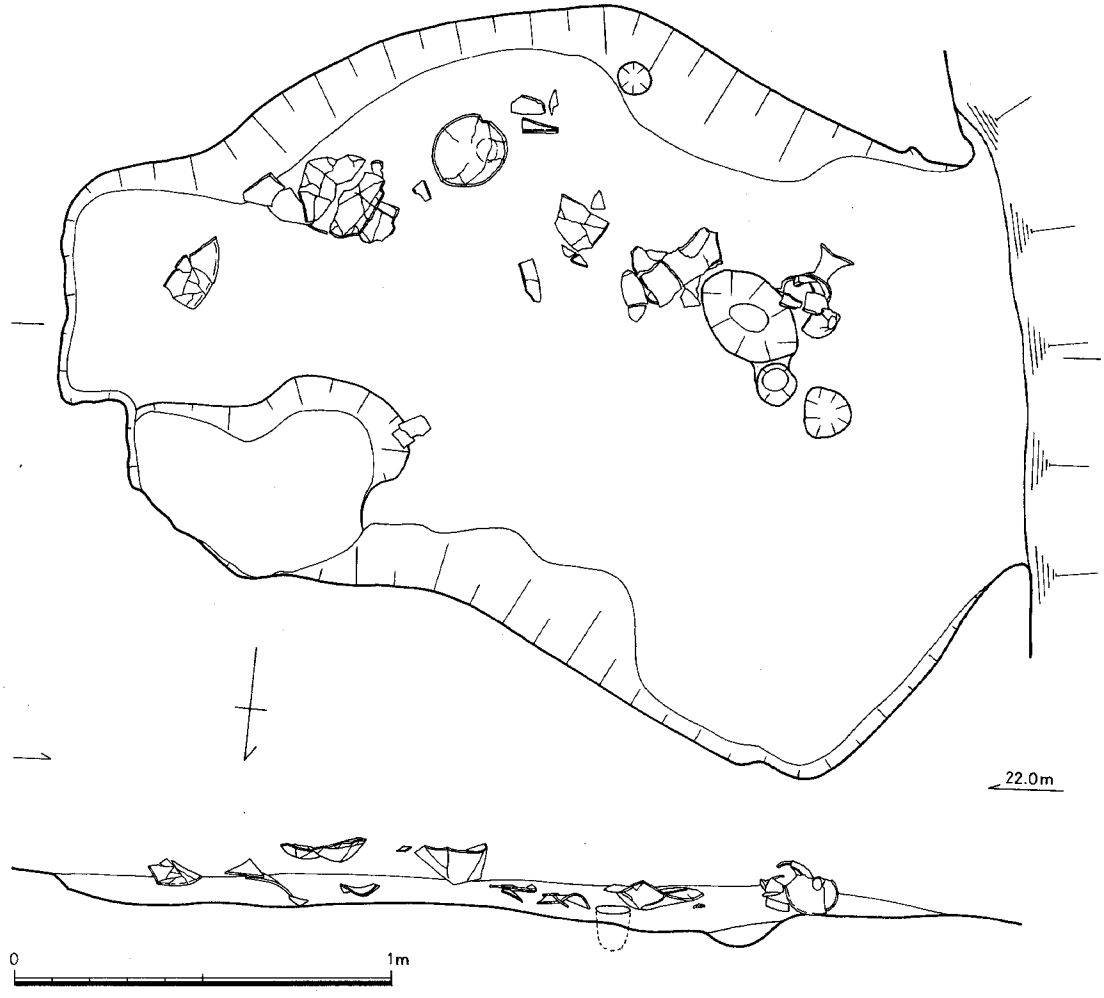


Fig. 118　甕棺墓群に伴う祭祠遺構実測図（縮尺１／20）

⑥ 縄文時代の遺構

「８．その他の遺物。
縄文式土器」（84頁）
参照。

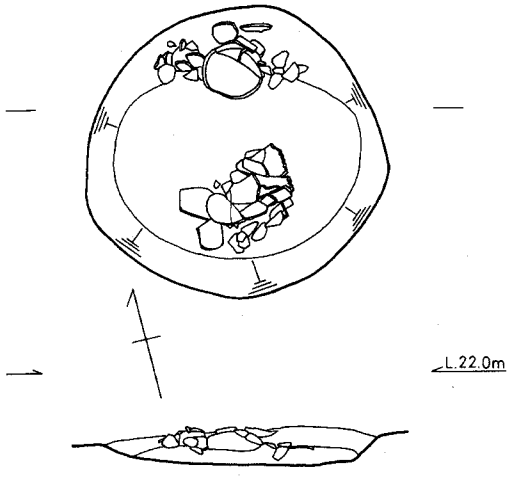


Fig. 119　縄文土器出土土坑（K30）実測図（縮尺1／20）

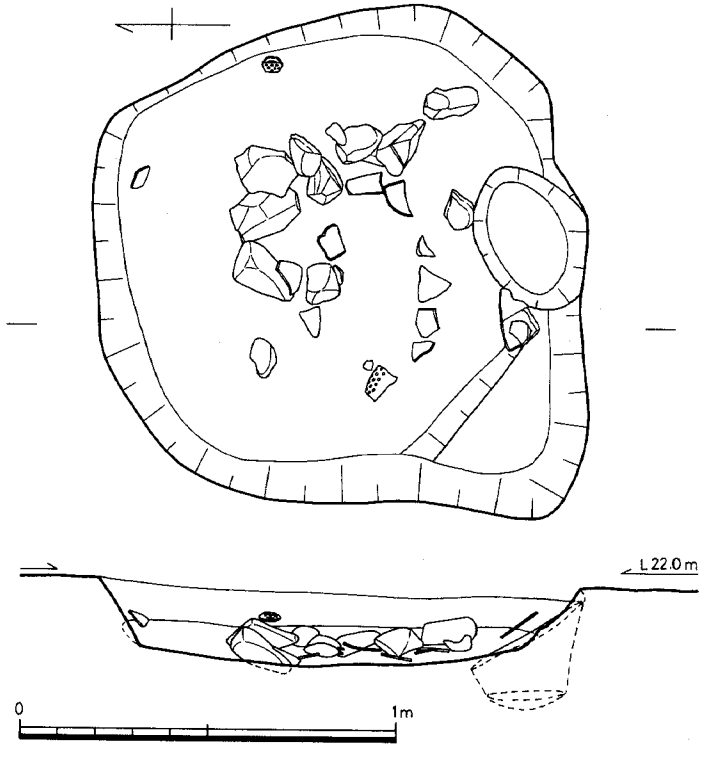


Fig. 120　第１号土坑（P1）実測図（縮尺１／20）

Tab 27 甕棺墓一覧表

No.	棺の規模	形　式	合わせ口の方法	形　態	方　位	傾　斜	備　考
1	小児	単	——	甕	N－8°－W	ほぼ水平	
2	小児						口縁部付近の10数片の破片が残存する。墓坑も削平される。
3	小児	合わせ口	接口	甕＋甕	N－124°－W	30°	上甕を削られる。底部欠損。
4	小児	単	——	甕	N－14°－E	ほぼ水平	
5	小児	合わせ口	? 接口だったか	鉢＋甕	N－75°－W (墓坑N－103°－W	74°	上甕（鉢）が下甕内に落ち込んでいる。
6							破片。詳細不明。墓坑をK９の墓坑に切られる。
7	小児	単	——	甕	N－14°－W	10°	上面を削られる。
8	小児	単 (と思われる)	——	甕	N－114°－W	45°	上部（口縁）を削られる。K９の墓坑を切る。
9	成人	単	——	甕	N－78°－W	5°	墓坑をK８に切られる。K６→K９→K８
10	成人	合わせ口	接口	鉢＋甕	N－112°－E	ほぼ水平	K11と切り合っているが、同時に埋葬されたか、もしくはK11の方がやや古いと思われる。時期差はあまり認められない。
11	小児	合わせ口	覆蓋	壺＋甕	N－112°－E	ほぼ水平	
12	成人	単	——	甕	N－176°－W	20°	完形。墓坑を２段に掘り込む。下段の横穴に甕棺を挿入。
13	成人	合わせ口	接口	鉢＋甕	N－104°－E	ほぼ水平	上面を削られる。
14	成人	単	——	甕	N－104°－W	ほぼ水平	上面を削られる。口縁部に粘土。
15	成人	合わせ口	接口	鉢＋甕	N－78°－W	ほぼ水平	上面を削られる。
16	成人	合わせ口	接口	鉢＋甕	N－111°－E	12°	上面（特に上甕）を削られる。上甕（鉢）の底部。横穴に下甕を挿入。
17	小児	単	——	甕	N－118°－E	3.5°	
18	小児	合わせ口	接口	甕＋甕	N－14°－E	2°	上面を削られ、胴部の一部分のほかは欠損。詳細不明。丹塗り。
19	小児	?	?	?	?	?	
20	小児	合わせ口	呑口	鉢＋甕	N－92°－W	ほぼ水平	上面を削られる。特に上甕（鉢）の状態が悪い。
21	成人	単	——	甕	N－31°－W (推定)	ほぼ水平 (推定)	試掘溝にかかり削られる。底部も含め約5/6欠損。
22	成人	合わせ口	接口	甕＋甕	N－99°－E	7.5°	試掘溝にかかり削られる。上甕の欠損部分が多い。底部欠損。
23	成人	合わせ口	呑口	甕＋甕	N－92°－E	ほぼ水平	上甕口縁部打ち欠き。上面を削られる。
24							胴部の一部を除き他は欠損。詳細不明。
25	成人	単	——	甕	N－23°－E	38° (推定)	上面を削られる。口縁部欠損。胴部約⅔欠損。
26	成人	単	——	甕	N－167°－W	ほぼ水平	上面を削られる。½強欠損。
27							小破片。詳細不明。
28	成人	単	——	甕	N－88°－W	ほぼ水平 (推定)	上面を削られる。底部欠損。口縁部・胴部⅔欠損。口縁部の西側（上部）に23cm×88cm、深さ７cmの掘り込みがある。
29	成人	合わせ口	接口（?）	?＋甕	N－111°－E	ほぼ水平 (推定)	上面を削られる。上・下ともに残りはよくないが、特に上甕は欠損部分が多い。
30							81ページ～82ページ参照
31							破片。詳細不明。
32	小児	単	——	甕	N－110°－E	ほぼ水平	底部は試掘溝にかかり欠損、上面も欠損。
33	小児	単	——	甕	N－93°－W	ほぼ水平	口縁側を溝に切られる。
34	小児	単 (と思われる)	——	甕	N－33°－E	ほぼ水平	試掘溝にかかり、口縁側欠損。

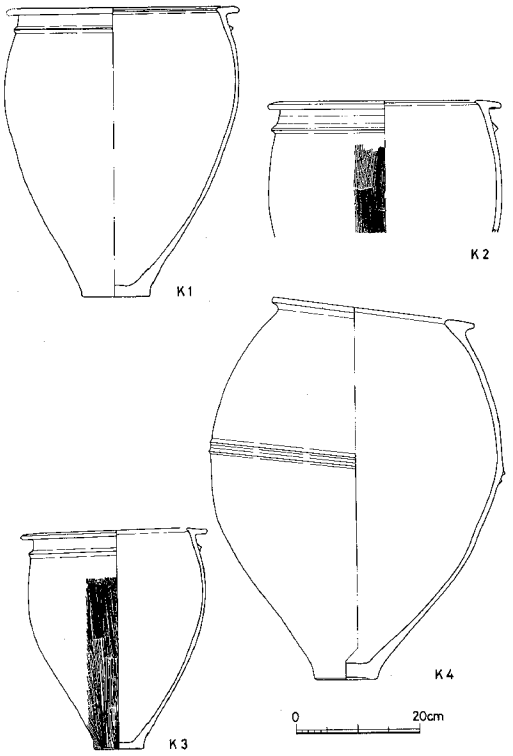


Fig. 121　第1・2・3・4号甕棺実測図（縮尺1／12）

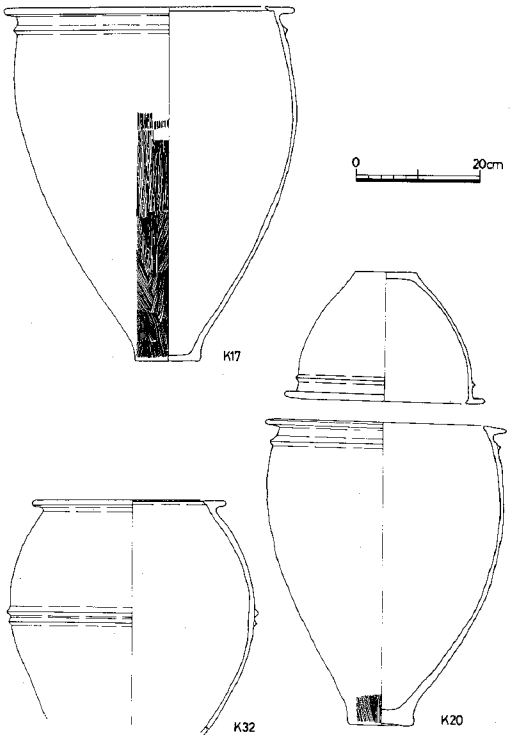


Fig. 122　第5・7・8号甕棺実測図（縮尺1／12）

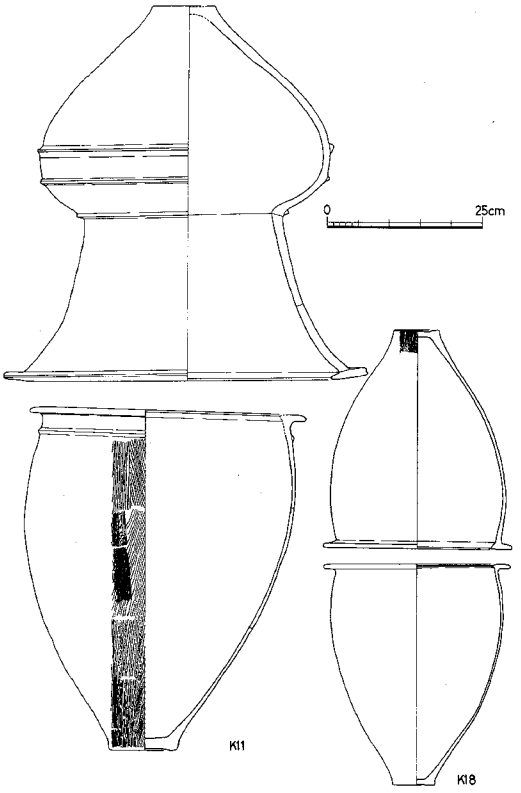


Fig. 123　第11・18号甕棺実測図（縮尺1／12）

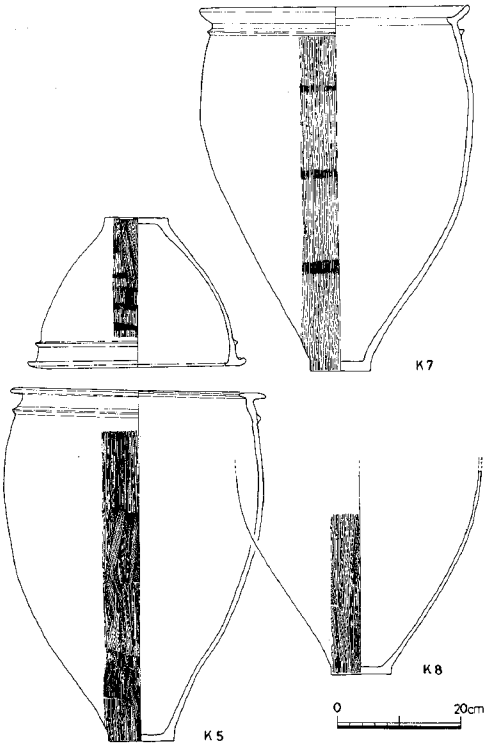


Fig. 124　第17・20・32号甕棺墓実測図（縮尺1／12）

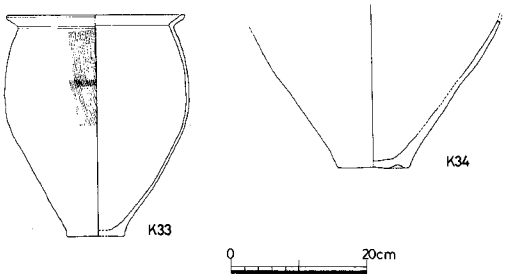


Fig. 125　第33・34号甕棺実測図（縮尺1／12）

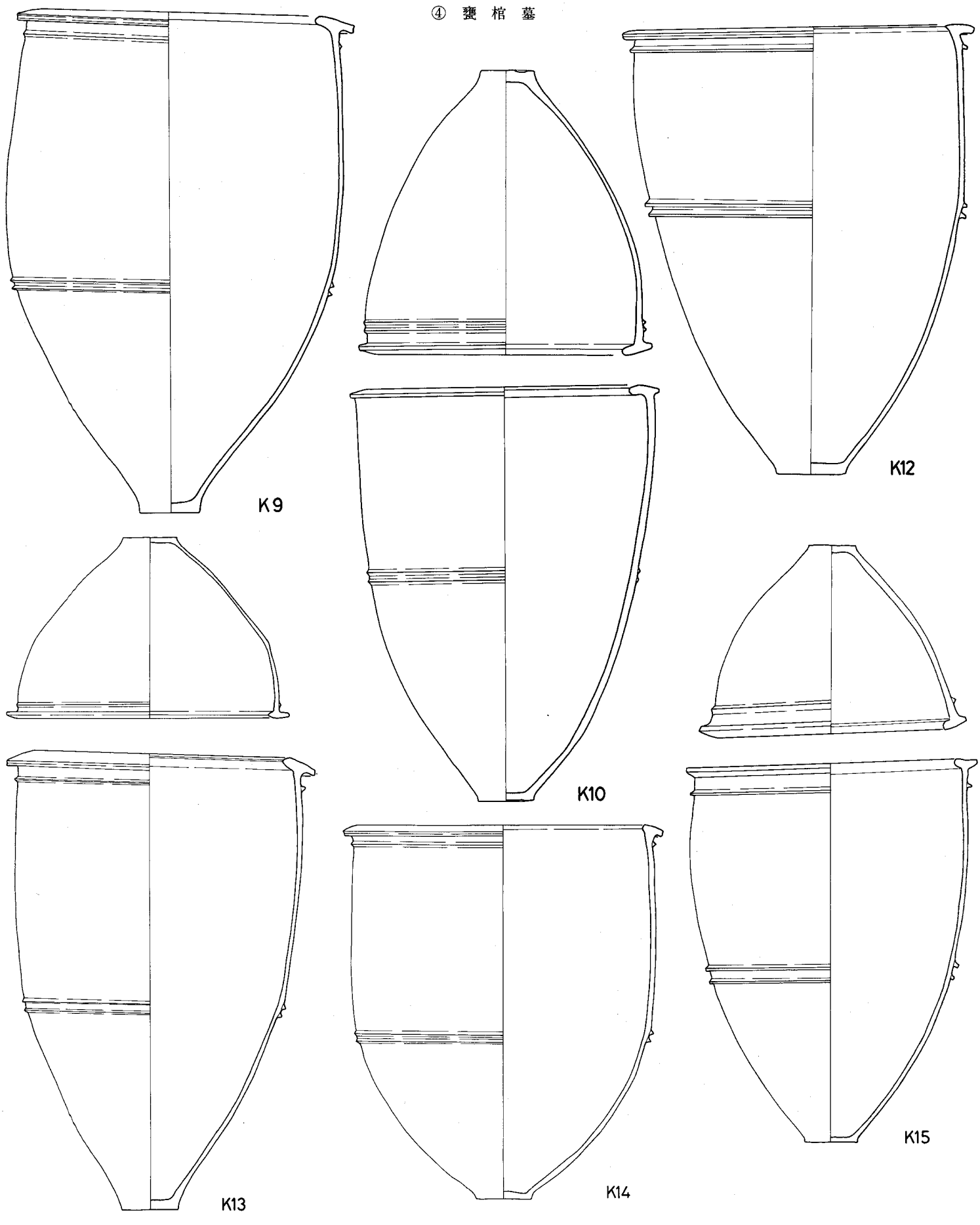


Fig. 126 第9・10・12～15号甕棺実測図（縮尺1／12）

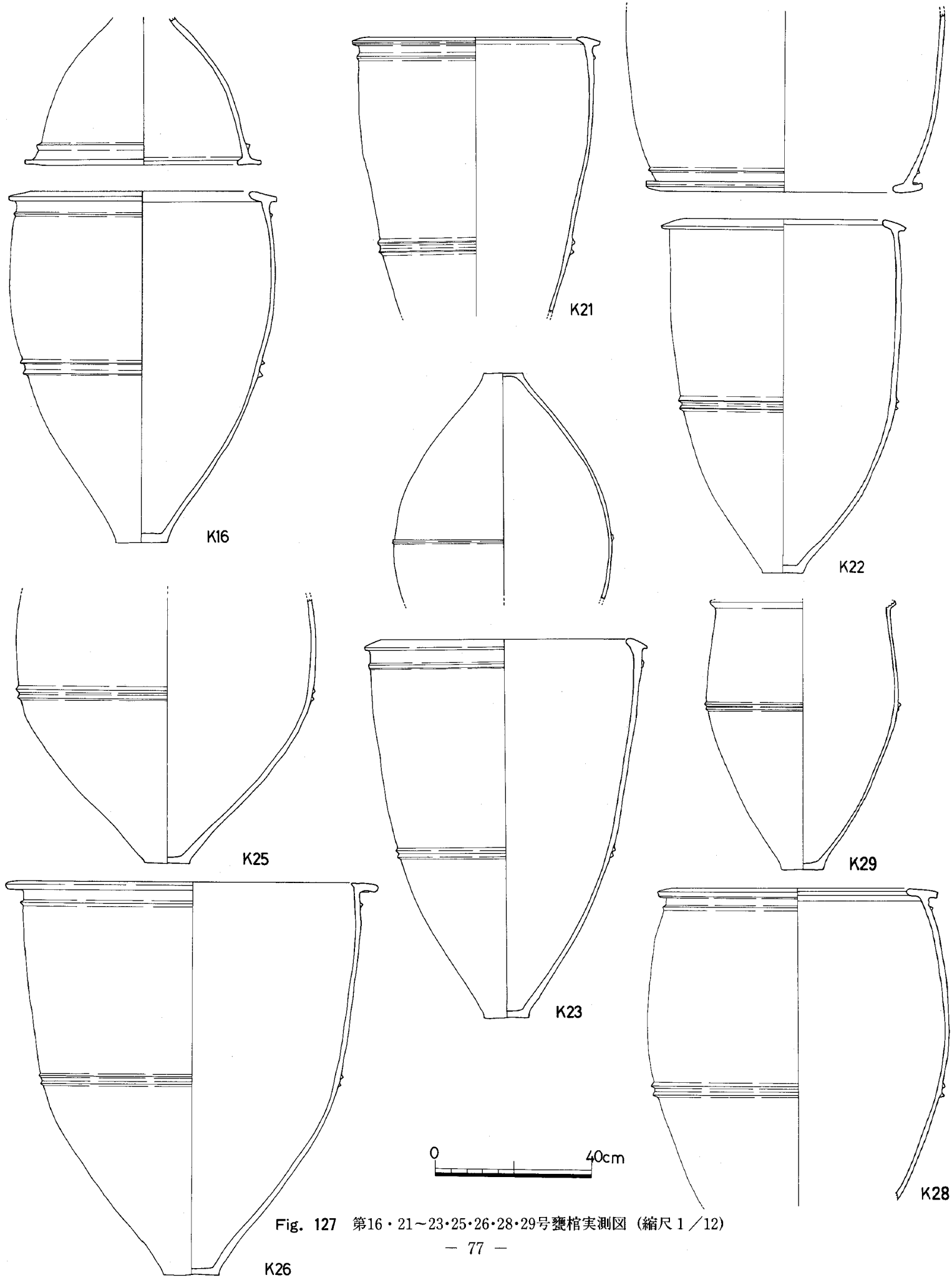


Fig. 127　第16・21～23・25・26・28・29号甕棺実測図（縮尺１／12）

Tab. 28　甕棺観察一覧表

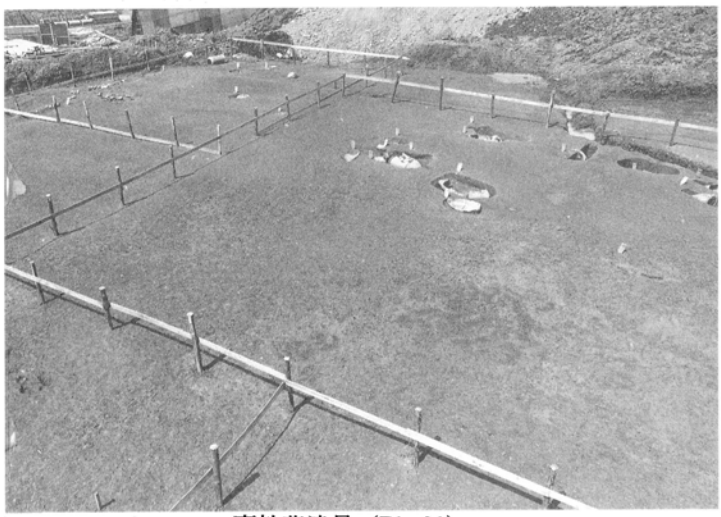
No.	形式	形態	口径(cm)	胴部最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	小児 単棺	甕	37	26.9	10.1	46.7	逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条。 底部端から約0.9cmに巾0.8cmの指ナデによる浅い凹みが廻る。胴部最大径は中位と口縁の中間。口径とほぼ等しい。	器面は磨滅。調整痕の確認不可。	外：淡褐色 内：黄褐色	砂粒と小石(1～5㎜)を多量に含む。	良	口縁部・胴部の一部欠損。
2	小児 おそらく単棺		37.7	37.7			逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条。 口径・胴部最大径等しい。	口縁部～凸帯は横ナデ。 胴部ハケ目。磨滅により不明瞭。	外：淡褐色 内：白黄色	細粒の小石多量きめ、やや粗。	良	10数片の破片。 計測値は復元実測による推定値。
3	小児 合わせ口	甕										口縁部・胴部の一部を除き他は欠損。
		甕	29.2	27.8	7.8	35.5	逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条。 底部端から1cmに巾0.55cmの指ナデによる浅い凹みが廻る。	口縁部～凸帯は横ナデ。 凸帯下～胴部最大径を測る位置まで縦方向のハケ目の上から横ナデ。 それ以下は底部から口縁に向かってハケ目。	明赤褐色	小石を微量に含み、細砂粒を少量含む。	良	
4	小児 単棺	甕	32.7	46.2	10.1	61.7 (一番高い部分)	厚みのある逆L字口縁。胴部最大径を測る位置に三角凸帯2条。底部は端から約1.3cmよりあげ底。	器面の磨滅著しく観察不能。	淡褐色	砂粒と比較的粒の大きい石を多量に含む。	良	口縁部・底部は残存。 胴部欠損やや多い。
5	小児 合わせ口	鉢	45.4		9.9	23.9	内側に若干突出のある逆L字口縁。 口縁下に三角凸帯1条。底端から約0.6cmのところに巾7.7cmの浅い凹み（指ナデ）が廻る。	口縁部～凸帯は横ナデ。胴部はハケ目。内面は底部から放射状に指先でナデ、その上からもう一度ナデ（横ナデ）。	外：黄褐色	砂粒を多量に含む。	良	内面：暗赤褐色の上に黒色粒子が多量に付着して、口縁下帯状に斜めに廻る。発掘時の傾きに一致。底部にも赤褐色の水の溜ったような跡がみられる。(帯状のものより先についたもの。)
		甕	41.1	41.8	10.5	57.3	平坦な丁字口縁。口縁下に三角凸帯1条。 胴部最大径は中位よりやや上方にあり口径とほぼ等しい。	口縁付近剥離のため調整痕の確認不可。胴部は0.8～1cmを単位としたハケ目。	明赤褐色	1～2㎜大の石を多量に含む粗い胎土。	良	
6												破片。復元不可。 詳細不明。
7	小児 単棺	甕	43.4	43.7	9.6	58.8	内弯するく字口縁。口縁下に三角凸帯1条。 胴部最大径は中位より上方。口径とほぼ等しい。	口縁～凸帯は横ナデ。 外面はハケ目。内面ナデ。	明茶褐色	砂粒を多く含みやや粗い。	良	上面を削られ、約½欠損。
8	小児 単棺 (と思われる)	甕			9.6	現存器高 32.5	器壁約6㎜、薄い。	外面ハケ目。単位1cm強。	明赤褐色	1～2㎜大の石を多く含み粗い	良	上部削平。 (口縁～　)
9	成人 単棺	甕	72.6	72.8	13	109.8	外に傾斜する丁字口縁。口縁下に1条、胴部に2条の三角凸帯。胴部の凸帯は中位よりやや下。胴部最大径はほぼ中位。	器面磨滅。調整痕の確認不可。				口縁約¼、胴部上半を約1/8欠損。
10	成人 合わせ口	鉢	64	60	11.8	61.4	外に傾斜する丁字口縁。口縁下に三角凸帯2条。底端から1cmに巾約3cmの凹み（深4㎜）が廻る。	口縁部～凸帯は横ナデ。内面ナデ。他は磨滅して不明。おそらくナデ。	茶褐色	砂粒と小石(1～5㎜)を多量に含む。	良	口縁の一部を欠くが、ほぼ完形。
		甕	66.6	64.4	12.2	91	内側に突出部分の多い丁字口縁。胴部中位に三角凸帯2条。筒形で胴部最大径は口縁下にある。底部やや凹む。	口縁部横ナデ。他は全面磨滅。	赤褐色	4～5㎜大の石を多く含む。	良	
11	小児 合わせ口	壺	58.2	46.4	10	61.5	丁字口縁。頸部と胴部の接合部、肩部、胴部、（最大径を測る位置）に各1条、計3条の三角凸帯。ややあげ底気味。	口縁部および凸帯は横ナデ。 頸部および胴部はヘラ削りもしくはヘラ磨き。（器面磨滅のため不明瞭。）	茶褐色	細粒の小石、2～3㎜大の小石を多量に含む。	良	
		甕	43.5	42.3	10.5	55.3	逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条。胴部最大径は中位より上方。底部ややあげ底。	口縁部と凸帯は横ナデ。 口縁と凸帯の間はハケ目の上から横ナデ。 凸帯下～底部はハケ目。2種類のハケ目。 内面ヘラナデ。	灰茶褐色	微粒の砂を多量に1～2㎜大の石を少量含む。	良	胴部⅓欠損。

Tab. 29　甕棺観察一覧表

No.	形式	形態	口径(cm)	胴部最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
12	成人 単棺	甕	75.4	70.8	14.4	98.2	口唇部がやや下がり気味の逆L字口縁。口縁下に1条、胴部に2条のコ字形凸帯。胴部の凸帯は中位よりやや上方。最大径は口縁と胴部凸帯の中間。	口縁部～凸帯、胴部凸帯は横ナデ。 他は内外面ともにナデ。 磨滅により調整不明の部分が多い。	茶褐色	砂粒を非常に多く含む。キメやや粗い。	良	完形。
13	成人 合わせ口	鉢	70	64.6	13.3	44.5	丁字気味の逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条。最大径は凸帯の上。	口縁部～凸帯は横ナデ。 他は内外面ともにナデ。 磨滅部分が多い。	灰黄褐色	砂粒・1㎜大の石を多量に含む。キメ粗い。	良	底部残存。他は欠損部分が多い。
		甕	75.2	70.2	13.6	103.2	外に傾斜する丁字口縁。口縁下に1条、胴部に2条の三角凸帯。胴部凸帯は中位よりやや下方。筒形を呈す。	口縁部～凸帯、胴部凸帯は横ナデ。 他は磨滅して不明。おそらくナデ。	淡赤褐色	砂粒・2～3㎜大の石を多量に含む。	良	胴上部¼欠損。
14	成人 単棺	甕	(86.8)	(82)	13.4	(92)	やや外に傾斜し、厚みのある逆L字口縁。口縁下に1条、胴部に2条の三角凸帯。 胴部凸帯は中位よりやや下方。	口縁部～凸帯、胴部凸帯は横ナデ。 他は磨滅。	淡黄褐色	非常に細かい粉末状の砂、微量の雲母。キメ細かく他の甕棺と比べ良質。	良	残存部分少なく復元はかなり正確さを逸している。全体にもっと内傾するのではないか。計測値は想定。参考にできるのは底部の直径・口縁部・凸帯の形態。
15	成人 合わせ口	鉢	65.8	60.6	11.2	47.2	外に傾斜する丁字口縁。 口縁下に三角凸帯1条。	口縁部～凸帯は横ナデ。 他は内外面ともナデ。	明赤褐色	2～3㎜大の石を多く含み粗い。	良	
		甕	70.6	67.4	12.6	94.2	中央が若干凹む傾斜のない丁字口縁。 口縁下に三角凸帯1条、胴部中位よりやや下にコ字形凸帯2条。	器面の磨滅著しく観察不能。	灰褐色	細粒の石を多く含む。キメ非常に細かい。	良	歪みがでて楕円形を呈し、口縁部の短径は59.7cm。
16	成人 合わせ口	鉢	60.2	54.6		現存器高 38.4	中央がわずかに凹む丁字口縁。 口縁下に三角凸帯1条。	口縁部～凸帯は横ナデ。 磨滅して不明瞭ではあるが一部にハケ目の痕跡が残る。 内面はナデ。	淡褐色	砂粒と2～3㎜大の石を多量に含む。	良	底部欠損。胴部½強欠損。
		甕	67.8	67.4	13	90.8	外に傾斜し、内側への突出部分が大きい丁字口縁。口縁下に1条、胴部に2条の三角凸帯。胴部の凸帯はほぼ中位に位置する。	口縁部～凸帯、胴部凸帯は横ナデ。 他は磨滅。調整痕不明。ナデか？	淡褐色	砂粒・大きいもので径5㎜の石を多量に含む。	良	口縁から⅔の位置まで。 ½強欠損。
17	小児 単棺	甕	46.7	45.1	10.5	57.3	平坦な丁字口縁。口縁下に三角凸帯1条。 底部端よりやや内側指の押痕が廻る。胴部最大径は中位より上方に位置する。	口縁部～凸帯は横ナデ。凸帯下はハケ目。磨滅して不明瞭。底部付近目が細かくなる。 内面はナデ。	淡赤褐色	微粒の石砂粒を少量含む。キメやや粗い。	良	
18	小児 合わせ口	甕	30.5	28.2	7.4	35.5	平坦な逆L字口縁。凸帯なし。底部ややあげ底。 胴部最大径は口縁と中位の中間。	口縁部横ナデ。胴部はハケ目と思われるが底部付近に残るのみ。他は磨滅。内面はナデ。	淡黄赤色	砂粒と大きいもので3㎜大の石を多量に含む。	良	
		甕	30.1	27.8	6.8	35.4 (推定)	平坦な逆L字口縁。凸帯なし。 胴部最大径は口縁と中位の中間。	口縁一部に表面が残る。横ナデ。 他は剥離。	淡黄赤色	砂粒と1～2㎜大の石を多量に含む。	良	口縁と底部が接合せず図面を合成。
19	小児											上面を削られ、胴部の一部分の他は欠損。 丹塗り。
20	小児 合わせ口	鉢	32.4	28.8	9.9	21	平坦で内側にやや突出した逆L字口縁。 口縁下に三角凸帯1条。	口縁部～凸帯は横ナデ。 他は磨滅して不明。	淡褐色	砂粒と細かい石を多く含む。	良	口縁部と底部が接合せず図面を合成。
		甕	38.7	38	10.3	(推定) 49.5	やや外に傾斜する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条。底部あげ底気味。厚い。	口縁部～凸帯は横ナデ。胴部は底部付近にハケ目が残るが他は磨滅。 内面はナデ。	外：茶褐色 内：黒灰色	微粒の砂粒を多量に含む。	良	
21	成人 単棺	甕	(63.3)	(60)		現存器高 71.6	外に傾斜する丁字口縁。口縁下に1条、胴部に2条の三角凸帯。	器面は磨滅。調整痕不明。	外：淡黄赤色 内：淡褐色	砂粒・1～2㎜大の石をやや多く含む。	良	約5/6欠損。底部なし。 直径・傾き等明瞭でない。 計測値は復元による推定。

Tab. 30　甕棺観察一覧表

No.	形式	形態	口径(cm)	胴部最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
22	成人合わせ口	甕	71				外に傾斜する丁字口縁。口縁下に三角凸帯1条。	口縁部～凸帯は横ナデ。胴部は磨滅。内面はナデ。	淡褐色	砂粒・比較的粒の大きい石を多量に含む。	良	口縁が½。下部は若干残存するのみ。底部欠損。
		甕	63.4	60	10.8		外に傾斜する丁字口縁。胴部中位よりやや下方に三角凸帯２条。	口縁部横ナデ。胴部は磨滅。調整痕不明。	赤褐色	細かい砂粒を多く含む。	良	
23	成人合わせ口	甕		57	10.1		口縁部打ち欠き。胴部最大径を測る位置にコ字形（M字気味）凸帯１条。	器面は磨滅。調整痕不明。	黄褐色	砂粒・２～３㎜大の石を多量に含む。	良	
		甕	72.4	69.7	11.3		外に傾斜し、内外への突出が少ない厚みのある丁字口縁。口縁下にコ字形（M字気味）凸帯１条。胴部中位よりやや下に三角凸帯２条。胴部最大径は口縁直下。底部端から約2.4cmに巾1.6cmのごく浅い凹みが廻る。	口縁部～凸帯、胴部凸帯は横ナデ。他は内外面ともナデ。	淡赤褐色	細粒の石粉末状の砂粒を含む。	良	
24												胴部の一部を除き他は欠損。詳細不明。
25	成人単棺	甕		75.6	11.3		胴部最大径を測る位置よりやや下方に三角凸帯２条。	凸帯は横ナデ。他は不明。	灰黄褐色	細粒の石を含む	良	口縁部欠損。胴部約⅓欠損。
26	成人単棺	甕	(95)	(86.4)	14		平坦で口唇部がわずかに外傾する逆Ｌ字口縁。口縁下に１条。胴部ほぼ中位に２条の三角凸帯。	口縁部、口縁下凸帯、胴部凸帯横ナデ。口縁部と口縁下凸帯の間は縦方向のナデの後横ナデ。他は内外面ともナデ。	淡赤褐色	１㎜大の石微粒の砂粒を少量含む。	良	½強欠損。傾きに疑問あり。径はもう少し小さくなると思われる。測定値は復元による。
27												小破片。詳細不明。
28	成人単棺	甕	68.6	73.8			若干外に傾斜する丁字口縁。口縁下に１条、胴部に２条の三角凸帯。胴部の三角凸帯は胴部中位あたりに位置していると思われる。	器面磨滅。調整痕不明。	淡茶褐色	砂粒・小石を多量に含む。	良	
29	小児合わせ口						（現場の実測図によると）逆Ｌ字口縁。口縁下に三角凸帯１条。					復元不可。
		甕	45.3	46.6	10.4	65.6	口縁は破片１片を残すのみで明瞭でないが、汲田式のような形態をなすものと思われる。胴部最大径を測る位置に三角凸帯２条。	器面磨滅。調整痕不明。	薄茶色	砂粒・小石を多量に含む。	良	上面を削られ残存部分少ない。
30	縄文											
31												破片。詳細不明。
32	小児単棺	甕	31.1	39.3		現存器高 37.1	平坦な逆Ｌ字口縁。胴部最大径を測る位置に三角凸帯２条。	口縁部と凸帯横ナデ。胴部磨滅。内面ナデ。	淡赤褐色	砂粒を多量に１～３㎜大の石もやや多く含む。	良	底部欠損。胴部約½欠損。
33	小児単棺	甕	25.7	26.5	8.1	32.5	く字口縁。凸帯なし。胴部最大径は中位よりやや上方。	口縁部横ナデ。胴部はハケ目。上半に残る。下半は磨滅。内面磨滅。調整痕不明。	赤褐色	細粒の石をやや多く、砂粒を少量含む。	良	底部に穿孔のあった可能性あり。
34	小児単棺（と思われる）	甕			10.6	現存器高 21.5	底部に巾２㎝、深さ0.5cmの凹みが廻る。	底部端から凹みはナデ。胴部の底部付近にハケ目の痕跡。他は磨滅。調整痕不明。	淡褐色 底部は黒褐色	砂粒を１～３㎜大の石を多量に含む。	良	口縁部・胴部上半欠損。



甕棺墓遠景（Ph.20）

甕棺墓遠景（Ph.21）

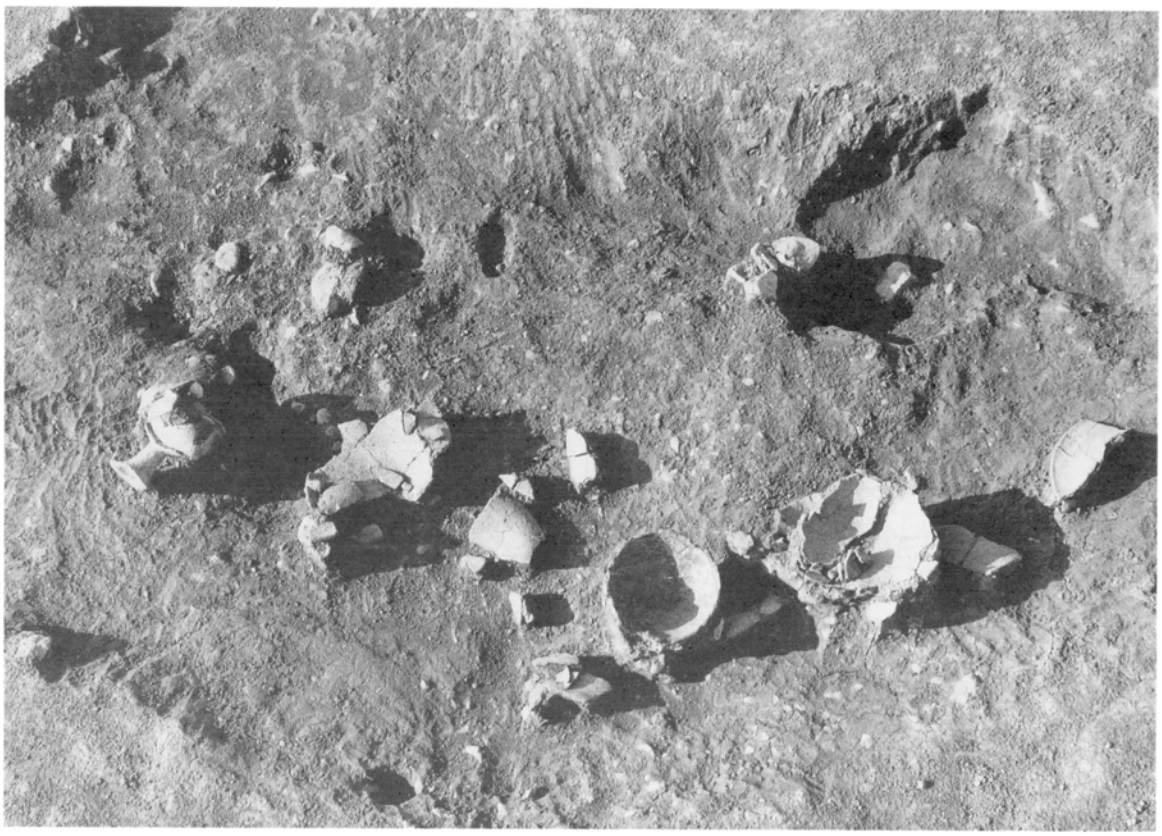


Fig. 128 祭 祠 遺 構 (Ph.22)

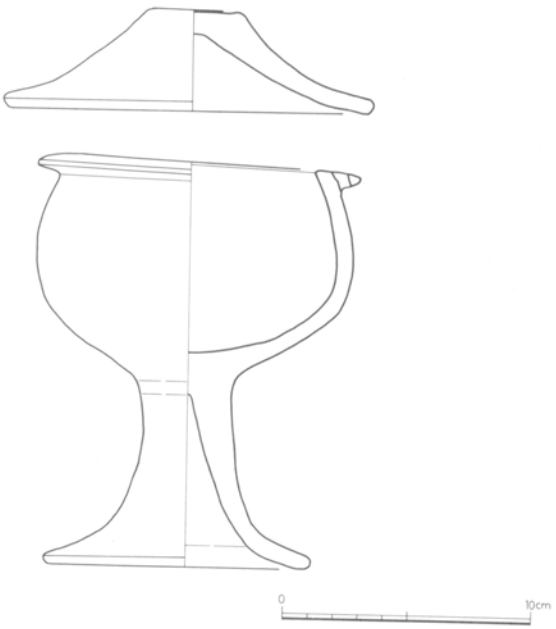


Fig. 129 祭 祠 土 器 実 測 図 (縮尺1／3)

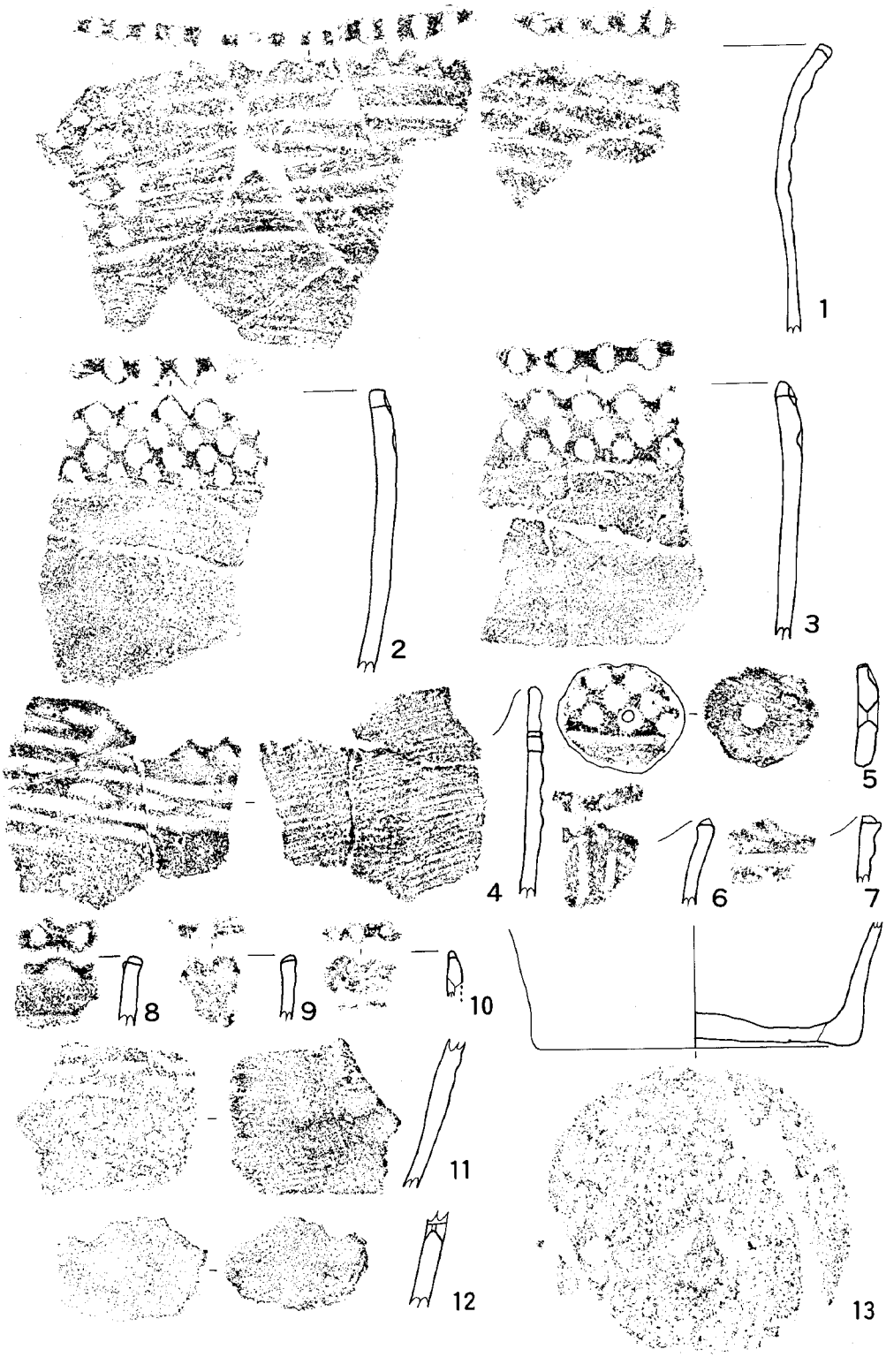


Fig. 130　P１・K30内出土土器実測図と拓影（縮尺１／３）

Fig. 130-2 出土した縄文土器 (Ph.23)

8．その他の遺物

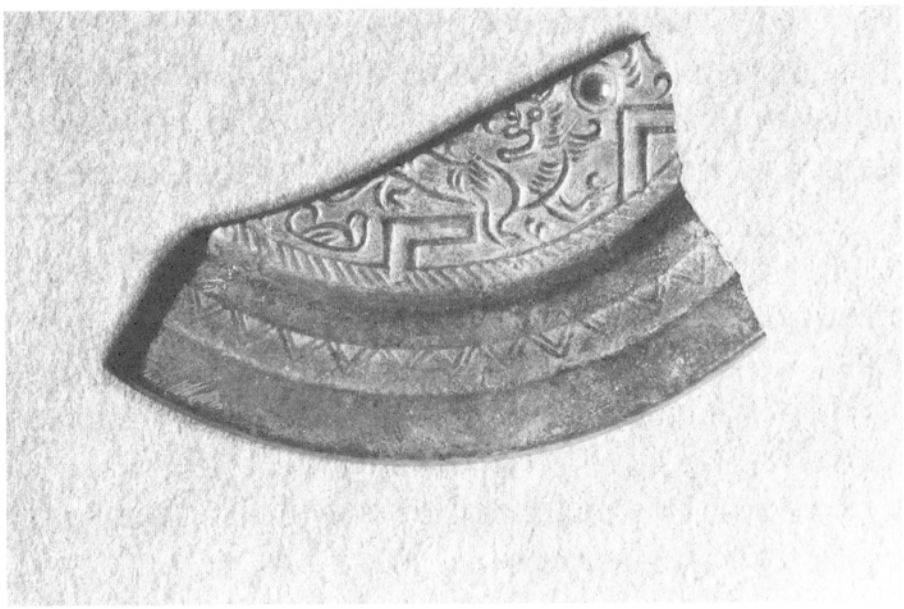


Fig. 131 方格規距鏡片 (Ph.24)

ナイフ形石器
(Fig. 132)
剝片の側縁片側を刃部として利用し、側縁片側を表裏両面から細かく剝離して、刃部にほぼ直角な面をもつように調整している。石材は黒耀石である（1）。

縄文式土器
(Fig. 130)
胎土に滑石の粒子を多量に含ませ表面は非常に滑らかな肌触りを有つ。全て破片の集合体で検出されている。口縁部が外半し口唇部に波状に小さな棒で凹凸を施するもの（1）、直立する口縁を口唇部で少々内弯させ、口縁に指押による凹状の圧痕を有するもの（2、3、4）。底部は平底である（13）。胴部全体は横方向に条痕が施されている。また口縁部を利用し中央部を穿孔された円形の紡錘車（5）も出土している。土器様式は縄文時代前期の轟式土器ないしは曽畑式土器に比定される。出土地点は第IV地点弥生時代甕棺主体の共同墓地K30土坑に遺存した一括遺物である。

石　鏃
(Fig. 132)
全て打製無茎石鏃である。基部を大きく抉り側縁基部とも表裏両面を剝離して調整したもの（2・3）、基部の抉りは小さく、雑ではあるが側縁基部と表裏両面を剝離調整するもの（4～9）、側縁を長く保ち先端を鋭角に作り出し、さらに側縁を押圧剝離で鋸歯風に調整したいわゆる鋸歯鏃（10、11）、先端を鋭く保ち、基部が抉りのない直線で三角形を保ち、表裏を丁寧に剝離調整するもの（15）、原料とした剝片の摂理面片側を生かし片面のみを剝離調整したいわゆる剝片鏃（12～14、16）、石材からくる加工の難しさから剝離調整が雑なもの（17～19）等々がある。石材は17から19が安山岩質系と思われるが他は黒耀石である。使用年代は縄文時代前期から後期に比定される。出土地点は遺跡全域である。

弥生時代
石　斧
(Fig. 133)
石斧は4点あって打製のもの（1、2）、磨製の蛤刃状のもの（3～5）がある。1は弥生時代の住居址から出土しているが形状が縄文時代的であるところから今後の検討課題である。

石 包 丁
(Fig. 134)
石包丁のほとんどは第II地点弥生時代後期集落地点ないしは住居址内出土である。後期は鉄器の時代である。従来石包丁には穂刈具の機能が与えられているが、この時代まで残存することは第III地点の方形周溝遺構内に見る石包丁の存在が祭祀具的であるところから、この時代の石包丁の機能の再考が図られよう。

砥　石
(Fig. 136
～138)
砥石は20点検出され、主に第II地点の住居址に集中している。砂岩質のものが粗研ぎ用で、硬質粘板岩質のものが最終研磨用に使用されたと考えられる。石材等の観察については後日の課題とする。砥石の多量な出土は弥生時代後期鉄器社会の定着性を想わせる。

ガラス玉
(Fig. 130)
16点の出土を見る。径2.8ミリメートルから7.5ミリメートルまで大小いろいろある。色は明青色、明青緑色、明褐色と多様である。全て第II地点住居址内出土である。

金属器
(Fig. 139)
10は青銅製の鍬先か鋤先の破片と思われる。2は鉄製の鍬先、9は鉄斧、7は鉄鏃で、他は鉄製工具であるが製品名の判断はつかない。

銅鏡片
(Fig. 131)
方格規矩鏡片である。幅が3.5センチメートル、長軸6.2センチメートルを測る。厚さは外縁で4.0ミリメートル、内区で2.2ミリメートルを測る。外縁に凹帯双線三角文を配し、内区に白虎の姿が見える。内区白虎を折る長辺端は研磨されている。出土は第II地点、遺構は覆土中で不明である。

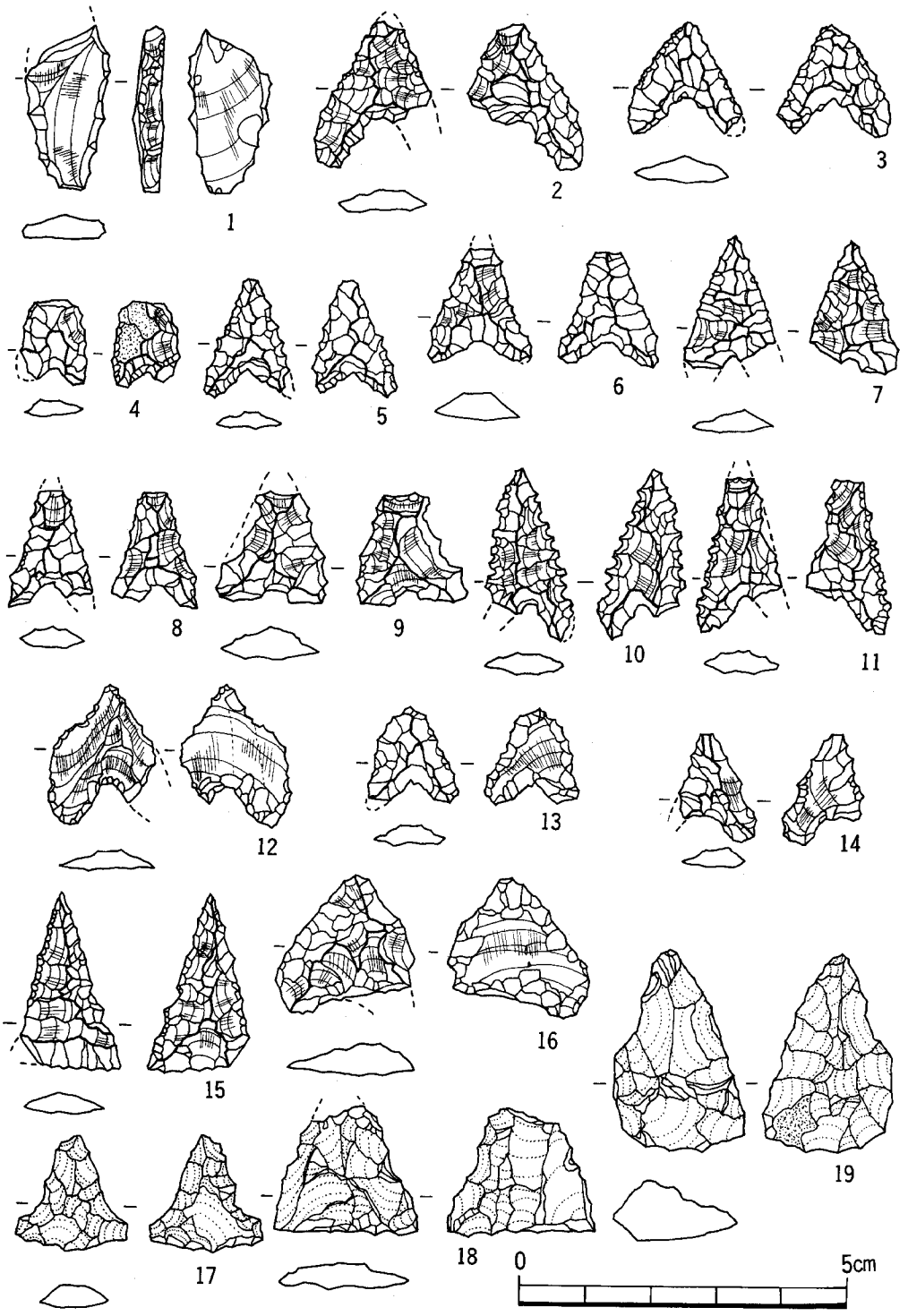


Fig. 132　ナイフ形石器・石鏃実測図（縮尺１／１）

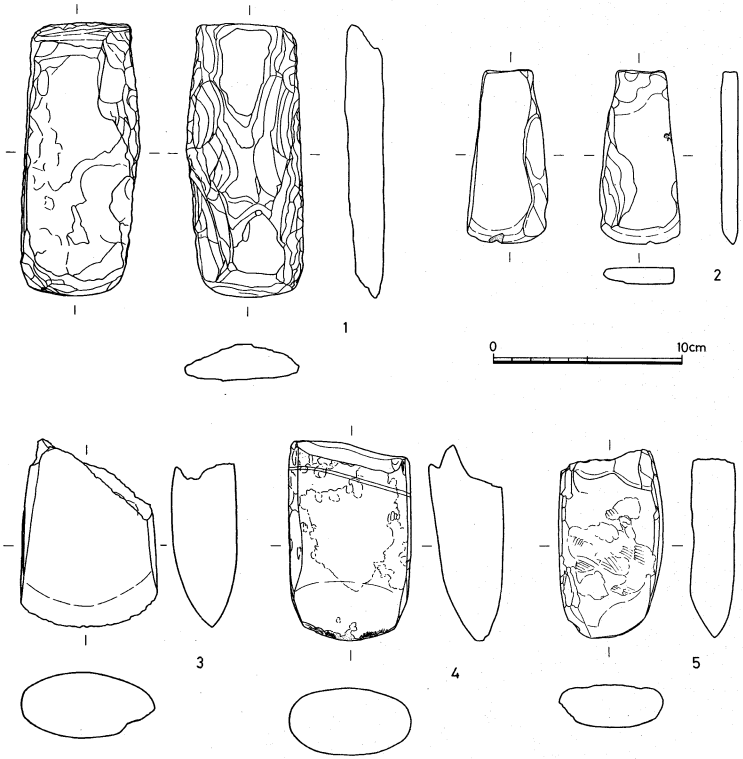


Fig. 133 石斧実測図（縮尺1/4）1・4・5(J3)
2（祭祠遺構とK30の中間）、3（環濠）

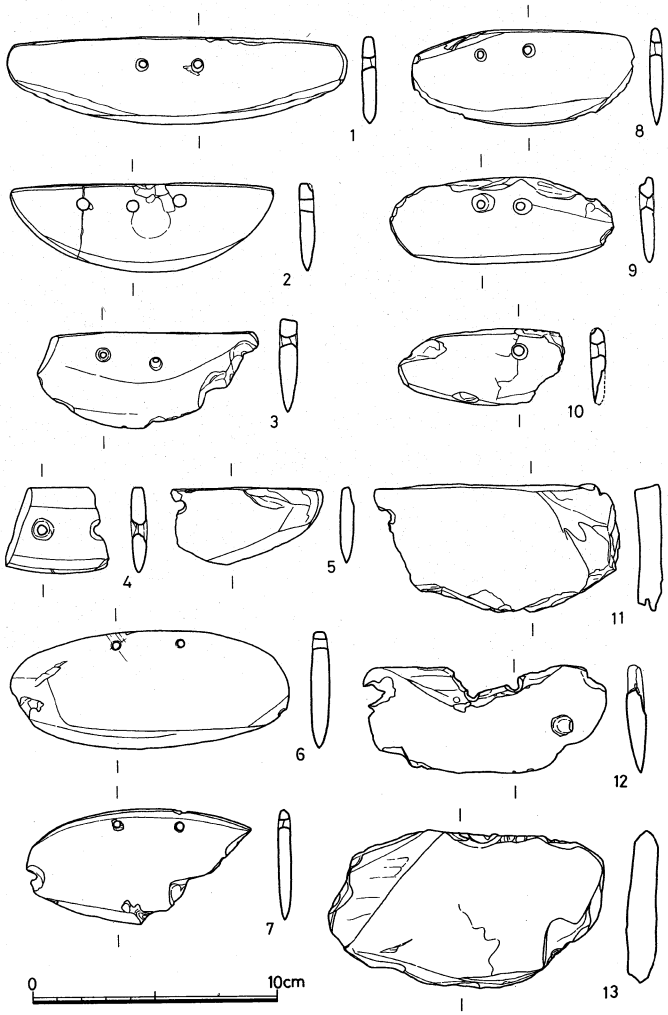


Fig. 134 石庖丁実測図（縮尺1/3）1(J37)、2(J22)、3(第II地点Pit内)、4・5(J15)
6(GS-11西側)、7(表採)、8(J21)、9・12(J17)、10(J32)、11(J29)、13(C-2)

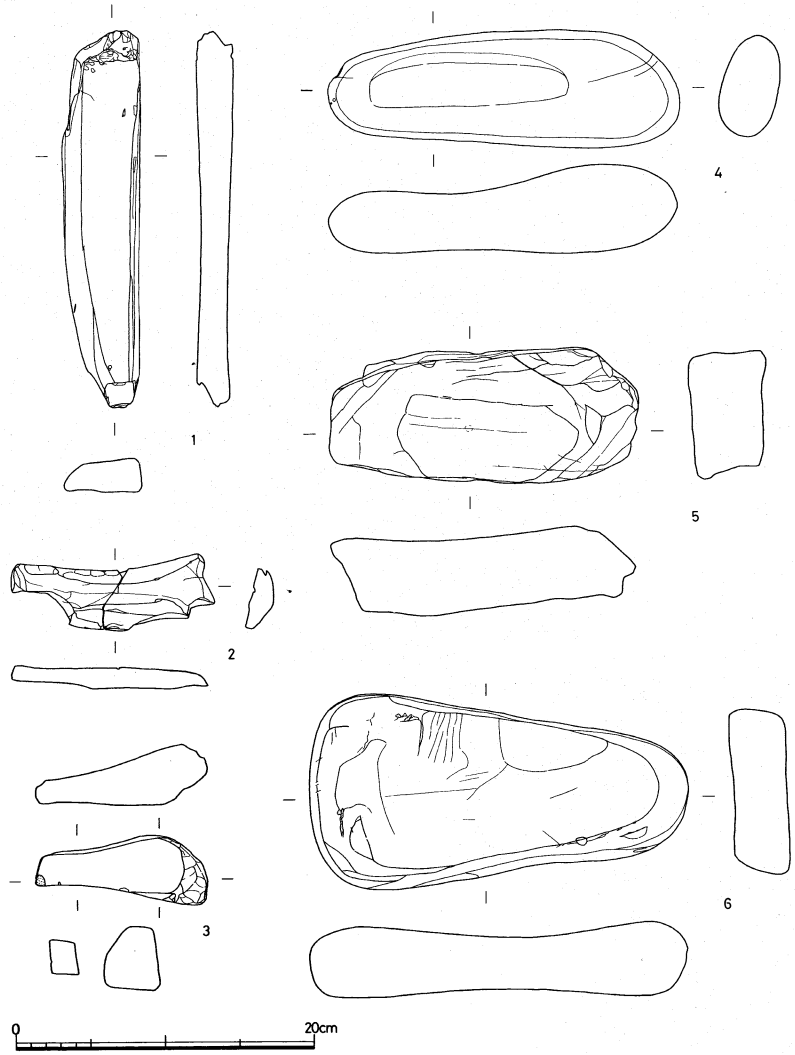


Fig. 135 第II地点出土砥石実測図（縮尺1/5）
1・2(J25)、3・4(J31)、5(J32)、6(J33)

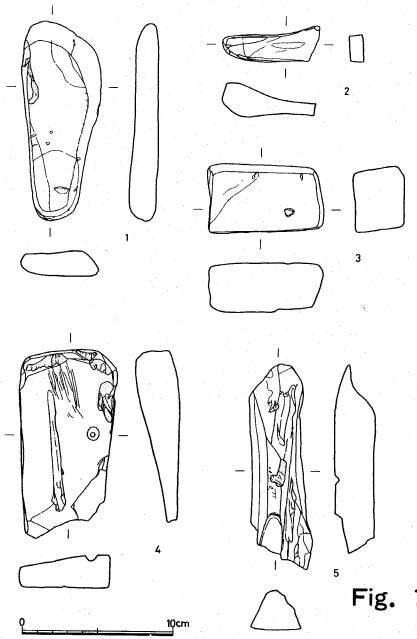


Fig. 136 第II地点出土砥石実測図（縮尺1/5）
1・2(J10)、4・5(J26)、3(J29)

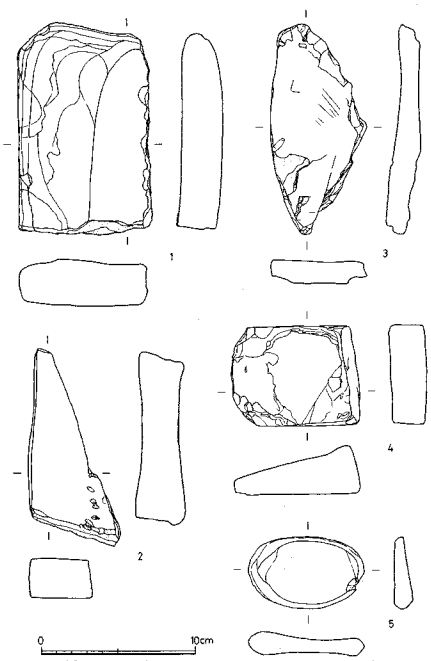


Fig. 137　第II地点出土砥石実測図（縮尺１／５）
1(環濠),2(J28),3(J37),4(E-9区),5(ｎ出土・第IV地点)

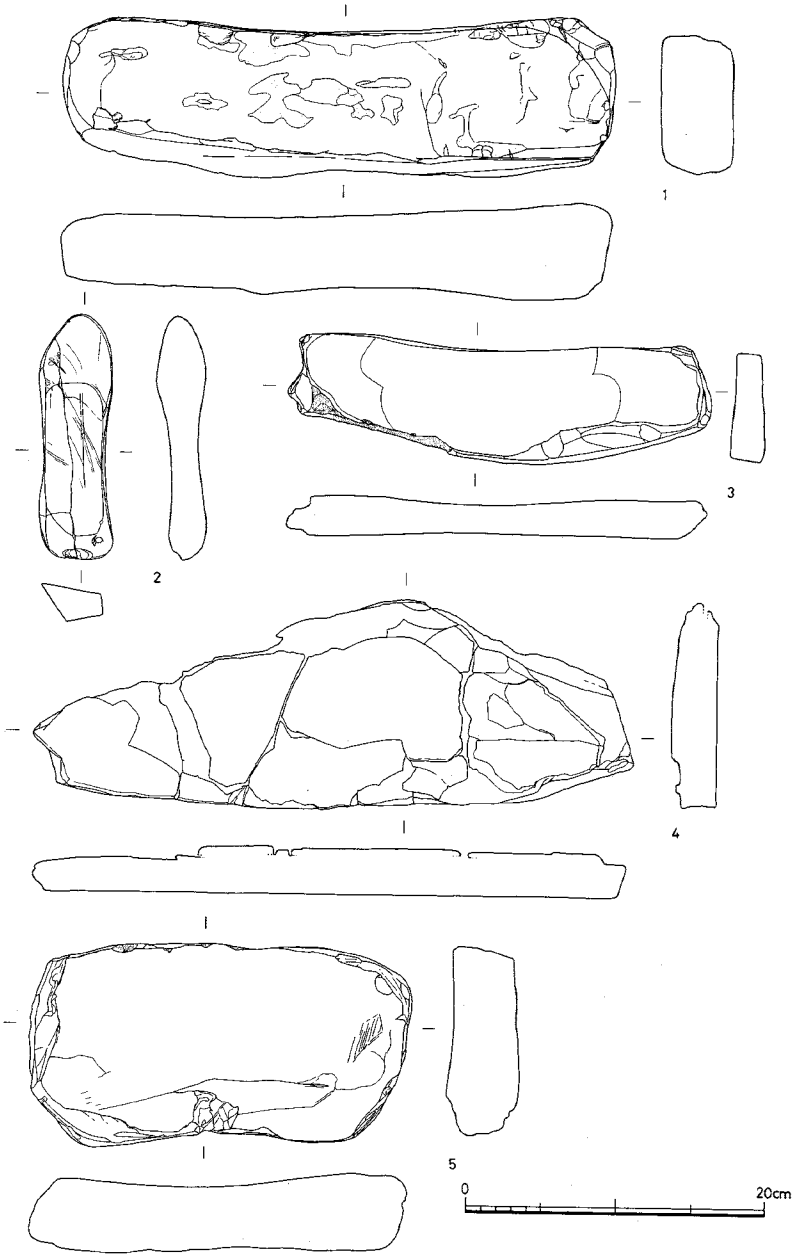


Fig. 138　第Ｉ・II地点出土砥石実測図（縮尺１／５）
1(J1),2(J2),3(J3),4(J12),5(J17)

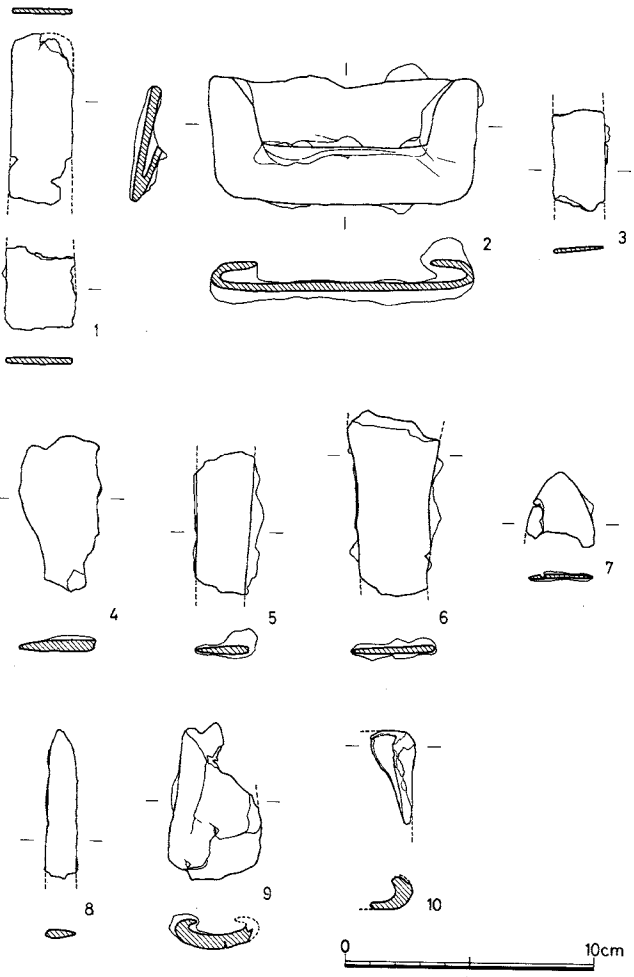


Fig. 139　鉄器・青銅実測図（縮尺１／５）

Tab. 31　ガラス玉計測表

No.	出土住居址	径 (mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	材質	色	備考	No.	出土住居址	径 (mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	材質	色	備考
1	J15	4~4.5	4.2	1.0~20	ガラス	明青色	断面不整五角形	9	J17	4.5	4.0	2.5	ガラス	明青色	
2	〃	3.5~4.0	2.5	1.0	〃	〃		10	J18	4.0~5.0	3.9	1.5	〃	〃	
3	〃	3.5~3.9	1.2~1.5	1.5	〃	〃		11	〃	6.5~7.5	5.0	2.0	〃	〃	
4	〃	4.0	3.5	1.0	〃	明緑青色		12	J27	5.0~5.2	4.2	1~1.8	〃	〃	
5	〃	3.2~4	2.0	1.0	〃	明青色		13	〃	5.0~5.8	3.8	2.0	〃	〃	
6	J17	4.5	4.1	1.5	〃	〃		14	〃	4.5	3.5	1.5	〃	〃	
7	〃	4.5~5.5	5.5	3.5	〃	明褐色	断面不整四角形	15	〃	4~4.2	2.5~3.2	1.5	〃	明緑青色	
8	〃	2.8~3	1.5	1.0	〃	〃		16	〃	4.5	3.1~3.7	1.7	〃	〃	両端が切られる。孔と平行に細線。

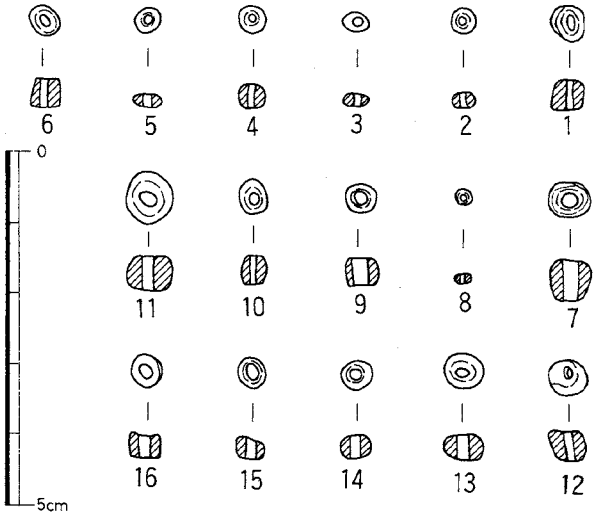


Fig. 140　第II地点住居址内出土ガラス玉実測図（縮尺１／１）
1~5(J15),6~9(J17),10,11(J18),12~16(J27)

作業員のみなさん（Ph.25）

後　　記

遅きに失した感のある蒲田水ヶ元遺跡の発掘調査報告書の執筆を終え安堵しております。

振り返り見まするに、昭和50年（1975）当時、福岡市教育委員会の発掘調査体制は発足から7年目を迎えておりましたが、開発側の埋蔵文化財の発掘調査の要請に充分答えられる程整備されておりませんでした。

事前協議の席で開発側からの市教委の行政能力に対する厳しい糾弾に等しいお呵りを受けた事を昨日の出来事のように憶えております。

先述の如く調査会を発足させる訳ですが、当時福岡市職員の採用待ちで熊本大学考古学を卒業された中野和夫さんに試掘調査をご依頼し、熊本大学の考古学研究室の学生さんにもお手伝い戴いた訳であります。学生さんには本調査までお付合い戴く訳ですが、夏休みに行なわれた熊本大学主催の「南島発掘調査」を差し置いて本遺跡の調査にご尽力頂きました。白木原教授にご迷惑をおかけしました。慎しんでお詫び申し上げます。

調査会発足にあたって、大変なご指導を戴いたのが、当時の福岡県文化課長、今は亡き藤井功さんでありました。藤井さんは東京教育大学出身で、ご紹介戴いたのが、後輩の松浦宥一郎さんです。松浦さんは桐朋学園大学の講師の身分でしたが、東京の教え子を派遣して戴きました。藤井さんは勤務ご多忙な中、よく現場に足を運んで、ご指導戴きました。厚い胸にくっついたあの笑顔が今も脳裏に焼き付いて離れません。本当に感謝の念で一杯であります。合掌。

兎に角、人と人の出会い、人と人のつながりが、調査会を発足させ今日を迎えた訳であります。調査を支えてくれた教委関係者、調査員、作業員のみなさん、本当にご指導ご協力ありがとうございました。この報告書をネタに一杯酒盃を交えましょう。未だ青春忘れ難き（折尾記）。

付録１．香椎Ａ遺跡第１次

香椎宮の西北西0.5キロメートル、香椎川の北台地に本地点はある。

本遺跡の調査原因は個人の共同住宅建設にあって、調査費は発掘調査費用を原因者、整理報告書の費用は原因者の負担能力を超越したものであるところから行政の責任において予算化することとし、蒲田水ヶ元の末尾を借用することとした。

本地点の調査面積は幅約12メートル、長さ約44メートルの約528メートルである。本遺跡は香椎川の北側に位置し、香椎川の微河岸段丘の台地に形成される。本遺跡の北端に区画の意企のもとに設けられたと思われるほぼ東西の溝が見え、その溝と香椎川の間に集落の痕跡を残す柱穴群が存在する。柱穴群を建物として復元するために組織的に拾おうするが困難を窮め、建物の軒数は把握できない。

遺跡から出土する遺物は土師器皿がその大多数でその中に少々中国産の輸入陶磁器が含まれる。土師器皿から見て、本集落の営まれた時代は12世紀代であろう。

本遺跡の性格は香椎宮の門前町として認識される。香椎宮の創建神亀元年（724）以来、中央の庇護のもと、権勢を誇ったと思われるが、本遺跡の有り方はその末端の姿を表しているものであろう。

本遺跡の類似遺跡は「香椎Ａ２次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第317集大庭康時編があって、遺跡の報告はもとより香椎宮の沿革についても触れられている。参照されたい。

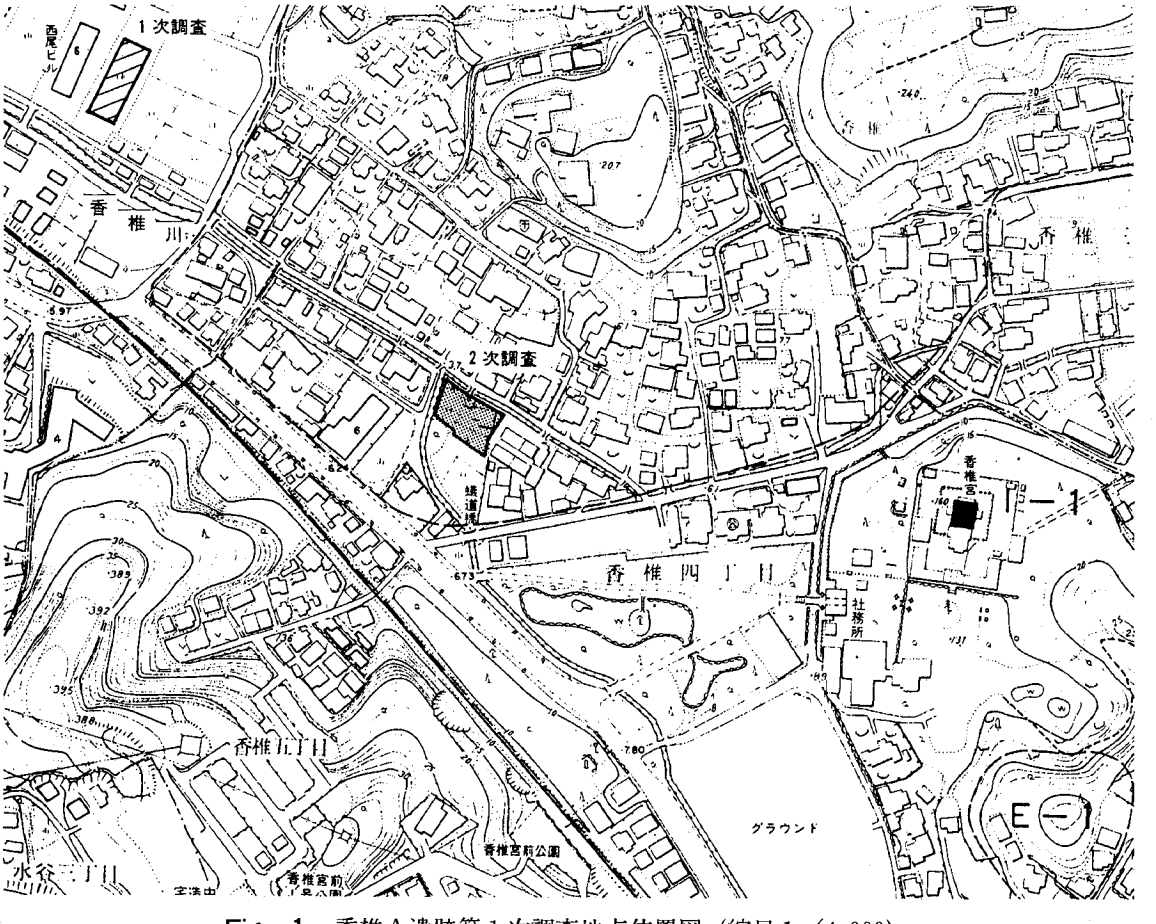


Fig. 1　香椎Ａ遺跡第１次調査地点位置図（縮尺１／4,000）

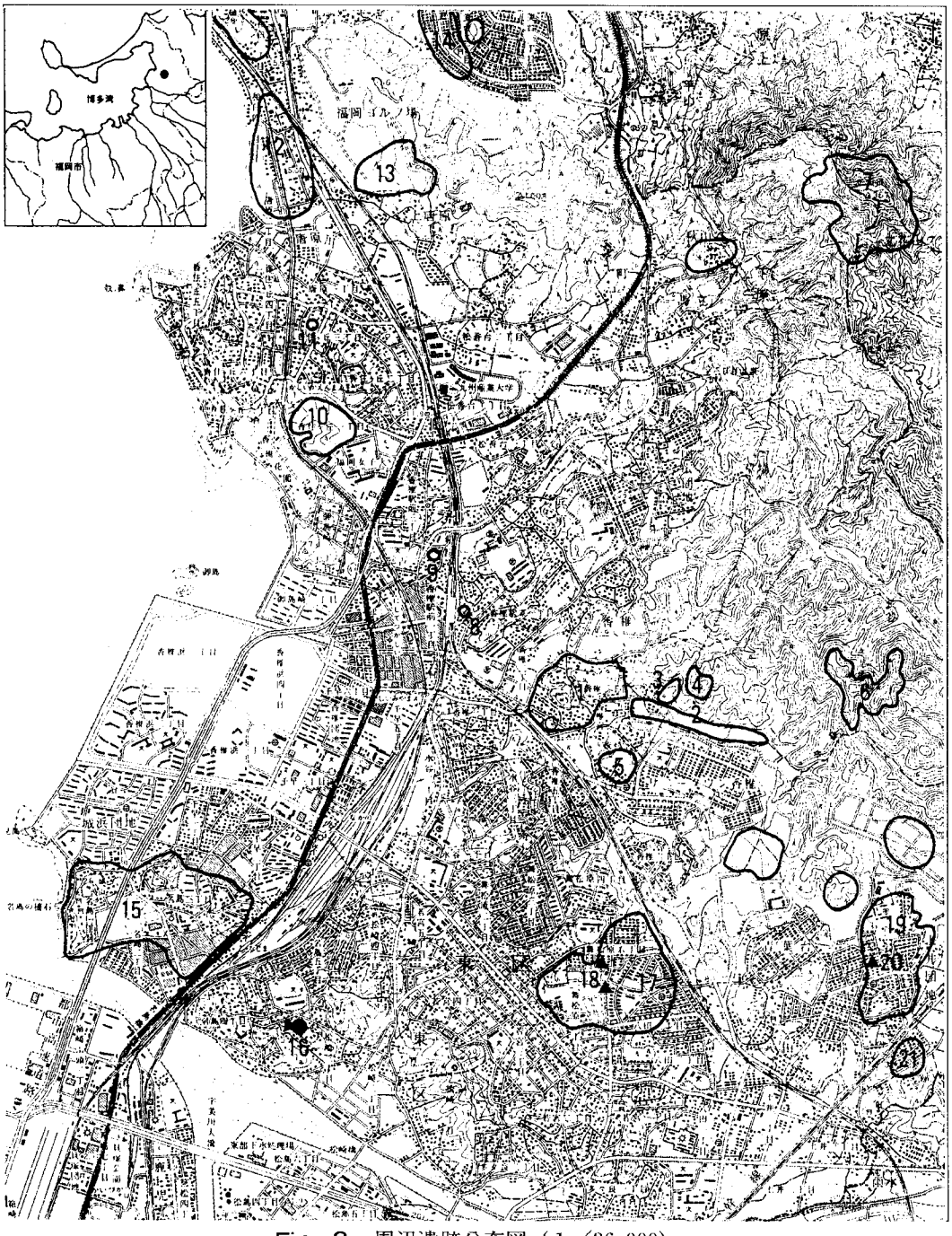
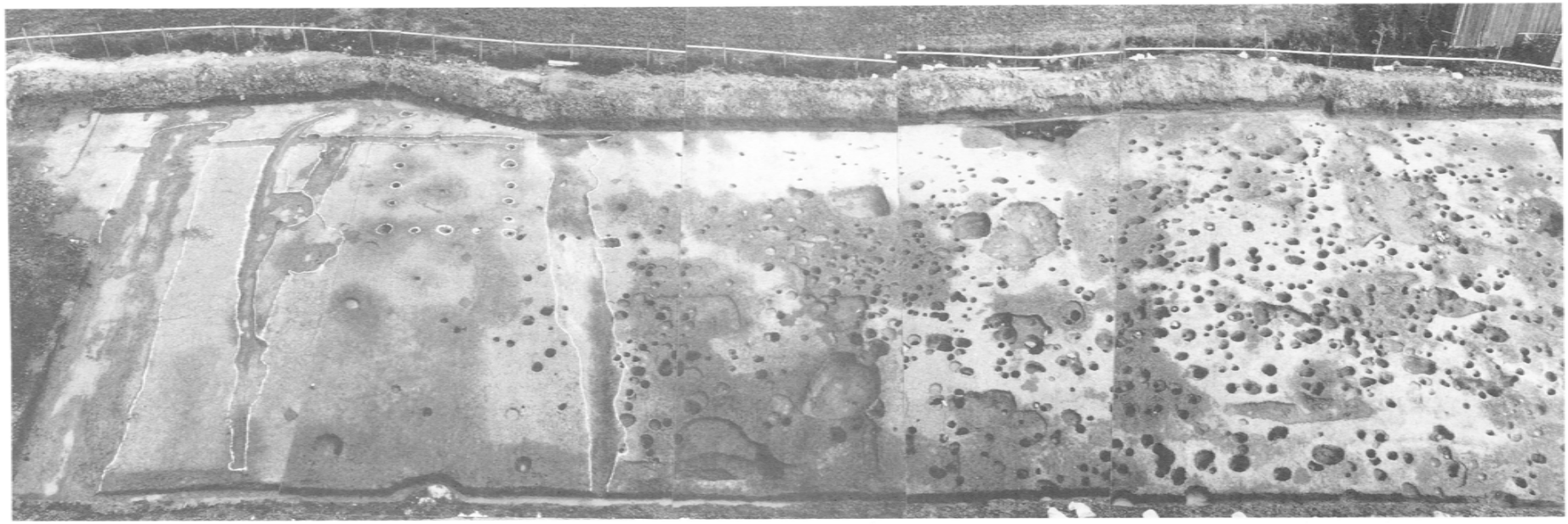
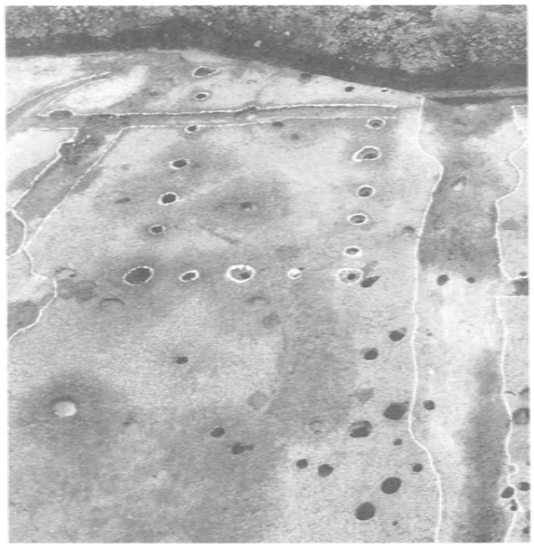


Fig. 2　周辺遺跡分布図（1／36,000）

1.香椎Ａ遺跡　2.香椎Ｂ遺跡　3.香椎Ｃ遺跡　4.香椎Ｄ遺跡　5.香椎宮遺跡　6.城ノ越城　7.立花山城　8.耳塚古墳
9.胄塚古墳　10.香住ヶ丘遺跡　11.香住ヶ丘古墳　12.唐ノ原遺跡　13.唐ノ原野添遺跡　14.上和白遺跡　15.名島城
16.名島古墳　17.多々良大牟田遺跡　18.銅釧・銅戈鋳型出土地　19.土井遺跡　20.銅戈鋳型出土地　21.名子道古墳



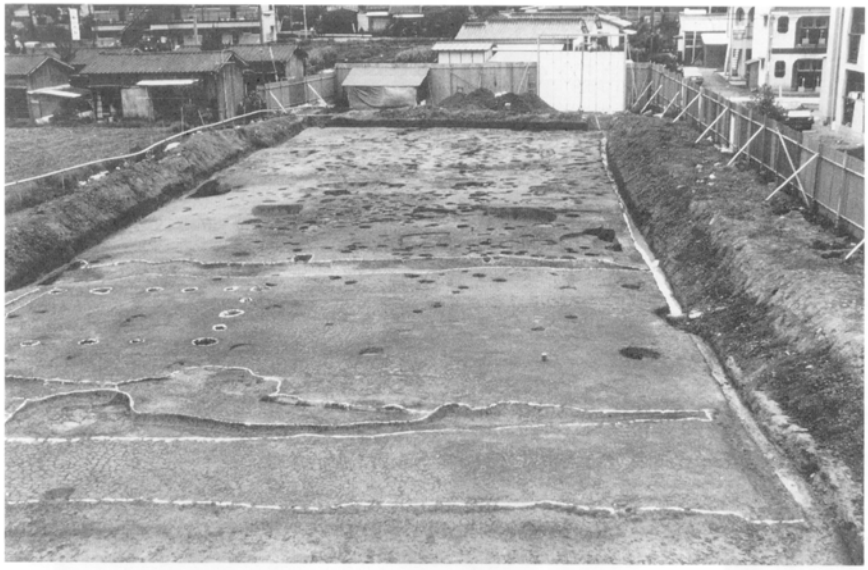
Ph. 1　遺跡遠景（西より）



Ph. 2　柱穴と溝

Ph. 3　井戸とその枠

Ph. 4　土坑と遺物



Ph. 5　遺跡遠景（南から）

Ph. 6　作業風景（西より）

Ph. 7　遺跡遠景（北より）

Ph. 8　遺跡遠景（西より前方香椎の森）

付録２．梅ヶ崎遺跡

梅ヶ崎遺跡は福岡市東区梅ヶ崎にあって、博多湾の北端、そこから東へ砂嘴状に張り出し海の中道を含む、志賀島半島の根元にあたる湾岸に位置する。和白郵便局の南側、西鉄宮地岳線の東部丘陵にある。

調査原因は（株）協栄年金ホームで高齢者向けの福岡年金ホーム建設のための発掘調査である。

調査対象は遺跡全体であるが、試掘の結果丘陵の南西部の一部が遺物散布地として認められたにすぎない。本調査は遺跡散布地に10メートルかけ30メートルのトレンチを設定して行なった。

調査結果は弥生時代後期の土器群の検出を見るが、一部焼け爛れた土器があり製塩の可能性を匂わせている。本遺跡関連として「唐ノ原遺跡」福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第161・207集小林義彦編があり、参照されたい。

Fig. 1　遺 跡 位 置 図（A－2が梅ヶ崎遺跡）

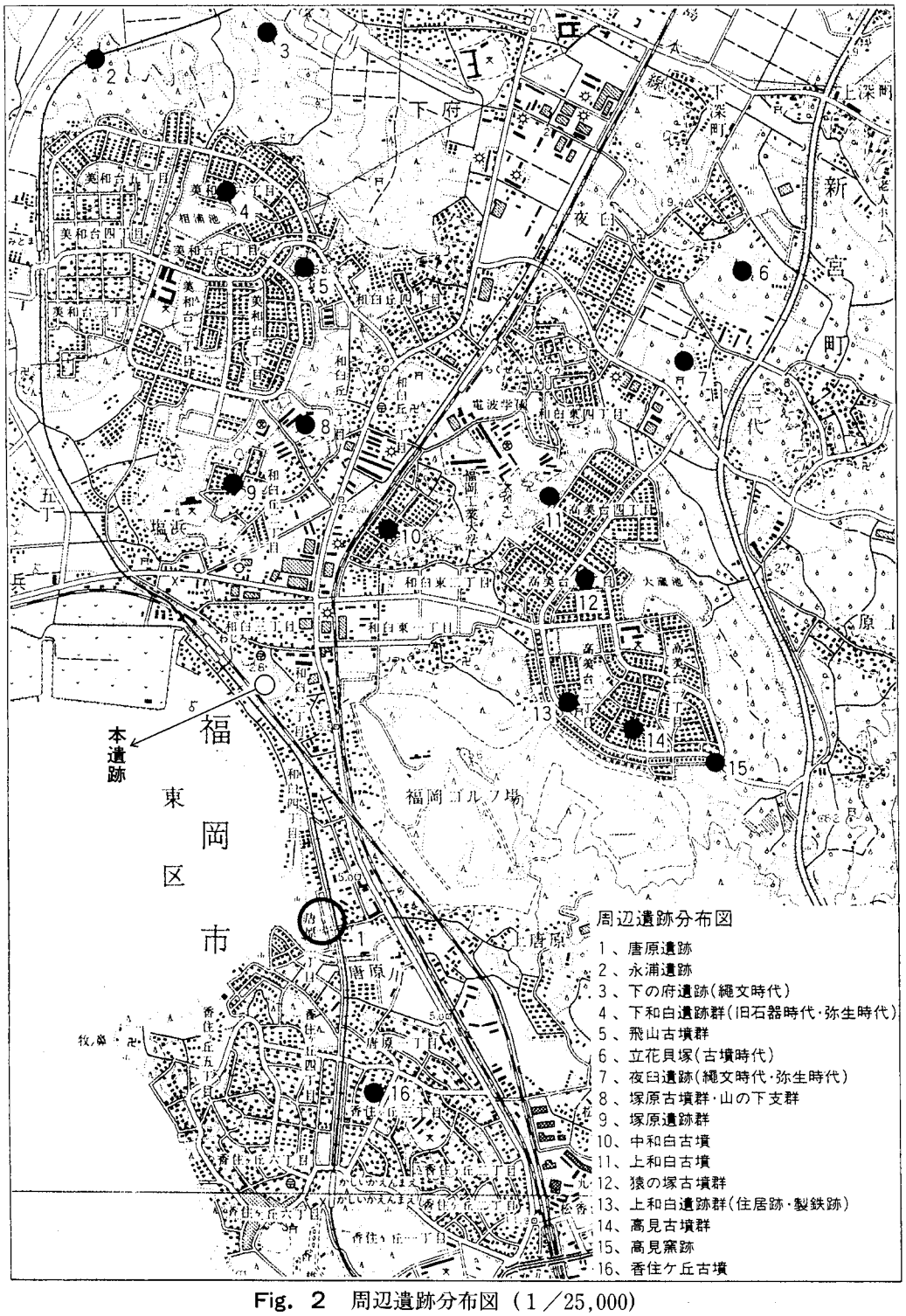
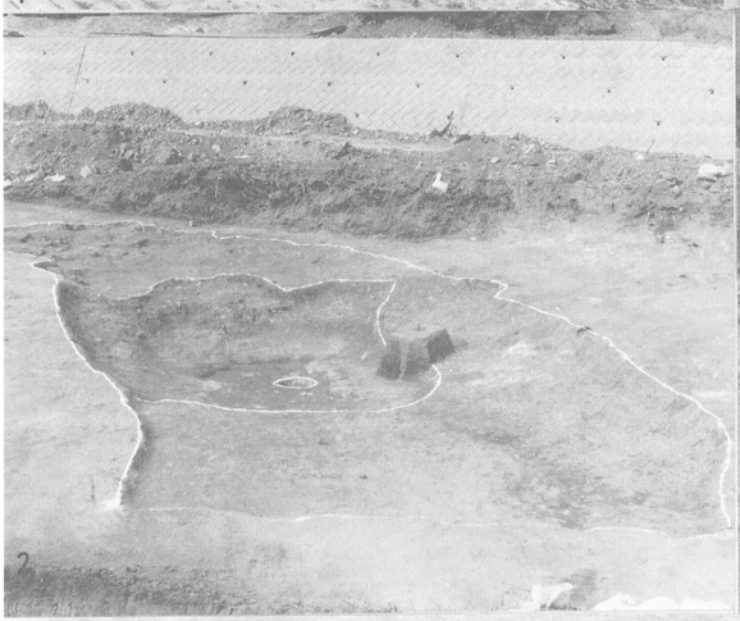
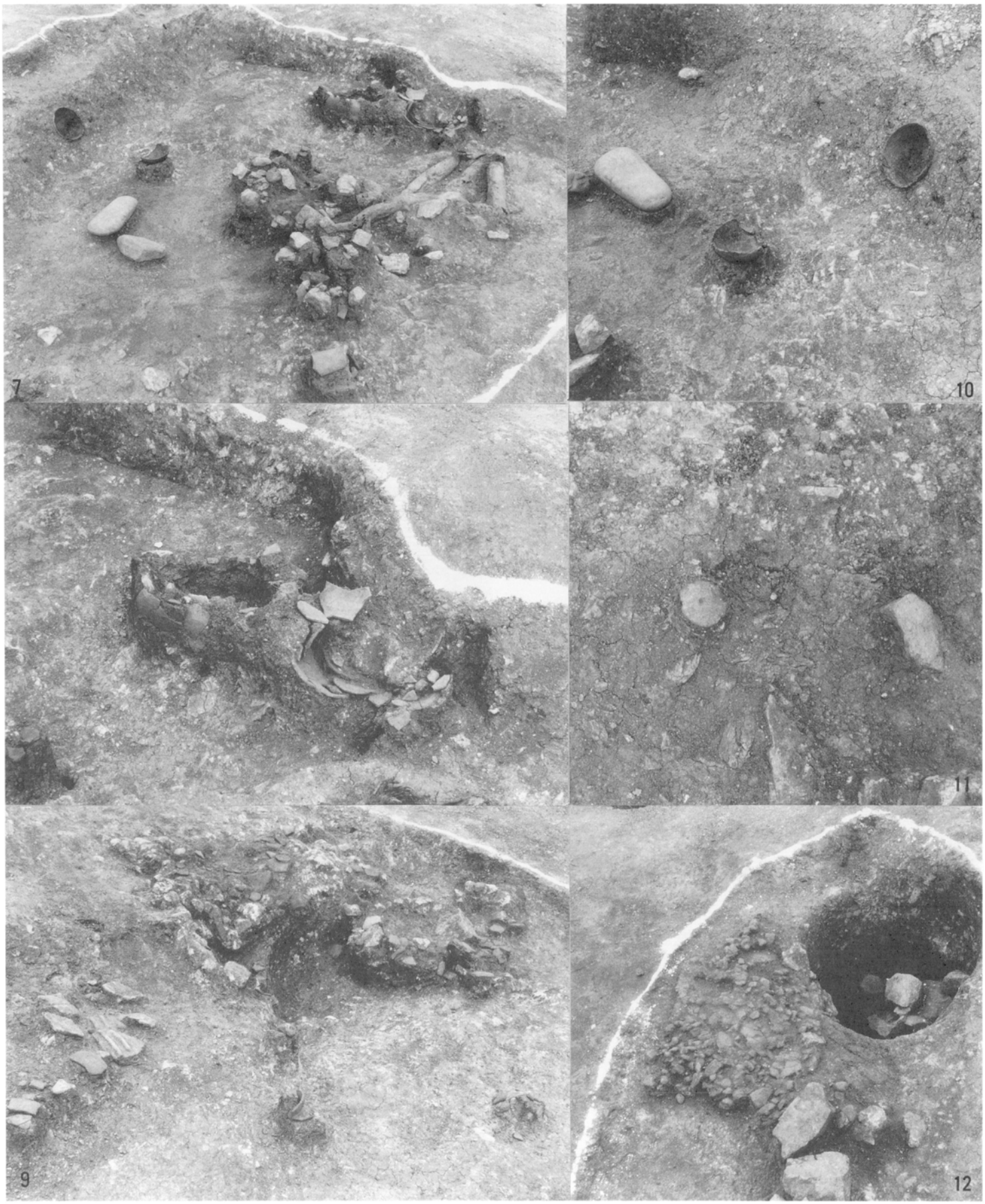


Fig. 2　周辺遺跡分布図（1／25,000）



Ph. 1　遺跡遠景（香住ヶ丘をのぞむ）
Ph. 2　遺跡遠景
Ph. 3　土器溜り
Ph. 4　遺跡遠景（和白、海の中道をのぞむ）
Ph. 5　作業風景
Ph. 6　遺跡遠景



Ph. 7　土器溜り
Ph. 8　土器溜り
Ph. 9　土器溜り

Ph.10　土器溜り
Ph.11　土器溜り
Ph.12　土器溜り（製塩土器？）

付録３．博多遺跡第23次

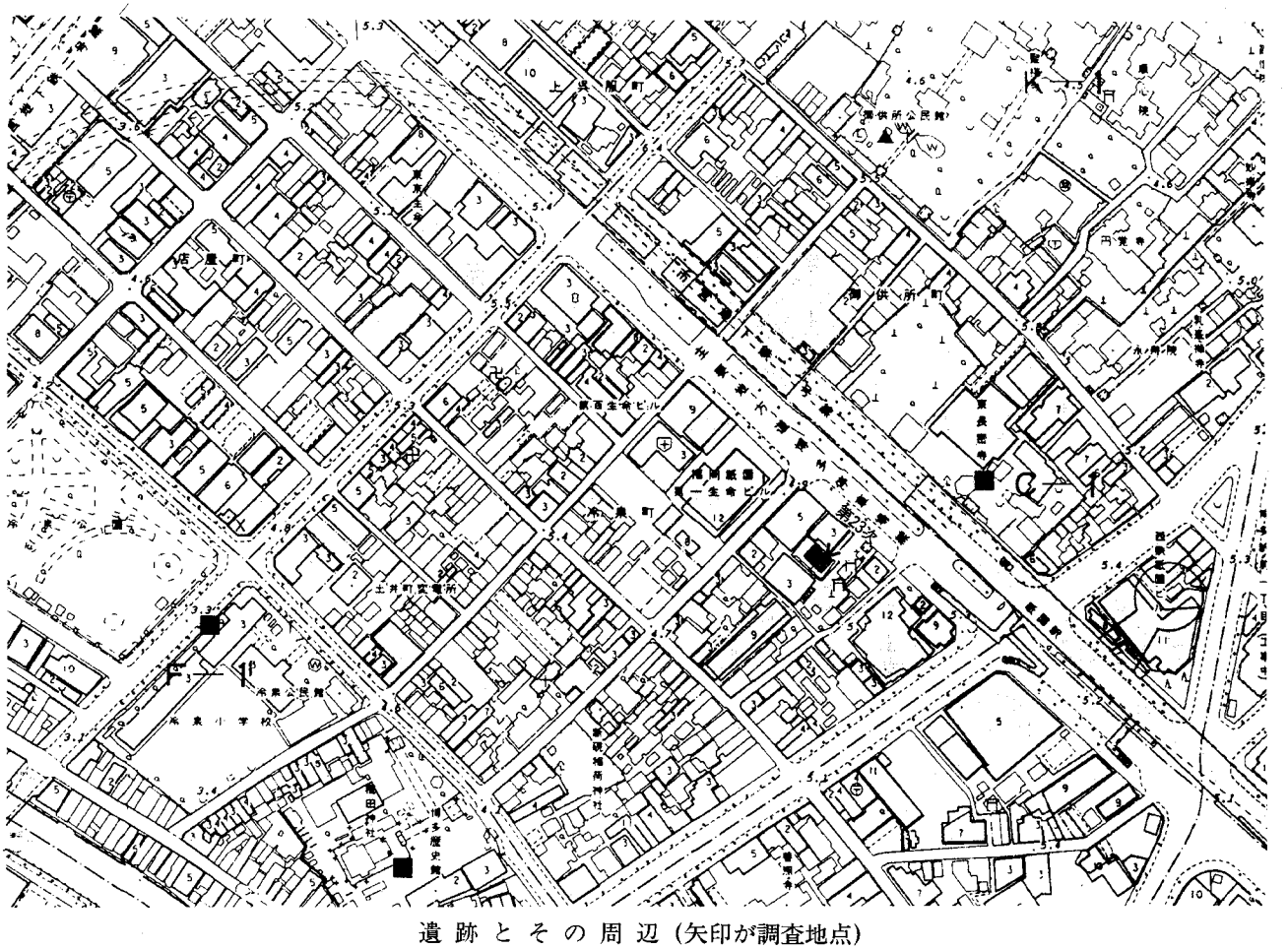
本遺跡はＪＲ博多駅前一帯に広く展開する中世の国際都市博多を象徴する博多遺跡群の一部である。博多駅の北前方に大博通りがあって国際港博多港に延びる。この大博通りを国体通りが東西に交差している。交差する北西角が冷泉町である。その冷泉町の東南側に龍宮寺がある。龍宮寺は東長寺の大博通を股いだ前面に位置している。龍宮寺が本遺跡である。

本遺跡の調査原因は龍宮寺の本堂と墓所を解体統合して、本堂と納骨堂を新築する事にある。諸般の事情で原因者の負担する調査費用は必要最小限度であり、調査内容も制約を受ける事になる。

調査面積は10メートルかけ15メートル約150平方メートルである。

調査による検出遺構は東西、南北に区画された溝と、井戸、配石遺構、それに用途不明の土坑等である。本遺跡を含む冷泉地域の遺跡を包含する文化層は厚く濃密で、中近世の文物を包蔵するものであるが、予算と時間の制約を受け検出遺構は最下層文化層のみである。南北東西の溝は小規模であることから、一般家屋に伴う溝と考えたい。また遺物は中国産の輸入陶磁器が多数あって、胎土が精製された薄手の毛彫り文様を有つ碗など優品が多く、特筆に値する。

関連資料として一連の博多遺跡群福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書がある。参照されたい。

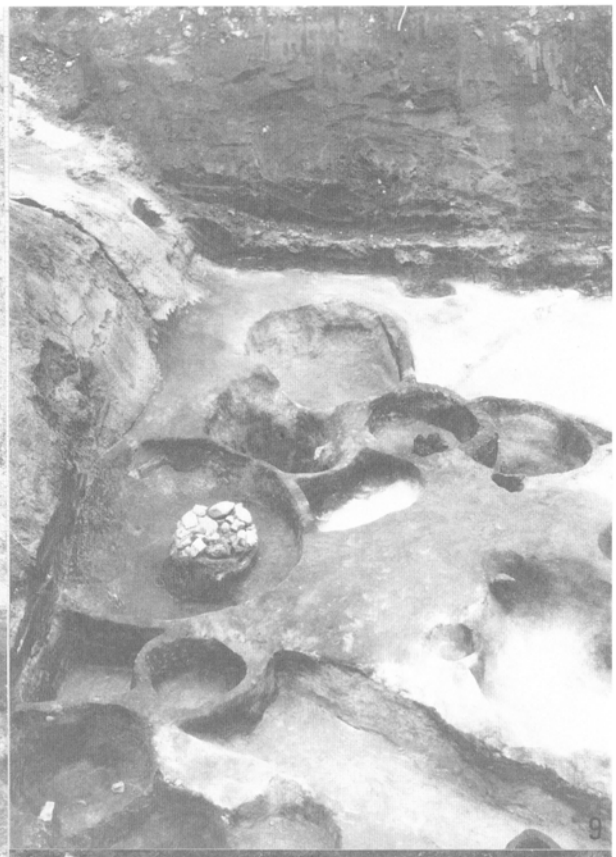


遺 跡 と そ の 周 辺（矢印が調査地点）

Ph. 1　遺跡遠景（東長寺を望む）
Ph. 2　遺跡遠景（南より）
Ph. 3　遺跡遠景（東より）

Ph. 4　遺跡遠景（南より）
Ph. 5　遺跡遠景（南より）

Ph. 6　井　戸
Ph. 7　配石遺構



Ph. 8　配石遺構
Ph. 9　遺跡遠景（東より）
Ph.10　遺跡遠景（南より）

付 録 後 記

昭和59年（1984）当時の福岡市の埋蔵文化財緊急発掘調査の報告であります。

当時、福岡市の発掘調査体制は充分ではありませんでした。それでも埋蔵文化財に関係する開発事前審査体制は未熟なりにも整っておりまました。しかし調査申請に対して、体制は整わず窮余の策としてとられたのが福岡市教育委員会の中に調査会を設けるというものでした。開発事前審査を担当する者にとって、調査費の開発者負担に関する文化財保護法の条文に自信が持てず、又調査費以上に重く伸し掛かる開発者の経済的重圧、それに私ども文化財行政に訴えられる行政的、道義的責任。事前協議で醸し出される多くの課題に、文化財保護に対する理想とは裏腹に、無力感のみが私どもに蓄積されていった事は言うまでもありません。勇気を絞り出し、開発側に必要最小限度の調査期間と費用負担を願い出て、認められた結果がこの一連の調査略報であることにお許しを乞う次第であります。

現在福岡市の埋蔵文化財行政は機構も整備され、開発側のご理解とご協力にお答えするだけの機能を果しております。今後、「行政の継続」という理念をかかげ、文化財保護行政に携わる者として精励していきたいと思います。

勝手ながら本略報の不完全な部分に対してご理解を戴くことをお願いし、又ご活用戴く関係各位には福岡市埋蔵文化財センターまでご足労戴くことをお願い申し上げ後記といたします（折尾記）。

蒲田・水ヶ元遺跡：香椎Ａ遺跡第１次
梅　ヶ　崎　遺　跡：博多遺跡群第23次

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第491集

1996年３月31日

発　行　福岡市教育委員会
蒲田・水ヶ元遺跡調査会
香椎Ａ遺跡跡遺跡調査会
梅ヶ崎遺跡調査会
博多23次調査会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　株式会社 西　　広
福岡市中央区天神２丁目８－34
住友生命福岡ビル